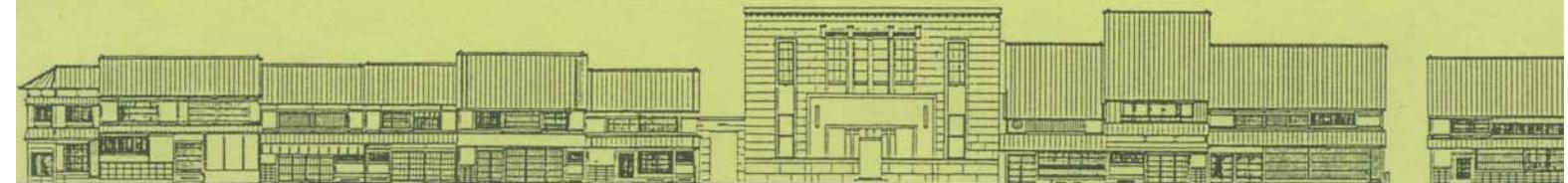


1988

津島市町家建築実態調査報告書

津島市町家建築実態調査委員会





はじめに

本書は昭和61、62年度にわたり津島市の委託を受け、調査委員会を設置し市内に残存する町家建築を中心とした調査の成果をまとめたものである。調査は当初から数えると10年近くとなり、調査委員会の手元には膨大な史資料が集積している。この間に津島市は昭和58、59年にも委託調査を実施し報告書を作成しているが、今回の調査はこれらの蓄積を踏まえ、さらに詳細な内容とし総まとめとした。

津島は津島神社によって全国的に知られ夏に行なわれる津島天王まつりには毎年多くの観光客が訪れる。まちの歴史は古く、湊町として交通の要衝であった。12~13世紀にかけてここを通った旅人の足跡が幾多の古文書に記され、当時からすでに都から尾張への西の玄関口としての役割を担っていたことを知ることができる。

中世以降、牛頭天王の信仰が隆盛となり織田、豊臣、徳川の庇護を受け、また御師によって全国から参詣者が集まり、大いに賑わうところとなった。江戸初期には桑名へわたる湊町として、米の集散地として栄えたが、やがて川が浅瀬になり湊としての機能を失うに及び、現在の津島の町の骨格がほぼ形成されることとなる。

自然堤防上沿いの街道を中心に面的に広がる近世から近代、そして現代へと継承されてきた町家、社寺、土蔵、そして路傍の石仏など、津島のまちのいたるところに歴史を感じることができる。これらは過去の遺産というだけでなく、現在も人々の生活の中に生き続けている。

町並みは個別の文化財ではなく、地域一体のトータルなたたずまいであり、さまざまな要素の複合体である。このような歴史的環境が少しずつ失われ、まちの魅力を損ねる状況が進行するなかで、住民の方々のまちに対する関心が高まっている。本書が津島の有形、無形の魅力を見直すきっかけとなり、不十分なところも含め、住民の方々の主体的な参画による調査・研究がなされ、将来に向けてのまちづくりの手助けになれば、幸いである。

おわりに本調査にあたって、多大なご協力とご尽力をいただいた地元委員の方々、並びに津島市教育委員会及び地元の住民の方々に対し、心から感謝の意を表わす次第である。

津島市町家建築実態調査委員会

事務局 中央設計

もくじ

津島の町並みと町家

津島の沿革と現状	4
津島の様子を示す絵図等について	10
津島の町並み	14

町家の住生活調査報告

調査概要	114
調査結果	114
まとめ	146

津島の都市景観

都市景観について	148
都市景観調査	148
都市景観要素の分布	149
津島の都市景観の構造	152

津島の町並みと町家

I 津島の沿革と現状

1 津島の沿革

① 古代・中世の津島

津島は、尾張地名考に「津島は正字なり。船のつくところなればなり」と述べられていくごとく港町であり、同時に交通の要所として発展してきた所である。「津島の文字が見られる最古の文書は承安5年（1175）「大般若経巻231」の奥書にある印記のものであり、また文治4年（1188）の「吾妻鑑」にも津島の文字が見られる。12～13世紀にかけて、ここを通った旅人の文章がいくつか残されているが、貞応2年（1223）に書かれた「海道記」の4月の条では「七日、市脇を立ちて津島の渡という所を船にて下れば、蘆の若葉あおみわたりてつながむ駒も立ちはなれず、菱の浮葉に浪はかくれども、難面かわづはさわぐけもなし。とりこすさをの雲袖にかかりたれば、さしてものを思うとなしに水馴棹み馴れぬ浪に袖は濡らしつ渡りはつれば、尾張の国にうつりぬ。片岡には朝陽の影うちにさして、焼野の草に雉なきあがり、小篠が原に駒あれて、泥みしけしき引きかえて見ゆ。」と書かれ、この一文から津島が尾張への玄関であったことが知られる。

一方、中世になって除役神として牛頭天王を信仰する風習が盛んになり、この頃から津島神社の存在が世間に認められるようになってきた。津島神社は織田、豊臣、徳川の崇敬の厚かったこと、御師の活躍によって津島の天王様と呼ばれ、ほとんど日本全国に信者をもち、全国からの参詣人を集めて大いに賑わった。また、東海道、中山道から集まる伊勢参りの人々の通行の要路にもあたっていたため、「津島かけねば片詣り」と言われて、関東、甲信越、三河方面の人々は必ず両社をお参りする習慣になっていた。当時の津島は堤防上に人々がたちならび、その繁栄ぶりを示す一文が大永6年（1526）の宗長手記に次のように記されている。「おなじ國津嶋へたち待る。旅宿は此処の正覚院、領主織田霜臺息の三郎、礼として来臨、折紙どあり、宿坊興行、つつみ行家路はしけるあしまかな、此処のをのをの堤を家路とす。橋あり三町あまり、勢田の長橋よりは猶遠かるへし。および洲保河落合近江の海ともいふへし、橋のもとより舟十余艘かさりて、若衆法師誘引、此河つらの里々数をしらず、桑名までは河水三里ばかり——あくるあした正覚院へ。此津、南北美濃尾張と河ひとつに落ちて、港のひろさ五、六町。寺々家々数千軒。きこゆる西湖ともいふへし。数千艘、橋の下廣く旅泊の火、星か河辺のなどふるごともさながらにぞみ

えわたる。」このように栄えた津島も天正13年（1585）の大地震、翌14年の木曽川の大洪水などの天災や、清洲城下の町の発展により一時急速に衰微することとなった。その後は大名領内の単なる在郷町への途をたどるに過ぎなくっていったが、港のある町と天王信仰の中心地であることにかわりがなかった。

② 近世以降の津島

江戸時代にはいって交通の要所である津島は尾張の入口であり桑名へわたる港町として栄え、再び隆盛をきわめることになり、承応2年（1653）には年貢米、給入米の積出地として50ヶ村の米を搬出することにもなった。このように津島は水運の要所として栄えていたが、河が次第に浅瀬となつたために港が佐屋に移ることとなり、寛文6年（1666）には津島の港としての機能は著しく衰退した。さらに天明5年（1785）に天王川（津島川）の上流である足立川を直接日光川につないだことによってこの川の機能そのものをなくし、その後、明治32年の天王川下流の佐屋川の廃川によって現在の津島の町へと変貌を遂げていくのである。

2 津島の現状

① 位置と面積

津島市は愛知県の西端部、名古屋市の西方22kmに位置し、名古屋市の中心部から名古屋鉄道で約30分の距離に存在している。昭和58年10月1日現在、人口59,298人、世帯数16,445戸となっており、市域は東西7.3km、南北7.25km、面積は25,36km²を有し、北は佐織町、南は佐屋町、蟹江町、東は美和町、七宝町、西は立田村と境をなしている。

この地は木曽川下流左岸近くの低湿地にあるため古来より水害に悩まされつづけた所である。本市の集落は大部分が自然堤防上に築かれていたが、最近では振興住宅団地や中心市街地の東部・北部についてみられるように宅地が形成されている。

② 地形と地質

津島市を含む海部地方は総面積の60%が標高0m地帯である。それは、この一帯が木曽川の乱流による堆積土砂でできた沖積地と17世紀以降にできた干拓地からなっているからであると考えることができる。

この地方は地下60m位まで5つの地層単位があり、下部から熱田層、第1レキ層、濃尾層、南陽層下部、南陽層上部と呼ばれている。熱田層とは、約3万年前、濃尾平野が海の底に沈んでいた時に木曽三川が堆積させたものである。これが後に陸化され、伊勢湾もほとんど陸上に姿をみせた。この時代の堆積物が「第1レキ層」であり、その後「濃尾層」「南陽層下部」と堆積を重ねていった。

25000分の1の地図によれば、犬山から稻沢までは1/500という急勾配になっているが、稻沢から津島の間では1/1600、津島以南では1/8000～1/10000というゆるやかな勾配になっていることが知られ、これがますます土砂を堆積させるもとなっている。

木曽川は16世紀にはほぼ現在の形をとるまで何回も流路を変え、特に犬山扇状地から南、南西に分流して流域に洪水をおこし土砂を流し、土砂は自然に堆積して「自然堤防」となった。この時代の最上部の地層が「南陽層上部」である。

津島は自然堤防上に位置し、旧津島川に沿った集落がこのもとなっている。この地域はその後合併された沖積デルタ地帯に比べて高燥な土地である。それに比べて新興住宅団地や中心市街地の東部、北部については後の盛土によって宅地が形成されている。

また、この地方は東に蟹江川、西に木曽川用水海部幹線路（旧佐屋川）と接し、市域内に目比川、日光川、善太川、旧津島川が流れる。低湿地平坦地帯で地盤沈下が進行し、市域の90箇所が海拔0m以下の地域になっている。雨量は極端に多い方ではないが、時々集中豪雨に見舞われ浸水被害を受けている。冬は伊吹おろしの影響を受けて寒く、夏は湿度の高い南風によってむし暑い気候となっている。

③ 災害

a 濃尾震災

明治24年（1891）10月28日午前6時38分頃、美濃、尾張一帯に未曾有の大地震がおこった。震源地は岐阜県本巣郡根尾村でマグニチュード8.4、濃尾地方の震度は6（烈震）であった。被害は死者7,466人（うち岐阜5,007人、愛知2,459人）負傷者19,694人、家屋全壊85,848戸であり、岐阜県では全家屋の半数が全壊した。愛知県では中島郡に被害が集中し22,000戸のうち、わずか1,300戸が損壊をまぬがれたのみである。

愛知県警察部の記録によれば、津島町における被害は、当時の戸数2,700余であったが、警察署、郡役所、その他公署を始め民家6分通り損壊し、その他の建物も安全である建物はなかったと記録している。この時、郵便局（橋詰町）が倒壊したあと火災を発生したが、

2戸の延焼のみで全町の火災を免れたのは不幸中の幸いであったと伝えられている。この震災のあとは余震がつづき、12月中旬頃になってようやく1日1回程度の余震となるに至るほどであった。このため、町民は震災のあと10数日は天王川の堤防上に起臥するという生活がつづく悲惨なものであった。

この時の津島町における被害は次のようなものである。

死者	68名
負傷者	264名
全壊家屋	934戸／2700戸
半壊家屋	1517戸／2700戸
焼失家屋	2戸
橋の損壊	日光川にかかる橋は半ば破損

被害を受けた主な建物

高等小学校	半壊
警察署（橋詰）	倒壊
郵便局（々々）	倒壊後火災
津島神社	回廊が傾き社務所、宝庫は倒壊
寺院	24／26倒壊
小学校	3／3倒壊
海東郡役所	倒壊
収税分所	半壊

翌、明治25年1月30日午後4時になって再び強震があり、10月28日の大地震につづく大きな被害を受けた。これによって最初の地震の発生以来2月5日までに実に振動回数1054回を数えるに到ったが、この後も時々の余震を記録している。

したがって、現在見る津島市の町家は、この地震抜きには考えられず、何らかの影響を受けていると思われる。その影響の受け方は様々であろうが、新しく建設しなおしたもの、倒れたが火災にあわなかつたために再び建ておこしたもの、少々の修理のみで若干の補強を試み使用を継続したものなどが考えられる。

b 水害

濃尾平野を流れる木曽川、長等川、揖斐川の3つの川は海部地方の西を並んで流れ、伊

勢湾に注いでいる。この3つの川は平野をゆるやかに流れているものの、一度豪雨があると数時間後には急に水かさを増し、刻一刻と危険な状態になる。特に長野県の山中から流れている木曽川は濃尾平野にはいると急に流れが緩やかになるが、土地が平らなためしばしば流路を変え、また三川の川底が木曽川、長等川、揖斐川の順に低くなっていることもあって、増水のたびに逆流を繰り返すこともあり、まさにこの地方の歴史は水害の歴史であると言える。

記録に残る主な風水害は別表（表一1）のとおりである。そのうちでも特に被害の大きかったとされている明治30年の水害および昭和34年の風水害について特筆するものとする。

＜明治30年の水害＞

明治30年9月は連日豪雨が降りつづき、その上暴風雨があったために、30日午前7時頃佐屋川が増水しその上流の現八開村の鶴多須の堤防が決壊した。そのため下流域一帯は一面水につかり、津島市内で浸水しないのは、橋詰、坂口（現本町2丁目）、高町（現本町3丁目）、厨子（現本町4丁目）、その他数町にすぎず、被害戸数1834におよび、被害を受けなかつたのは940であったと記録されている。

＜昭和34年の風水害＞

昭和34年9月26日台風15号（伊勢湾台風）は夕刻紀伊半島に上陸、夜半に富山湾にぬけた。中心気圧 945mb最大風速37mの暴風もさることながら、前日からの雨量は 164mm以上となり、河川の増水も極めて大きなものであった。また、この台風の通過時が伊勢湾の満潮時と重なり、このために被害は河川堤防の寸断によって、海岸線から20km以上離れた津島一帯でも60日以上の湛水という大災害となった。県の調べによれば家屋の被害は3975戸に達し、被害のなかつたのは1226戸であった。

④ 津島の人口の様態

津島市の人口は表（表一2）にみると徐々に増加し、昭和31年10月に現在の市域となつて以後、昭和58年までの27年間の増加は約 18000人である。名古屋市に近接した都市としては比較的安定した人口の増加を示していたが、昭和50年以降はこの増加も停滞みとなつていている。一世帯あたりの人員は昭和30年前後をピークとし徐々に減少し、昭和58年

では 3.61 人となっている。この人数は愛知県全体の3.29人と比較してかなり多い数となっている。男女別では本市の主要産業が繊維製品であることから女子の比重が目立ち、また全体でも女子の人口が多くなっている。これも近年産業の変化により、徐々にそのバランスをとりつつある。人口密度は昭和58年現在 $2324\text{人}/\text{km}^2$ であるが、この値は周辺部に広い農業地域を持っているために他都市よりも小さい値となっている。

Ⅱ 津島の様子を示す絵図等について

過去の津島の様子を知り得る資料として多くの絵図面が残されている。これらの資料から、津島市街地の様子、河川の変遷を知ることができるので、それらの主なものについて解説を試みたい。

① 尾張国海西郡津島之図

延享5年（1748）に作られたもので津島の姿を詳細に描きだしている。当時の津島神社は、東は天王川、西は木曽川の支流（佐屋川）に囲まれた神領地にあったことがわかる。したがって、神社へは天王川にかかる橋長七十間、幅三間の橋を渡って参っていた。道筋、町名も明確であり、天王川をはさんで津島36町をなす当時の様子を知ることができる。

② 津島邑之図（張州雑志）

津島の道筋と寺社を明記させている。これも天王川を大きく描いており、この川沿いに御殿跡が記されているが、この御殿は元和4年（1618）～天和3年（1683）まで存在していたもので、後はただ外垣のみ残っていたと云われている。この図はこのような状態になっていた御殿跡を記したものであろう。

③ 津島の惣図（張州雑志）

津島の東、佐屋・津島の追分あたりの上方から津島の町を見たふかん図である。当時の町の様子を知ることができ、主な町名と寺社が明記されている。天王川は橋詰の所で締め切られ、上流部分は埋立地となっている様子がよくわかり、おそらくこの部分は田畠となっているのであろう。天王川を締め切ったのは天明5年（1785）のことであるのでこの図はそれ以後のものである。

④ 尾張八郡図

尾張八郡の全体を描いたものであるが、主な街道を赤線で記入し明示させている。この街道を見ると名古屋の城下からは岩塚・万場をとおって直接津島へ入る街道として描かれている。したがって、この図の描かれた時は津島の湊が栄えており、佐屋へ下って船に乗る必要がまだなかったのであろう。この地図でみるとかぎり水路がまだ整備されておらず、津島川は上流で足立川につながり、向島は正に島であって佐屋川、津島川、領内川によって囲まれている。足立川を津島川と切りはなし日光川と結びつけたのは宝暦9年（1759）のことであるので、この図はそれ以前のものであることがわかる。

⑤ 尾張志付図 海東郡

この図では、津島は海東郡とされている。上街道、佐屋街道を明記しているが、現在の津島市街地部分については「津島町方」と記入しているだけである。ただ、「町内寺社地ハ別ニ詳図アリ合セルベシ」とあるので、これと対になった詳細図があったと思われるがどれであるか明らかではない。これには津島川を天王橋の所で締め切りその上流部には河川跡が描かれているのみであるが、そこには又吉新田と記されている。すでに埋め立てられて田畠となっているのであろう。

⑥ 尾張国図

描かれた年代は明らかではないが江戸末期のものとおもわれる。天王川は佐屋川に続く大きな入江となって描かれており、上流部は全くその跡も描かれていない。現在津島神社のある所は向嶋と記されている。

⑦ 瑞泉寺 （尾張名所図会）

瑞泉寺の東上方から天王川方面をみたふかん図である。瑞泉寺の後方に天王川の大きな入江が描かれ、天王川の築留の様子がよくわかる。車河戸には祭礼用の道具小屋

の存在が記されている。

⑧ 津島牛頭天王社（其二～其三）（尾張名所図会）

其二～其三と連続する図であるが、其二では津島神社と社家町の様子を、其三では天王川の堤防と築留の様子を描いている。この図の、天王川の西の堤防下に見られる社家の居並ぶ姿は、現在の姿と類似している。

⑨ 佐屋・津島追分の図（尾張名所図会）

佐屋・津島追分の雑踏の様子を描いたものであるが、鳥居をくぐって右へ左へと折れた街道のはるかかなたに津島の町を見る能够である。この図と張州雑志記載の「津島の惣図」（③）を見比べると、鳥居、燈籠、茶屋の位置、道の折れ曲がった様子等、全く一致していることがわかる。

⑩ 金燈籠社 祭礼の図（張州雑志）

金燈籠社（現在の堤下神社）の祭礼を描いたものである。T型路の角地に建つ金燈籠社と、これにつながる町家の様子がよくわかる。平入りの町家の奥に見える背の高い建物や裏庭の木々の間に見える建物は土蔵であろう。この姿は現在の津島の町家と大変よく似ている。

⑪ 宵祭の図（張州雑志）

津島の祭りを描いたものは数多くみうけられるが、この図は天王川の東側の上方からみたふかん図である。天王川が築留されていないので大きな橋がかけられている。祭りの見物には船から見るものと、岸辺に桟敷を作つての見物、および、柵を作つてその内側から見るもの等で祭りを楽しんでいる様子がよくわかる。後方に見られるものは社家の家々であろう。

⑫ 津島試楽の図 (尾張名所図会)

この図も祭りを描いたものであるが、⑪と違って天王川の西北上方から見たものである。すでに締め切られた天王川の堤防上には鳥居が建てられ現在の様子とよく類似している。東側の岸辺には見物者ようの桟敷が作られている。車河戸の、さらにそのむこうに松の描かれた堤防の存在する所から、天王川が大きな入江になっていることがわかる。

⑬ 朝祭りの図 (尾張名所図会)

図に描かれている岸辺の様子から⑫と全く同じ時のものであり、見る方向を変えただけのものと考えられる。

III 津島の町並み

津島市は古来から交通の要所として栄えたところである。特に江戸時代初期には東海道の熱田宿から桑名宿へわたる陸路としての通過地となり重要視されていた。

現在、津島市内に残る最も古い街道と思われるものは、中世以来の上街道と呼ばれるもので、これはかつて集落をなしていたと思われる天王川の堤防上の道路を通り津島の北から萱津の宿に抜けるものである。この街道の津島の町を通る部分は、江戸時代には犬山から一宮を通って津島の南、現在では弥富町前ヶ須まで通じる巡見街道と呼ばれるものと一致している。このうち北は兼平町の喜楽橋より南は南本町4丁目のすでに道路が拡幅されている所までの約2kmの旧街道をとりあげ、それに沿う町並みと町家について概説を試みたい。

1 町名毎による町並みの特色

〔兼平町〕 該当する旧街道のうち最も北にあるもので昔は鐘平堤と呼ばれていた。この名は応永10年（1403）10月、津島神社へ納める鐘を鋳た所から名付けられたとされているが、そのためか、明治から昭和の初期にかけては鍛冶屋の町とされるほどの鍛冶屋職人の町であった。現在ではただ1軒の鍛冶屋を残すのみである。町並みとしての歴史は浅く江戸中期以降とされており、現在の町並みをみても比較的新しい家屋が多く、その用途もほとんどが専用住宅として使用されている。

〔片岡町〕 兼平町の南に続く所で明治以降につくられた町名である。この町の街道の東側には明治末期につくられた片岡毛織の工場があり、その西側にはその当時の住宅が残っている。

〔北町〕 津島の北口と云われている所である。家屋はかなり密集しているが新しいものが多く専用住宅として使われている比率が高い。

〔米町・米之座町〕 北町の南に続く所であり、現在では東側が米之座町、西側が米町となっているが、ここはかつて全体を米之座と呼び、中世末期には津島五カ村の一つに数え

られた歴史の古い町である。明治以降に栄え現在も続けられている綿布問屋等、規模の大きな家屋が存在する所である。このあたりから南に行くにしたがって商家が多くなる。

〔本町〕 米町の南に続く所である。津島五ヶ村にあげられている、かっての堤下、筏場、下溝はこの本町に存在しており、また、この部分の街道は、かっての天王川の堤防上の道路である。津島の集落はこの地に発生したと云われていることから、これに沿う町家もまた古い型を残しているものがあると思われる。近年行った町家の調査において本町一丁目に元治2年(1865)の棟札を発見している町家もあり、明治24年の濃尾の震災にも耐え得た家屋もいくつか存在していることが明らかとなった。本町の北の方には規模の大きなものが存在しているが、南に行くにしたがって比較的小さな家が存在している。

〔南本町〕 本町の南に続く部分であり、津島市内の旧街道における今回の調査の最も南に位置する所である。4丁目部分から南はすでに道路が拡幅されて旧型を維持していないので、4丁目の一部分までが近年の調査の対象となった。南本町の南に行くにしたがって比較的新しい家屋が多く戦後の住宅の占める割合も高くなっている。この部分の北の端に江戸～明治初年と思われるものが数棟存在している。

全体として、明治期の津島の町並みの雰囲気を比較的よく残していると思われるのは、本町1丁目の成信坊の存在する地域、および本町4丁目のかって「厨子」と呼ばれた所である。

2 町並みの現況

① 巡見街道と呼ばれる道路に面する部分

昭和58年、津島市内に残る旧街道のうち北は兼平町の喜楽橋より南は南本町4丁目にわたる約2kmの部分についての町家の現況を用途別、構造別、年代別に分類を試みた。町家の総数は420棟であるが、この中には1棟を数戸で所有しているものがあるので、戸数は459戸となっている。これに算入していないものに寺社13、ガソリンスタンド1があり、それ以外に車庫13ヶ所、駐車場23ヶ所が存在している。

a. 建物の用途別分布（図 3）

建物を用途別にその戸数を調査したところ、下のようになった。町並みの北、および南に位置する所は専用住宅が多いが、中央部の本町にあたる所では商店の割合が多くなっている。

専用住宅	242
一般商店	131
サービス業 （飲食店・床屋・美容院等）	21
医療施設	4
公共的施設	2
事業所・事務所・工場	29
空 家	8
倉・倉庫	22
<hr/>	
合 計	459

b. 建物の構造別分布（図 4）

建物を構造別に分類してみると次のようになる。ただし、一般木造には戦後に建てられた新しい建物もその数に算入されており、伝統的建築物の範疇に入るべき景観上の数とは一致していない。

一般木造	365
木造モルタル	25
鉄筋コンクリート、鉄骨構造	30
<hr/>	
合 計	420 棟

c. 建物の年代別分布（図 5）

建物の建設年代については必ずしも明確ではなく、ヒアリング調査、および様式上から

の推測によることが多かった。明治24年を一定の区切りとしたのはこの年の濃尾平野地震がそれまでの建築物に大きな被害を与えていたとされることによったものである。

江戸～明治24年	24
明治24～明治末期	107
大正～昭和戦前	167
昭和戦後	122
合 計	420棟

3 津島市内の旧街道に沿う景観上の調査

津島市内の旧街道に沿った所には、町家以外の景観上重要なポイントとなるべきものが多数残されている。それらは、社であったり、地蔵であったり、道しるべとなるものであったり、様々であるが、これらが町並みの景観を高める上で大きな要素となっていることにはかわりがない。また、同時にこれらの要素が町並みの歴史を語るものであり、この歴史を知るために今後も維持されなくてはならないものである。

以下、地図上に記した①～④までのものについて説明を試みたい。

① 西岸寺（兼平町）写真一1

この寺は、この地に住んでいた水野長八氏が、明治15年に祖先の菩提を弔うために自分の邸内に庵室を建て和泉庵と称したのがはじまりである。後に堂を建て明治36年に西岸寺を名のつたものである。街道に面した門と植樹は充分に景観の要素となりえるものと思われる。

② 兼平神社（兼平町）写真一2

兼平町に存在する小規模の神社である。社殿が南面しているため街道には直接面しておらず背をむけるようになっている。

③ 大樹（兼平町）写真一3

兼平町の街道が大きく曲がりこんでいる所の街道に沿う敷地にある。このあたりではめずらしく大きな楨の大樹である。曲がりこんだ街道の外側の敷地にあるためにかなり遠方からも望見できる。

④ 金刀毘羅社（兼平町）写真一4

街道に沿って建つ鳥居と、これに続く石段が独特な景観を呈している。境内にある鐘はもと津島神社にあったものであるが、明治維新後の神仏分離の時からここにおかれるようになった。この鐘には応永10年未癸10月17日の鐘銘がみられる。

⑤ 兼平の地蔵（兼平町）写真一5

金刀毘羅社の隣に小さな稲荷社とともに存在している。もともとこの地蔵は、現在の片岡毛織工場の北東側の大鍛冶屋（現在はなし）から見越へ行く道の角にあつた石地蔵を移したものと云われている。

⑥ 和魂神社（片岡町）写真一6

この神社は、もと片岡毛織工場の東北角にあったが、工場の建物に囲まれ参拝者に不便であったため明治45年現在地に移し、現在では片岡毛織会社の守護神として崇敬されている。

⑦ 地蔵（片岡町）写真一7

街道に沿う片岡毛織工場の一角にある地蔵である。街道沿いにある数多くの地蔵の一つである。

⑧ 宗念寺（米町）写真一8

街道に直接堂の面する寺である。享保2年（1453年）開山と云われ、はじめは光淨庵と称したが享保20年觀音寺と改め、後安政6年（1859年）宗念寺と呼ばれるようになった。

⑨ 市神社（米町）写真一9

弘和元年（1381）創立と云われている。かつてはこのあたりは米之座とよばれたように米穀問屋の集まっていたところである。この神社には大市姫を祭っていることから市神社の名がつけられている。かつては正月10日には初市が開かれこれを十日市とよんでいた。

⑩ 本町神社（本町）写真一10

本町の北端に存在する。昔からこのあたりは社寺の多い所であり「俳風柳樽」（1859年刊）には「米之座は神社仏閣軒ならべ」と歌われている。

⑪ 清正公碑道しるべ（本町）写真一11

上河原町にある清正公遺跡へ行くための道しるべである。かつてはもっと大きなものであったが、現在では地中に埋もれそのうちの上半分が見られる程度である。

⑫ 堤下神社 (金町) 写真一12

現在は金町に属しているが、かつてはこのあたりを堤下町と呼んでいた。もとは金燈籠社と云われ、昔天王川が西に流れていた頃、増水して津島神社に参拝困難な時はこの神社の金燈籠にろうそくをたてて遙拝した。現在この金燈籠は津島神社に保管されている。

⑬ 道しるべ (本町) 写真一13

街道より津島神社へ参るための道を教えたものである。かつてはここから天王川にかかる橋をわたり参拝するのが常であった。

⑭ 井戸 (本町) 写真一14

街道上の坂口と呼ばれる所から横町へ曲がる南角に、かつて清水のわきで井戸があった。井戸の跡は今も残されているが、昭和の初め頃までは井戸の付近に大きな柳の木があったといわれている。

⑮ 坂口神社 (本町) 写真一15

この神社の位置する所は坂口と呼ばれた所であり、現在では本町3丁目となっている。坂を上がりきった所にあるためにこう呼ばれたのであろう。天保14年の創建である。

⑯ 屋根神 (本町) 写真一16

街道上の厨子と呼ばれていた所の町家の1階庇の上に存在する。

⑰ 窓 (南本町) 写真一17

江戸末期に建てられたと考えられる町家にとりつけられたもの。比較的大きな町家ではしばしば見ることができるがこの地方ではめずらしいものである。

⑲ 路地 (南本町) 写真一18

ここに限らず街道上の隨所で見ることができる。中には母屋の一端を通路としているものも存在している。

⑯ 地蔵（南本町）写真一19

南本町にある街道より共栄寺に入る角にあるもので小さな祠に納められている。街道に残る地蔵の一つである。

⑰ 地蔵（南本町）写真一20

街道沿いに存在するもののひとつであるが、地蔵のみで祠はない。像の左側に元禄6年の刻銘がみられる。

⑱ 下構神社（下構十王堂）（南本町）写真一21

このあたりはかつて下構町と呼ばれていた所である。街道に面しており、右側には小さな社をもち正面に十王を安置する堂をおいている。当初は本尊地像菩薩坐像、左右に十王像を安置していたが、明治初年に関係6町に配分したため、現在では木造2体・画像三軸をまつるのみである。

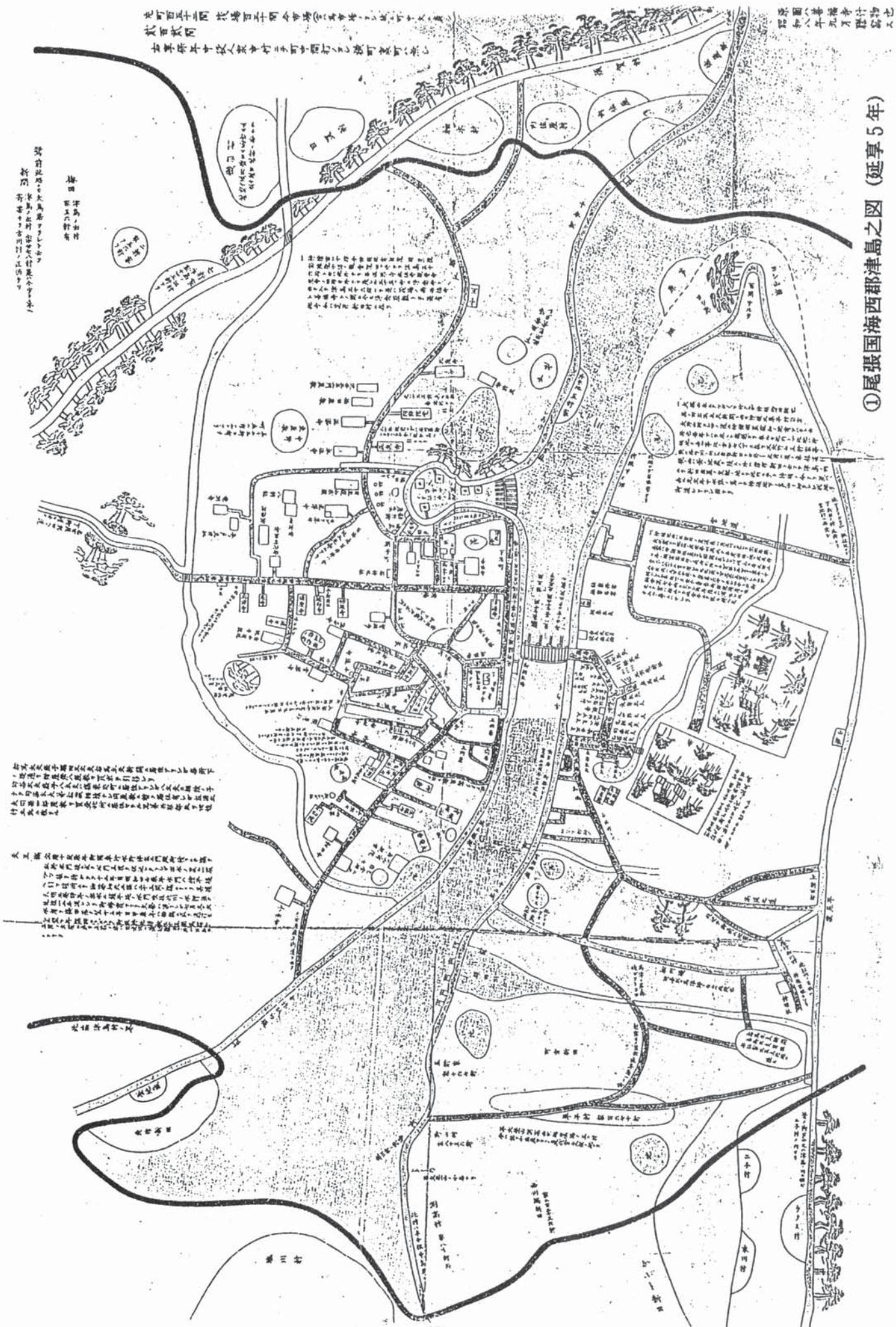
4 津島に残る主な町家について

津島の町家についてこれまでに調査されたものは次の表のとおりである。これらの平面図等を以下に示すものとする。

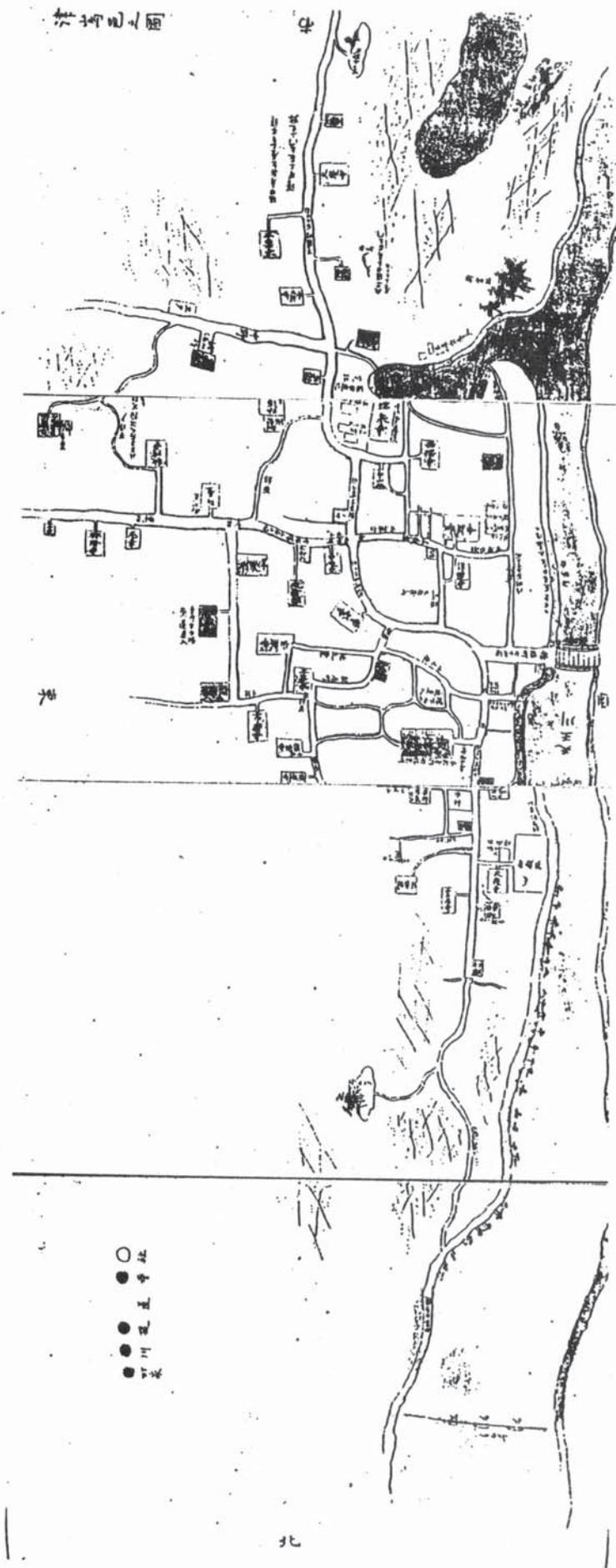
5 本町1丁目における町家の現況と修景について

津島市内の旧街道に沿う町並みのなかで、比較的よく原形をとどめていると思われる本町1丁目についてその現況を調べ、修景を試みた結果は以下のとおりである。

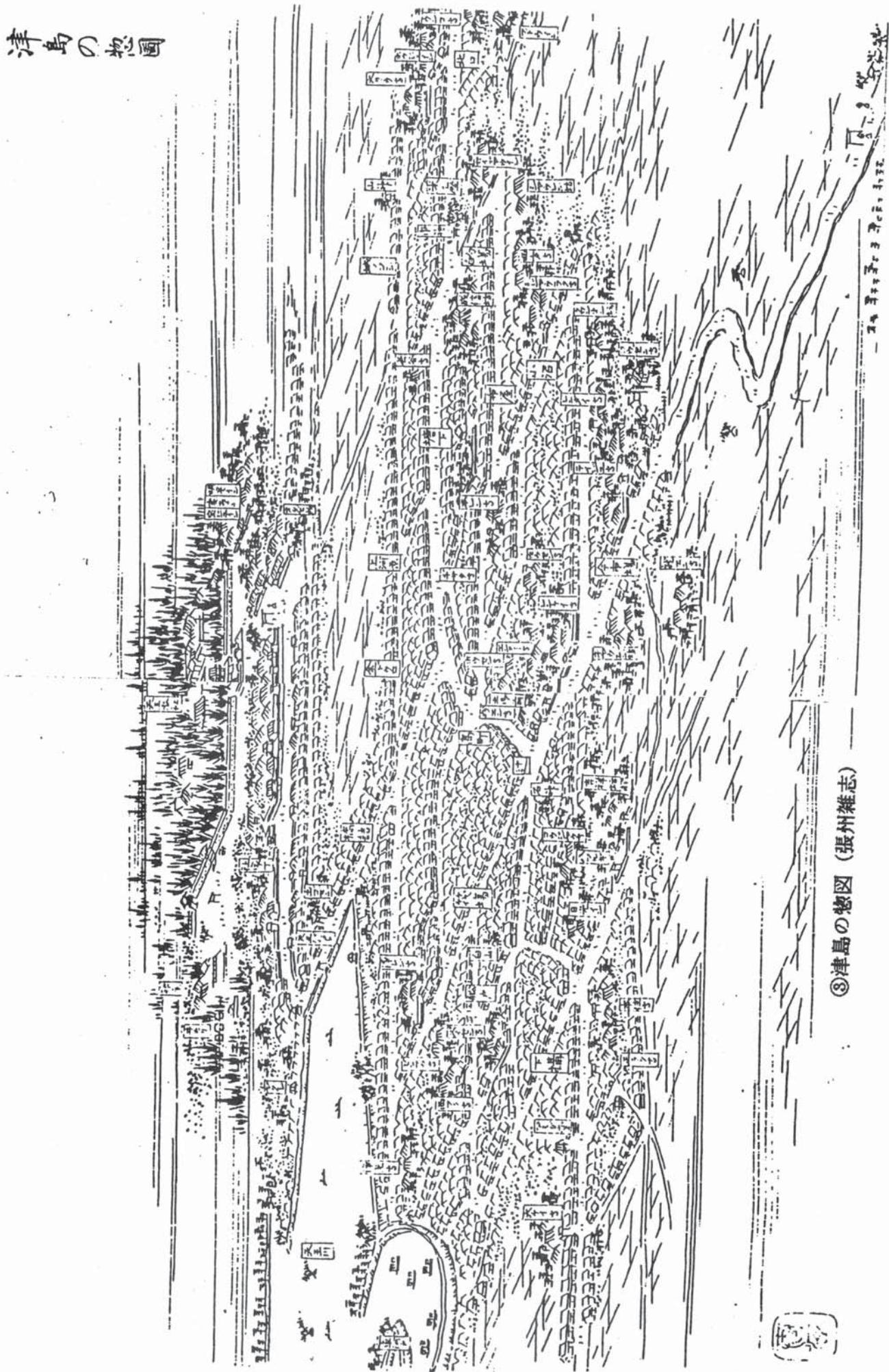
①尾張国海西郡津島之図（延享5年）



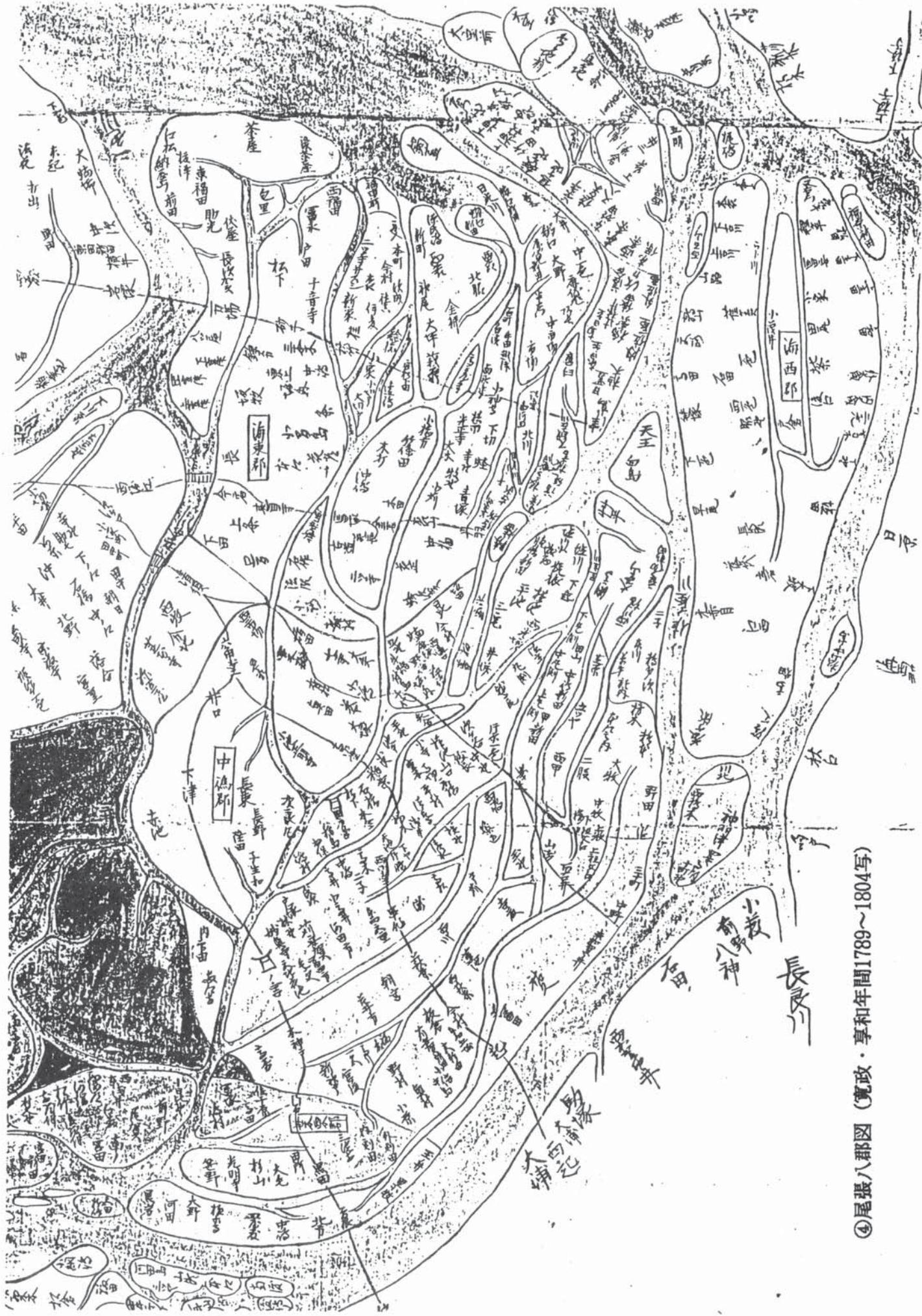
②津鷲邑之図（張州雜志）



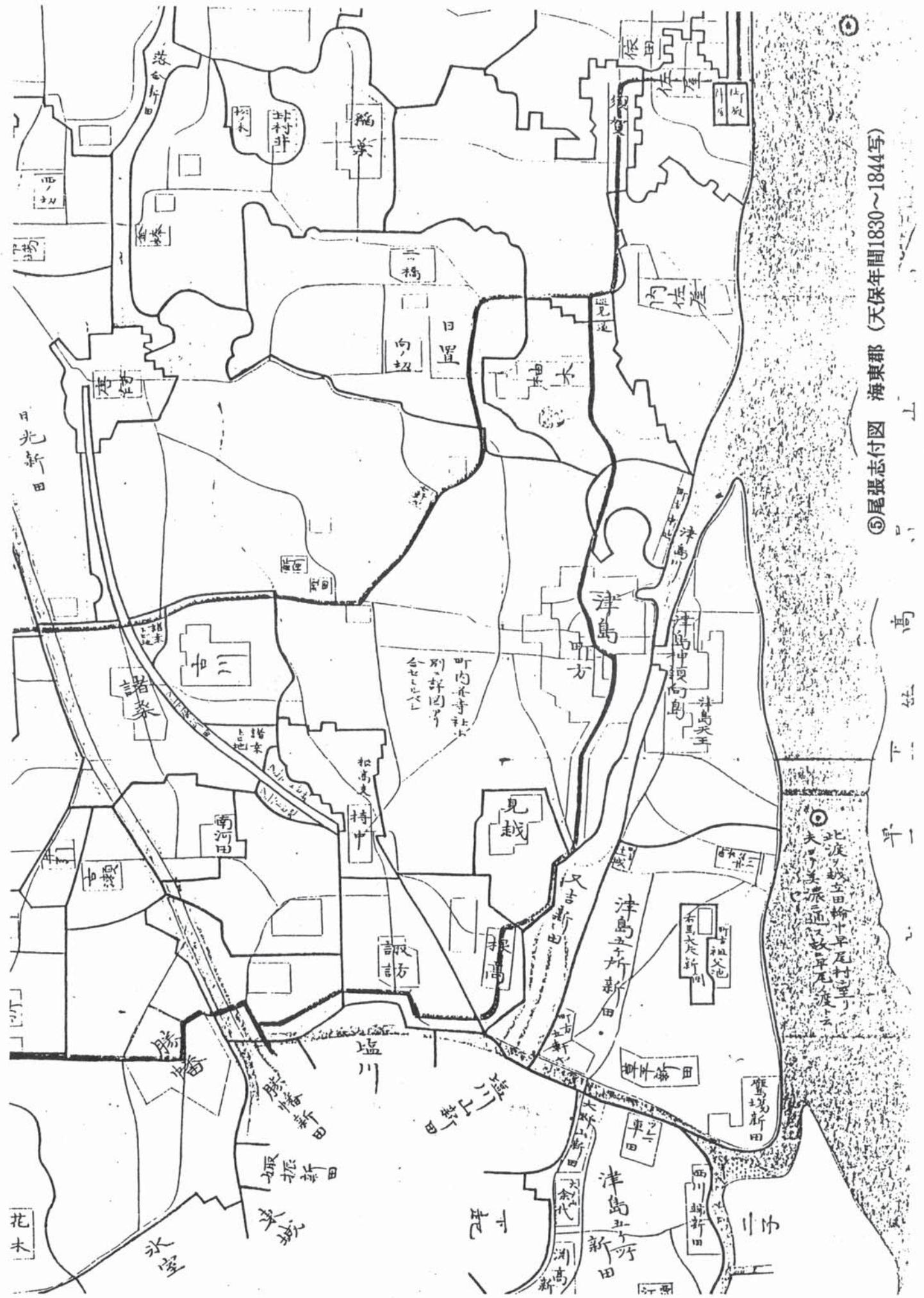
津島の物語



③津島の惣図（張州雜志）



④尾張八郡図(寛政・享和年間1789~1804写)



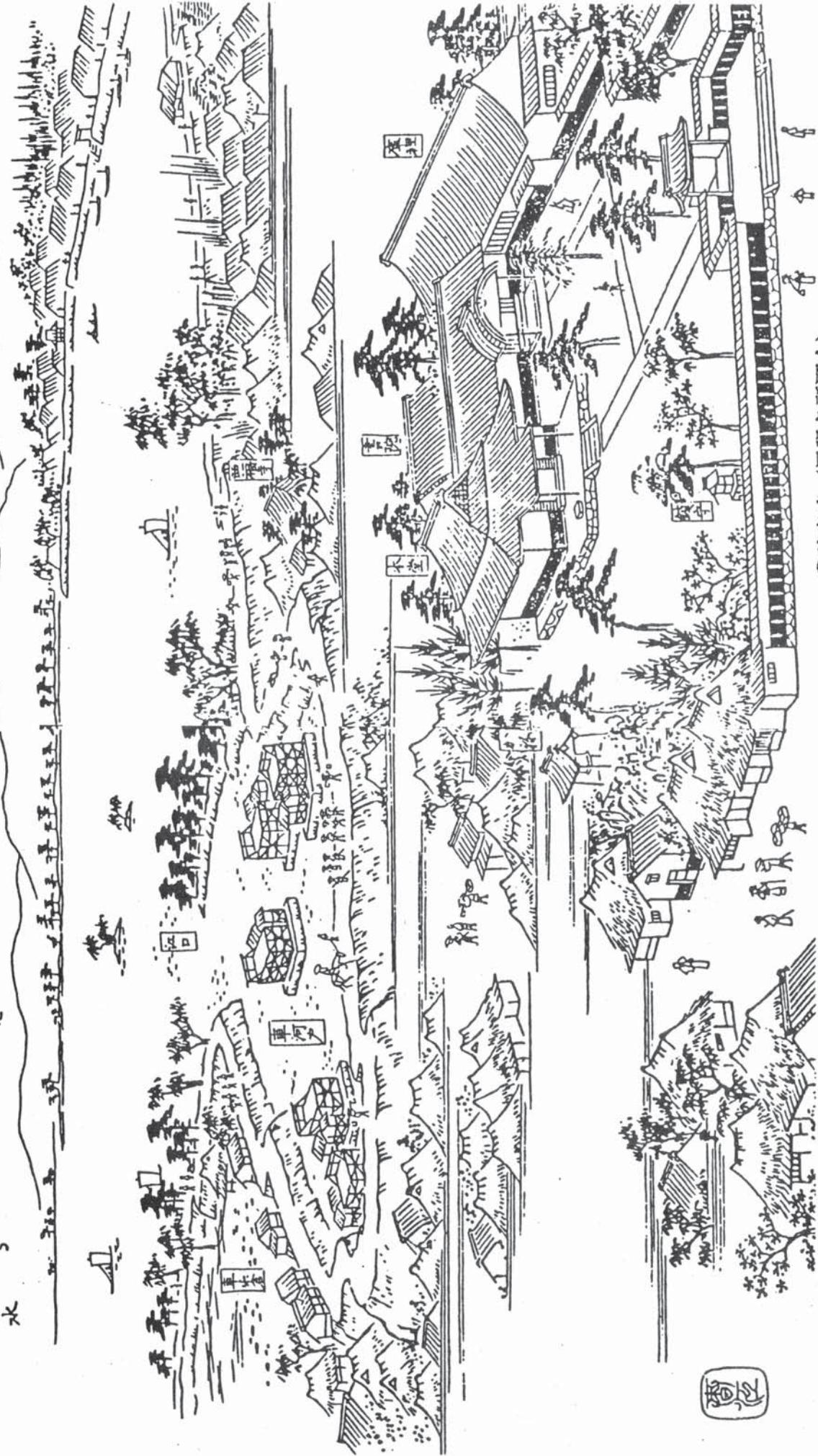
⑤尾張志付図 海東郡 (天保年間1830~1844写)



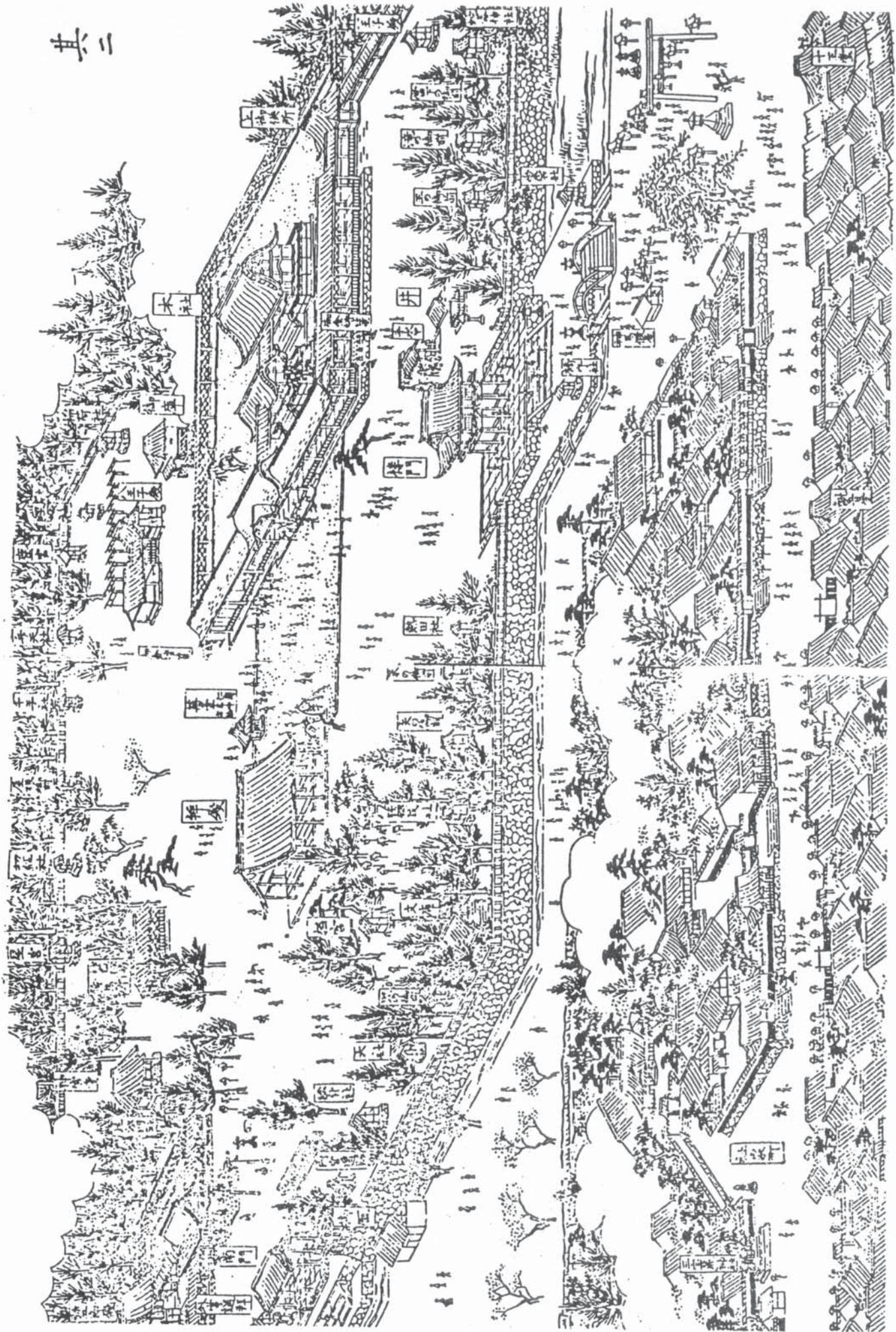
⑥尾張國圖（江戸末期）

寺泉花瑞

休止水
了了
新舊
日月
江口
本島公義

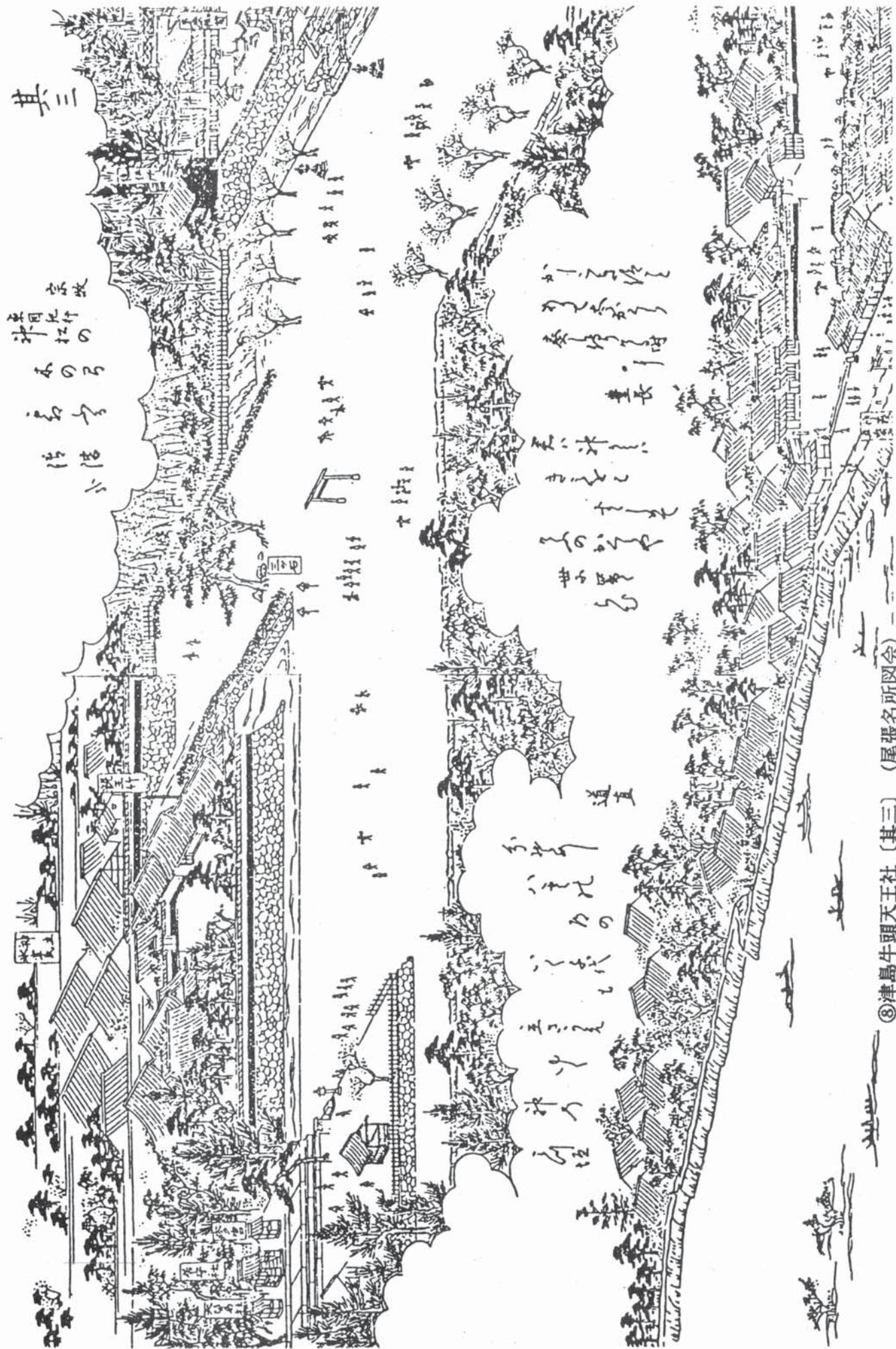


⑦瑞泉寺(尾張名所図会)



⑧津島牛頭天王社（其二）（尾張名所図会）

其三



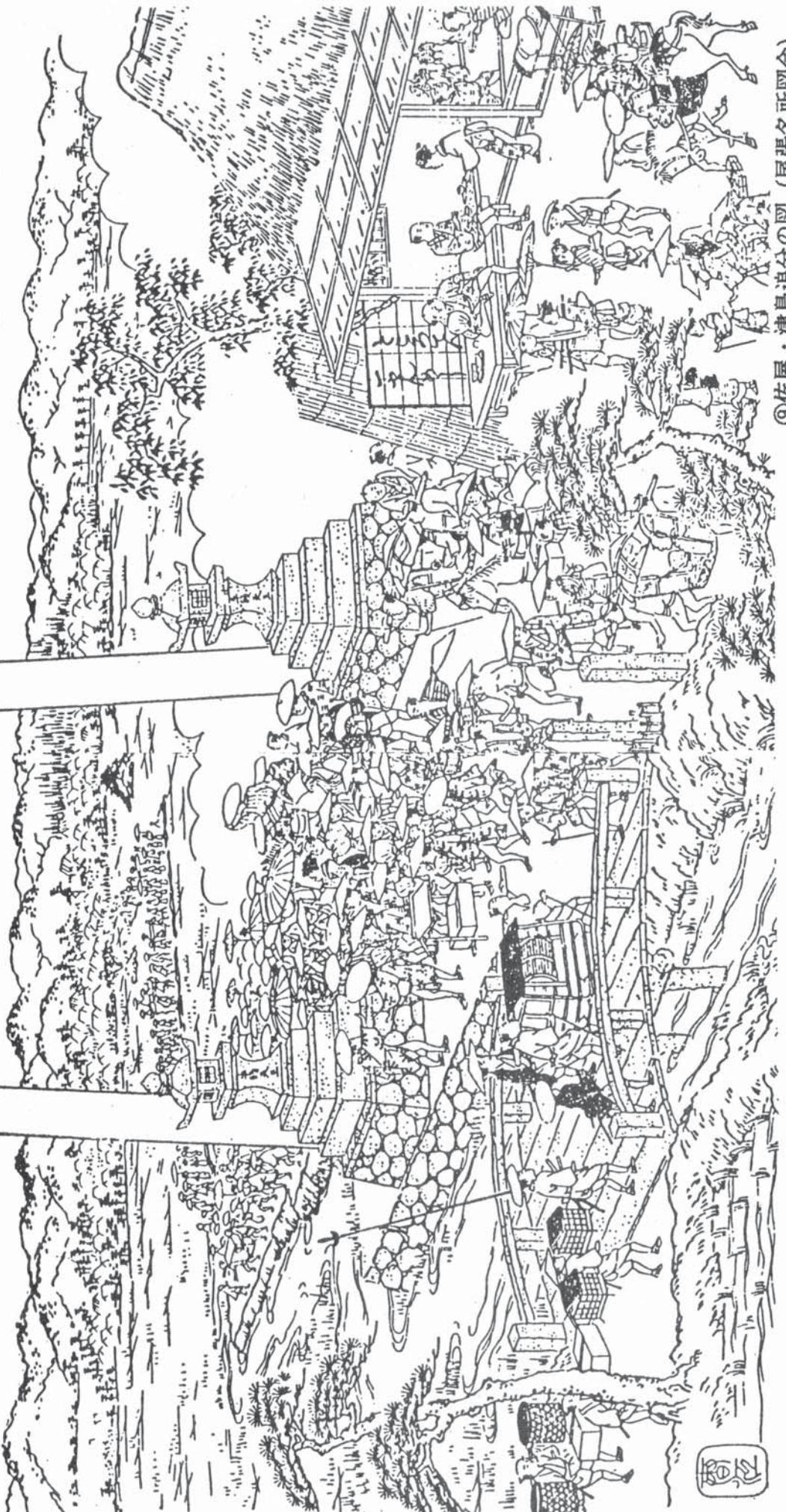
⑧津島牛頭天王社（其三）（尾張名所図会）

佐屋
津島追分

驛程北指雪山高
剣、白酸風、大飲刀
衰脚如何還得力
蒼松林下賣村醉
市河寛春

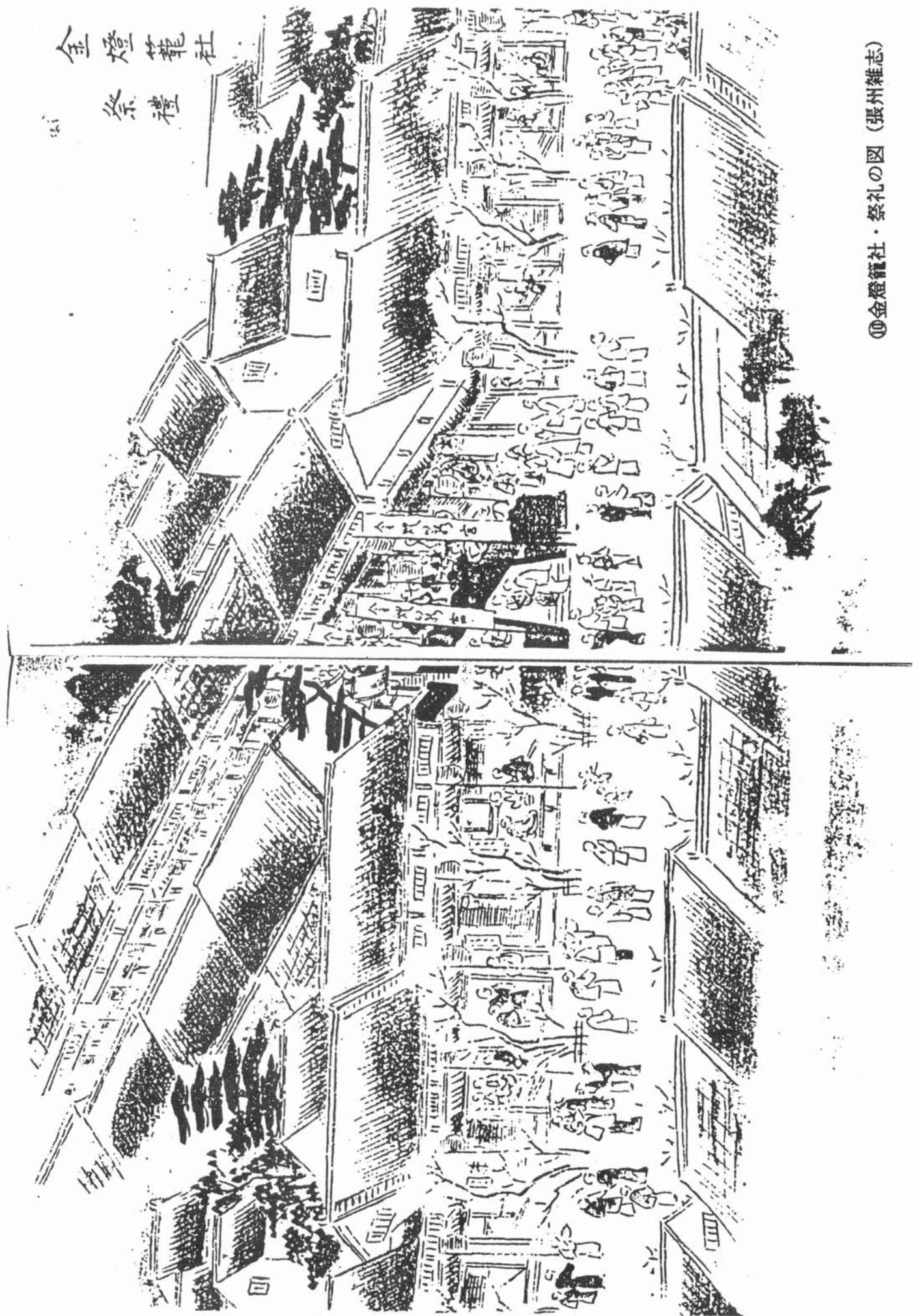


白人ホロ
シマツヨイ
ローマン
ナハシの
ナガの

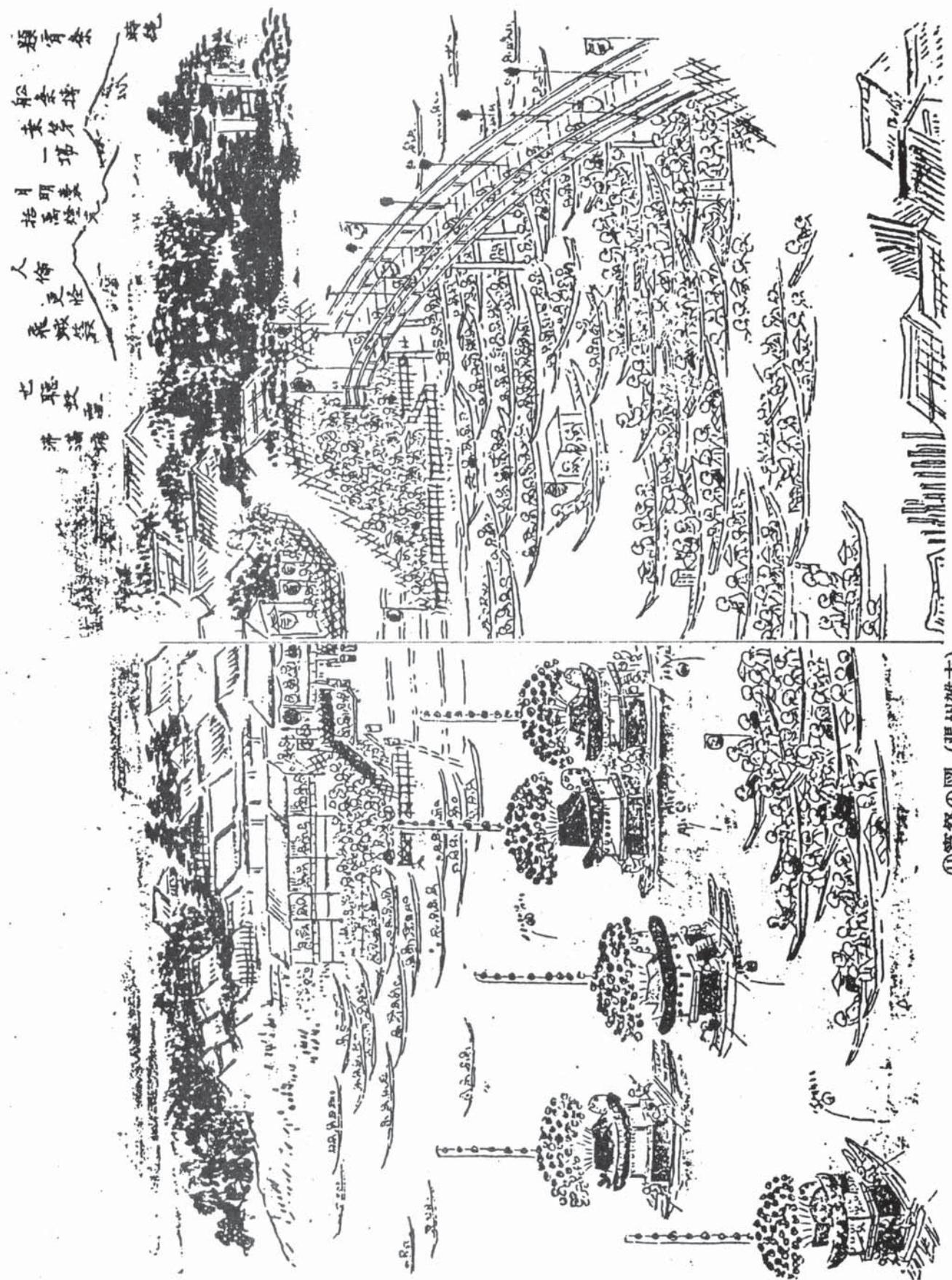


⑨佐屋・津島追分の図 (尾張名所図会)

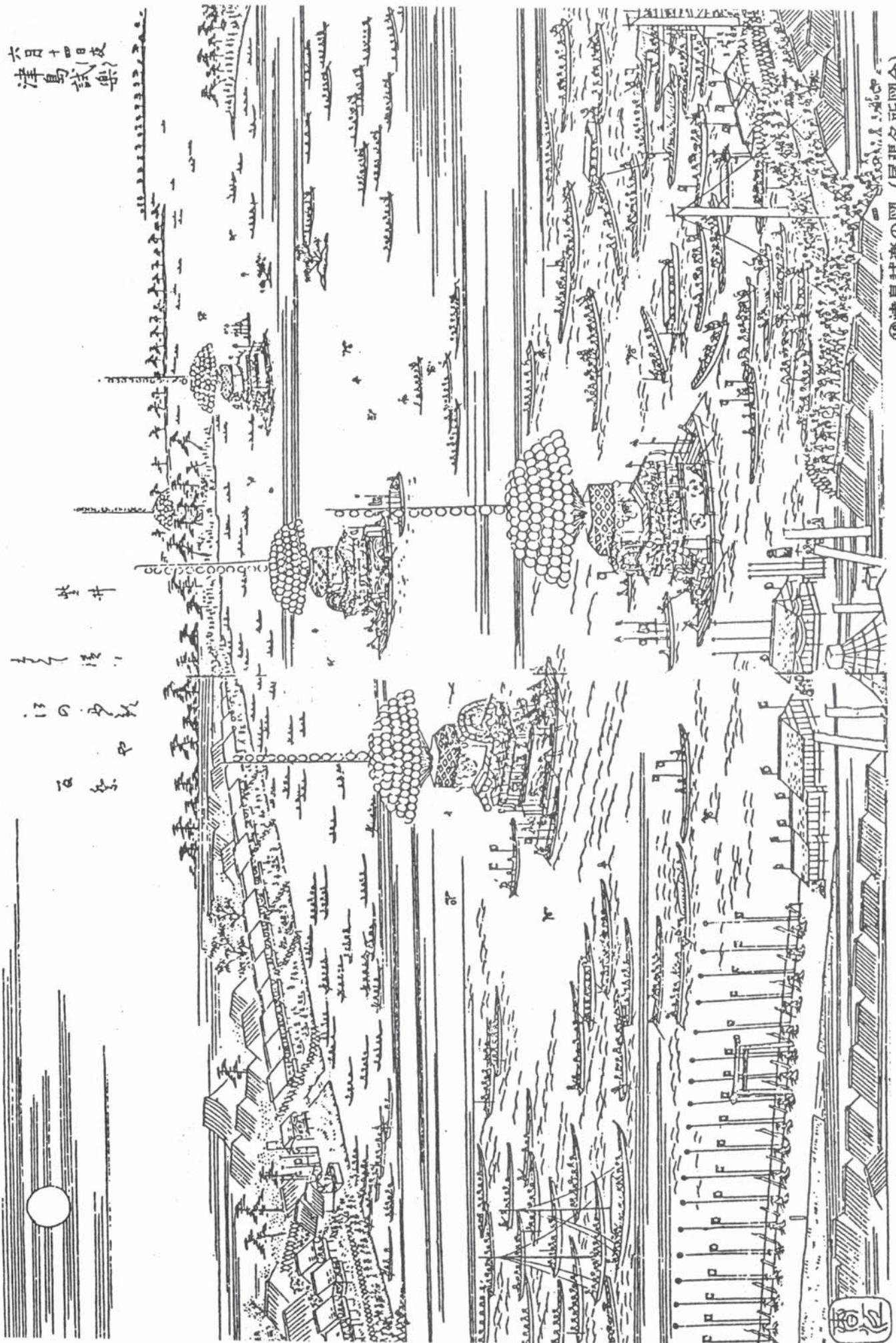
⑩金燈籠社・祭礼の図（張州雜志）



①宵祭の図（張州雜志）



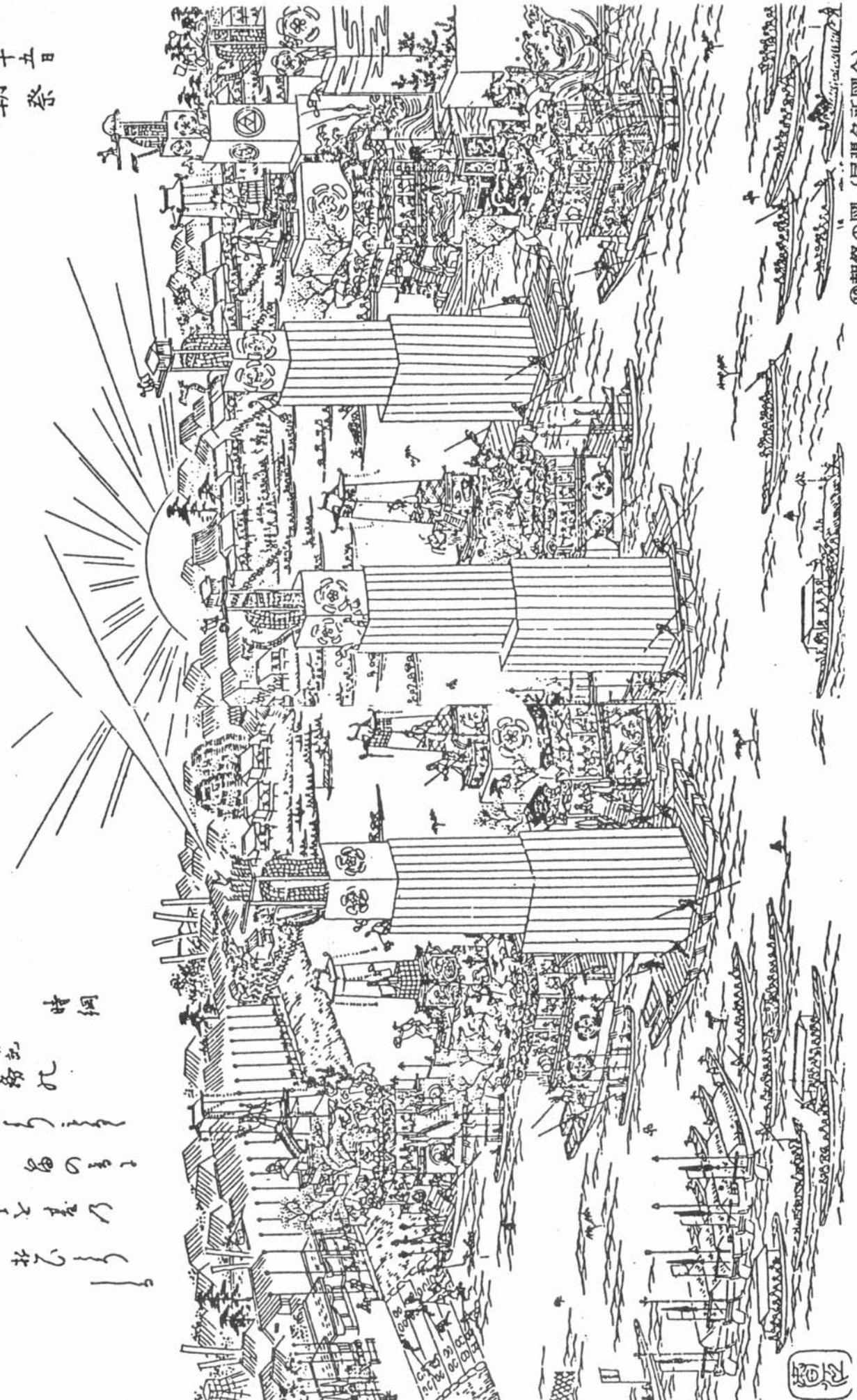
六日
津島試験



⑫津島試験の図（尾張名所図会）

六月十五日
朝祭

津島祭
御内神社
白山神社
金刀比羅宮
千手寺
松原



⑬朝祭の図 (尾張名所図会)

表一 記録に残る主な風水害

年 号	西暦	被 害 状 況
神護景雲 3	769	木曾川出水 葉栗・中島・海部三郡において被害甚し
慶 長 17	1612	塩田(立田村)の堤防破壊、津島町家に河水浸水
寛 永 10	1633	西境の堤防破壊し田畠に害あり
慶 安 3	1650	津島に被害
〃 4	1651	海東・海西の両郡に水害
元 錄 15	1702	海東郡三越村の大仏こわれて河水郡中にあふれ、津島輪中不毛となる。
正 德 5	1715	大風雨のため諸川水量を増し材木流失したため堤防を破壊、高須・立田・津島で被害大
宝 歴 3	1753	神領堤切、神仏がぬける。
〃 7	1757	雨による被害大、150年来の大水
明 和 4	1767	大雨のため各所で堤防破壊、佐屋街道以南の田畠水腐
天 明 3	1783	大水のため天王橋落ちる。
〃 6	1786	大雨による決壊
文 化 12	1815	大雨のため海東・海西で被害多し
明治元年 4~5 月	1868	大雨のため浸水家屋あり
明治17年 7 月	1884	洪水
〃 21年 8 月	1888	暴風雨のため各所に被害
〃 22年 8 月	1889	大雨・暴風のため各所に被害
〃 29年 8 月	1896	高潮・風水害、全壊・住宅21、寺1、その他14
〃 29年 9 月	1896	領内川堤防破壊、浸水家屋多し
〃 30年 9 月	1897	大雨のため海西郡海治村大字鶴多須の堤防破壊、浸水しないのは橋詰・高町・厨子・その他数町、被害極めて大
大正10年 9 月	1921	永和村大字唐臼地先の日光川堤破壊、農作物の被害大
昭和34年 9 月	1959	伊勢湾台風による被害
〃 36年 6 月	1961	篠川・日光川・小切戸川等の決壊、福原輪中の堤防も破堤、津島市・佐織町・蟹江町・八開村に被害
〃 49年 7 月	1974	集中豪雨23,963戸浸水
〃 51年 9 月	1976	目比川右岸が破堤31,009戸浸水

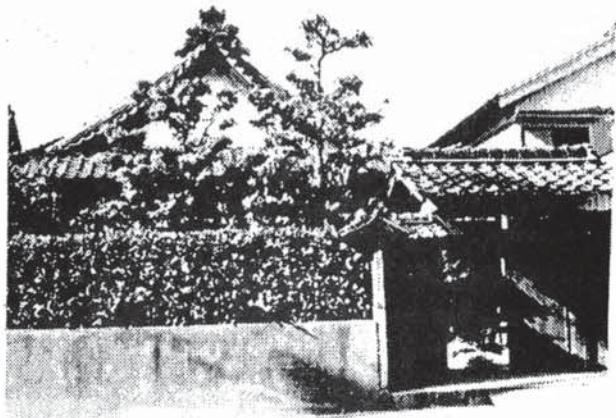
表—2 世帯数および人口の推移

年	世帯数(戸)	人口			一世帯あたりの 人員
		総数	男	女	
明治16年	2,180	—	—	—	—
明治22年	2,454	—	—	—	—
明治38年	3,400	15,489	—	—	—
明治44年	2,820	13,128	6,470	6,658	4.66
大正4年	3,020	14,399	7,119	7,280	4.77
大正9年	3,005	13,727	6,738	6,989	4.57
大正14年	3,369	15,809	7,684	8,125	4.69
昭和5年	3,799	18,422	8,932	9,490	4.85
昭和10年	4,427	22,166	10,512	11,654	5.01
昭和15年	4,651	22,733	10,675	12,058	4.89
昭和20年	6,017	27,209	12,466	14,743	4.52
昭和22年	6,595	31,737	15,012	16,725	4.81
昭和25年	6,116	30,608	14,334	16,274	5.00
昭和30年	7,264	38,672	17,483	21,189	5.32
昭和35年	8,383	43,198	19,280	23,918	5.15
昭和40年	10,217	46,559	21,406	25,153	4.56
昭和45年	12,544	51,441	24,504	26,937	4.10
昭和50年	15,048	58,241	28,149	30,092	3.87
昭和55年	16,065	59,049	28,681	30,368	3.68
昭和57年	16,133	58,937	28,621	30,316	3.65
昭和58年	16,445	59,298	28,874	30,424	3.61
昭和59年	16,390	58,951	28,679	30,272	3.60
昭和60年	16,277	58,735	28,334	30,391	3.60

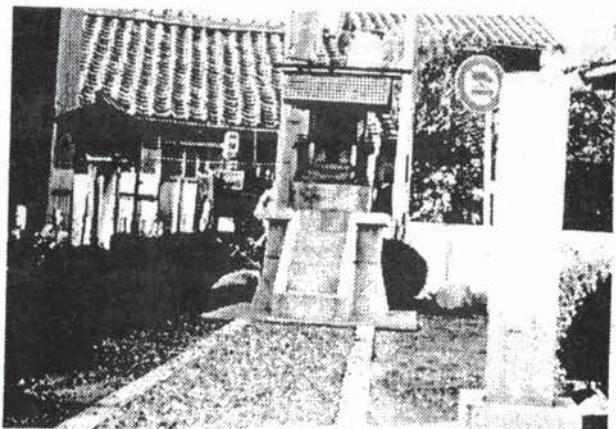
(昭和5年以降は国勢調査、および住民基本台帳により、他は町史による)

表一3 景観上の要因となるもの一覧

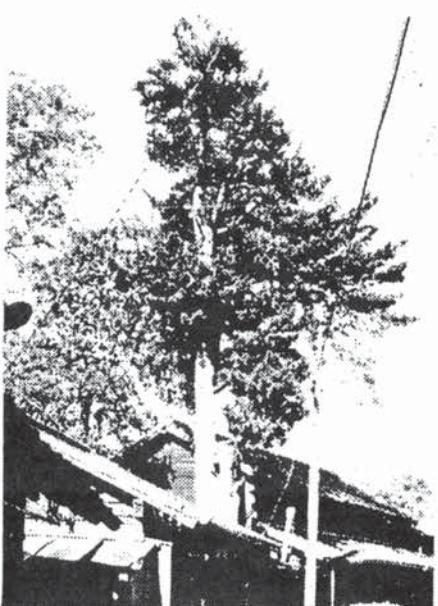
	景観上の要素となるもの	所在地	項目	備考
1	西岸寺	兼平町	寺	
2	兼平神社	〃	神社	
3	大樹	〃	大樹	
4	金刀毘羅社	〃	神社	
5	兼平の地蔵	〃	地蔵	
6	和魂神社	片岡町	神社	
7	地蔵	〃	地蔵	
8	宗念寺	米町	寺	
9	市神社	〃	神社	
10	本町神社	本町	〃	
11	清正公碑道しるべ	〃	道しるべ	
12	堤下神社	〃	神社	
13	道しるべ	〃	道しるべ	
14	井戸	〃	井戸	
15	坂口神社（秋葉社）	〃	神社	
16	屋根神	〃	〃	
17	窓	南本町	町家	
18	地蔵	〃	地蔵	
19	地蔵	〃	〃	
20	地蔵	〃	〃	
21	下構神社（下構十王堂）	〃	神社	



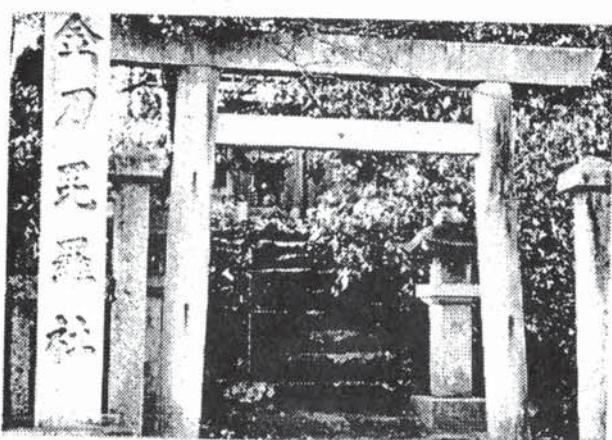
写真一
1



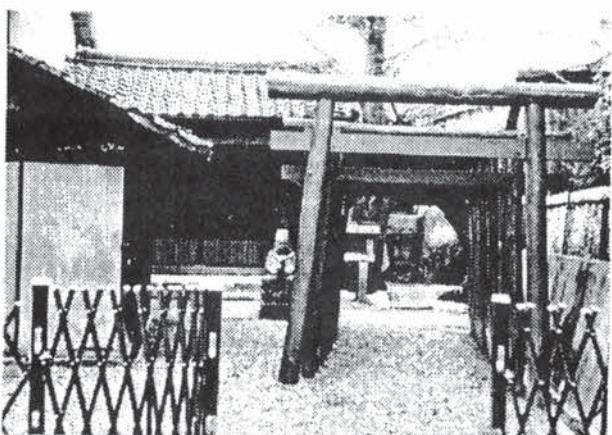
写真二
2



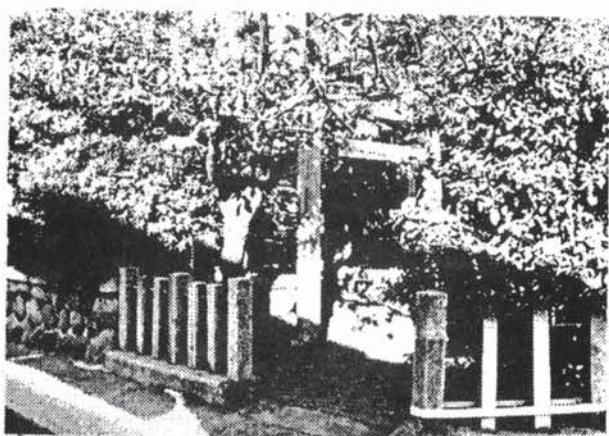
写真三
3



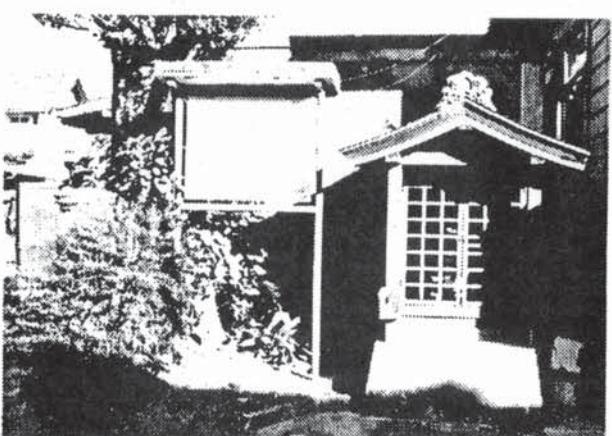
写真四
4



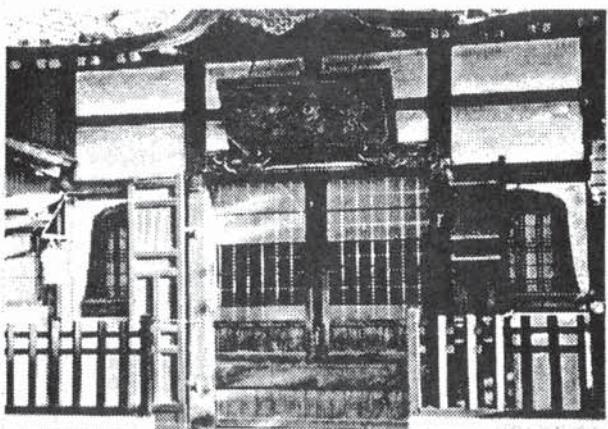
写真五
5



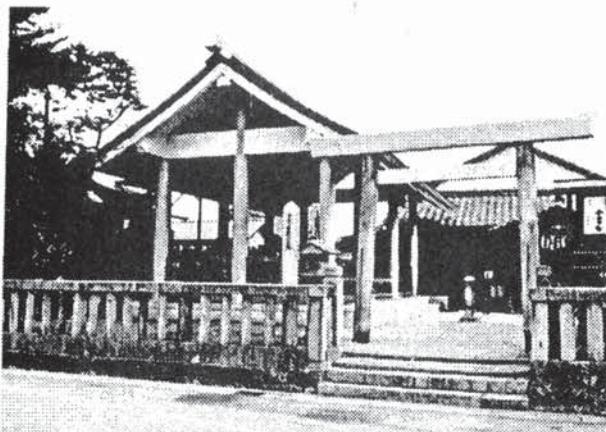
写真六
6



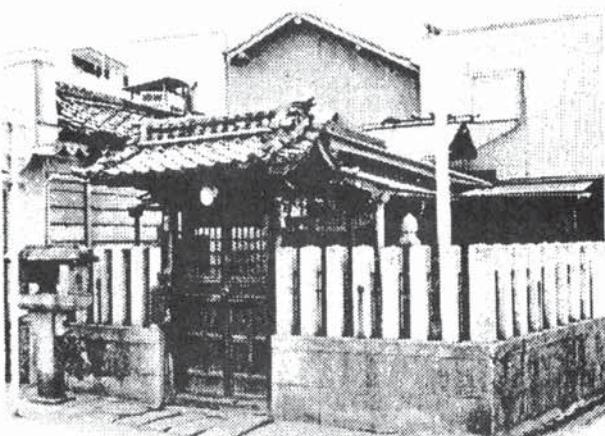
写真七
7



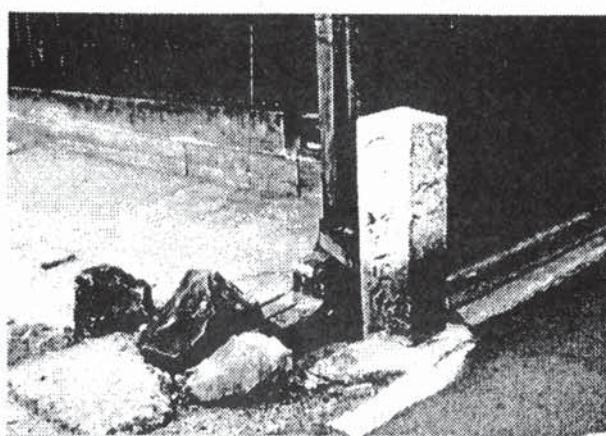
写真一8



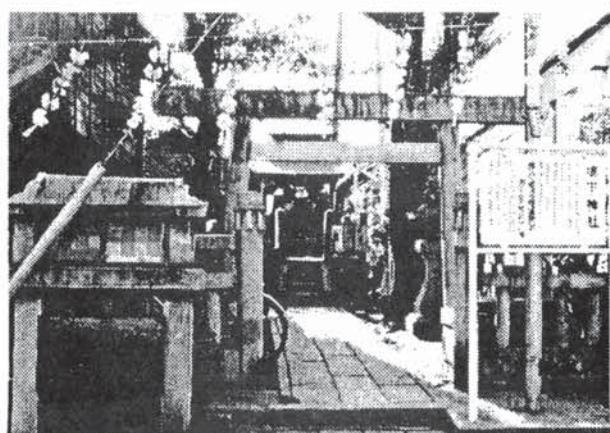
写真一9



写真一10



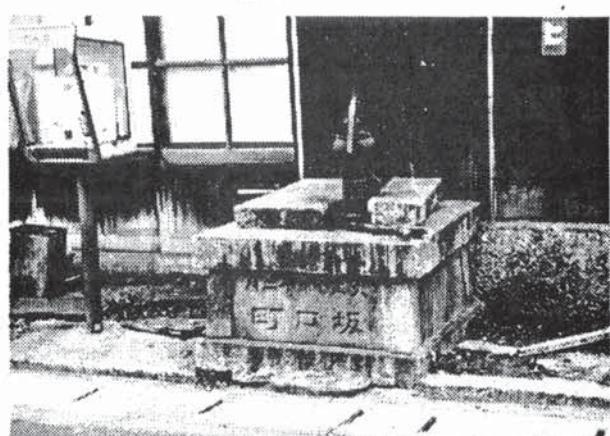
写真一11



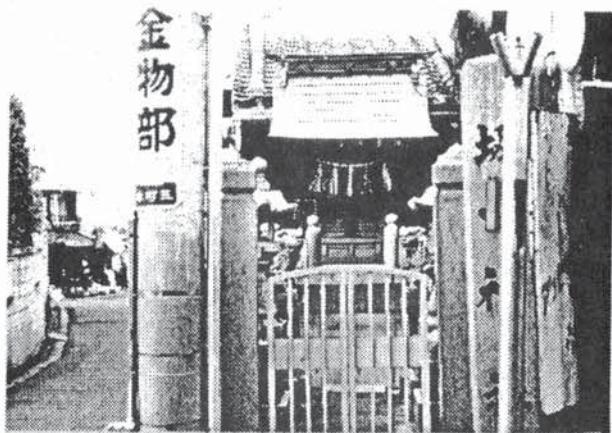
写真一12



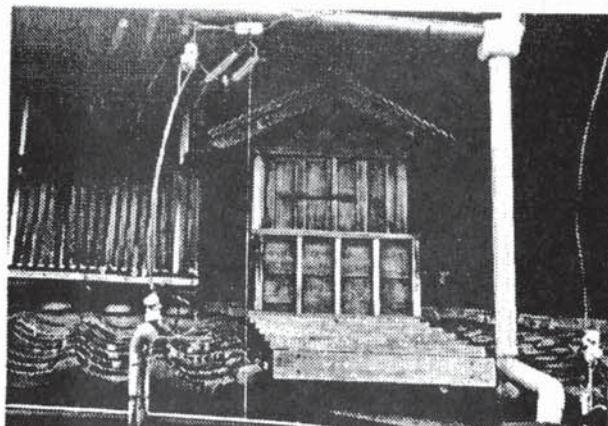
写真一13



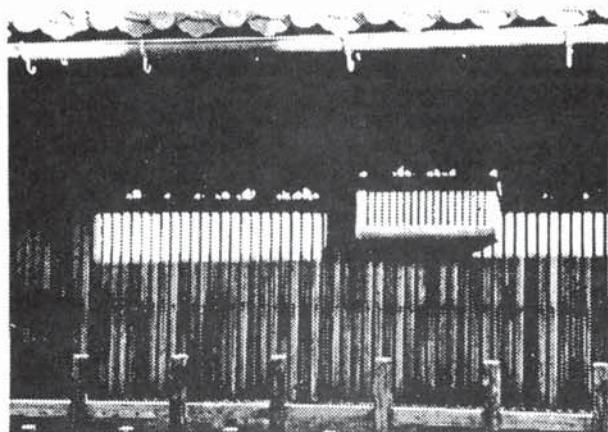
写真一4



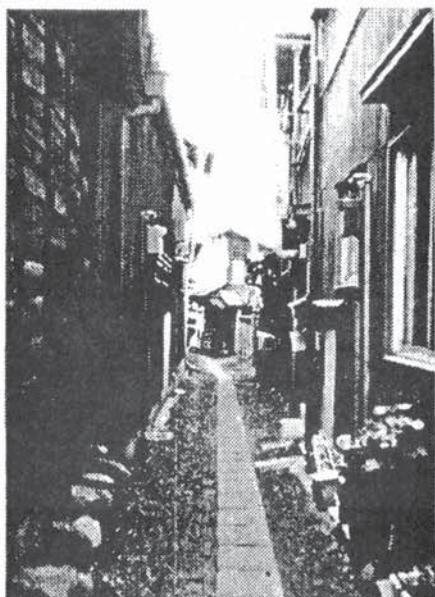
写真—15



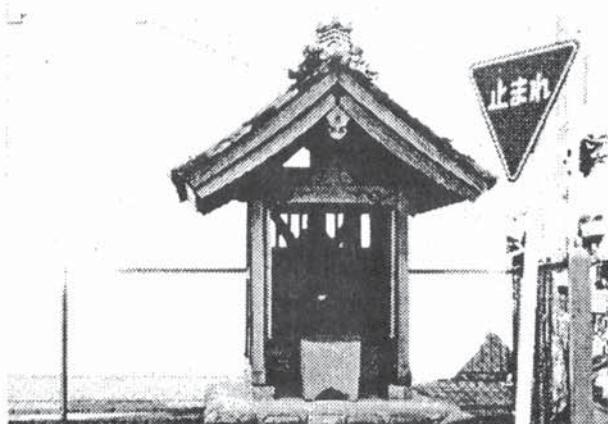
写真—16



写真—17



写真—18



写真—19



写真—21



写真—20

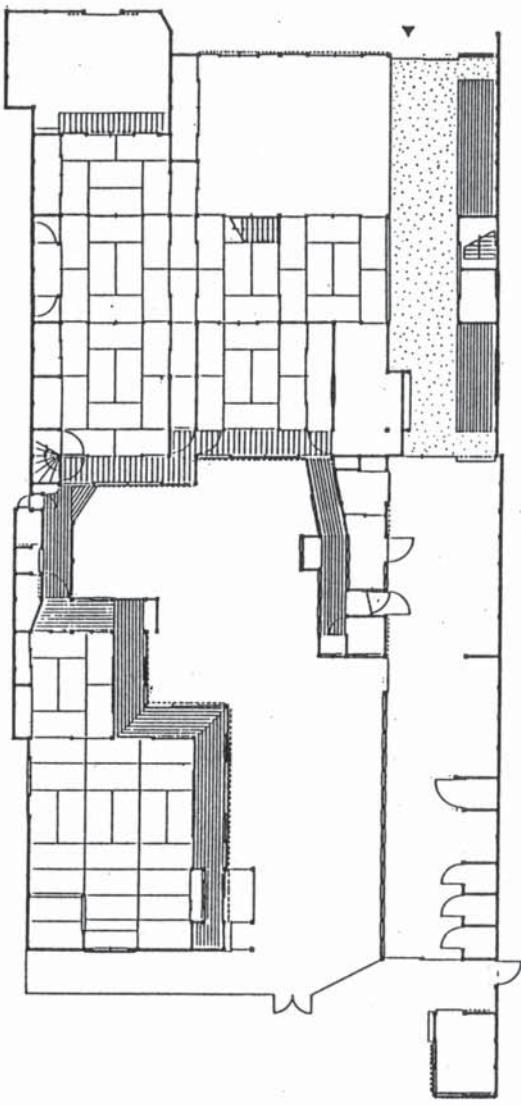
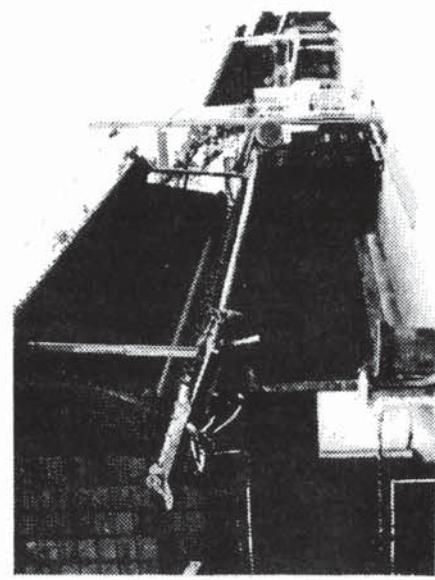
表—4 調査された町家の一覧

N.O.	住 所	間 口	奥 行	平 面 形 式	ファサード	建 設 年 代	備 考
1	米町 ^{主子目}	9 間	8.5 間	2列三間（当初）	2F塗ごめ	明治 38	
2	本町1丁目	5.75間	7.5 間	2列四間	2 F	江戸 末	
3	"	2.75間	7.5 間	1列四間	2 F	大正～昭和	
4	"	4.5 間	10.25間	1列五間	2 F	元治 2	棟札あり
5	"	2.75間	8.25間	1列三間	2 F	昭和 8	
6	"	6 間	9.5 間	1列四間（当初）	2 F	明治 初	
7	"	5.75間	7.5 間	1列四間（当初）	2 F	明治 末	
8	"	2.75間	12 間	1列型	2 F	江戸 未	
9	"	3 間	8.5 間	1列四間	2 F	明治 末	
10	"	3.75間	7.5 間	1列型	2 F	昭和 8	
11	"	3 間	8 間	1列四間	2 F	明治 末	
12	"	3.5 間 3.5 間	6 間 7.5 間	1列三間 1列三間	2 F 2 F	明治37～38頃 (1部明治初)	
13	"	3.75間	5.5 間	1列四間	2 F	明治 未	
14	本町2丁目	10 間	8 間	2列四間（当初）	2 F	江戸末～明治初	
15	"	6 間	(7 間)	—	2 F	江戸 未	2棟分を区切つて使用
16	"	4 間	(7 間)	—	2 F	江戸 未	増築、改築が激しく旧型が判断 しつらい
17	本町3丁目	5 間	8 間	2列四間	2 F	江戸 未	
18	"	5 間	6 間	2列三間（当初）	2 F	明治 未	
19	"	5 間	—	—	2 F	江戸 未	

20	"	10.5間	7間	2列三間(当初)	2F塗籠	明治 末
21	"	8間	12間	2列三間	2F	明治 末
22	本町4丁目	2.25間	6間	1列三間(当初)	2F	明治末~大正
23	"	4間	8間	1列四間	2F	江戸 末
24	"	3間	8.5間	1列四間	2F	明治 末
25	"	6間	9間	1列四間	2F	江戸 末
26	"	3間	7間	1列三間	2F	大正
27	"	3間	8.5間	1列四間	2F	"
28	"	3間	6.25間	1列三間	2F	明治末~大正
29	"	2.5間	6間	1列三間	2F	"
30	"	8間	9間	2列四間	2F	江戸 末
31	"	3間	6.5間	1列三間	2F	明治 31
32	"	3間	6.5間	1列三間	2F	"
33	"	3間	6.5間	1列三間	2F	"
34	本町5丁目	3間	6.5間	1列三間	2F	江戸 末
35	"	6間	7間	2列三間	2F塗籠	"
36	"	2.5間	7.75間	1列四間	2F	江戸末~明治
37	南本町1丁目	7.5間	10間	2列四間	2F	江戸 末
38	筏場町	5.75間	7.5間	2列四間	2F	江戸末~明治
39	橋詰町2丁目	5.5間	8.5間	2列四間	2F	明治22~23年頃
40	"	5間	6間	1列四間	2F	明治 26

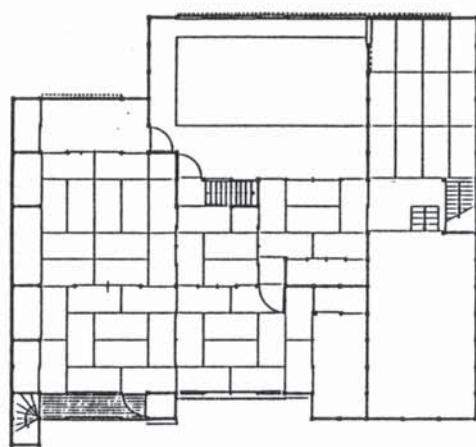
41	橋詰町1丁目	3.5間	9間	1列型	2F	明治末
42	瑠璃小路町	—	—	—	—	昭和初
43	浦方町	9.5間	6間	—	2F	江戸末

1 富永 新吾氏宅

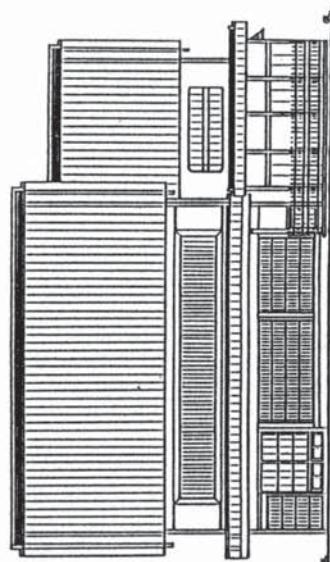


1F平面図

斜正面写真

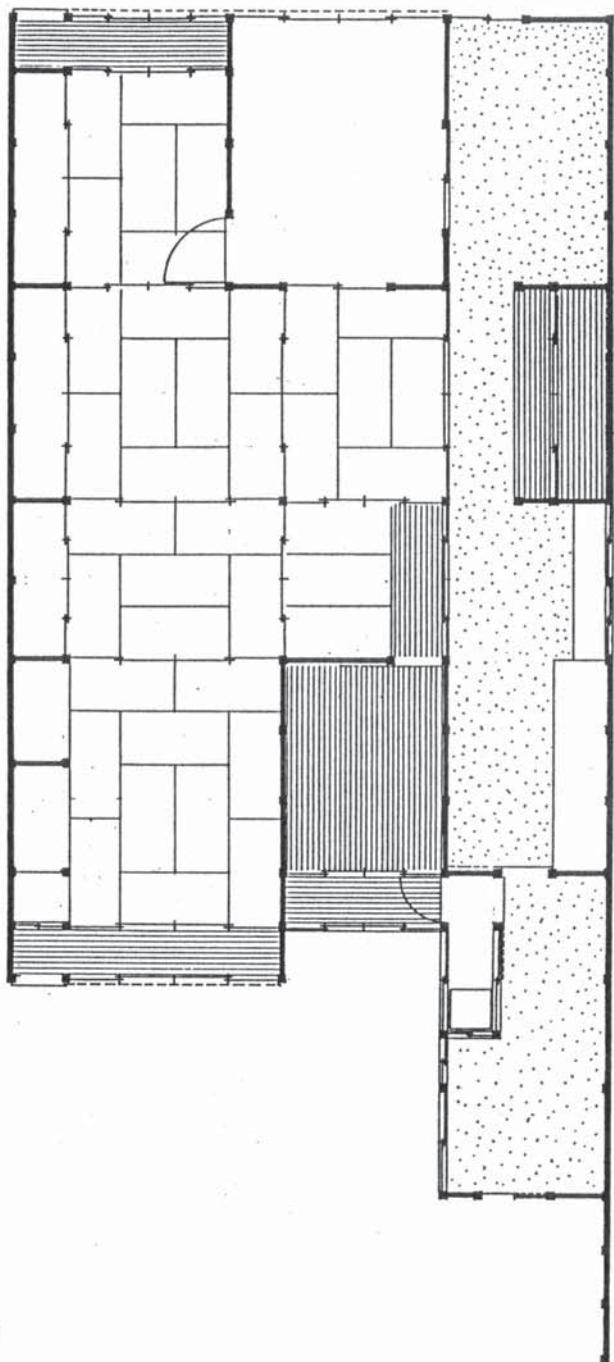


2F平面図

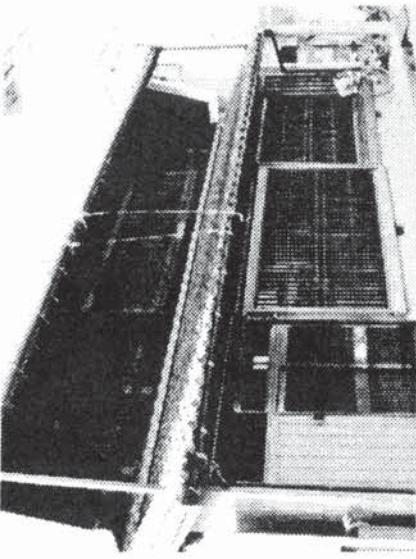


立面図

2 高木 恒夫氏宅

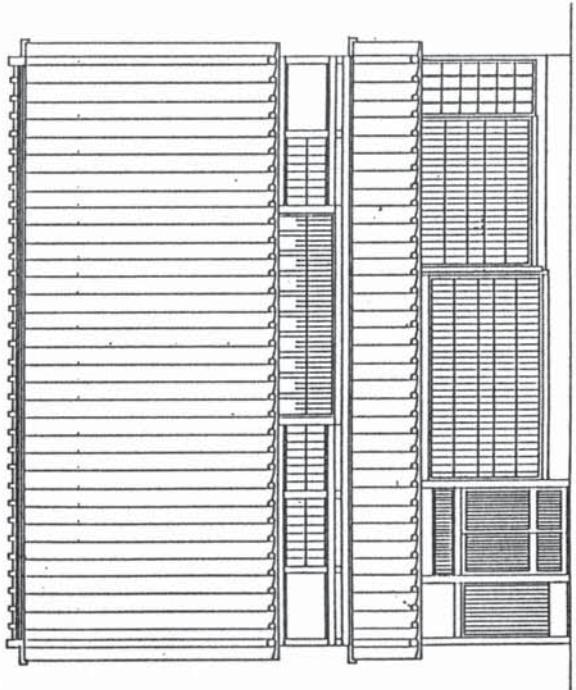


1 F 平面図

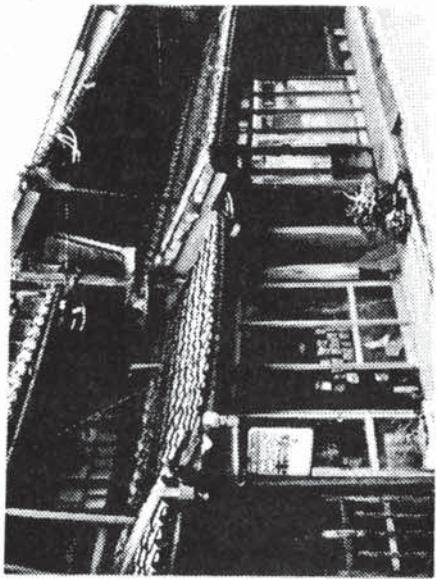


斜正面写真

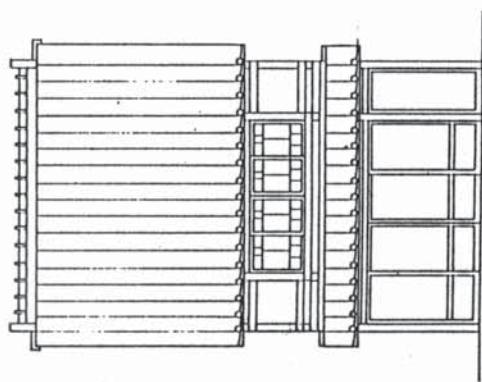
立面図



3 宇佐美 しづ子氏宅



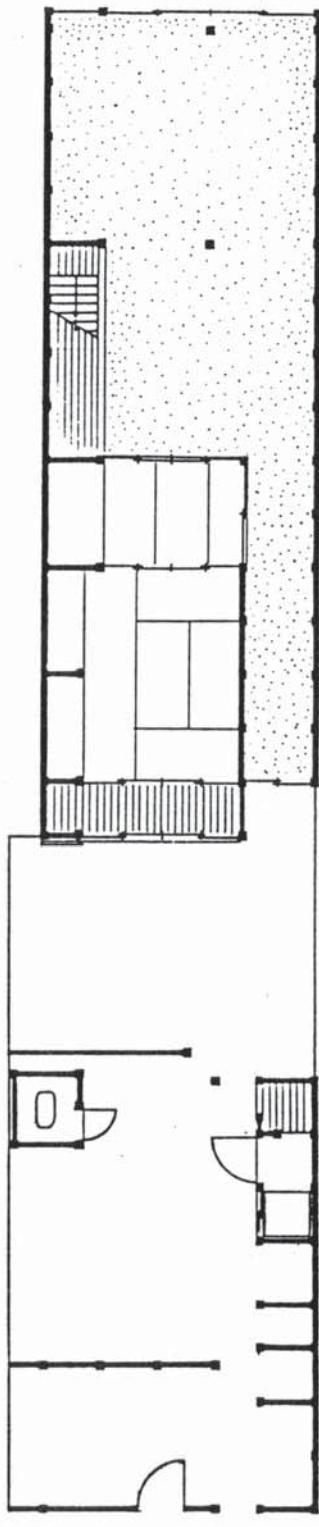
斜正面写真



立面図



2F平面図



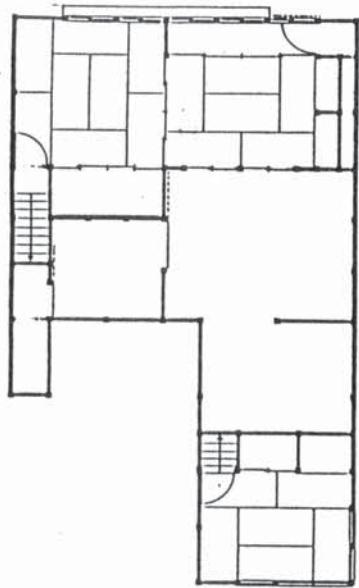
1F平面図

4 高木 良平氏宅

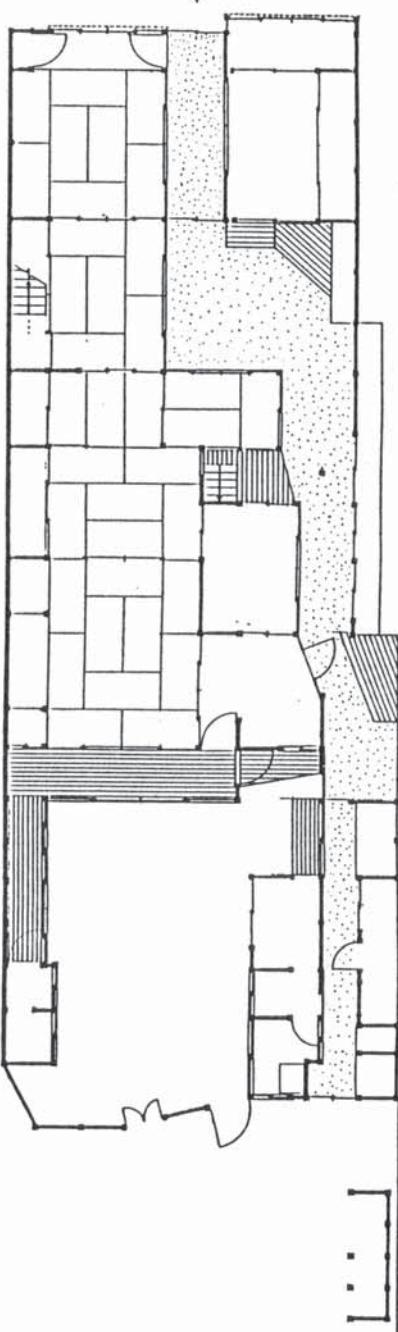


斜正面写真

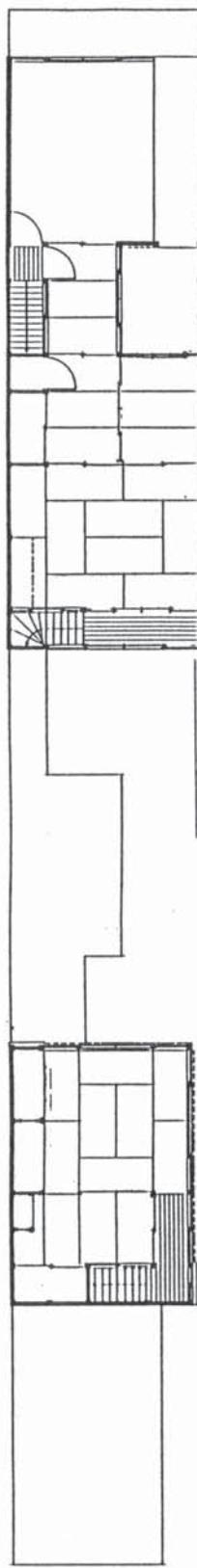
2F平面图



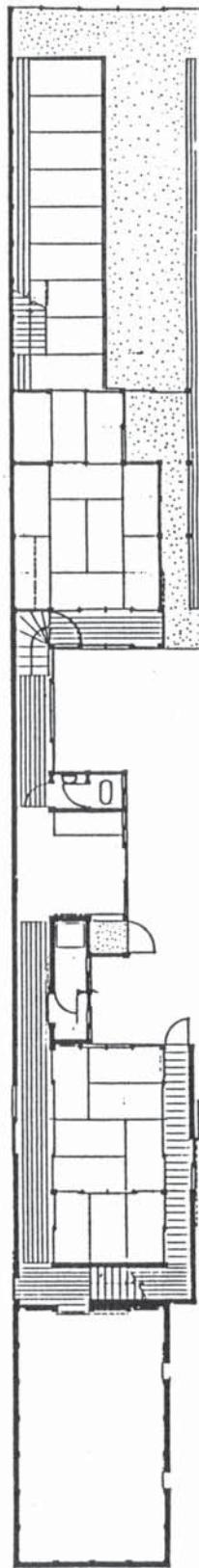
1F平面图



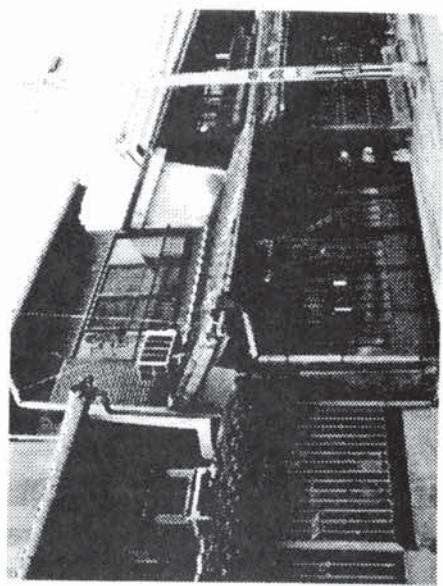
5 檜山 弘氏宅



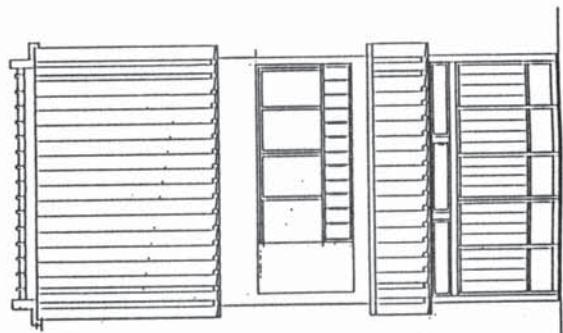
2F 平面図



1F 平面図



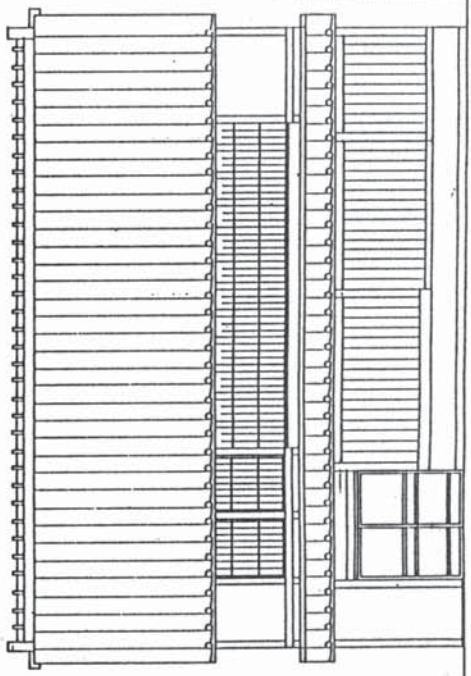
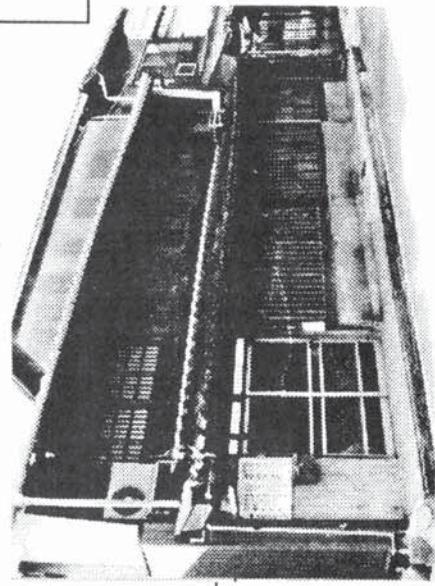
斜正面写真



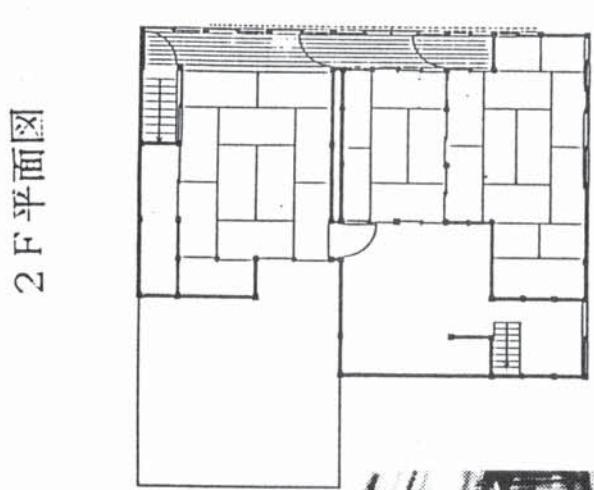
立面図

6 野田 佳彦氏宅

斜正面写真

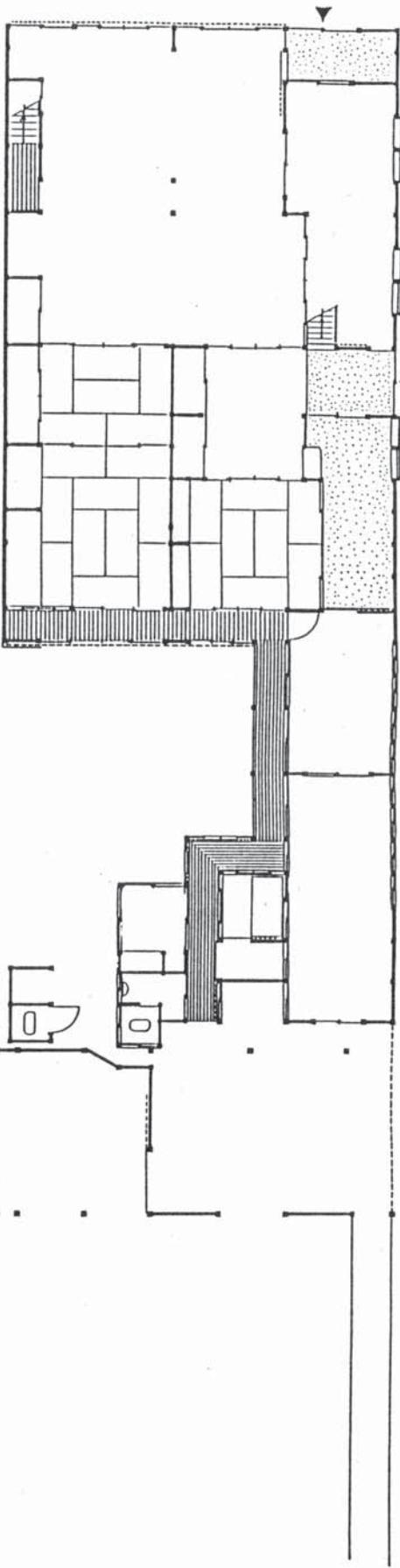


立面図

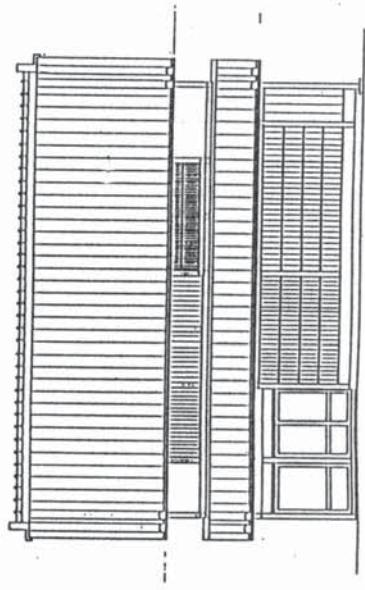


2F平面図

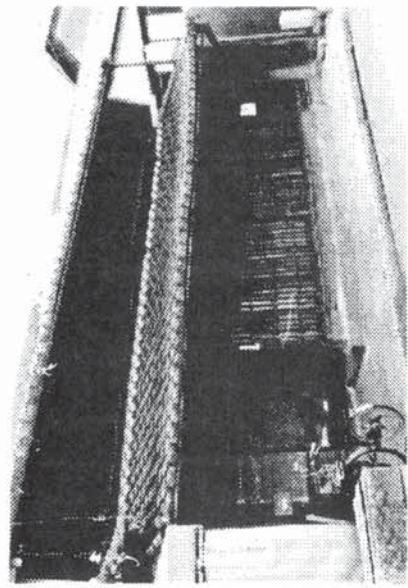
1F平面図



7 加藤 金之助氏宅

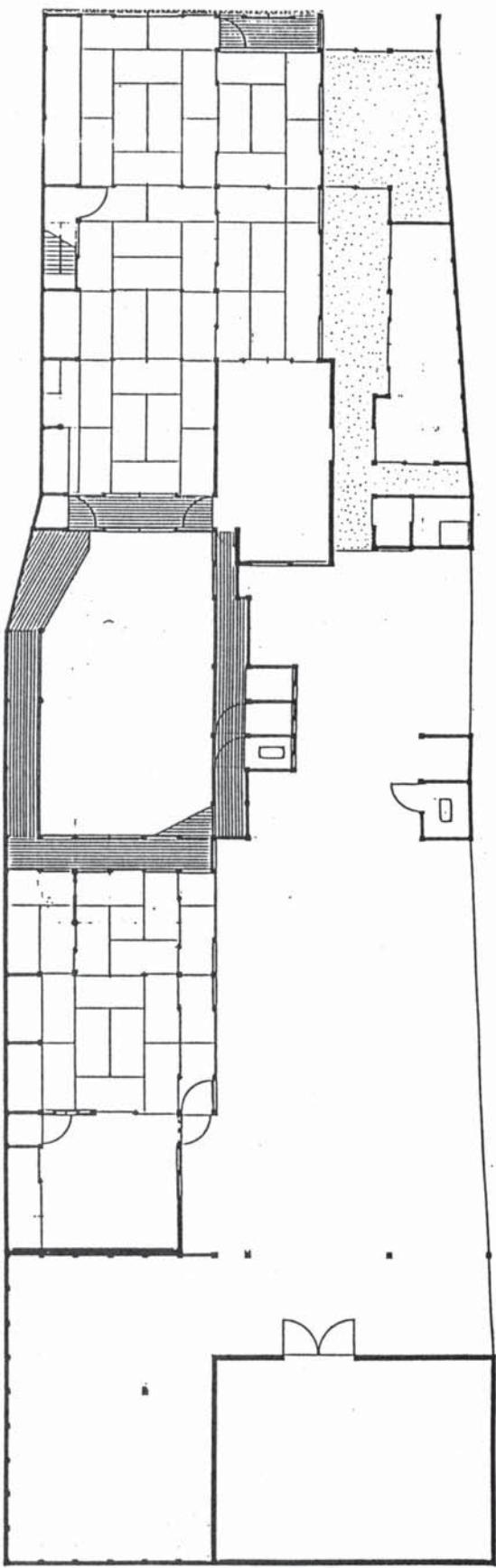


立面図

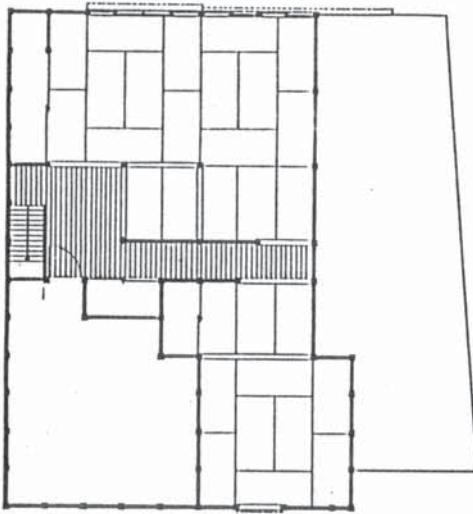


斜正面写真

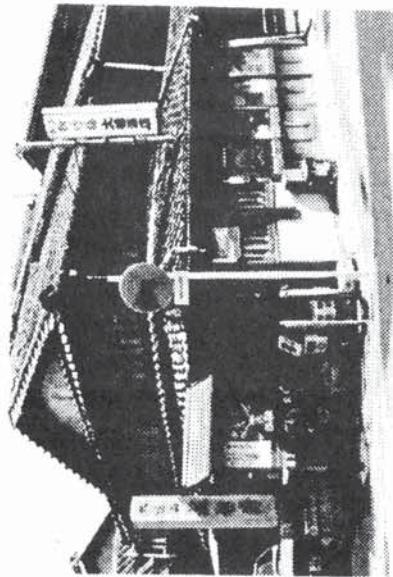
1 F 平面図



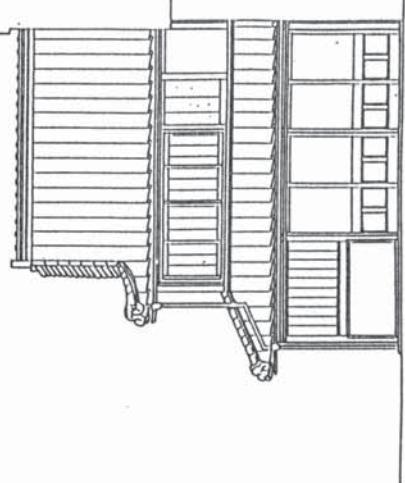
2 F 平面図



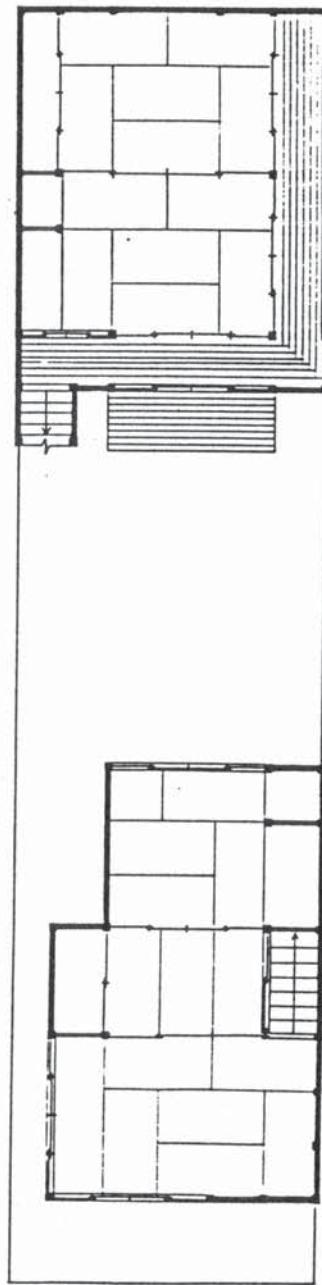
8 大橋 宣忠氏宅



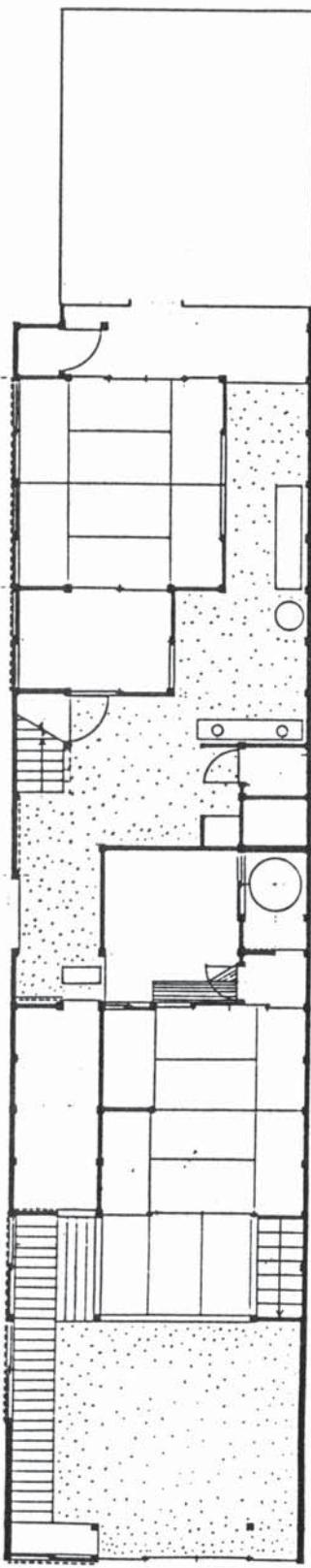
斜正面写真



立面图

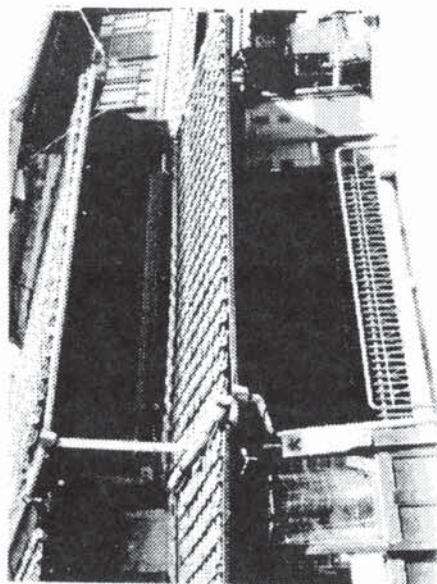


2F平面图

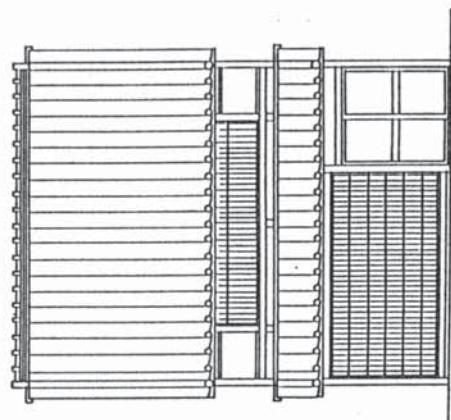


1F平面图

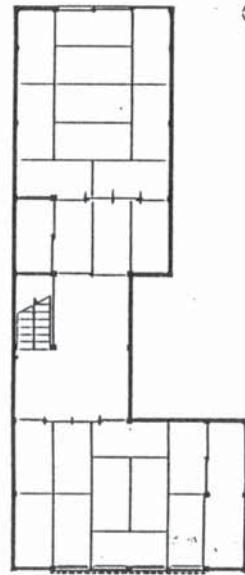
9 松原 嶽氏宅



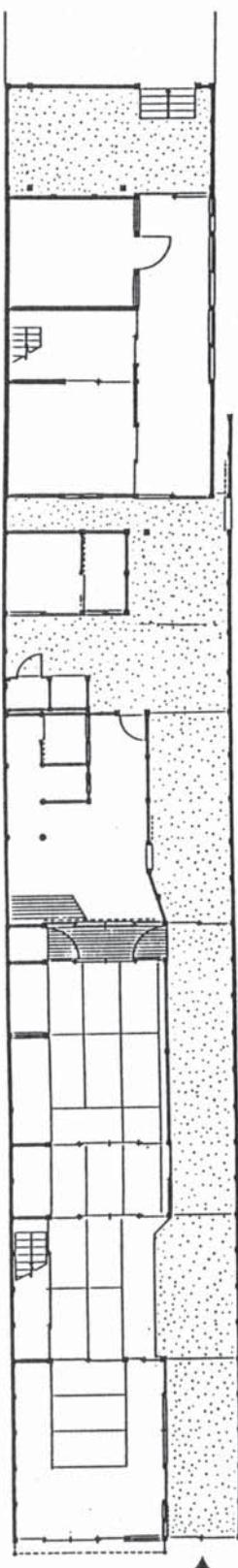
斜正面写真



立面図

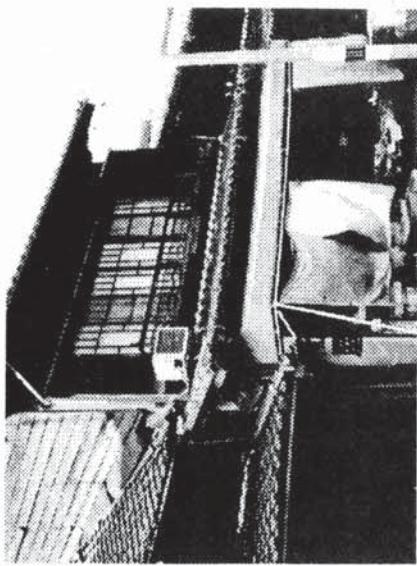


2F平面図

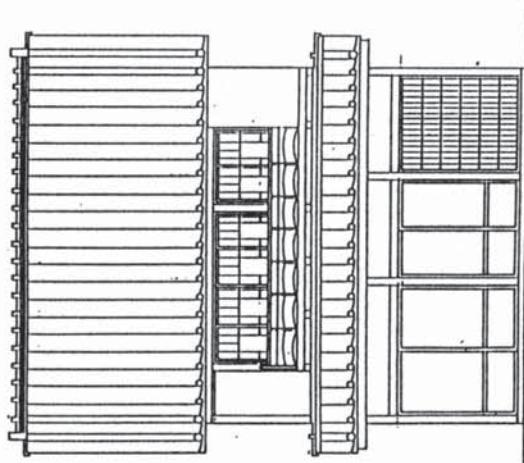


1F平面図

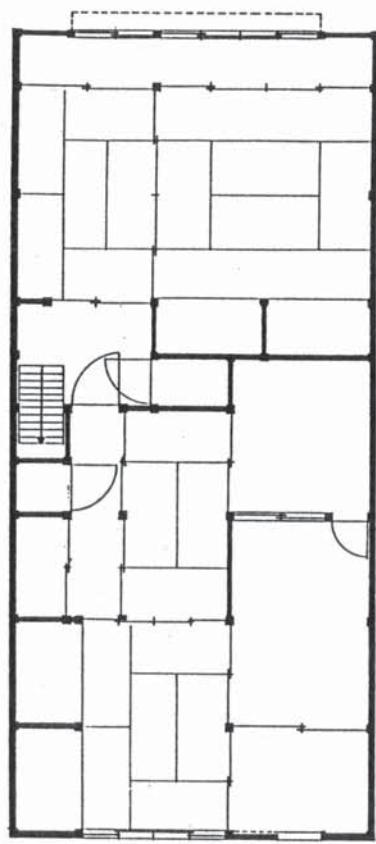
10 加藤 隆夫氏宅



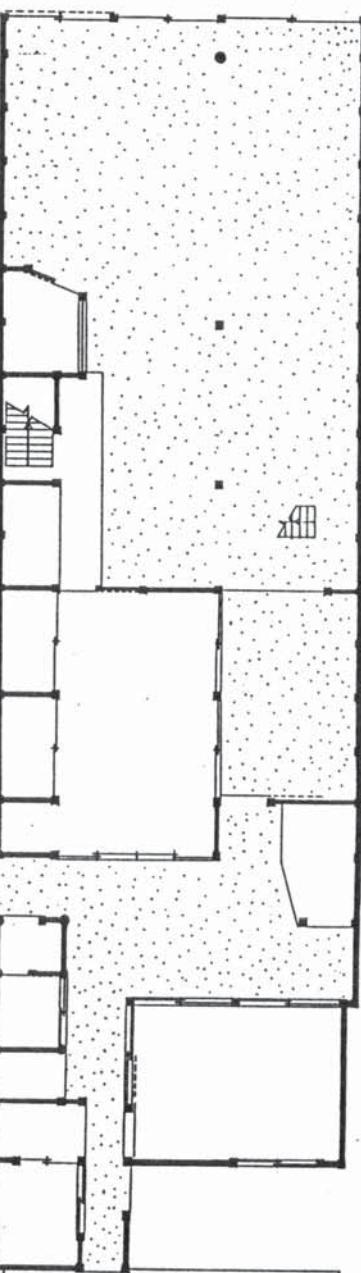
斜正面写真



立面図

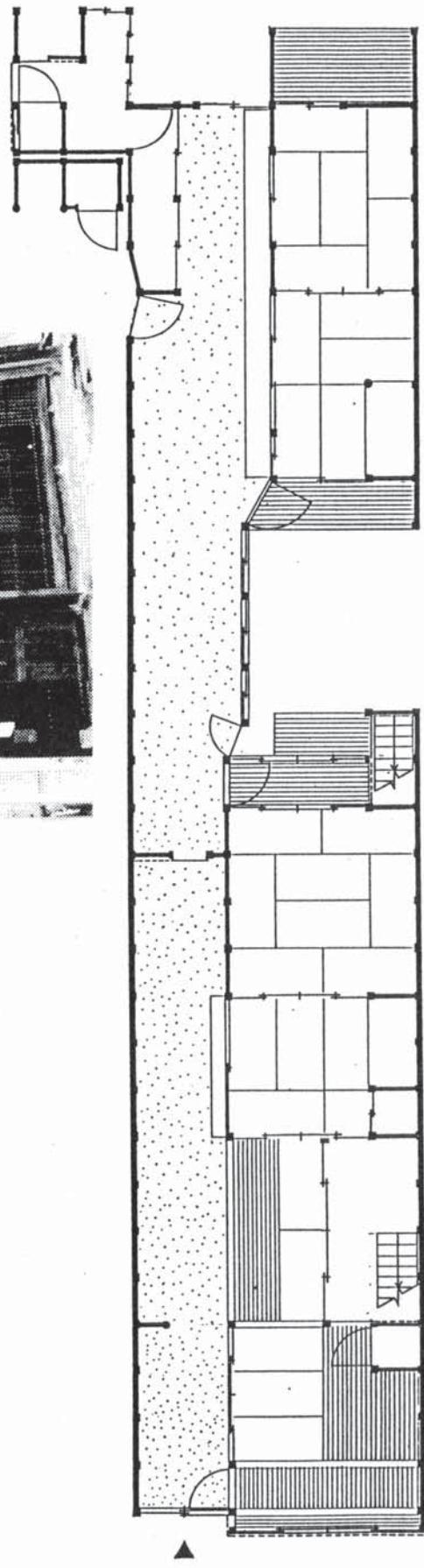
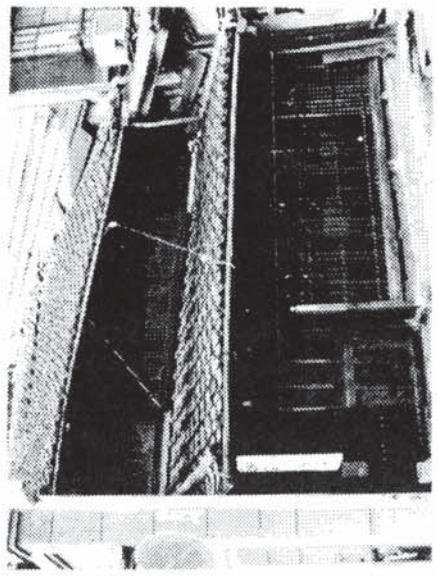


2F平面図

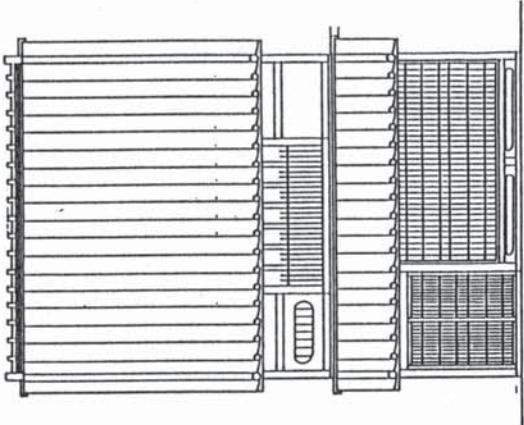


1F平面図

1.1 尾崎 興平氏宅

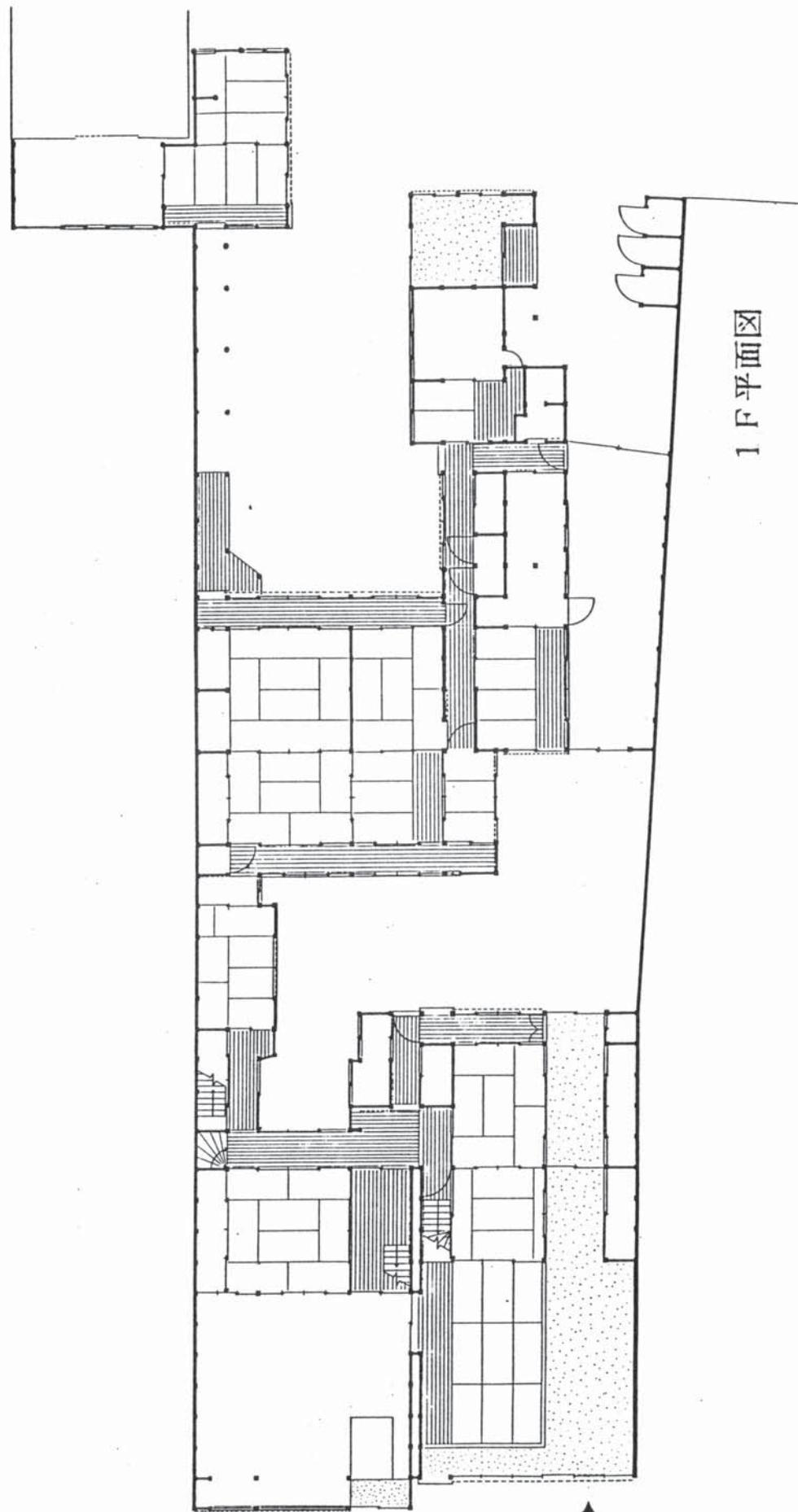


1F平面図



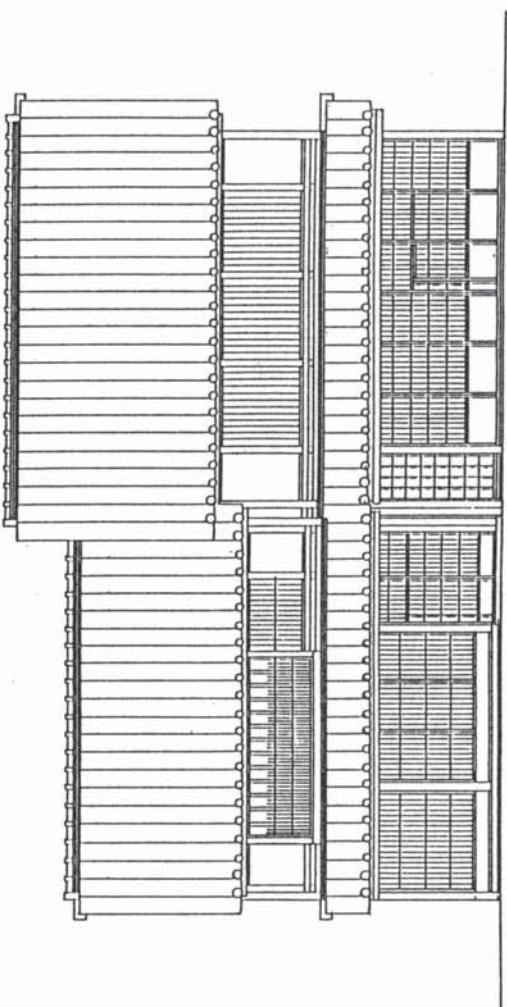
2F平面図

1.2 伊藤 長八氏宅

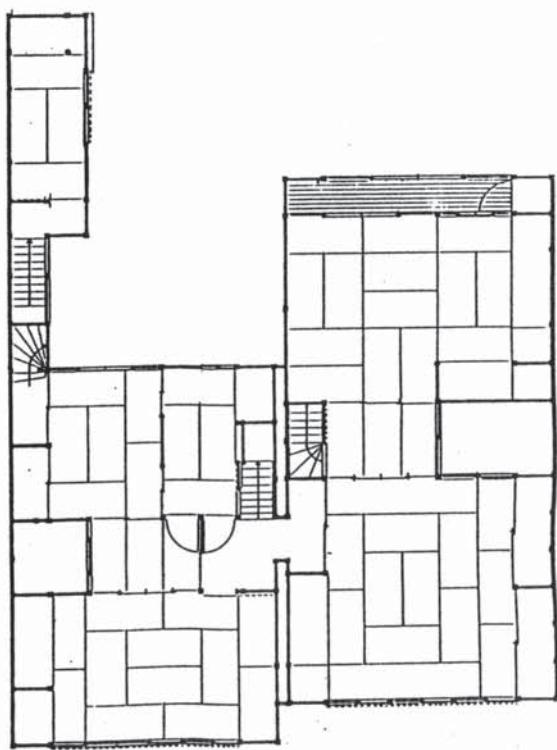


1F 平面図

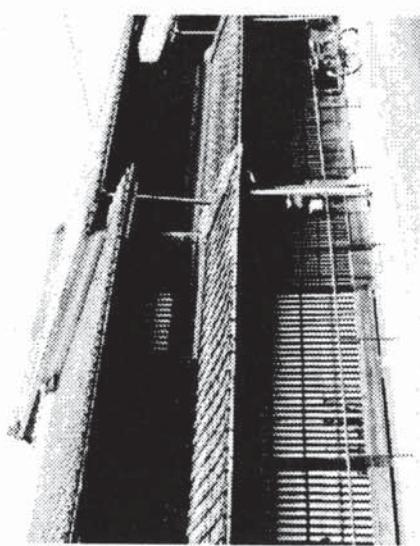
立面图



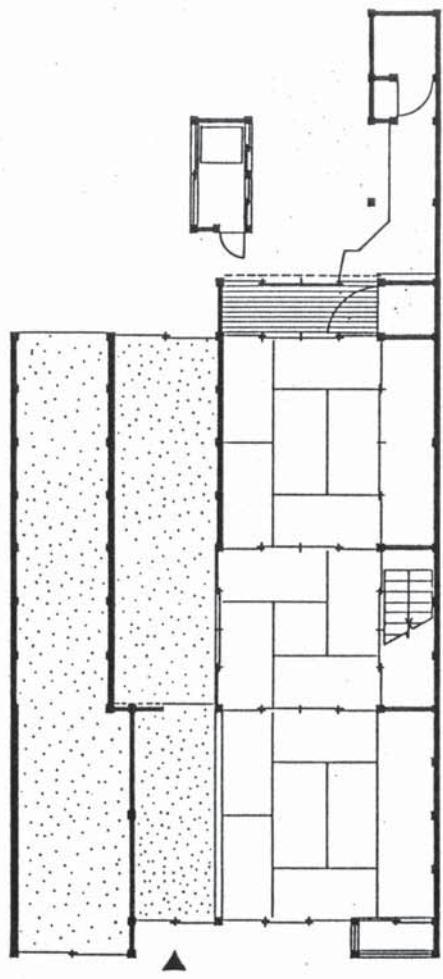
2 F 平面图



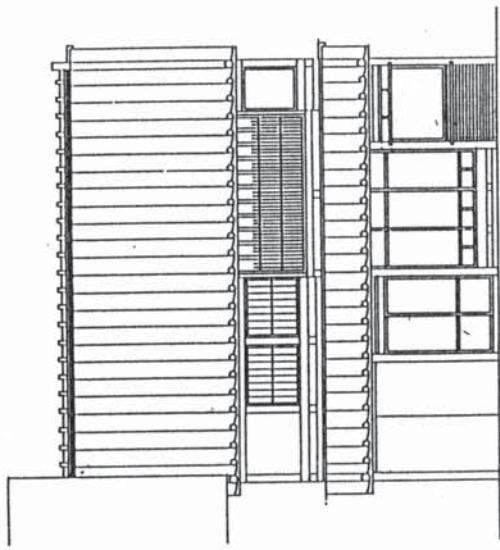
斜正面写真



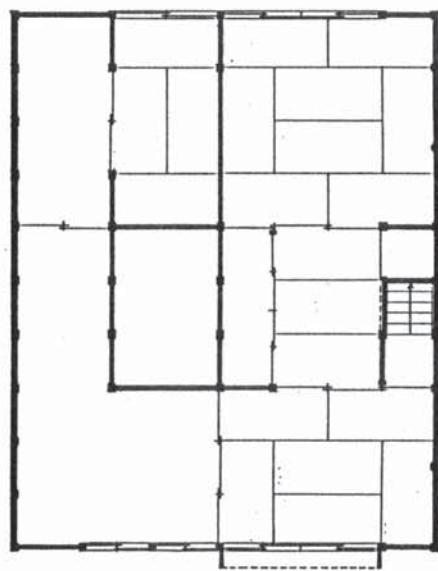
13 伊藤 あき氏宅



1F 平面図

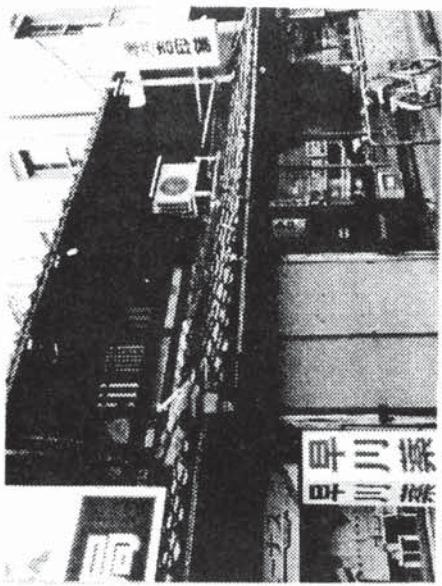


立面図



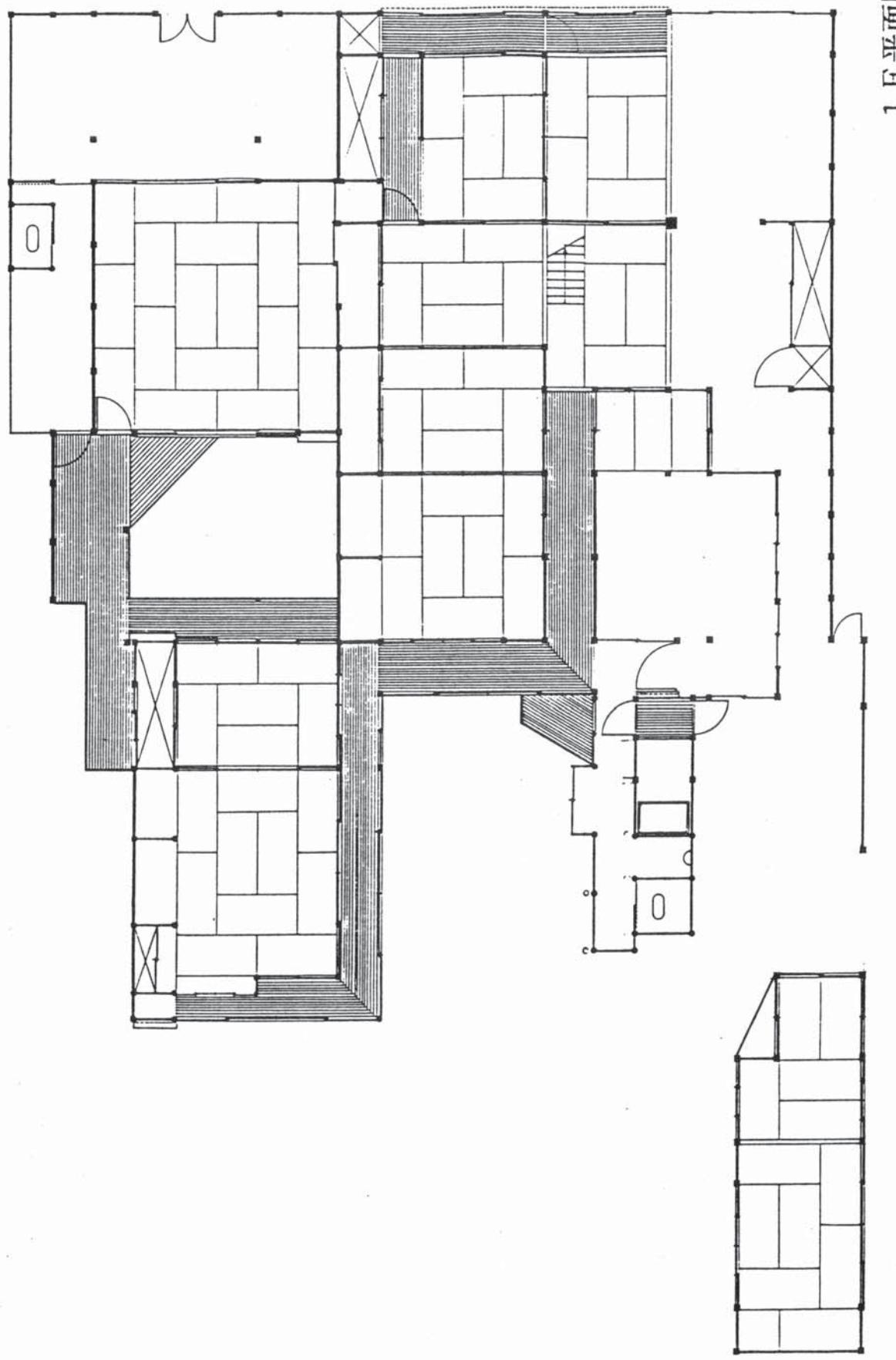
2F 平面図

斜正面写真



参考書写真

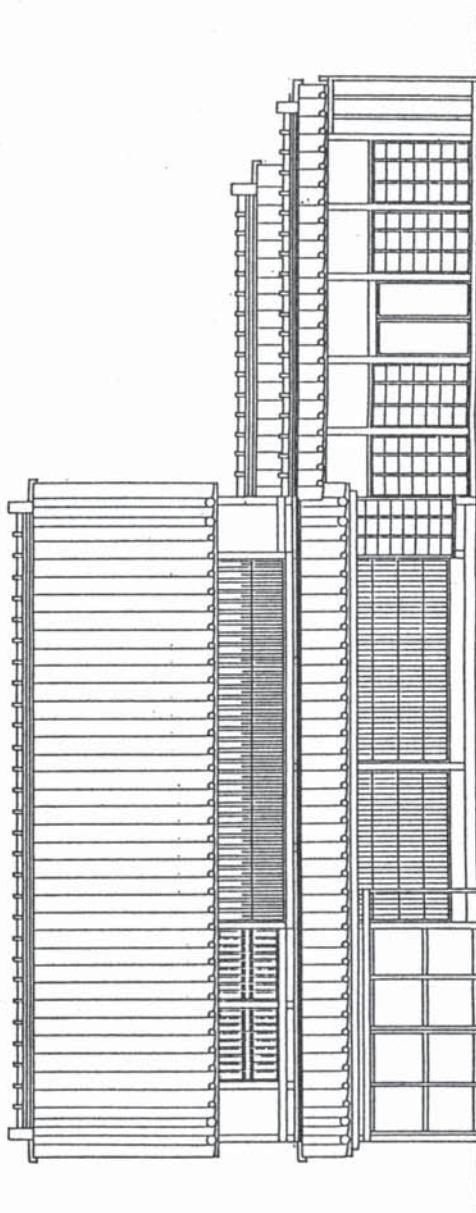
1.4 富永 悅夫氏宅



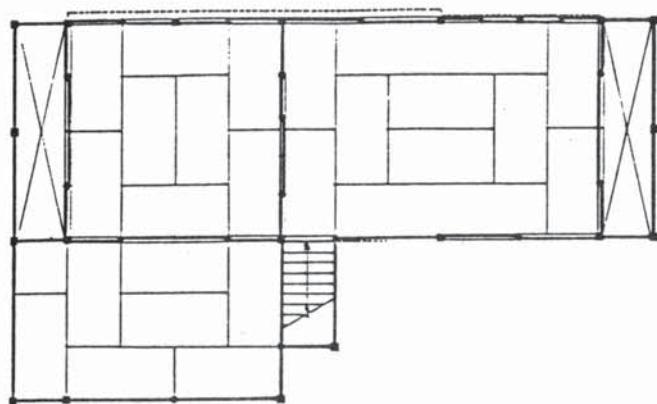
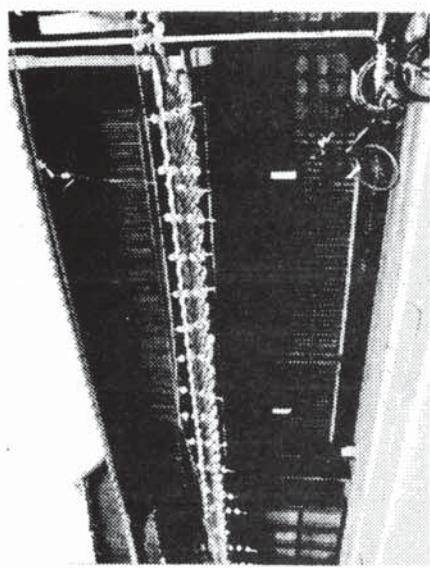
1F 平面図

立面图

2F平面图

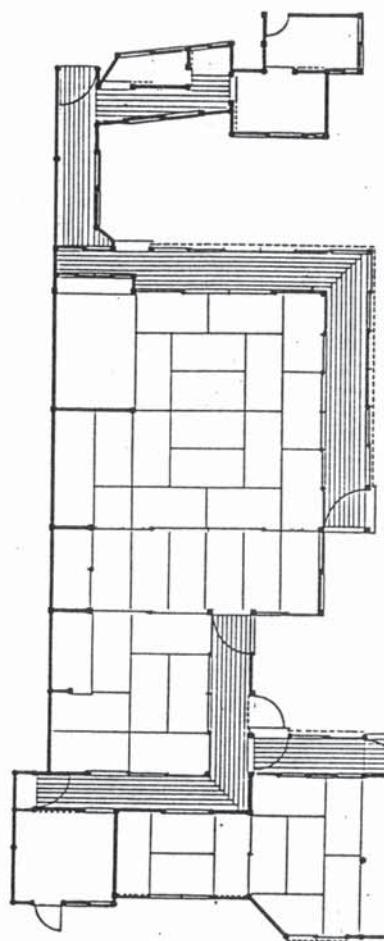


斜正面写真

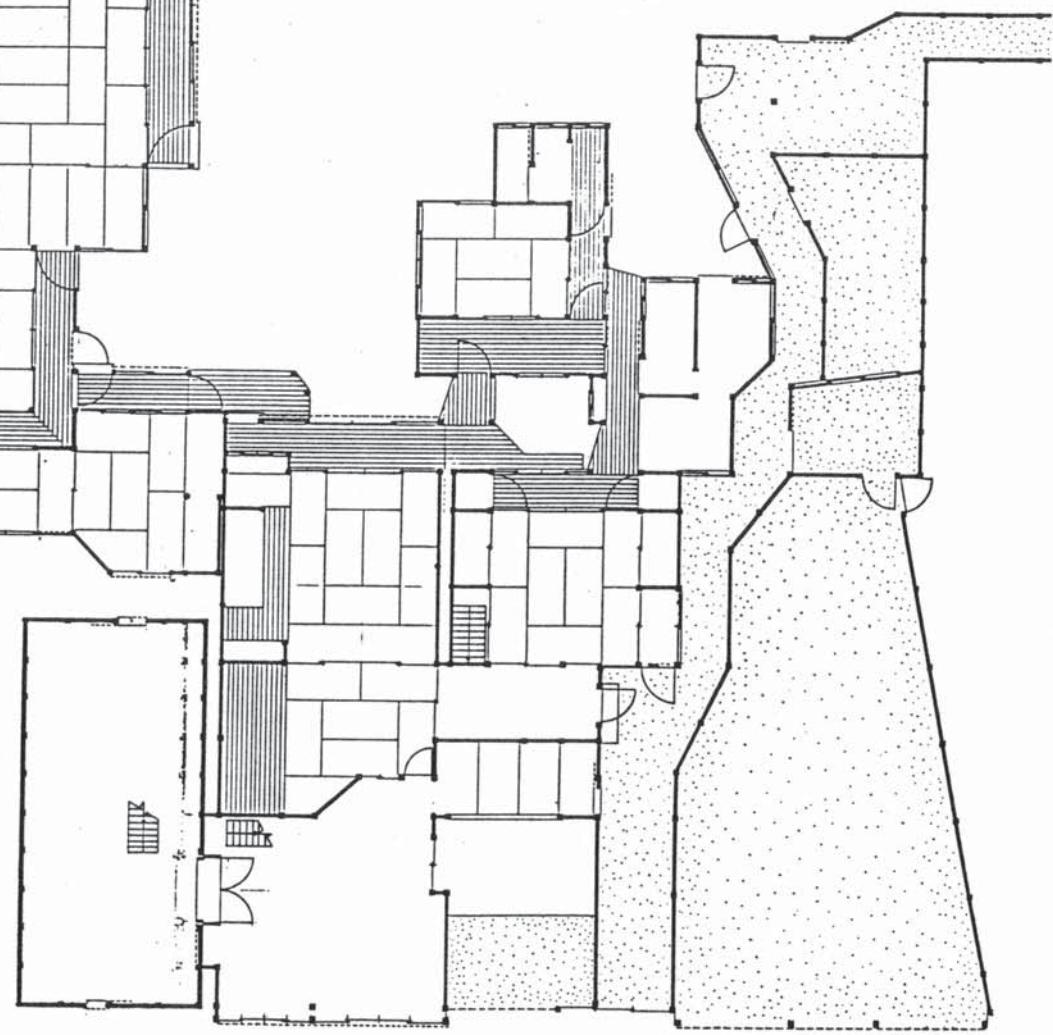


15 山内 茂氏宅

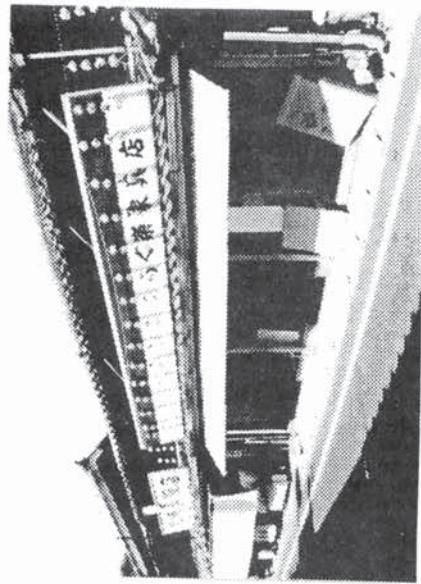
16 水谷 半三郎氏宅



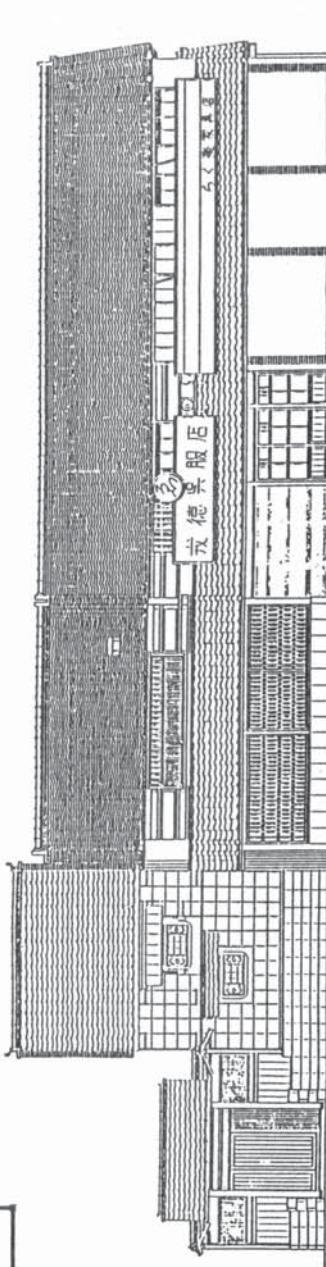
1F 平面図



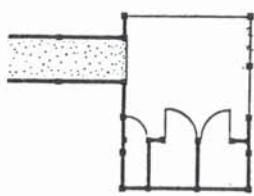
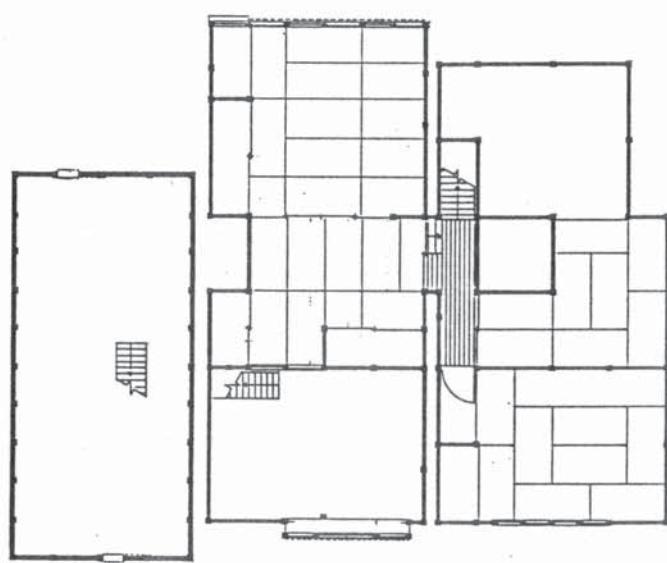
斜正面写真



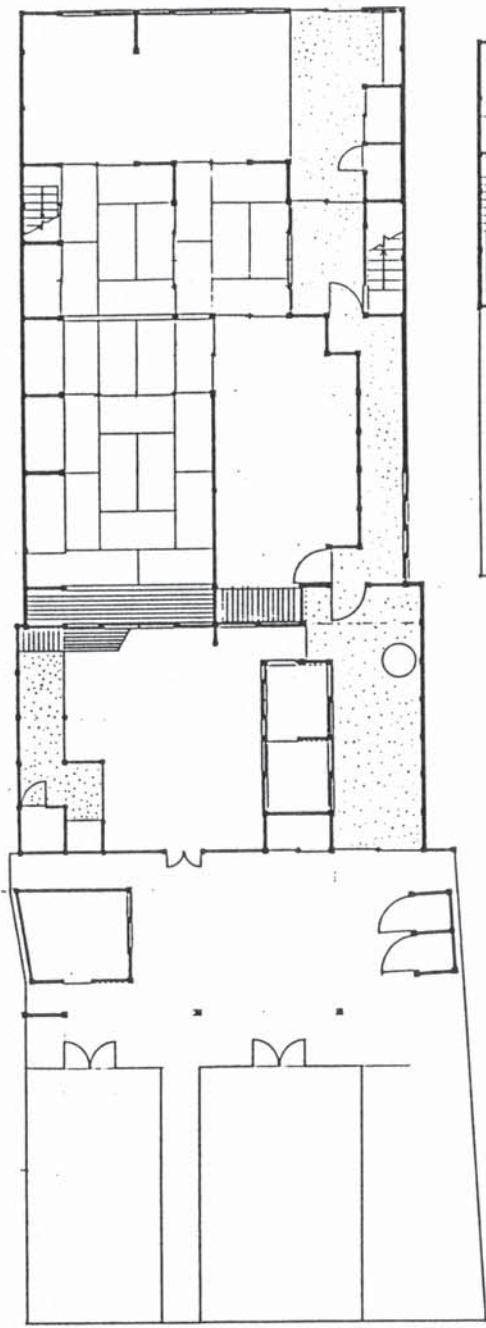
立面图



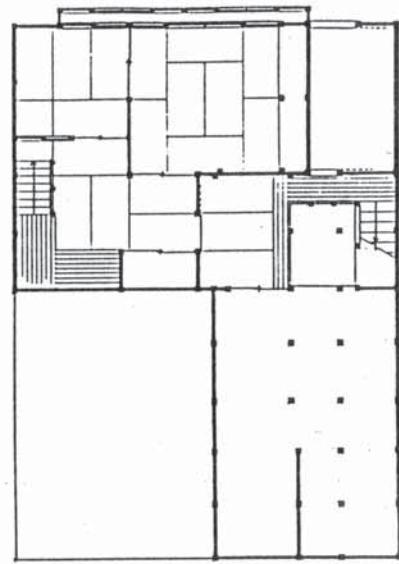
2F平面图



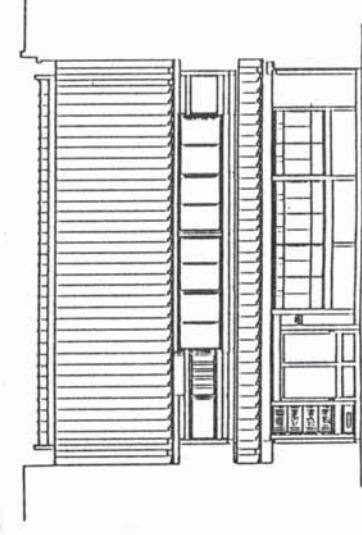
17 大橋 一雄氏宅



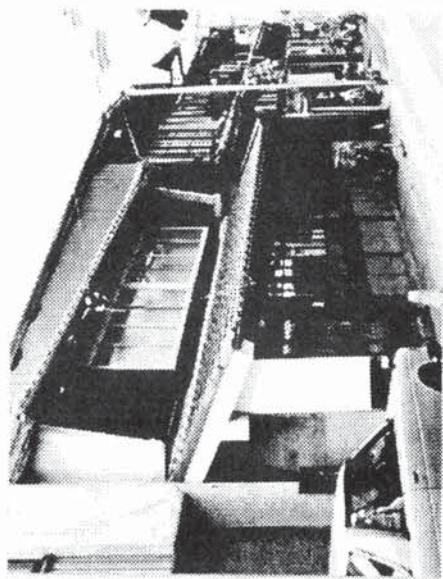
1F 平面図



2F 平面図

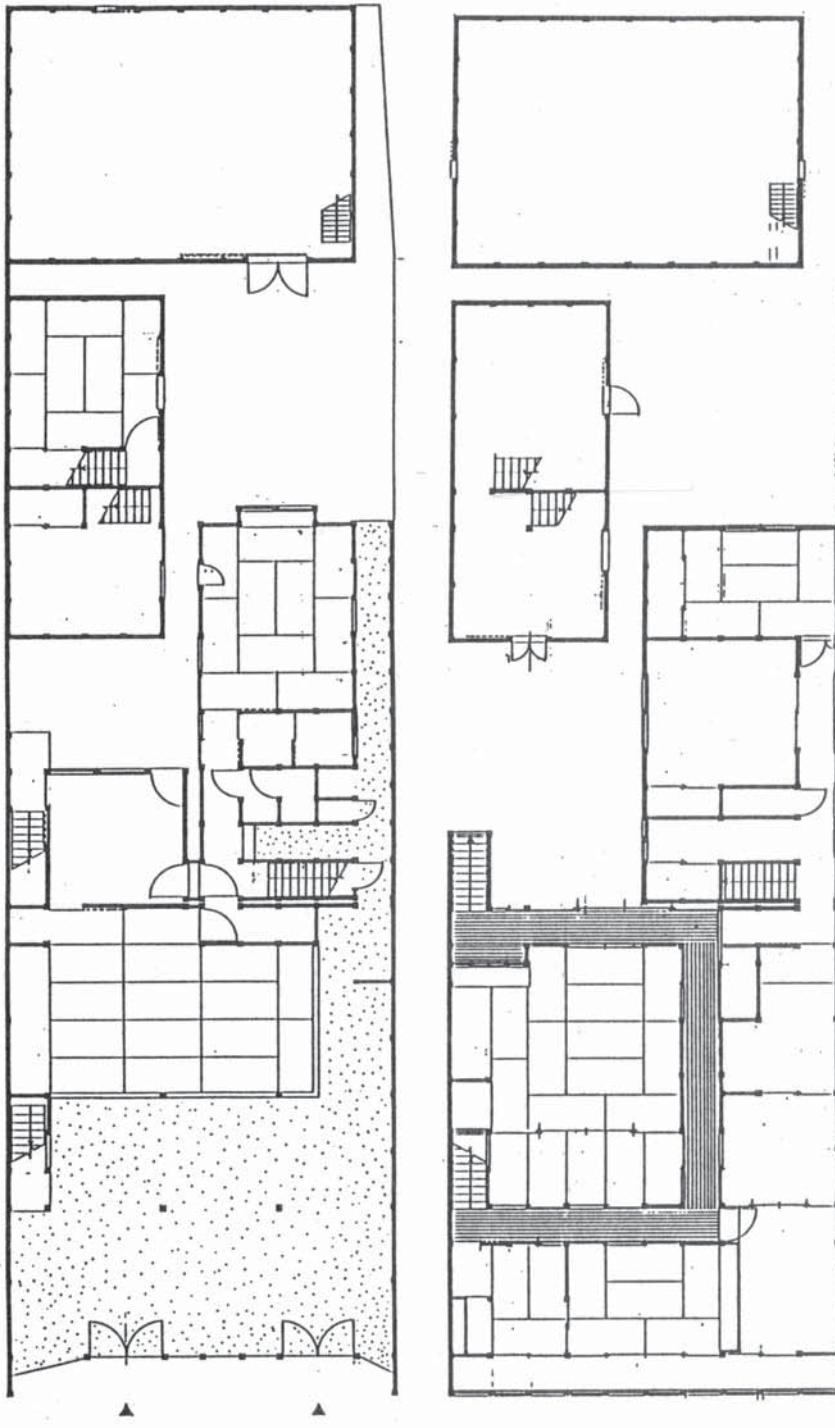


立面図



斜正面写真

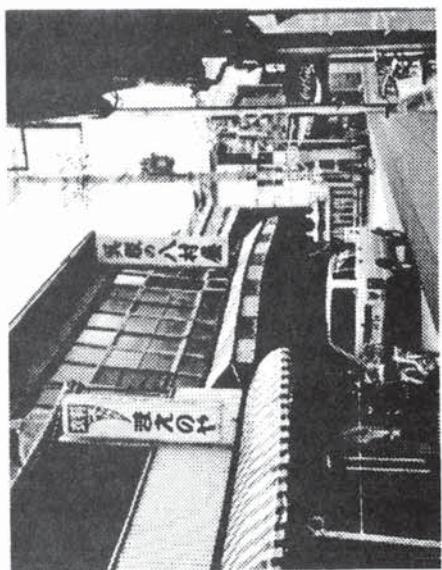
18 八村屋



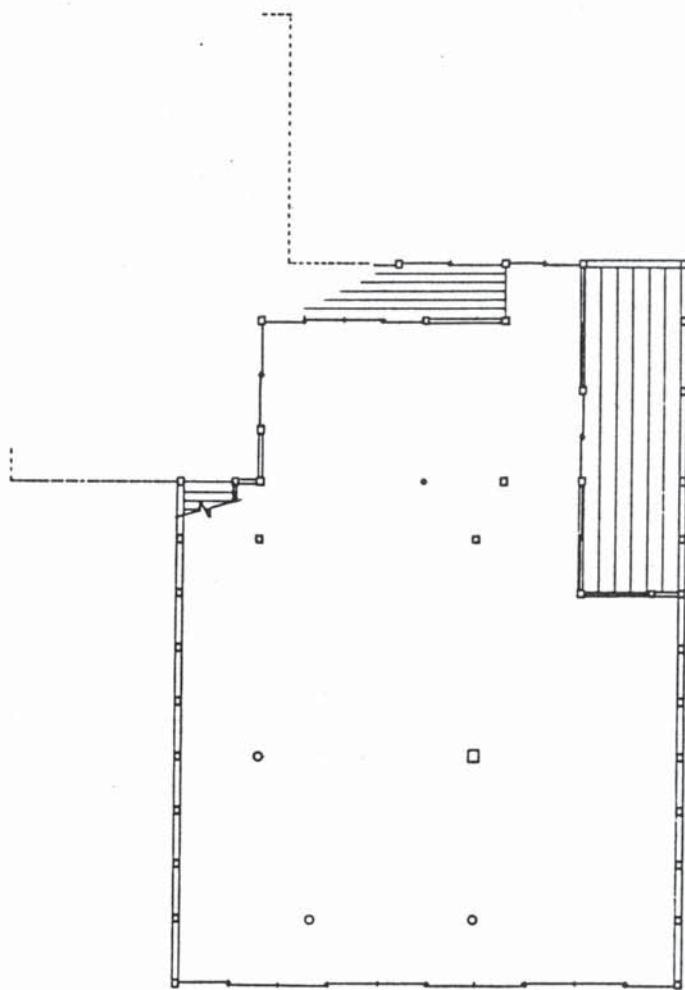
1F 平面図

2F 平面図

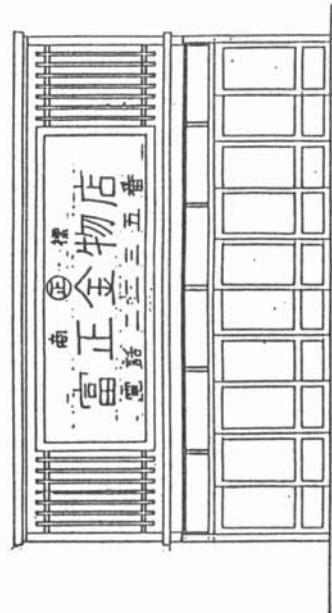
斜正面写真



19 沢井 氏宅

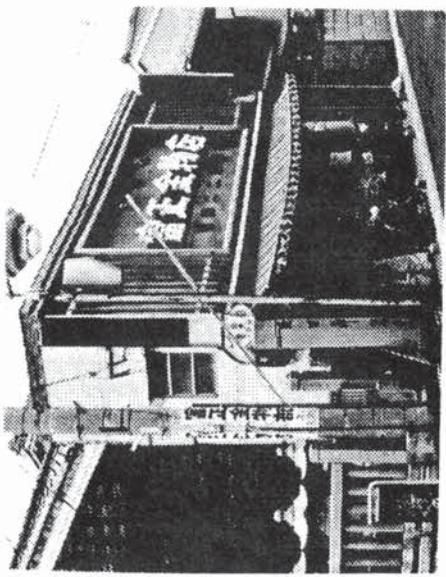


1.F 平面図

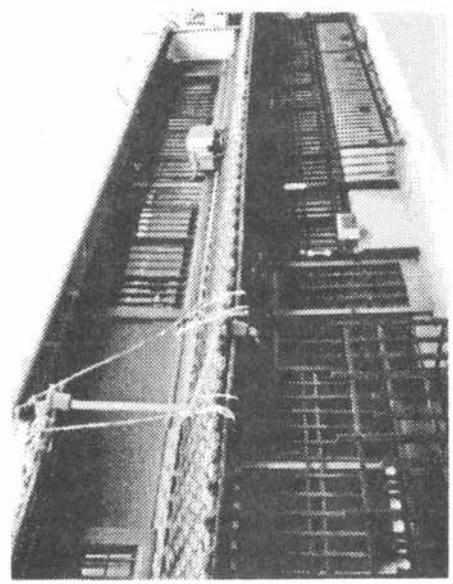


立面図

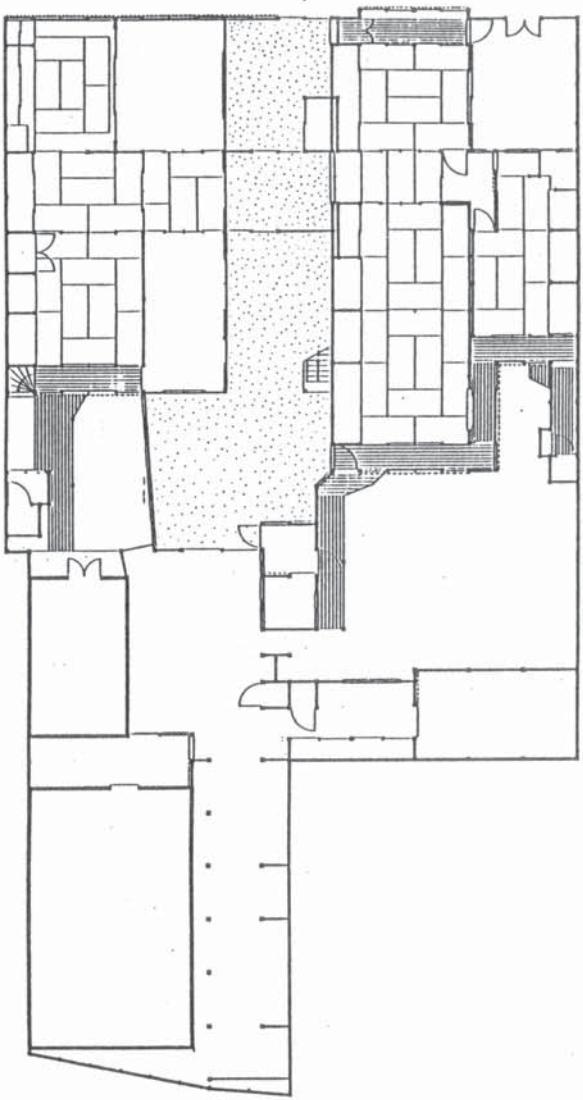
斜正面写真



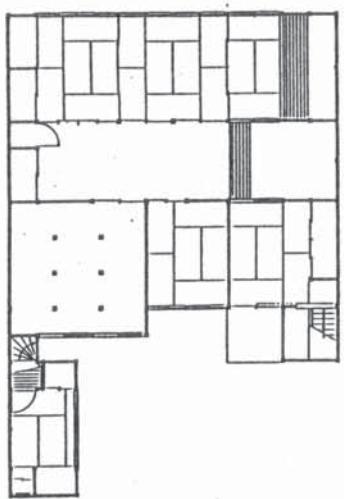
20 伊藤 義明氏宅



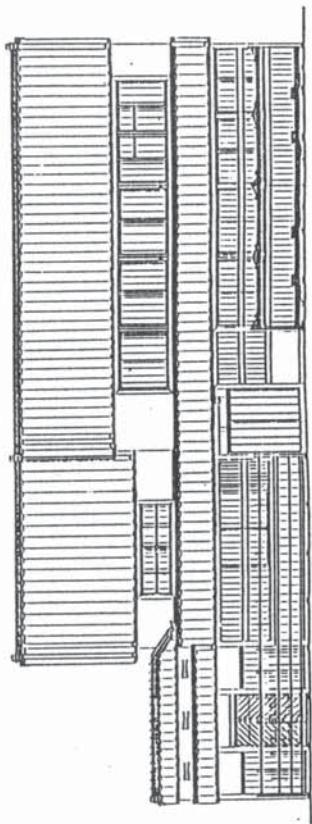
斜正面写真



1F平面図

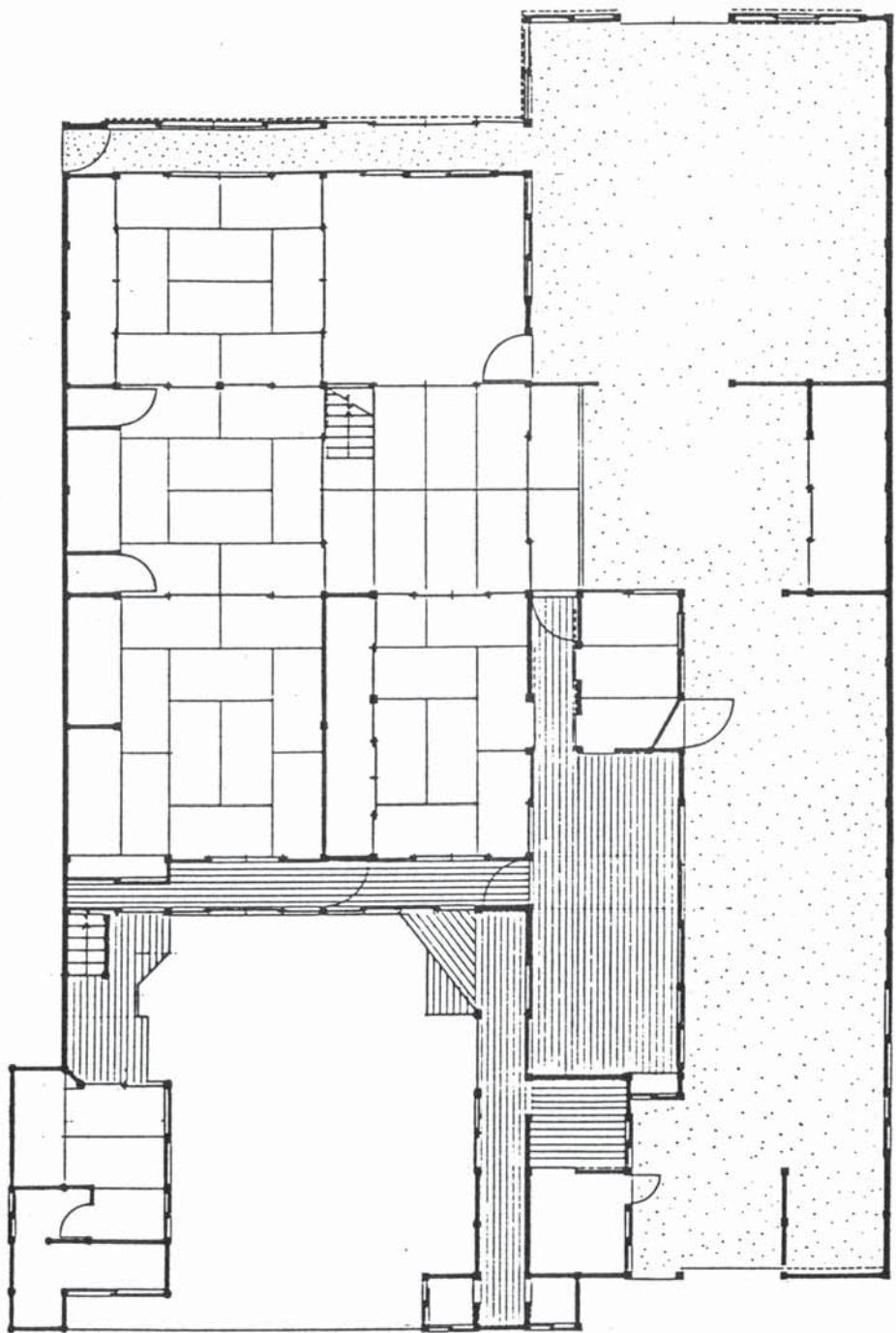


2F平面図



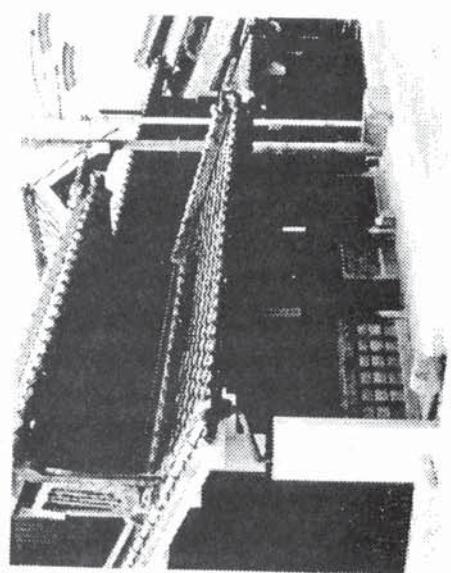
立面図

2 1 桑山 政太郎氏宅

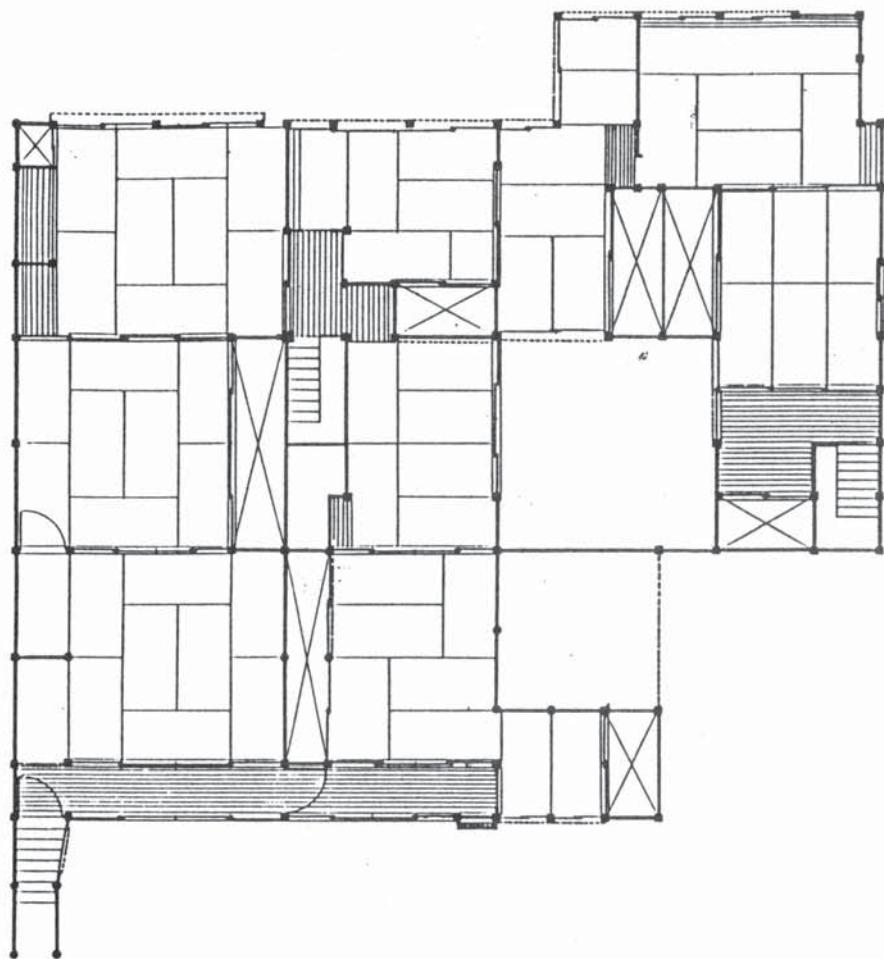


1 F 平面図

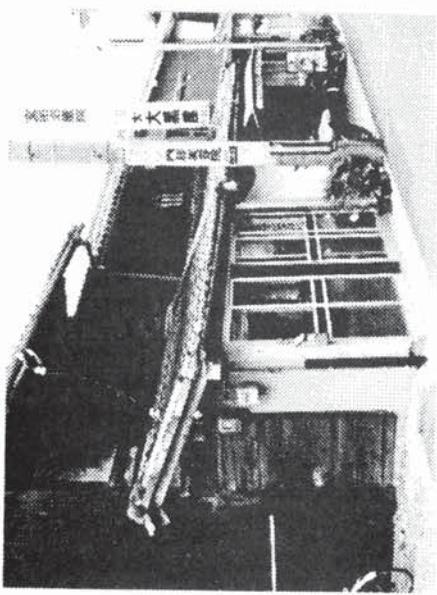
斜正面写真



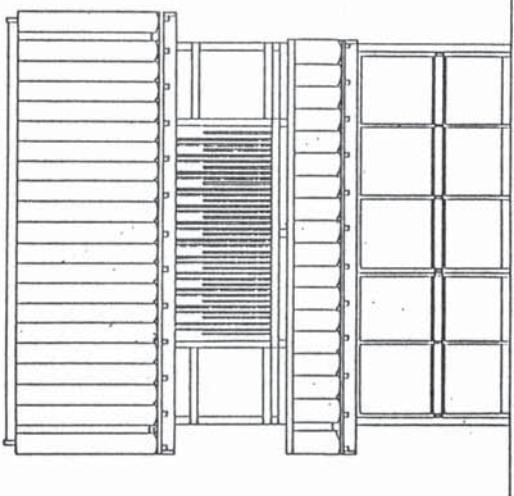
2F平面図



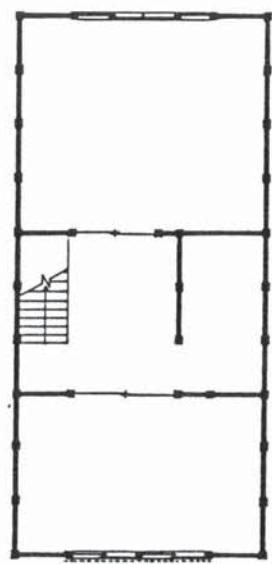
22 二村 直正氏宅



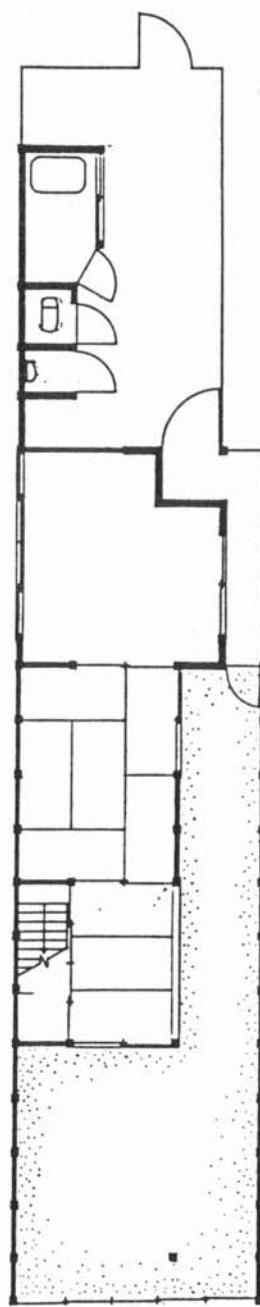
斜正面写真



立面图

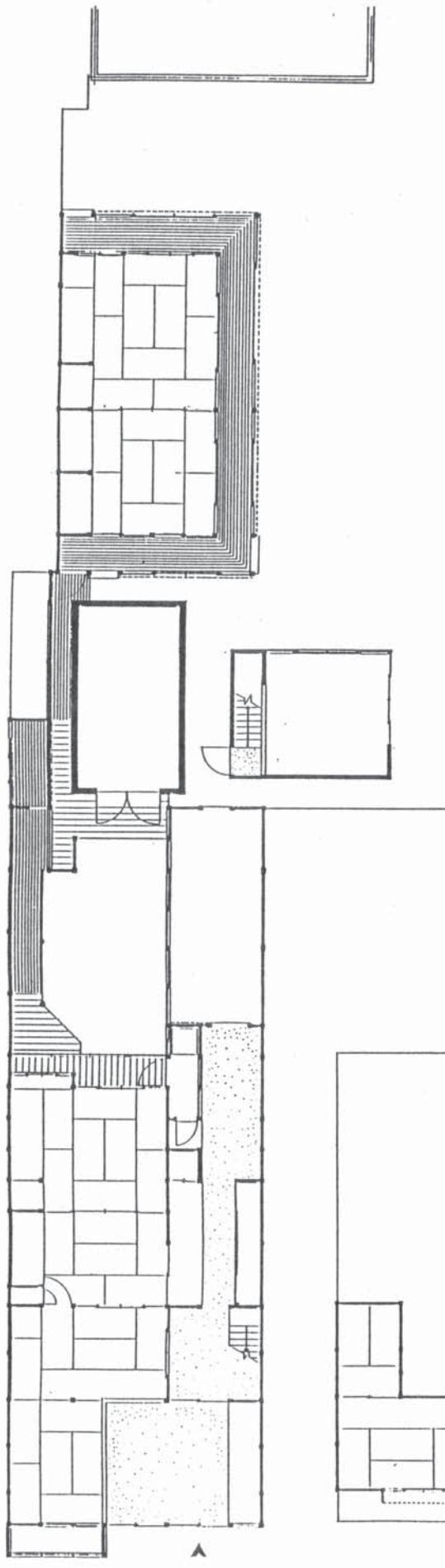


2F 平面图

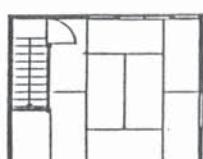


1F 平面图

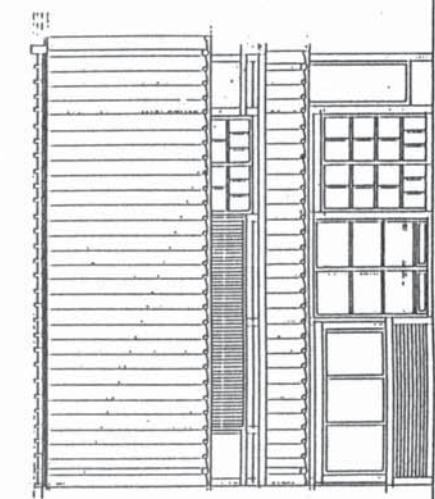
23 日榮 俊夫氏宅



1F 平面図



2F 平面図

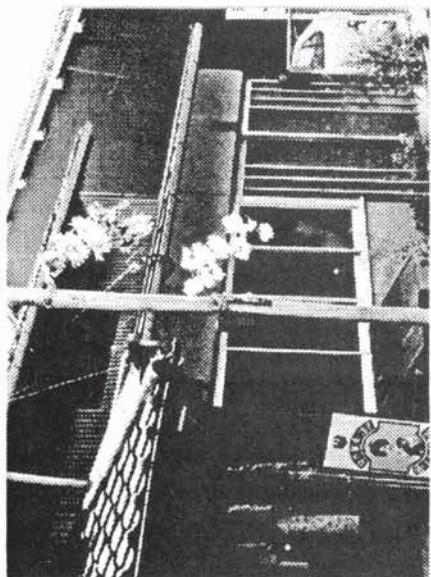


斜正面写真

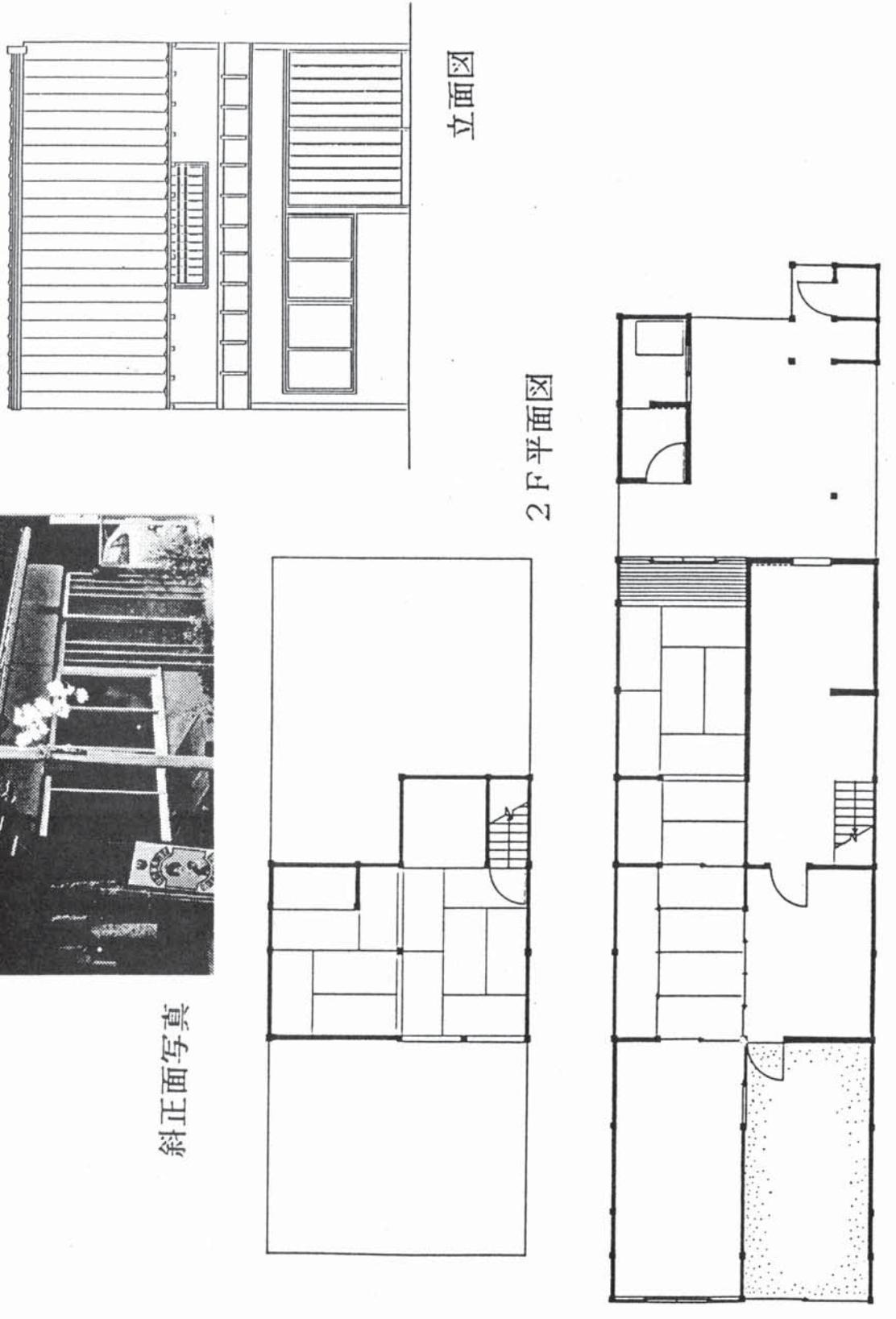


立面図

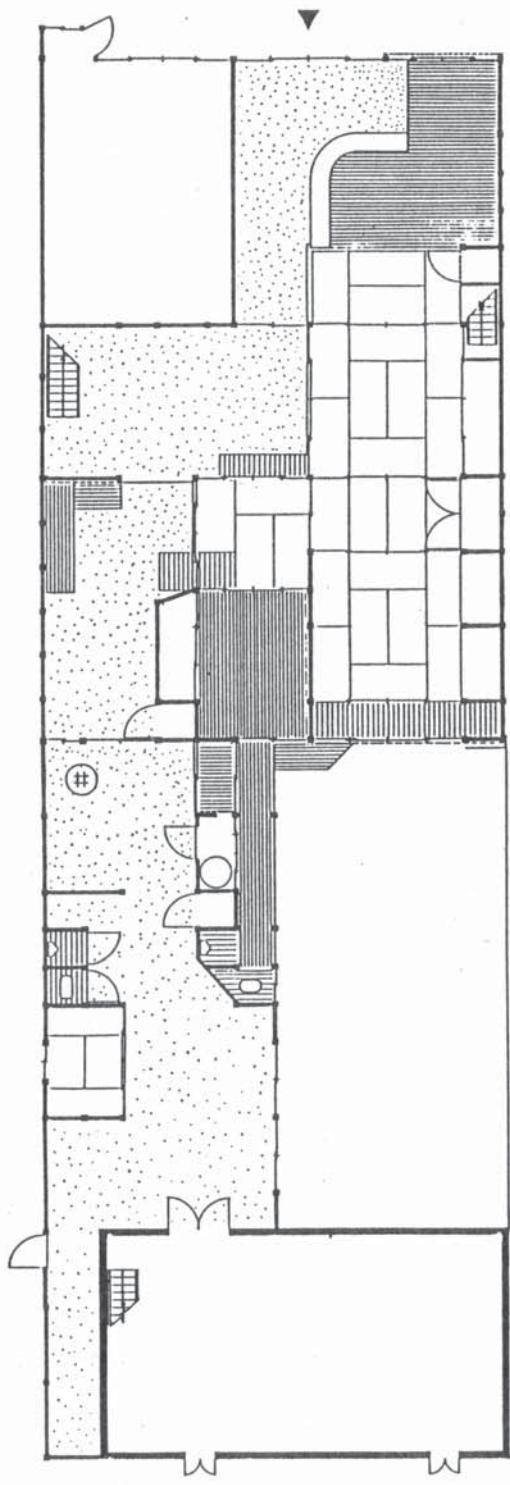
24 猪子 勘七氏宅



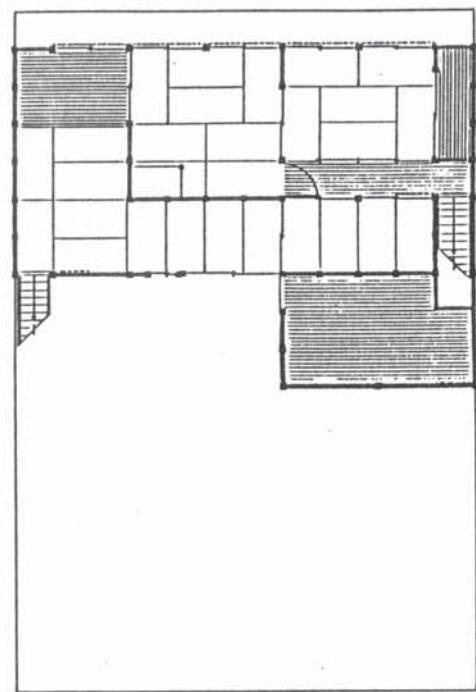
斜正面写真



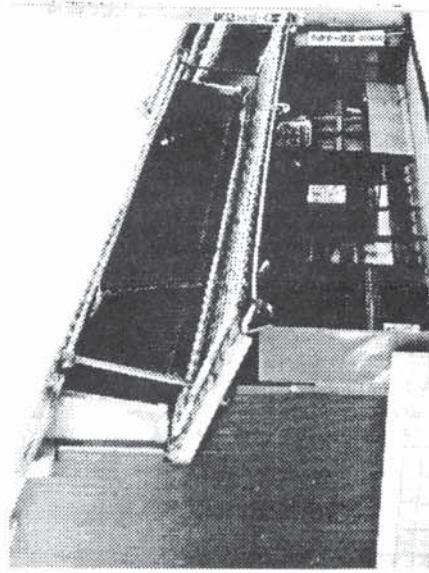
25 蟻田 昇氏宅



1F平面図

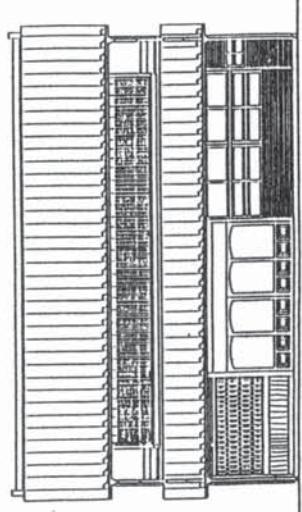


2F平面図

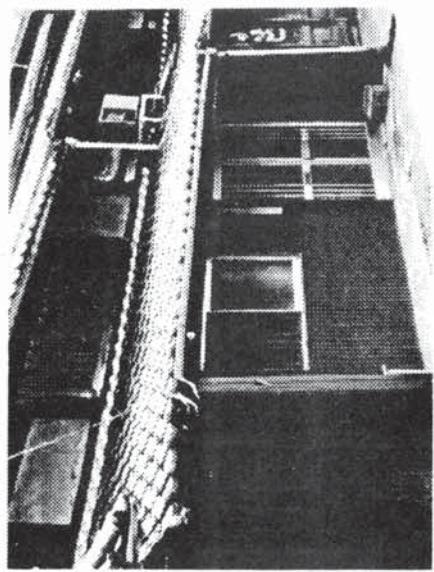


斜正面写真

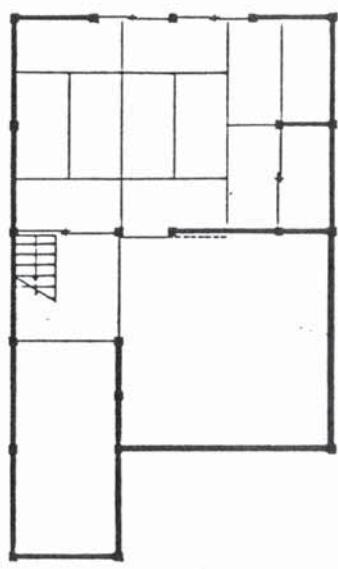
立面図



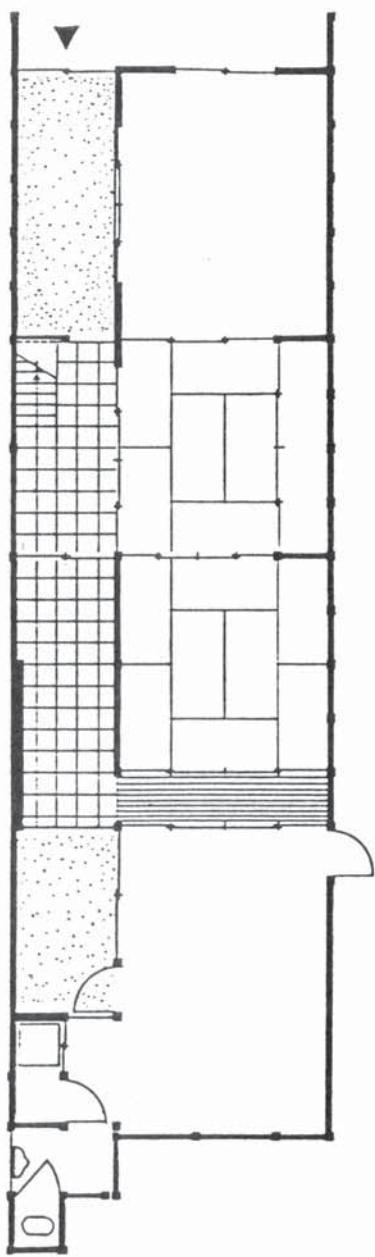
26 山田 噴夫氏宅
27 岩田 力氏宅



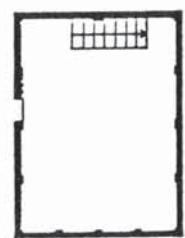
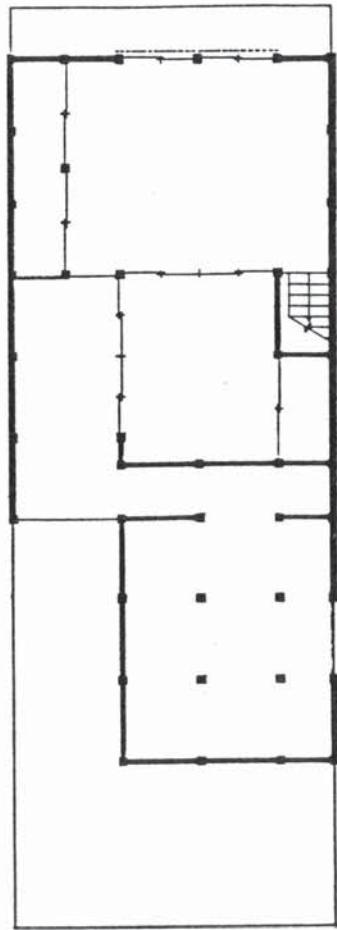
山田 噴夫氏宅



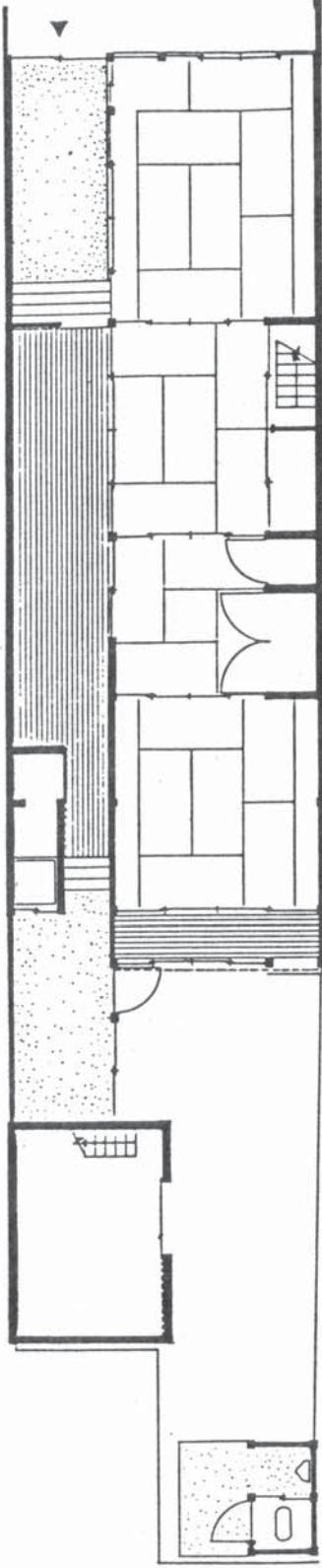
2F 平面図



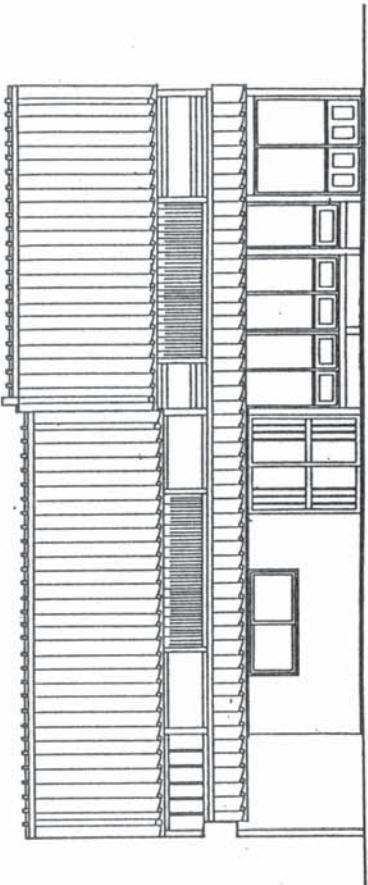
1F 平面図



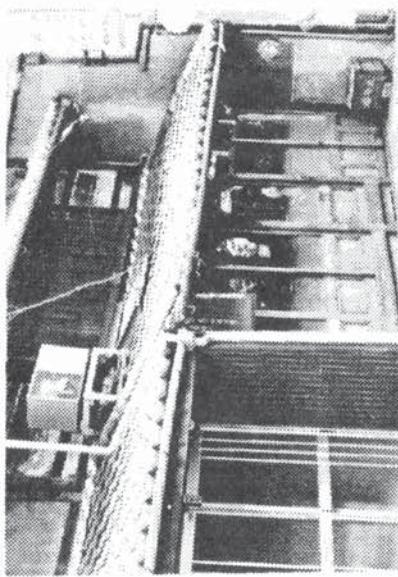
2F 平面図



1F 平面図

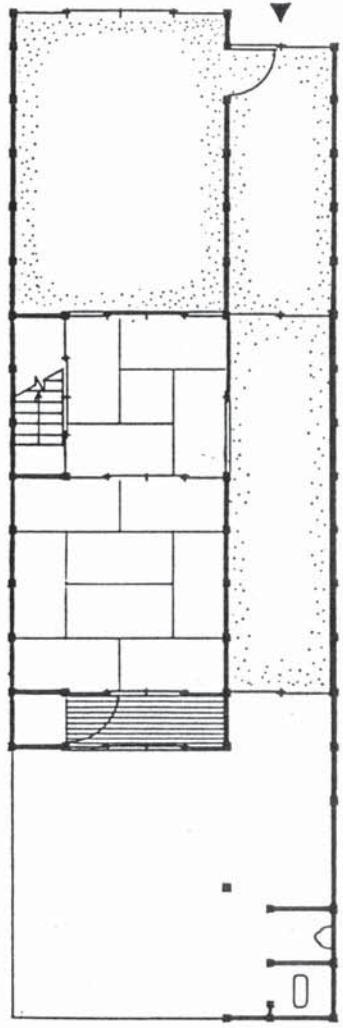


立面図

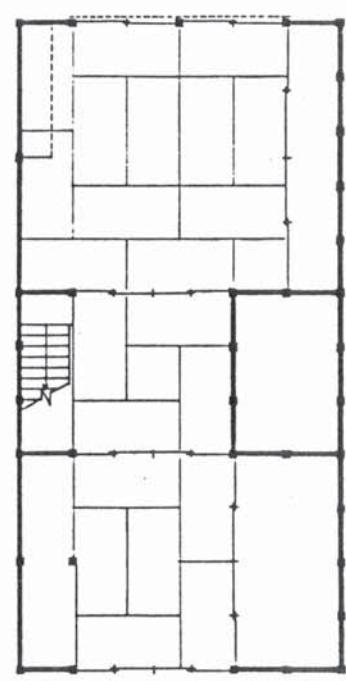
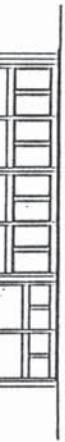


岩田 力氏宅

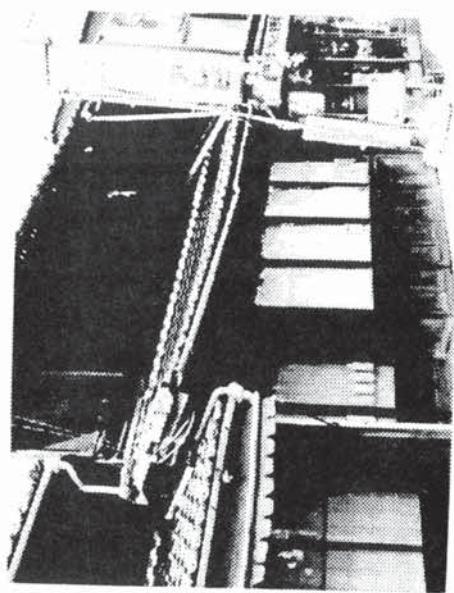
28 石田 昌平氏宅



1F 平面図



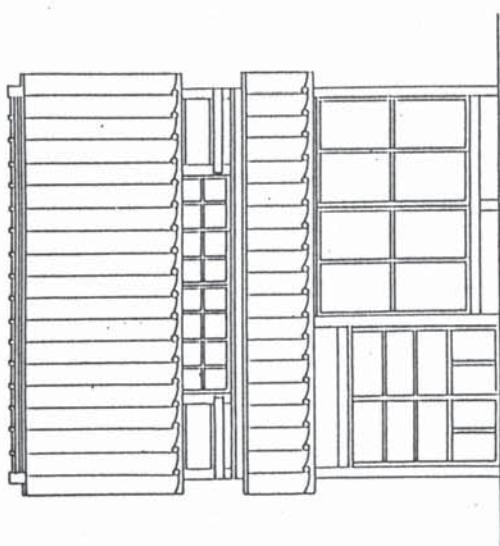
2F 平面図



立面図

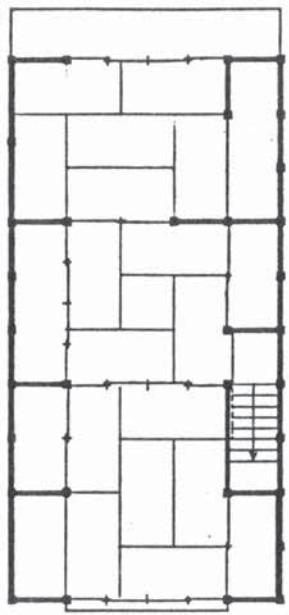
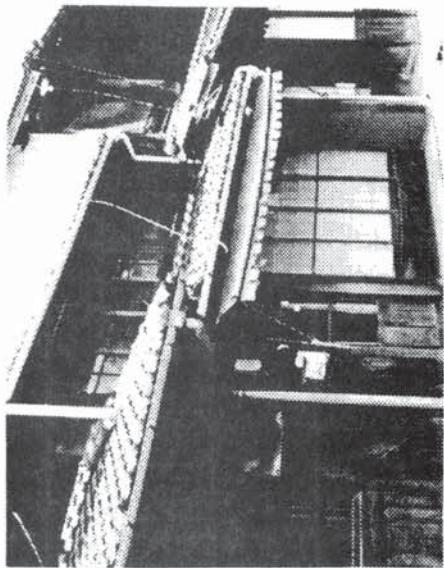
斜正面写真

29 清水房次郎氏宅

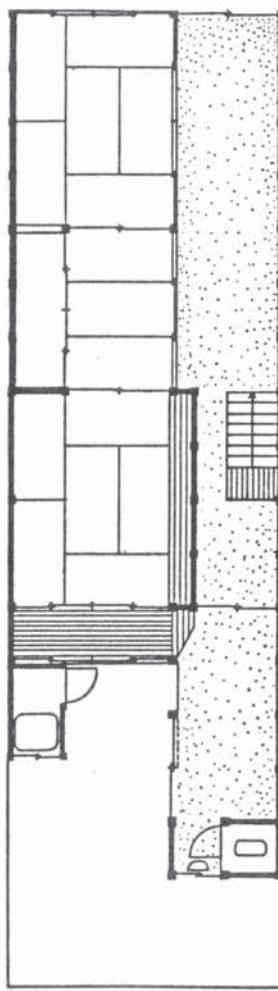


立面图

斜正面写真

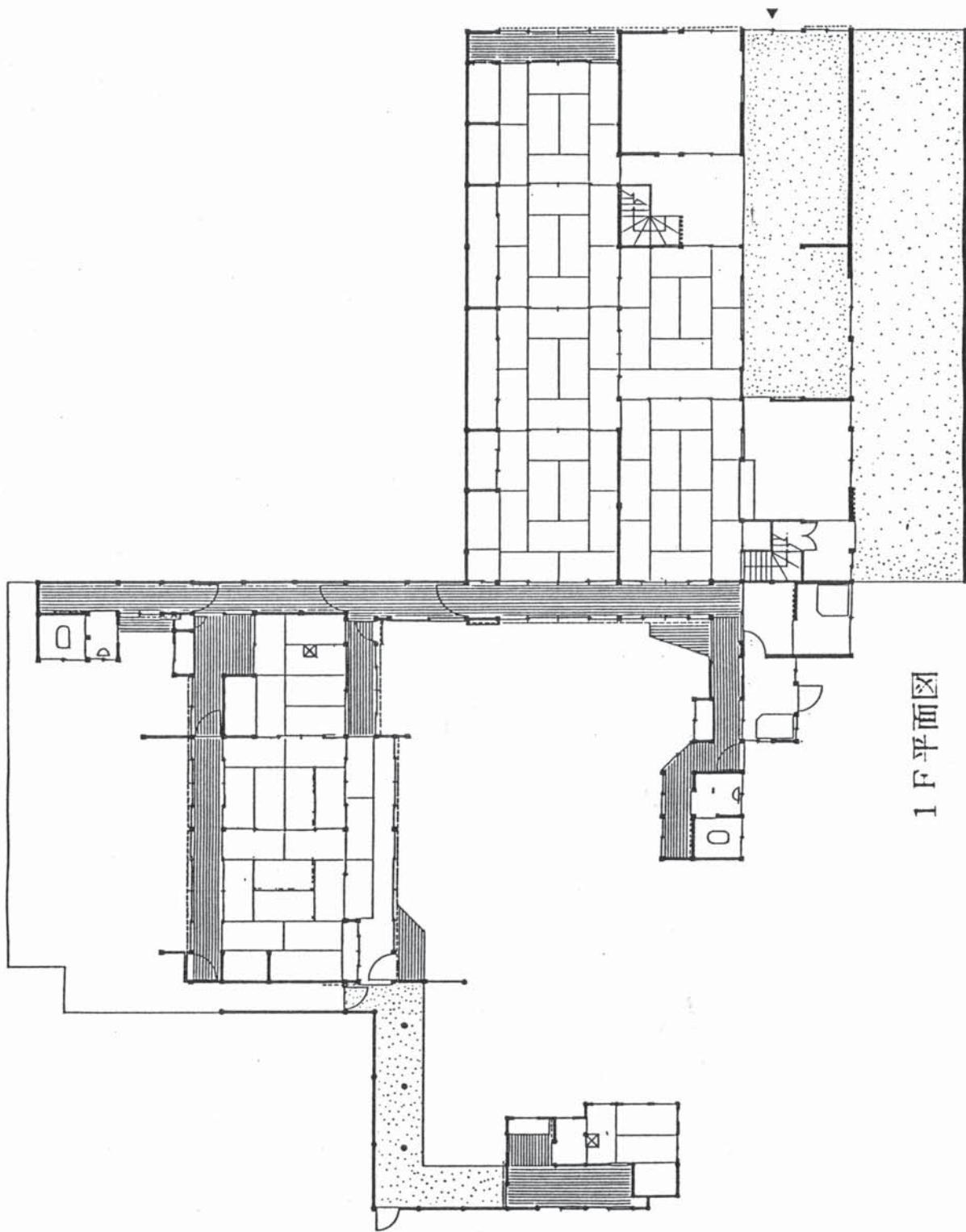


2F平面图



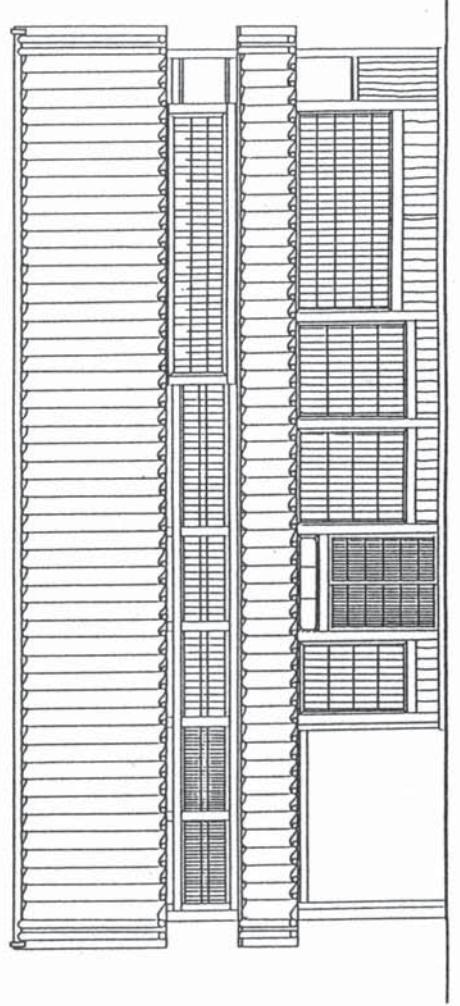
1F平面图

30 服部 政三氏宅

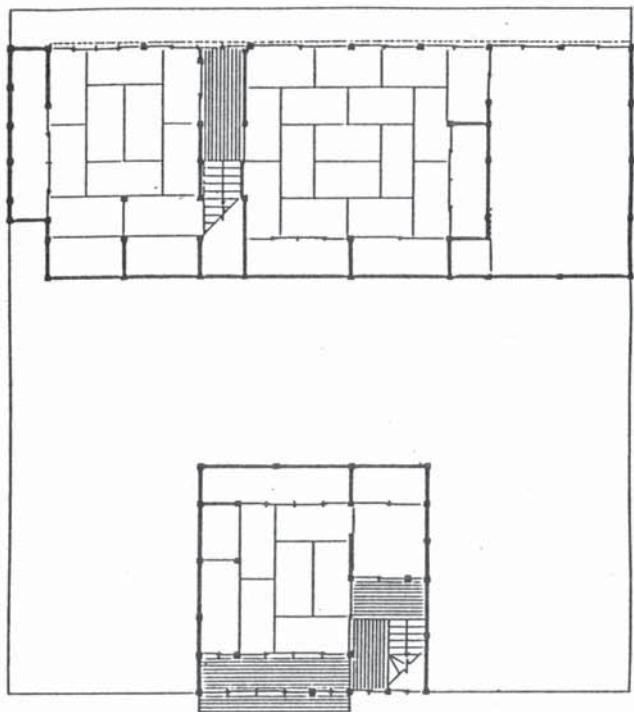


1F 平面図

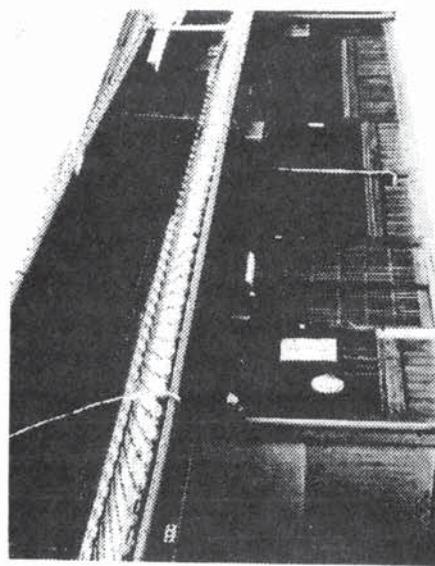
立面图



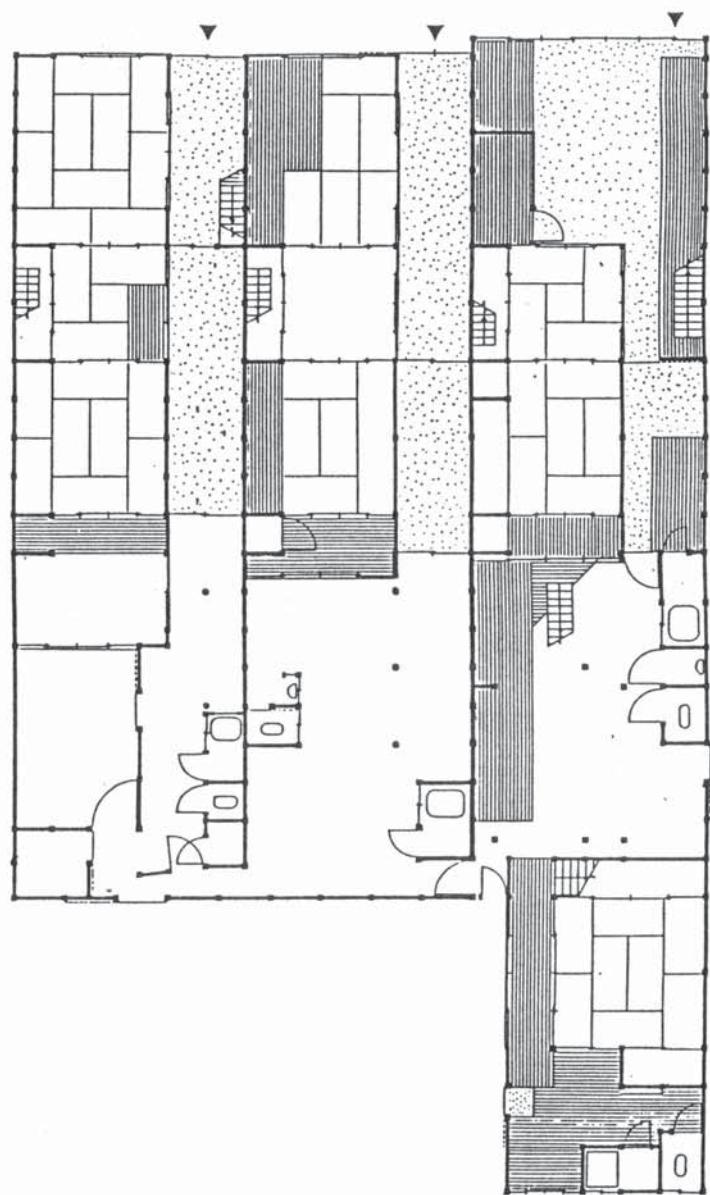
2F 斜面图



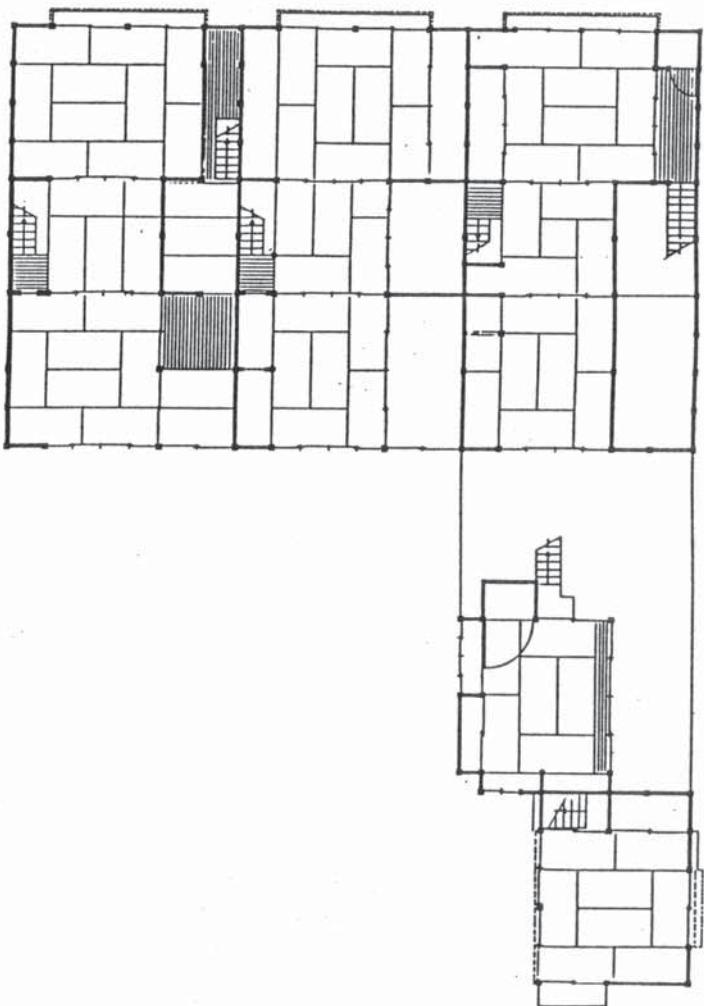
斜正面写真



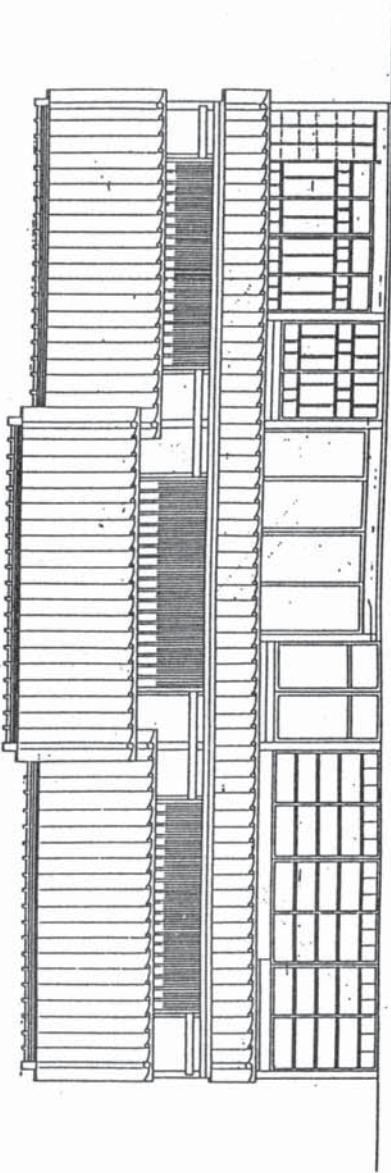
1. F 平面図



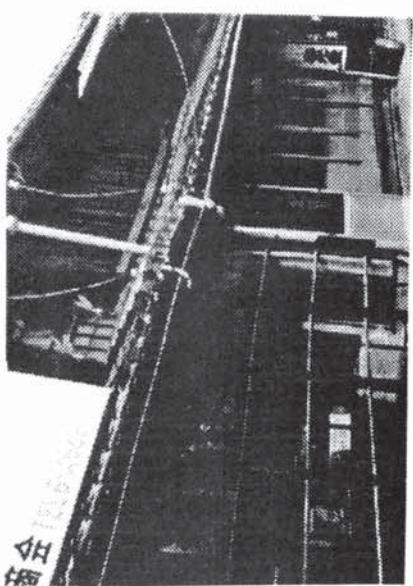
- 3 1 大橋 収二氏宅
- 3 2 山田 義郎氏宅
- 3 3 鈴木 茂氏宅



2F 平面图



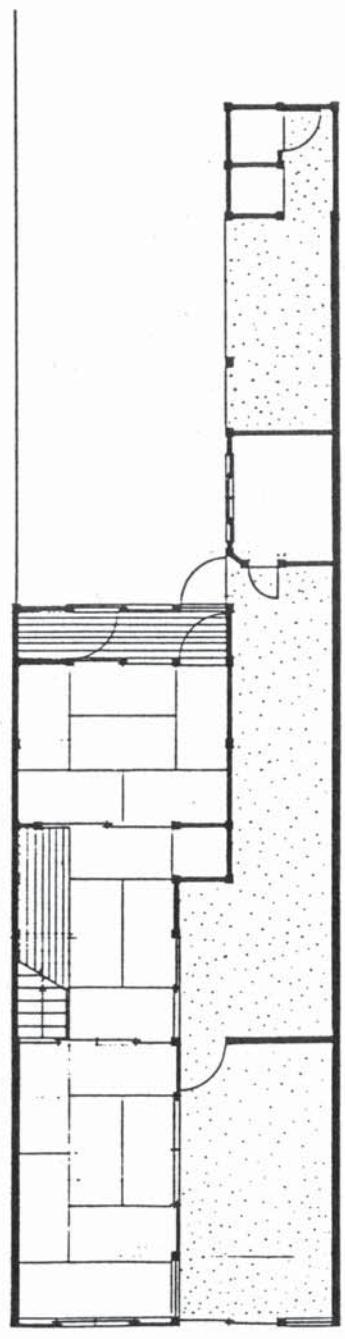
立面图



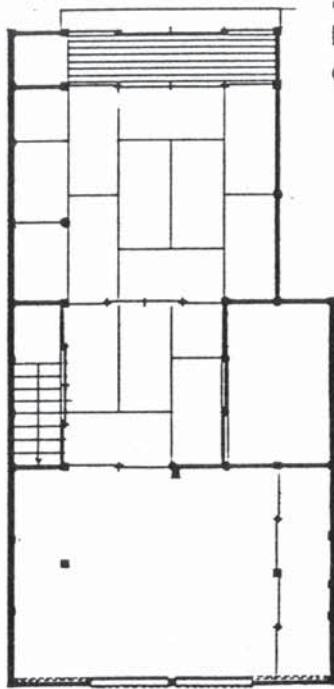
斜正面写真

3 4 長谷川 誠氏宅

3 5 佐藤 ゆき子氏宅



1F 平面図



2F 平面図

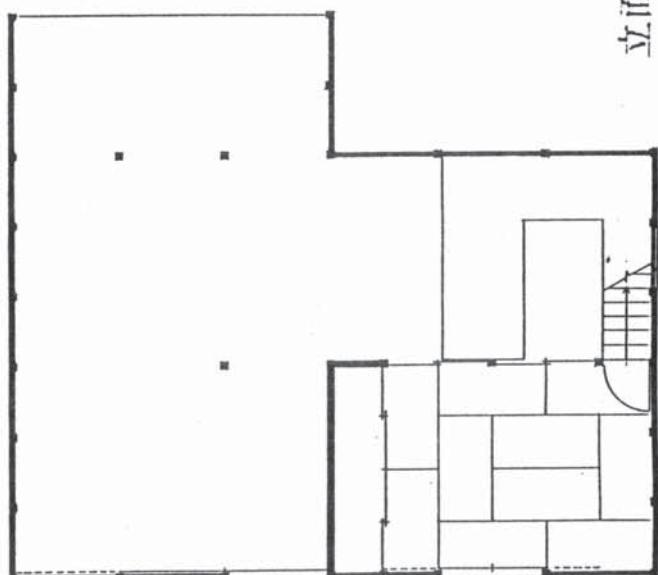
長谷川 誠氏宅

佐藤ゆき子氏宅

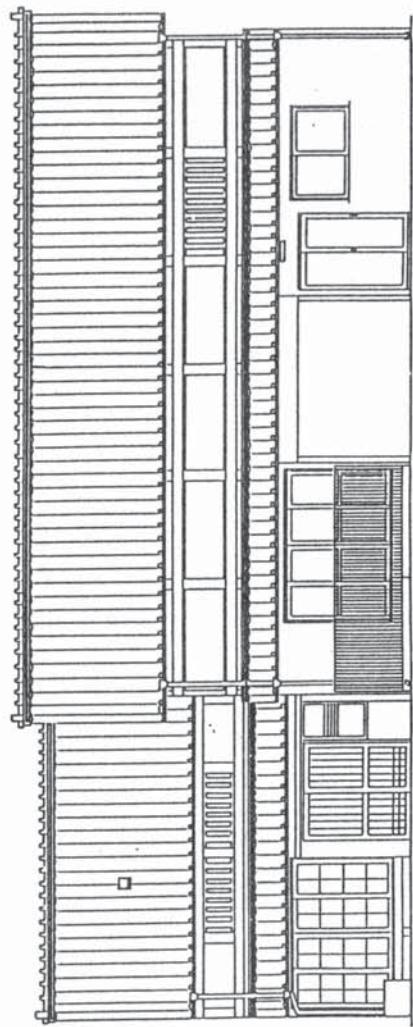
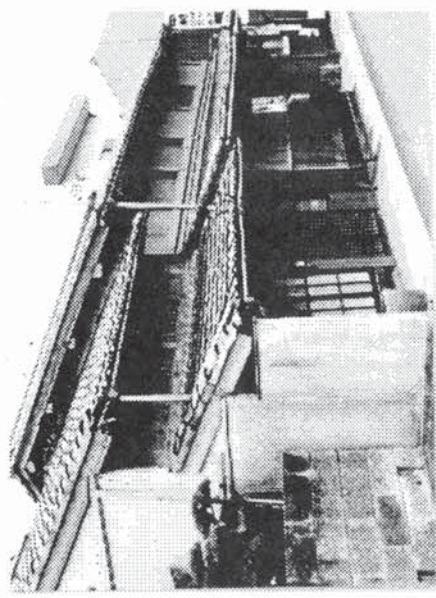
1F平面図



2F平面図



斜正面写真

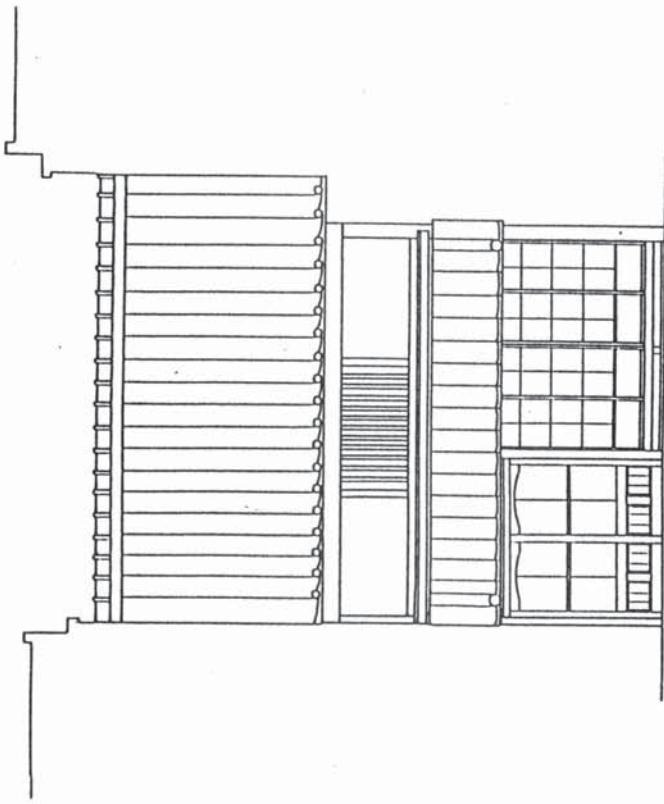


立面図

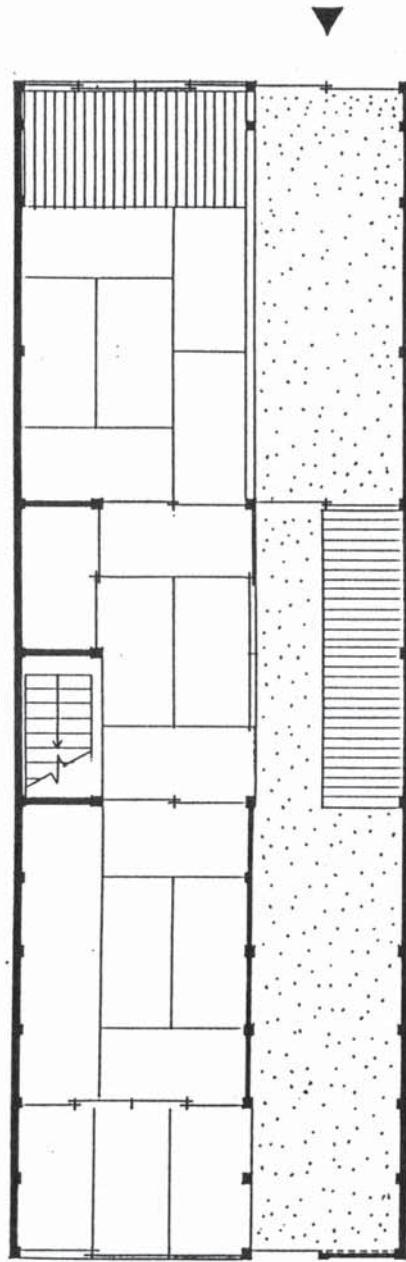
36 青木利晴氏宅



斜正面写真

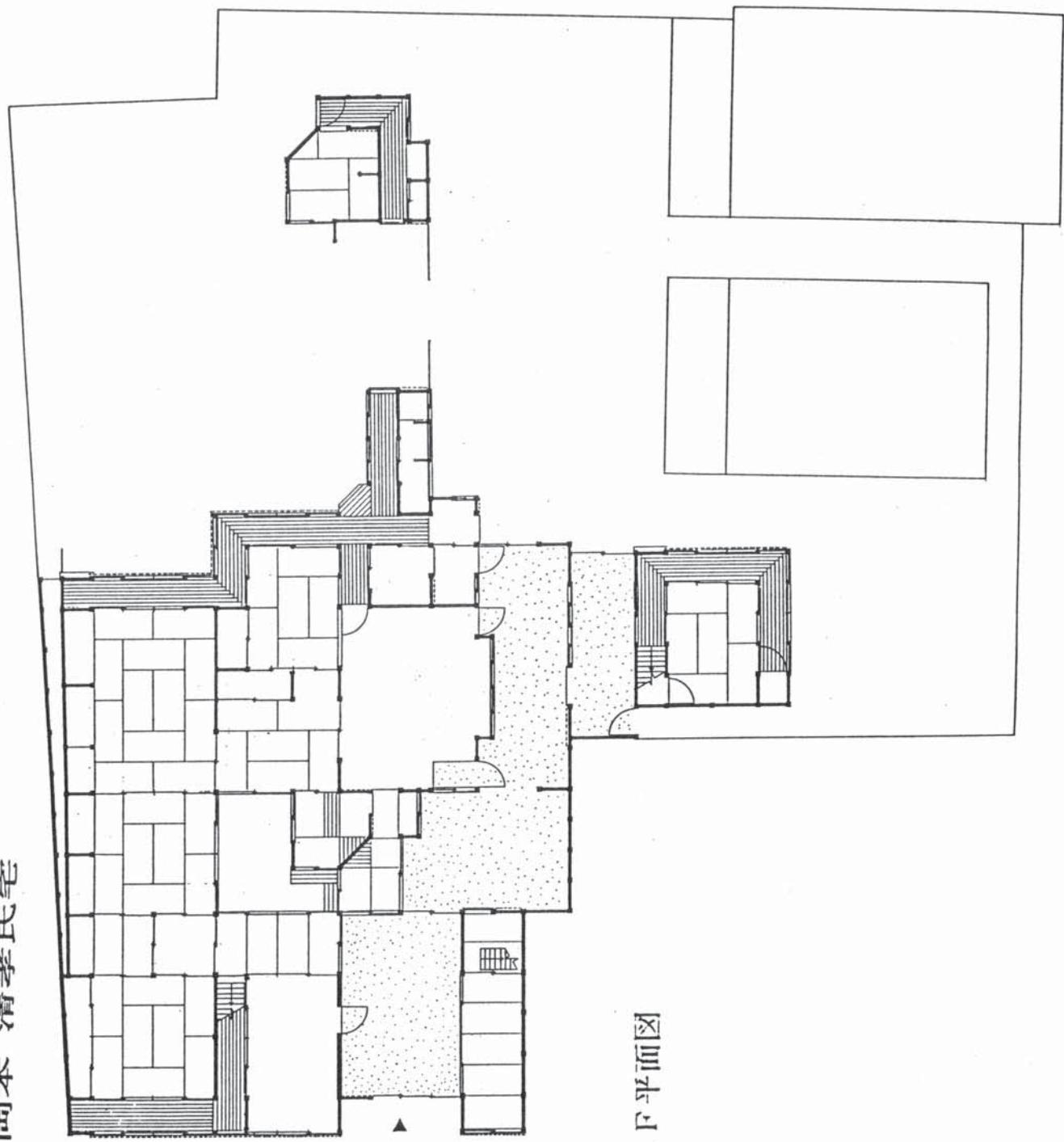


立面図



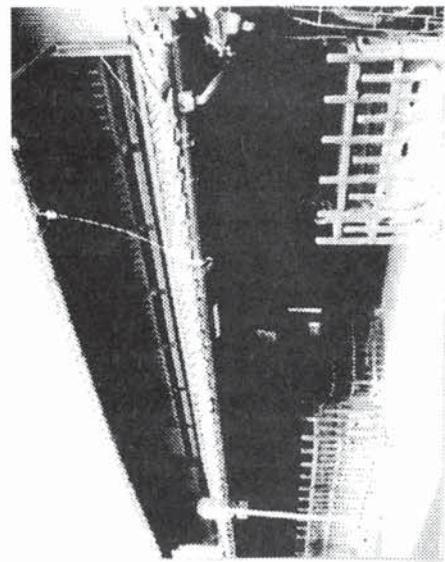
1F平面図

37 附本 清孝氏宅

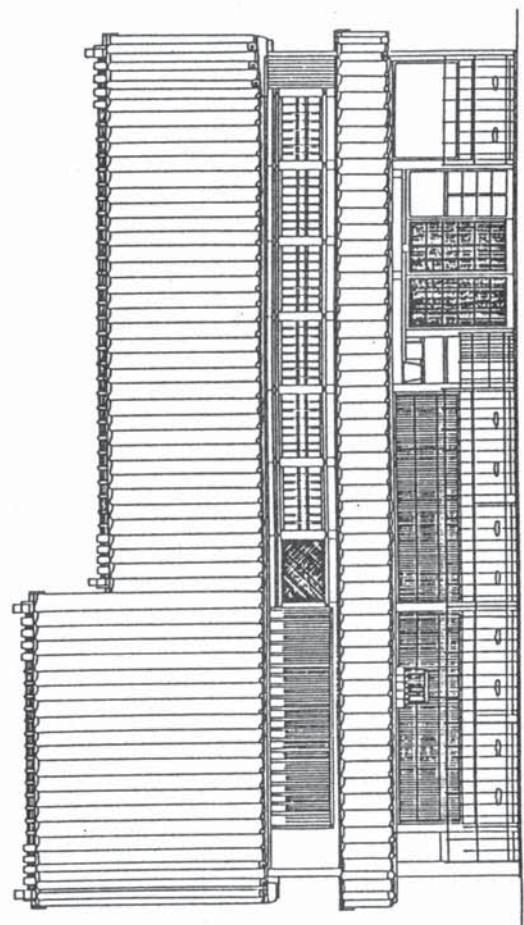


1 F 平面图

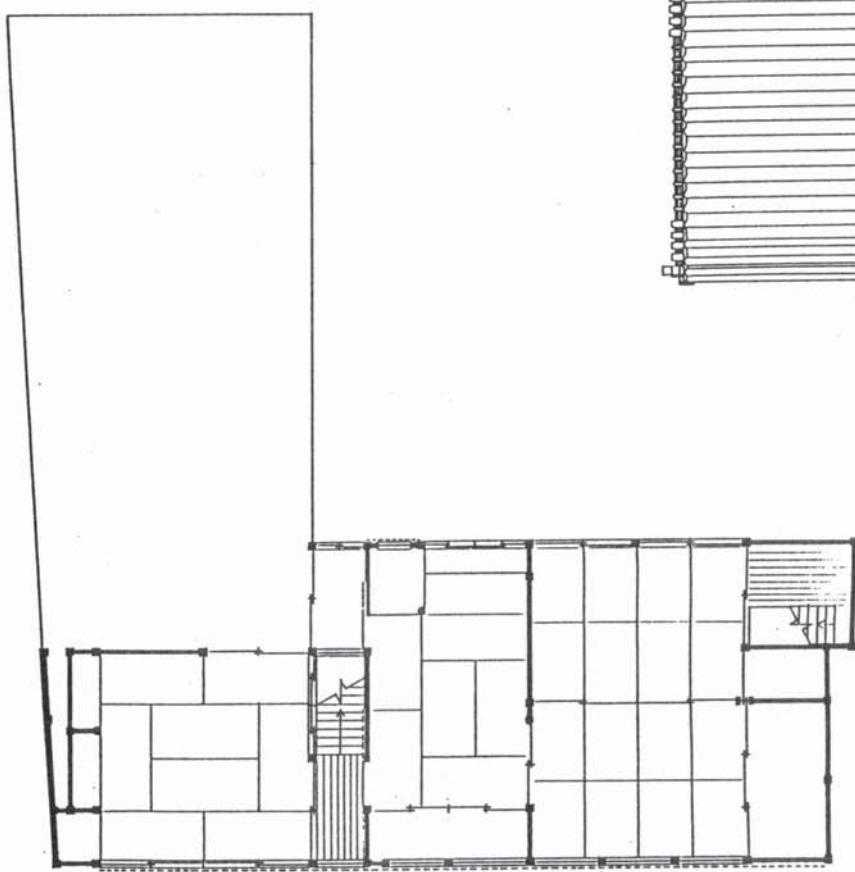
斜正面写真



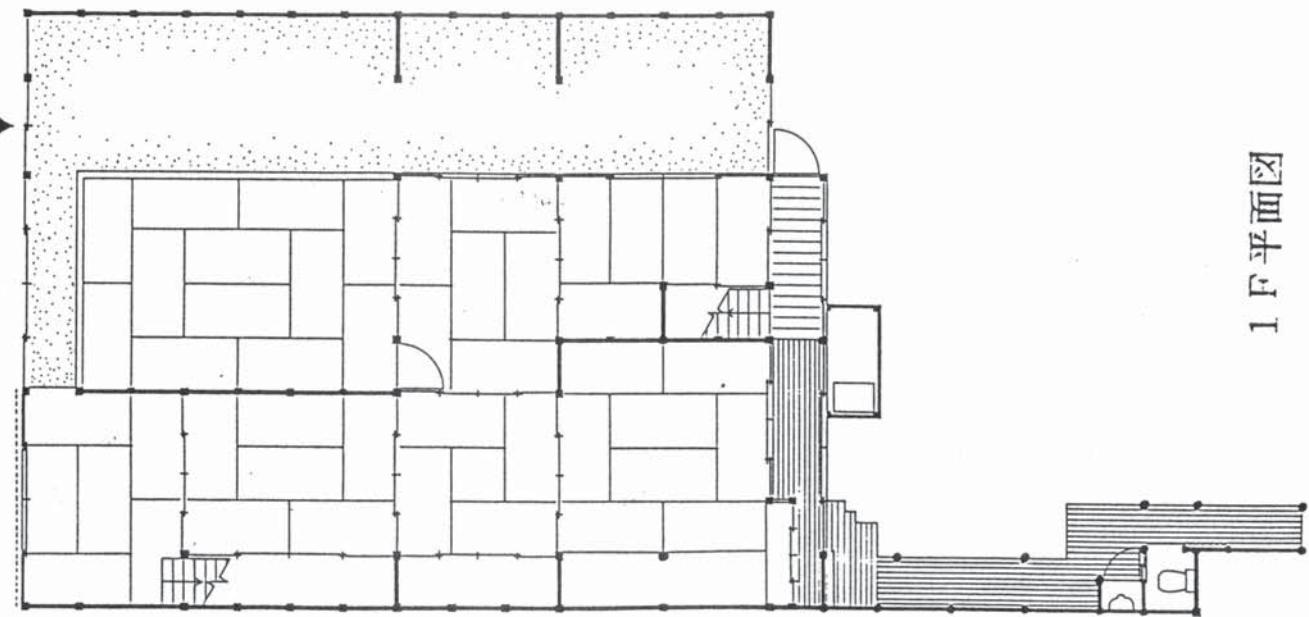
立面图



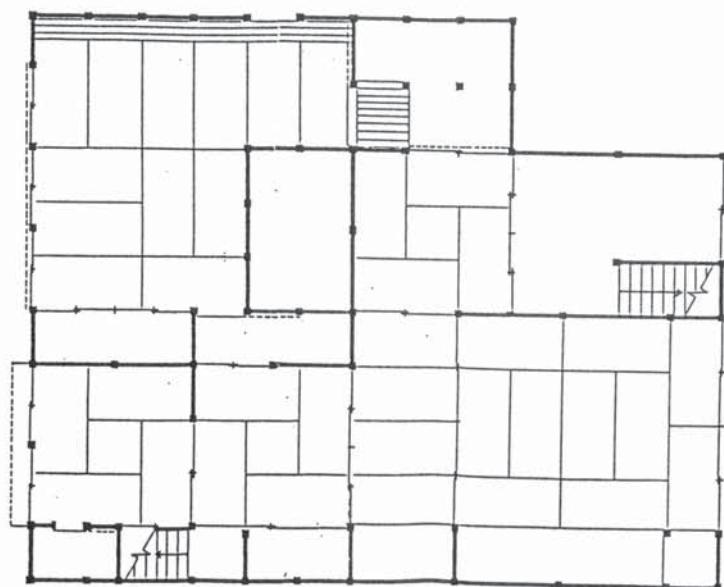
2F平面图



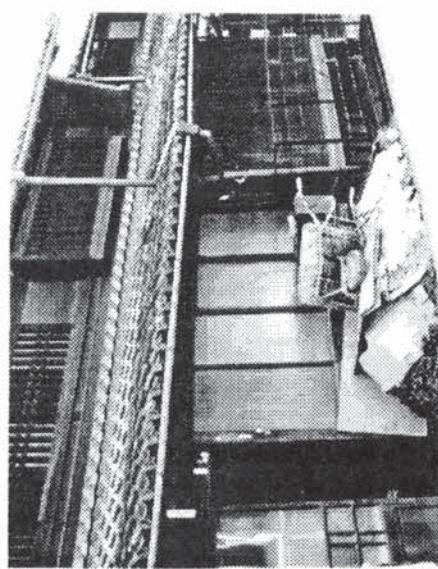
38 水野信夫氏宅



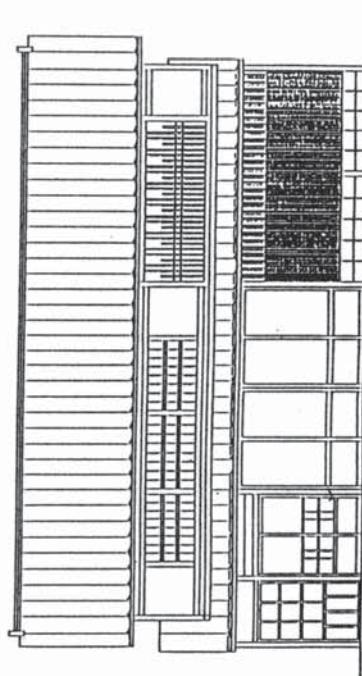
1F平面図



2F平面図

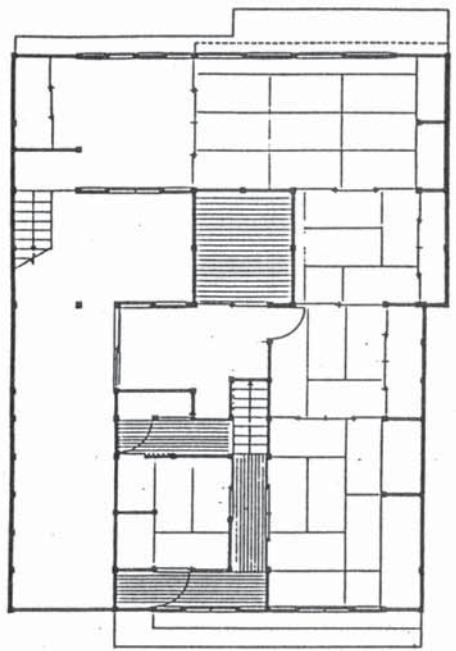


斜正面写真

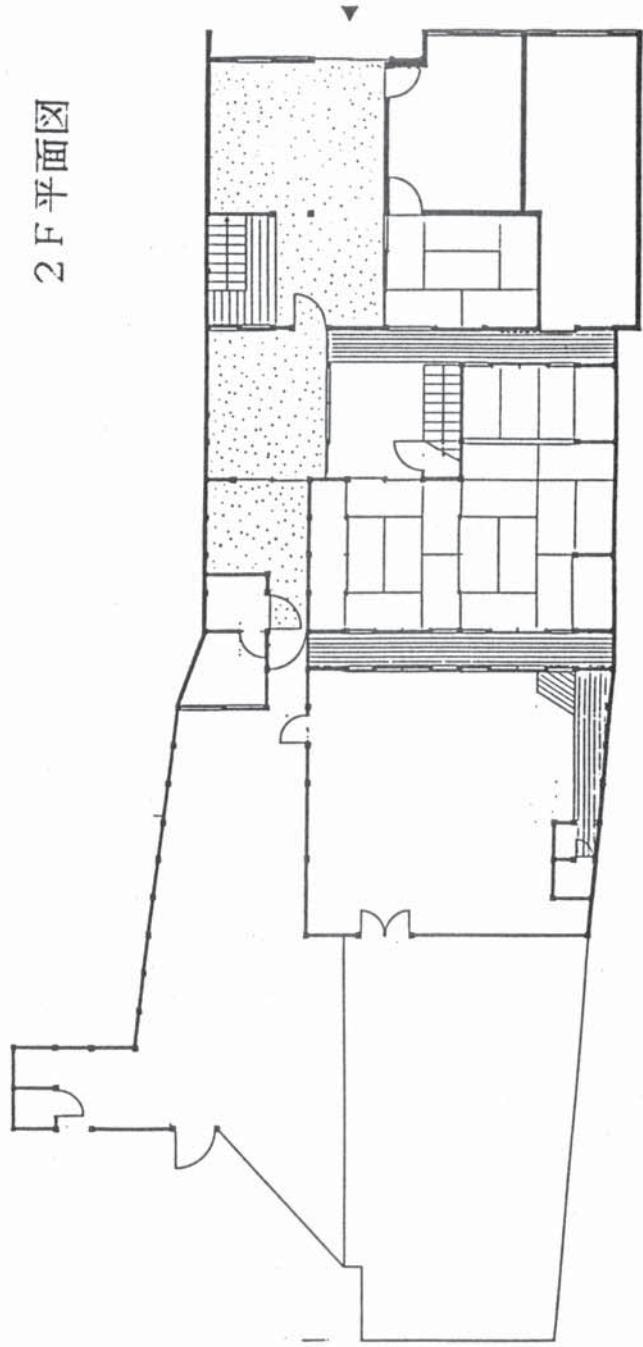


立面図

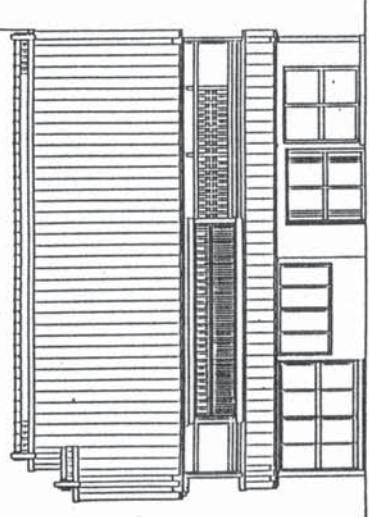
39 宮田 為一氏宅



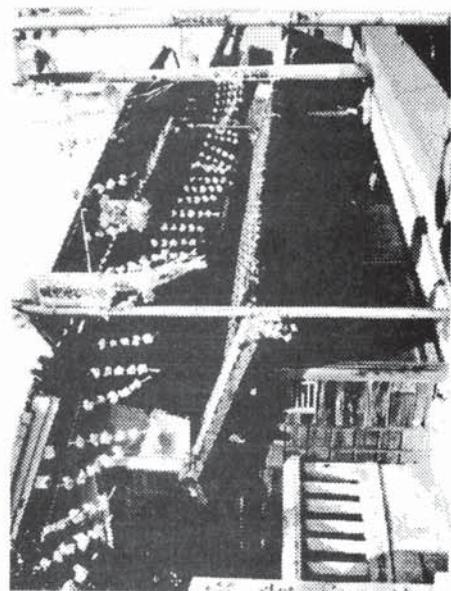
2F 平面図



1F 平面図

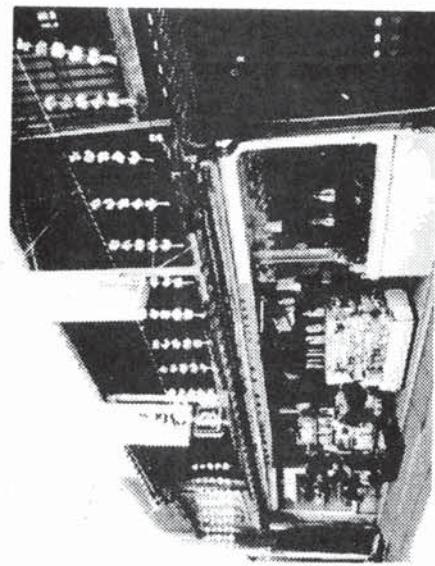


立面図

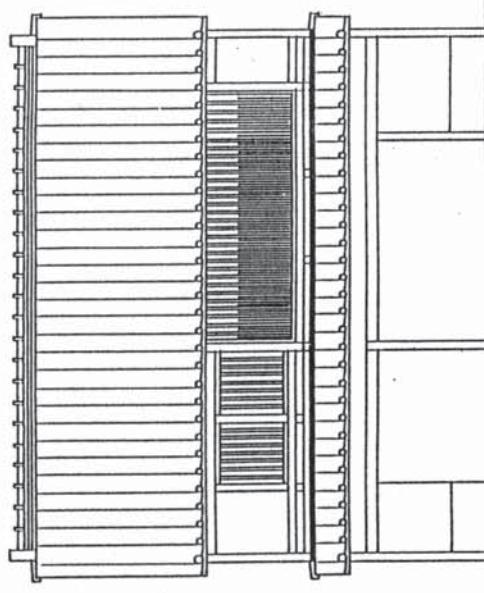


斜正面写真

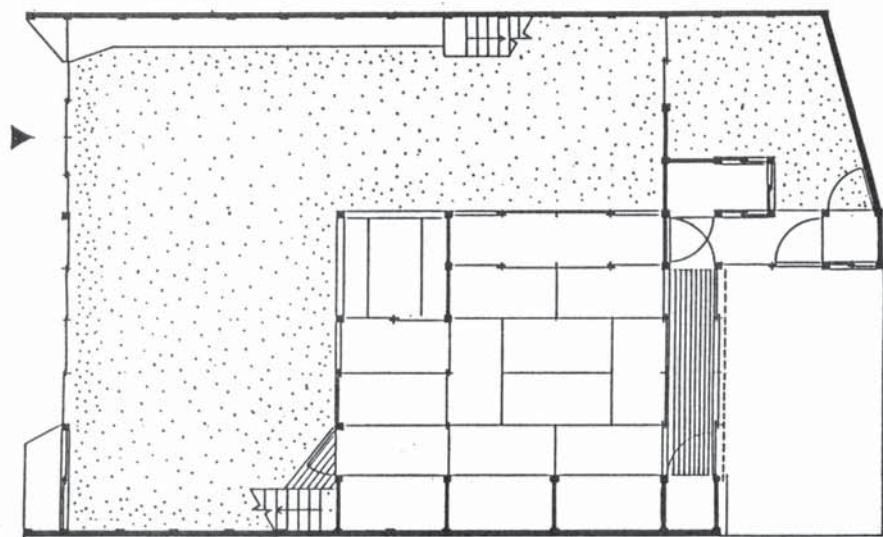
40 三輪 武郎氏宅



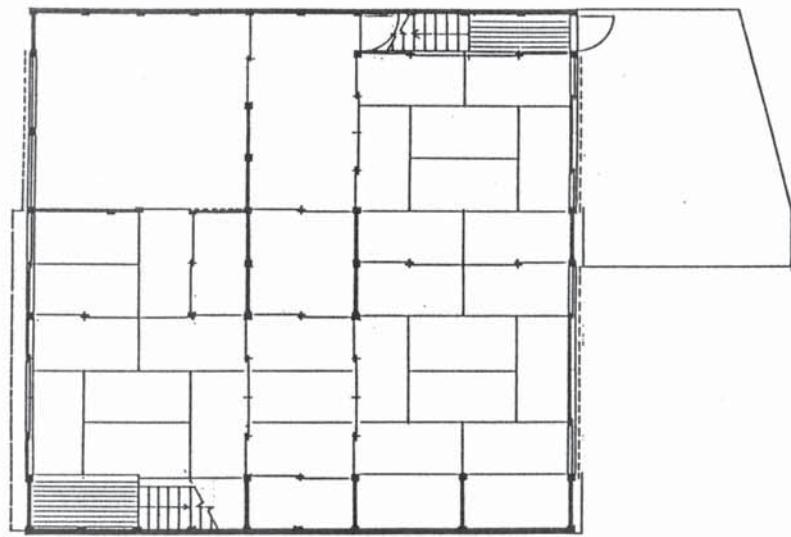
斜正面写真



立面図



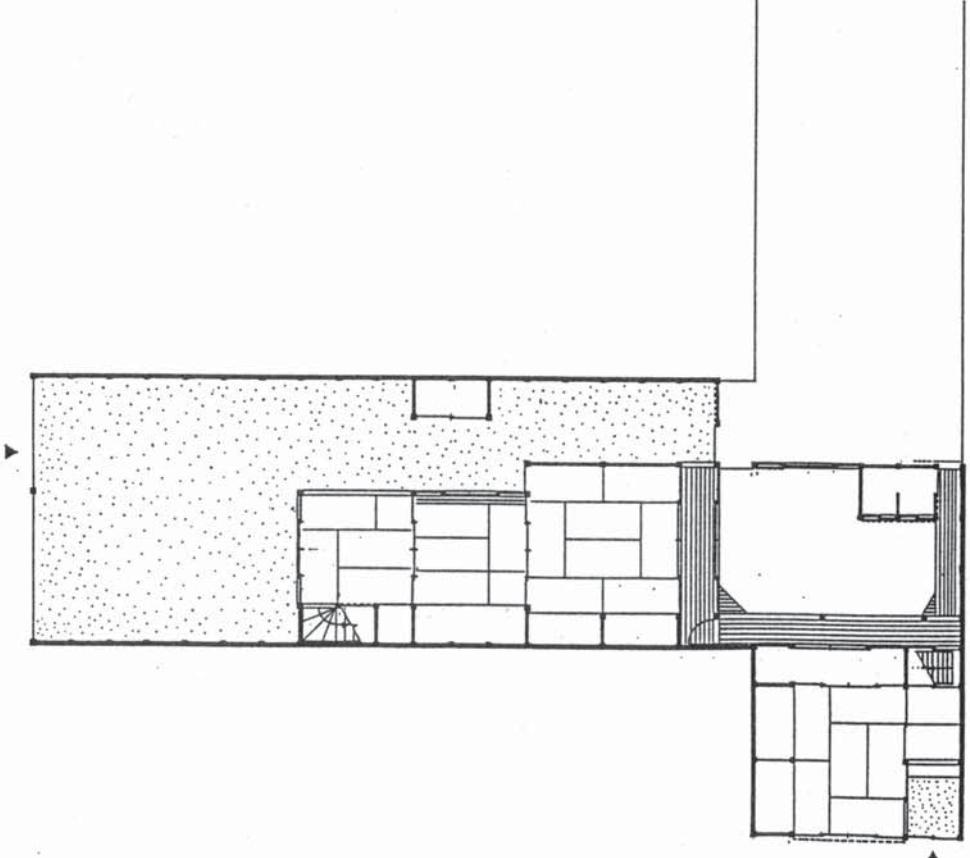
1F平面図



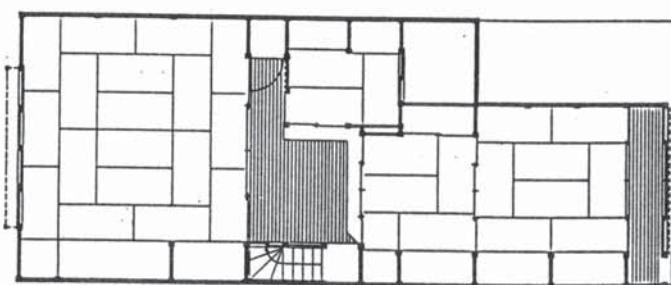
2F平面図

4.1 西八百宗

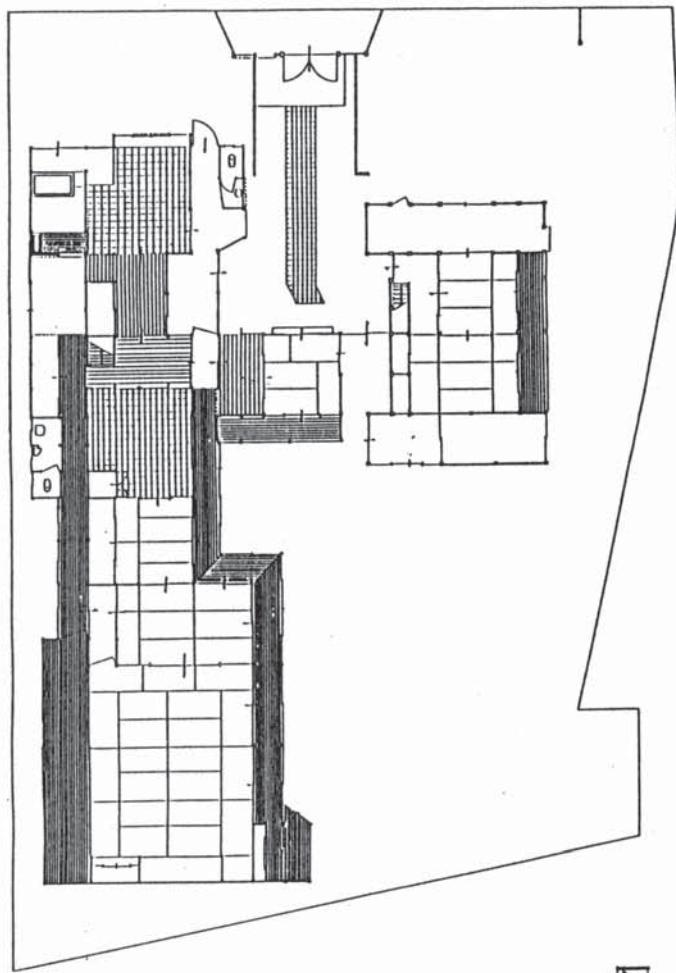
1F 平面图



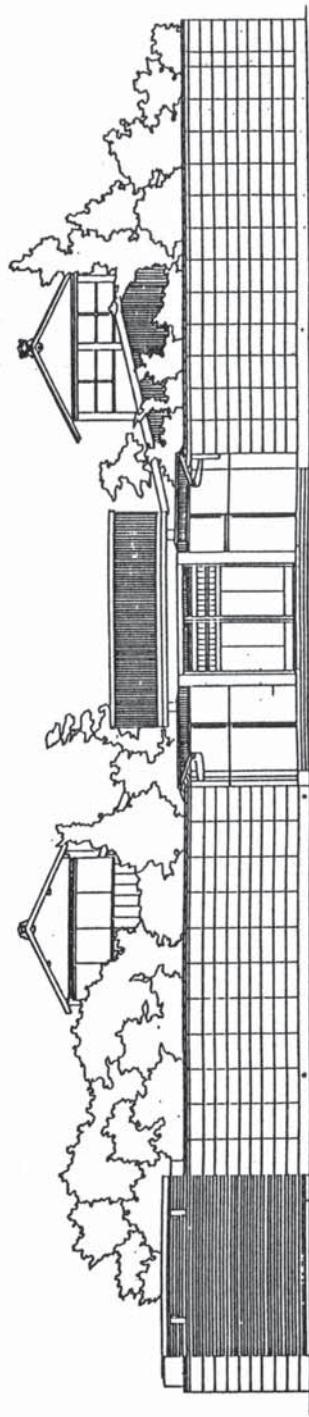
2F 平面图



4 2 堀田 俊彥氏宅

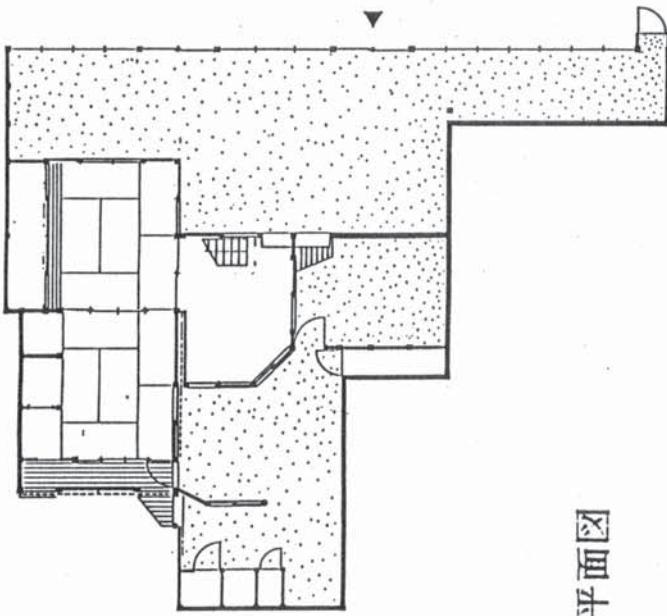


1F平面図

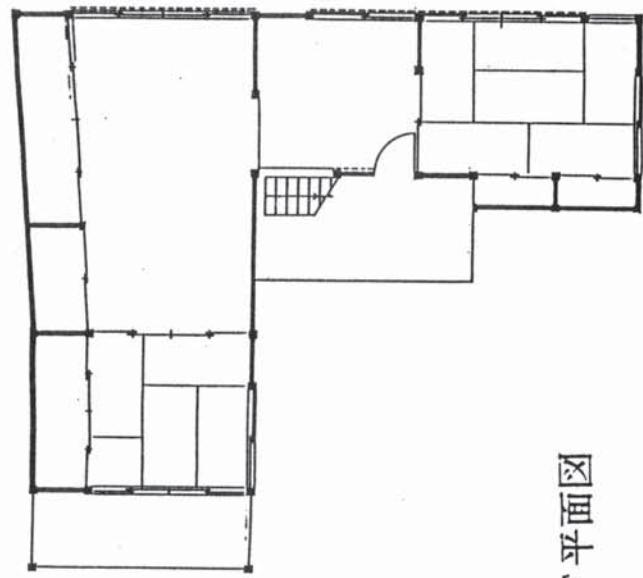


立面図

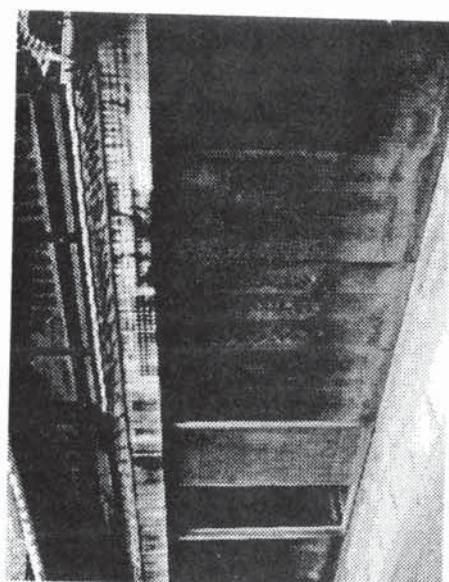
43 津坂 信男氏宅



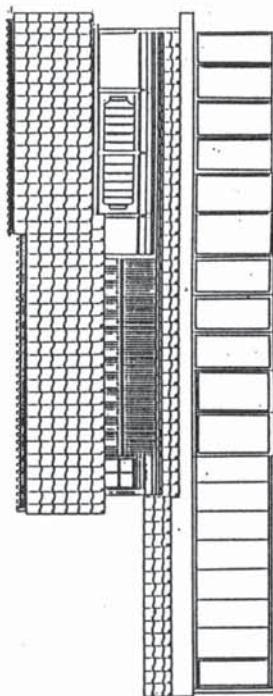
1F平面図



2F平面図



斜正面写真



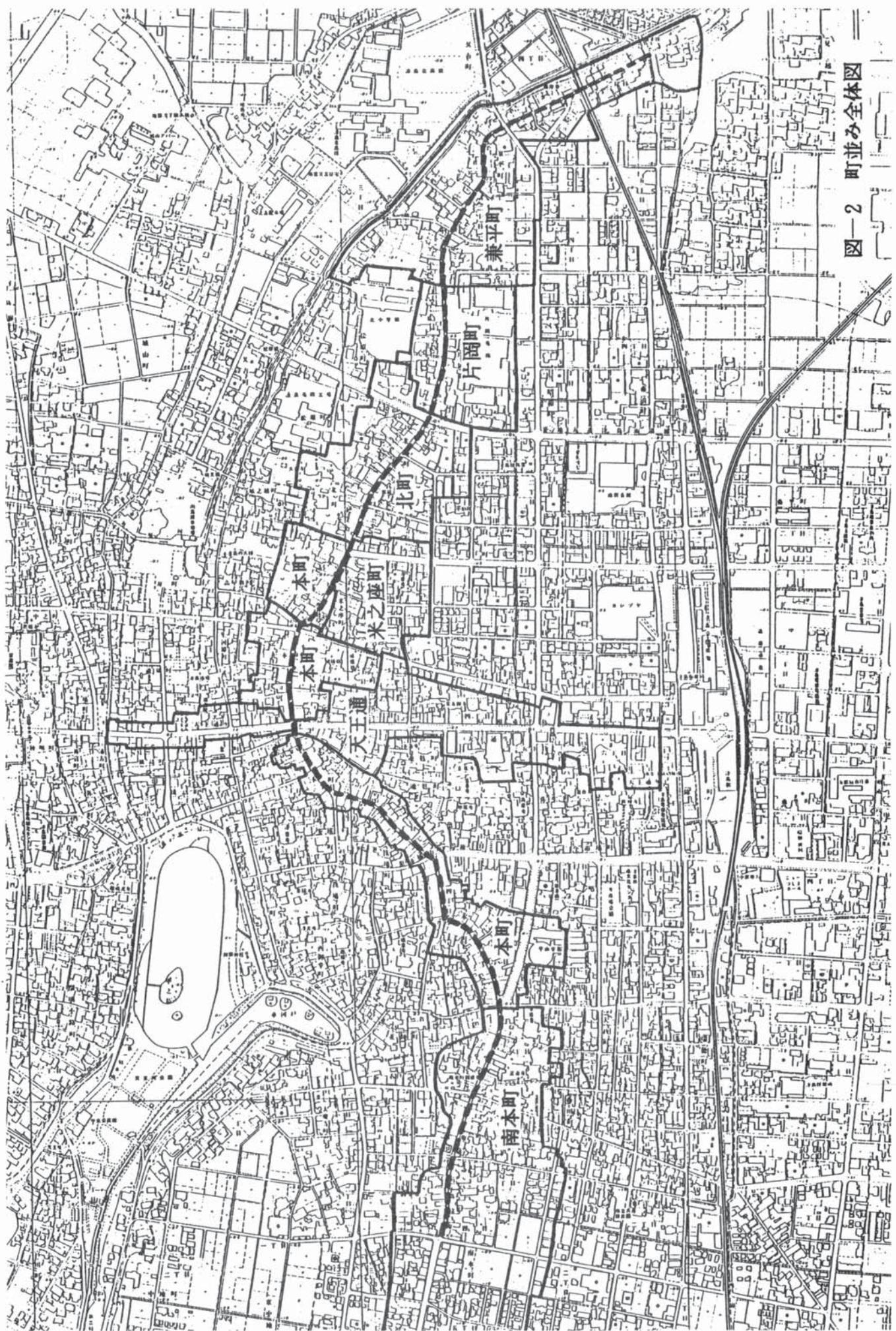
立面図



津島市位置図

図-1

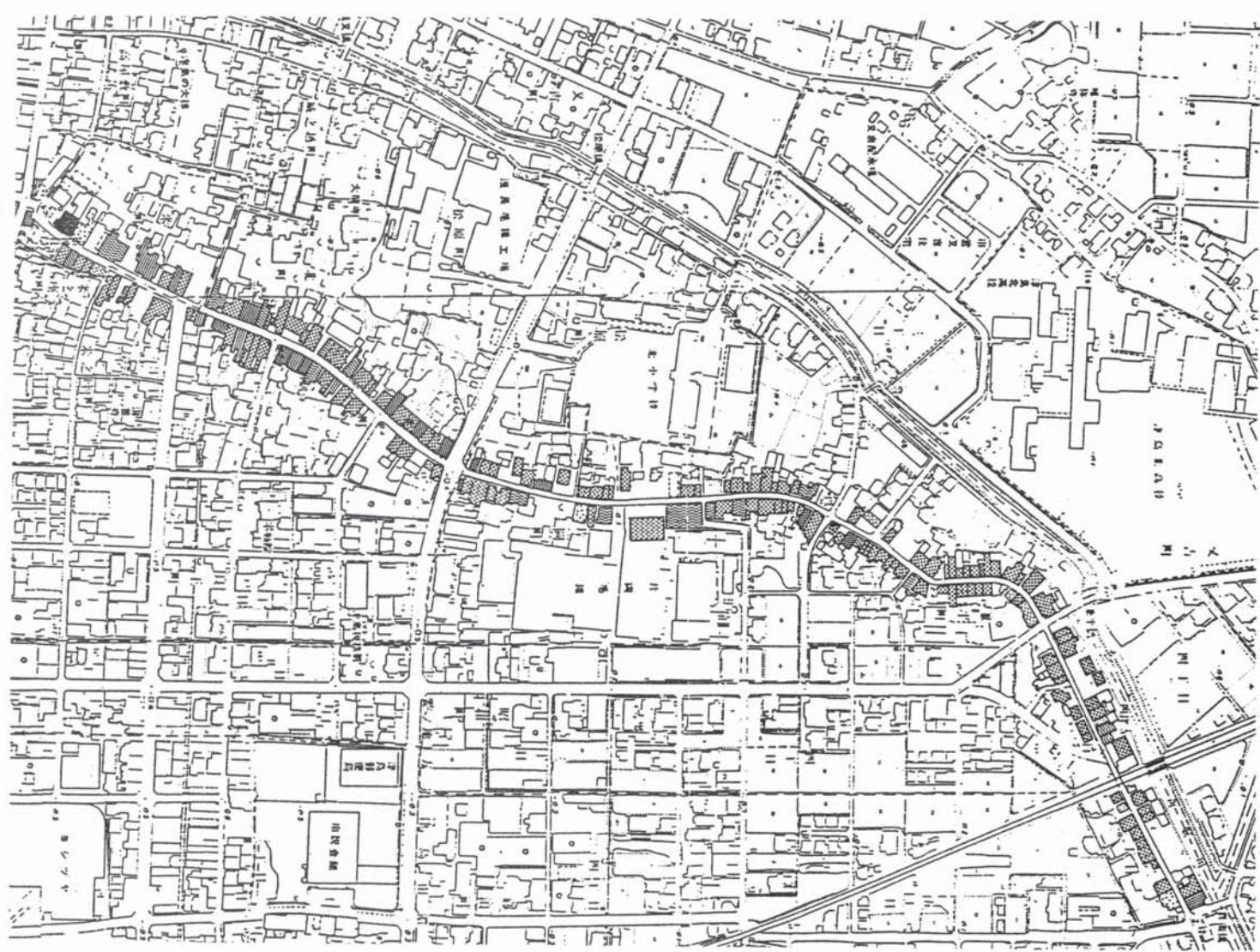
図-2 町並み全体図



図一3 建物の用途別分布

- [图案] 専用住宅
- [图案] 一般商店
- [图案] サービス業(飲食店、床屋、美容院等)
- [图案] 事務所、車両所、工場
- [图案] 医療施設
- [图案] 空屋
- [图案] 倉、倉庫
- [图案] 公共的施設





図一4 建物の構造別分布図

木造
木造モルタル
鉄筋コンクリート造、鉄骨造

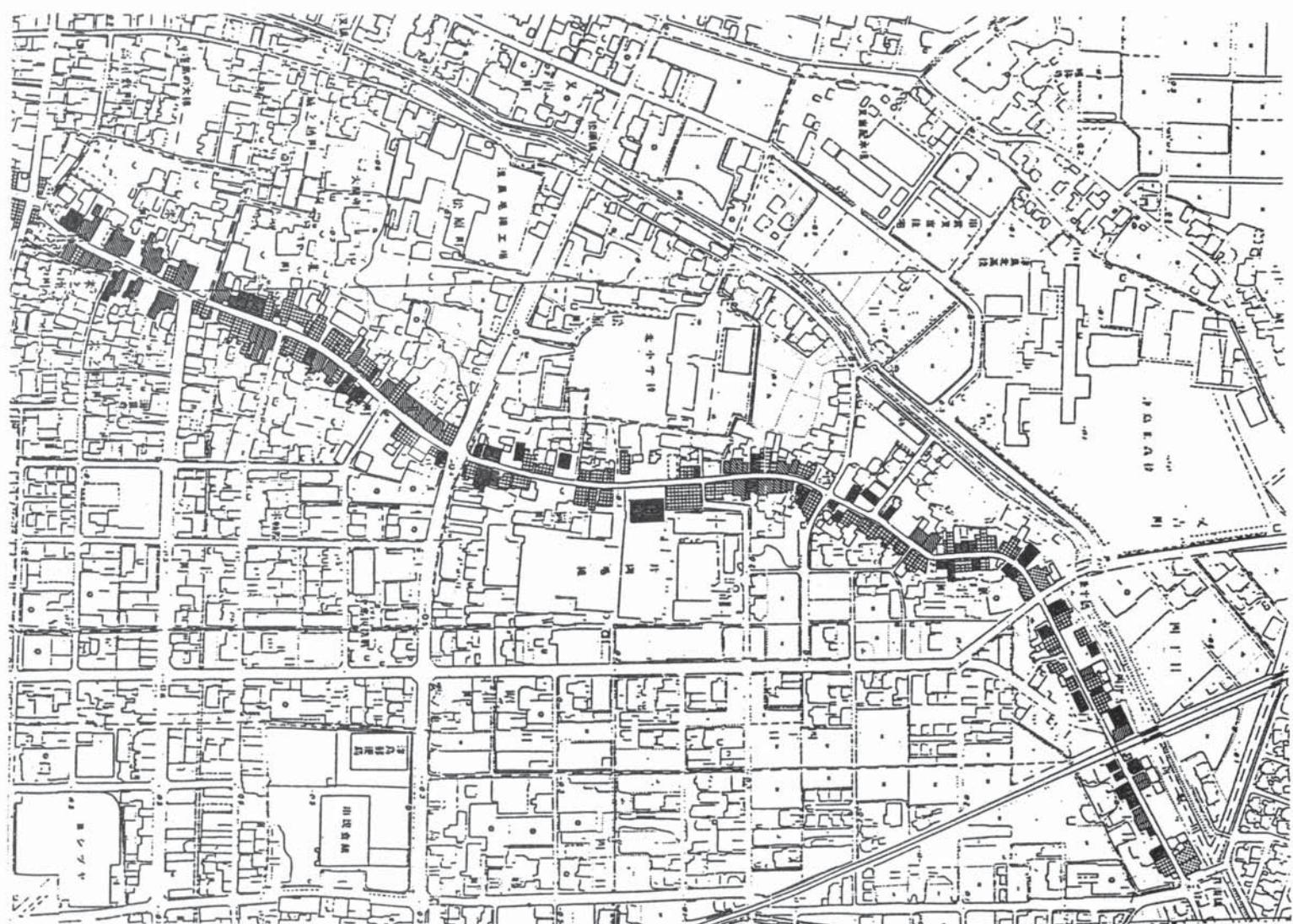




図一5 建物の年代別分布図

江戸時代～明治24年
明治24年～明治末期
大正時代～戦前
戦後





図一六 景観上の要素となるもの



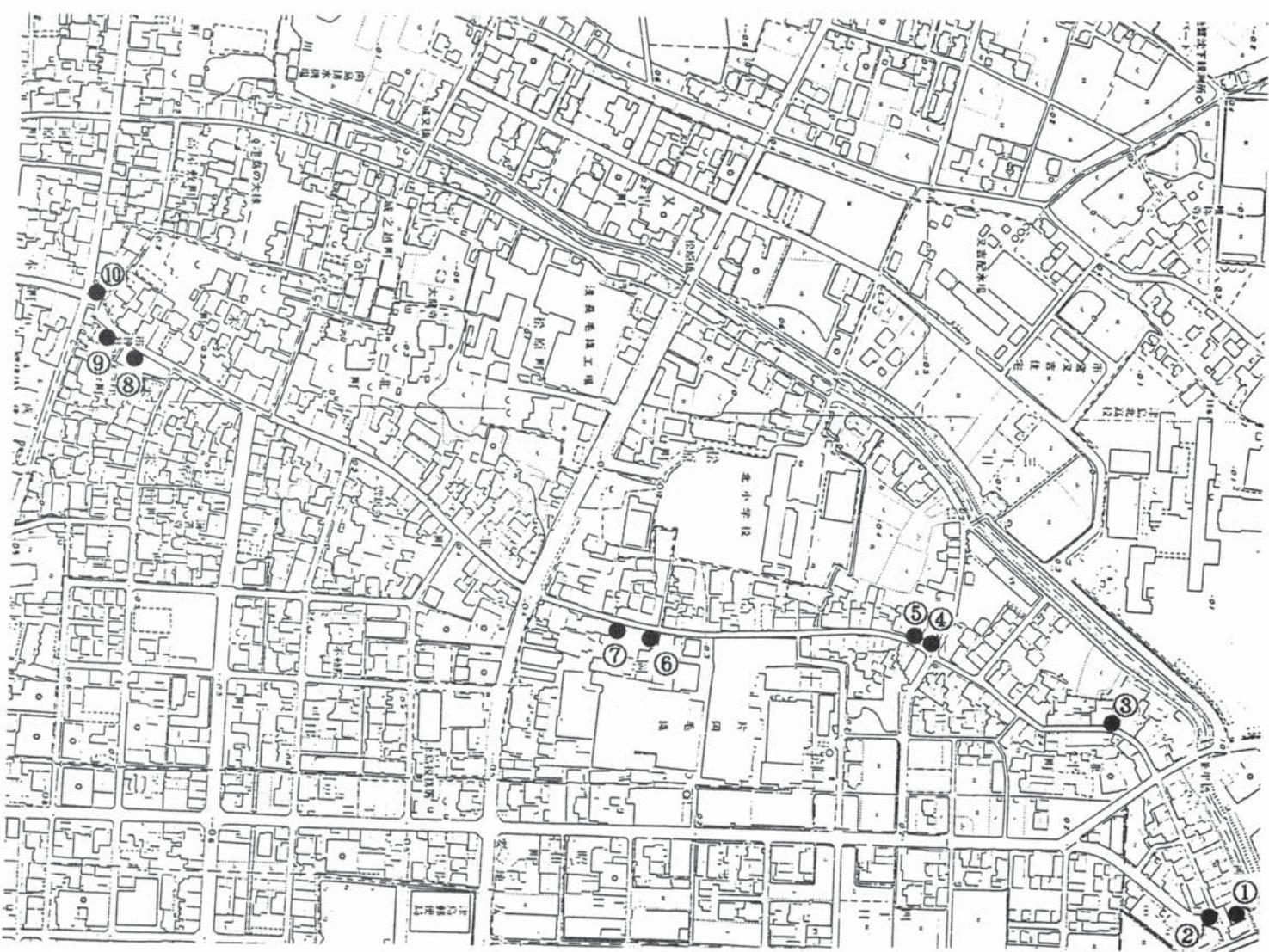
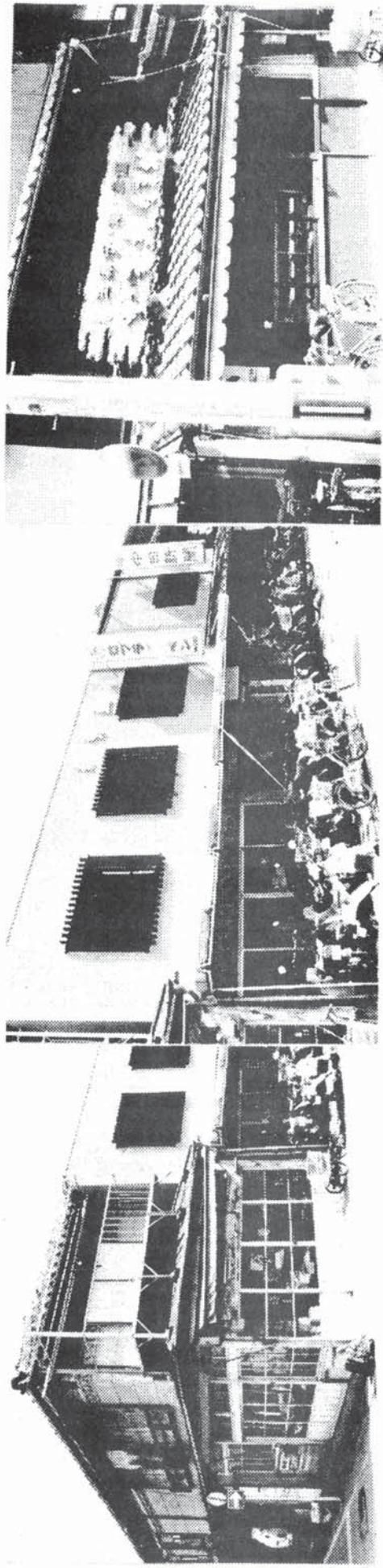
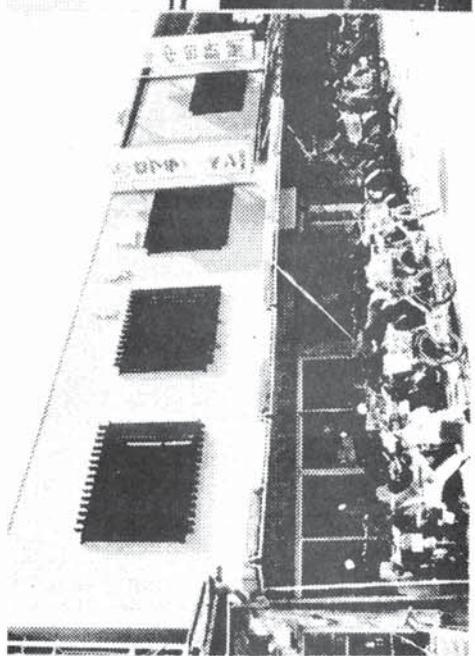


図-7 調査された町家の所在地

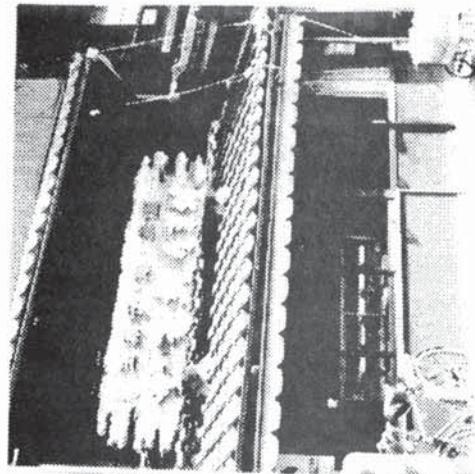




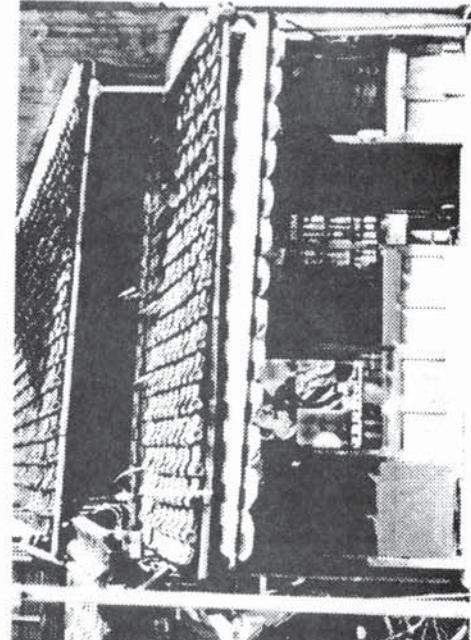
E - 1



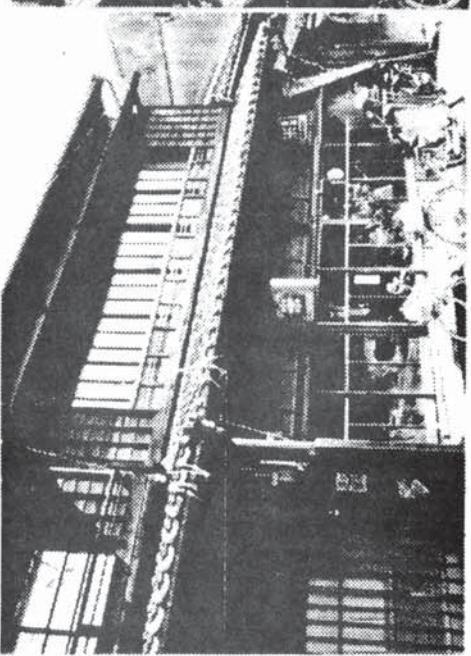
E - 2



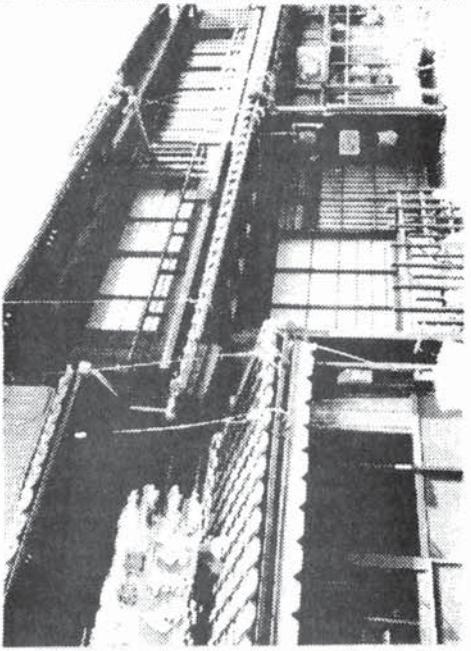
E - 3



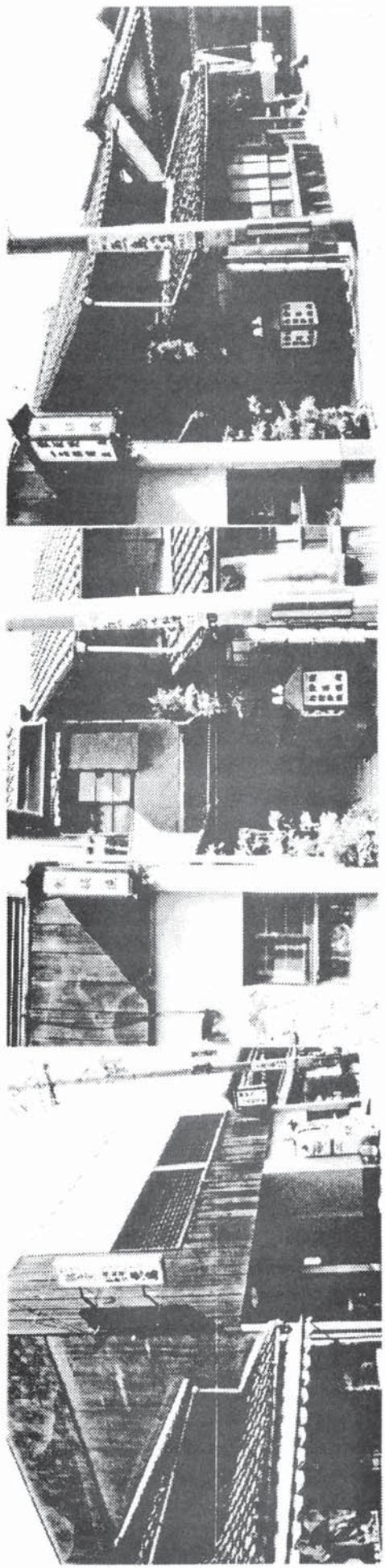
E - 6



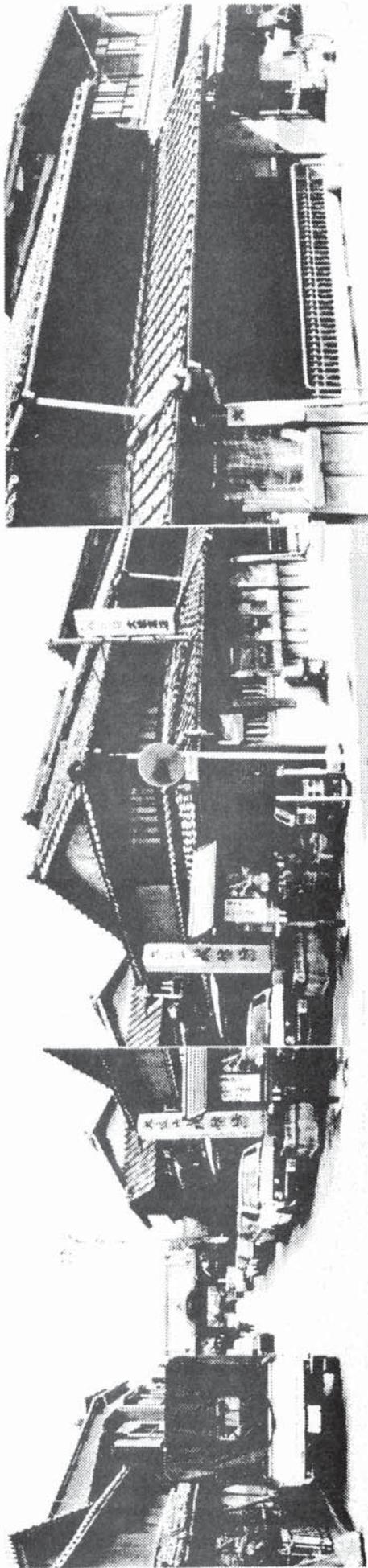
E - 5



E - 4

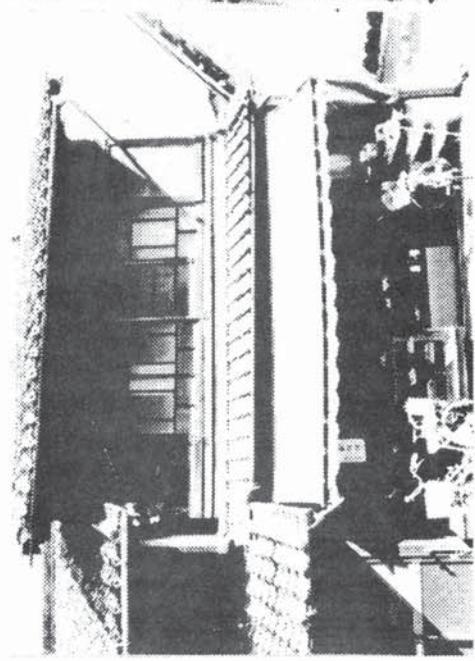


E - 8

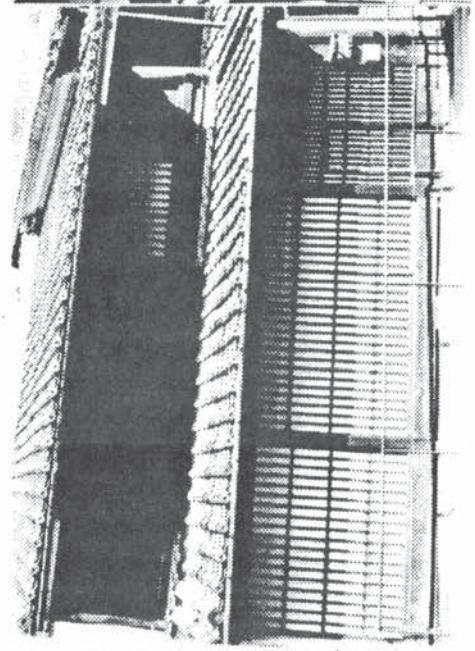


E - 10

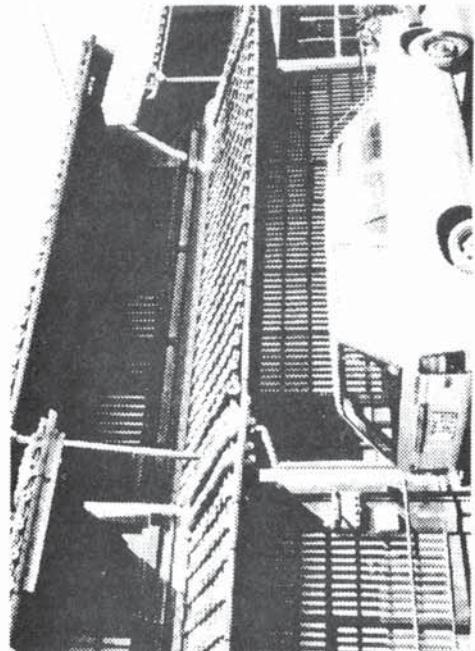
E - 9



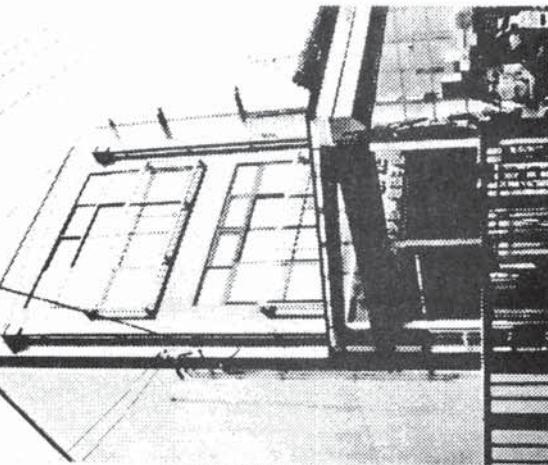
E - 1 1



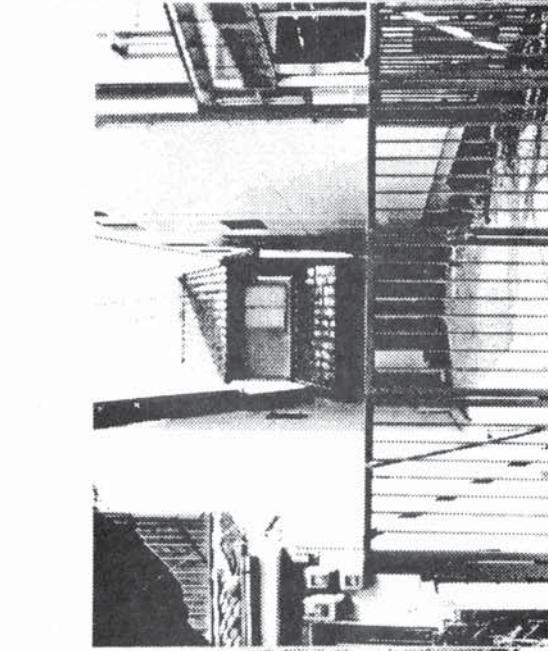
E - 1 2



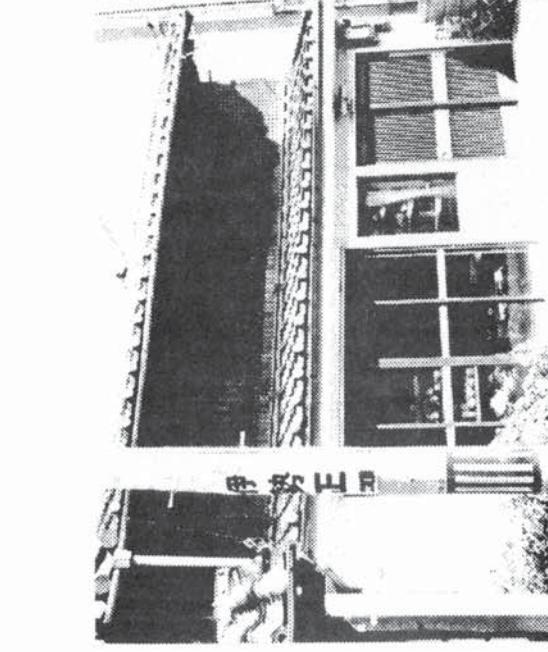
E - 1 3



E - 1 6

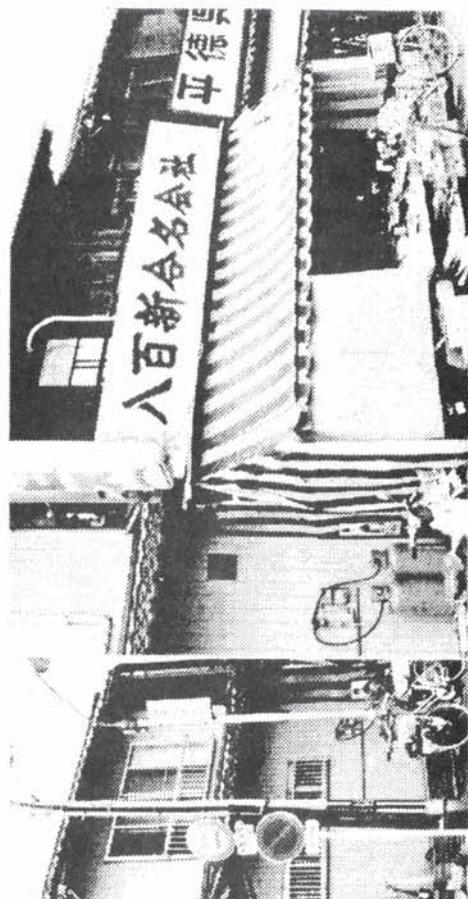


E - 1 5

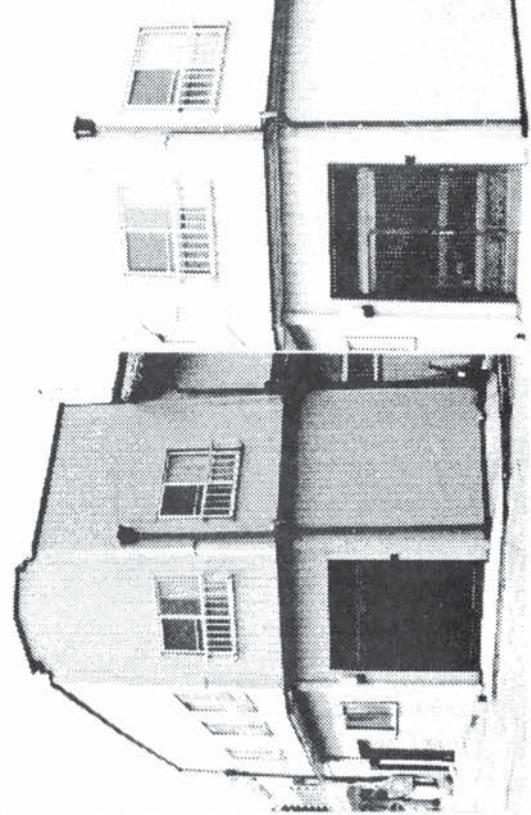


E - 1 4

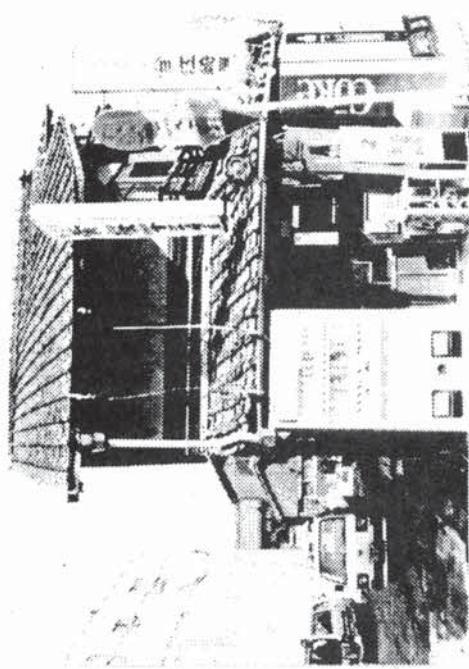
W-2

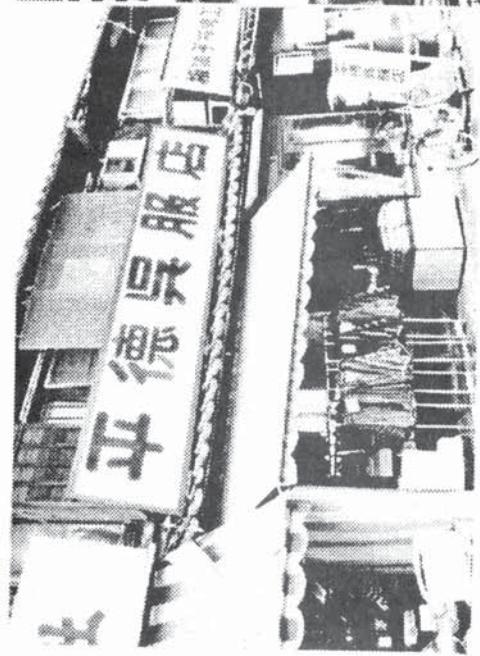


W-1

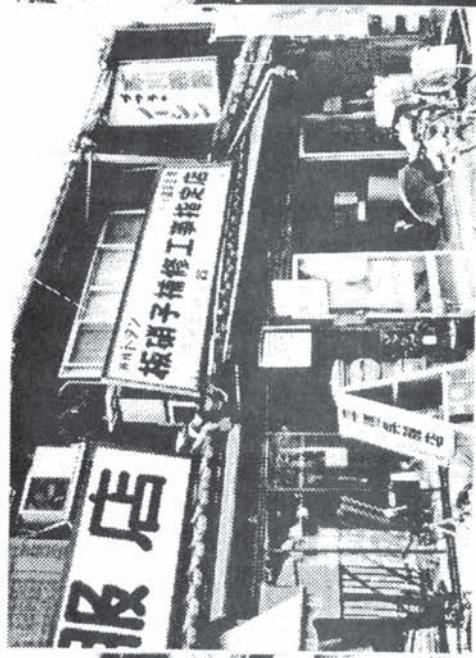


E-17





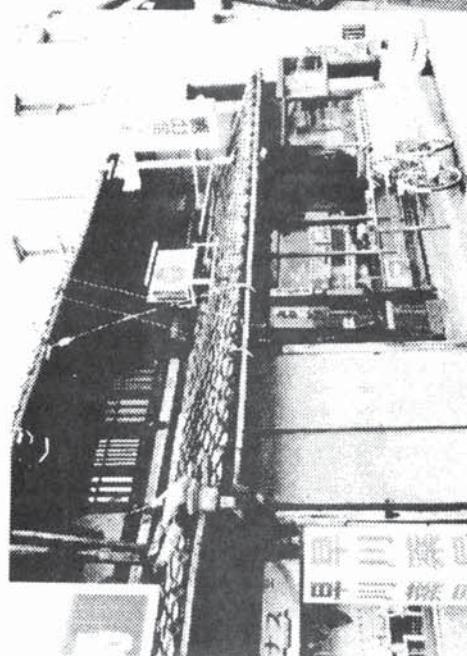
W- 3



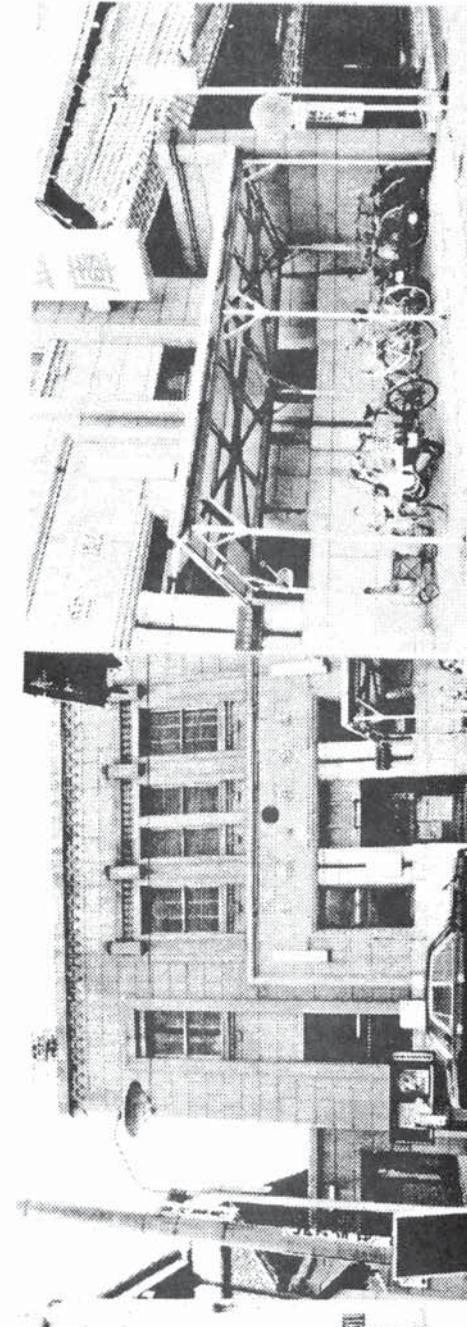
W- 4



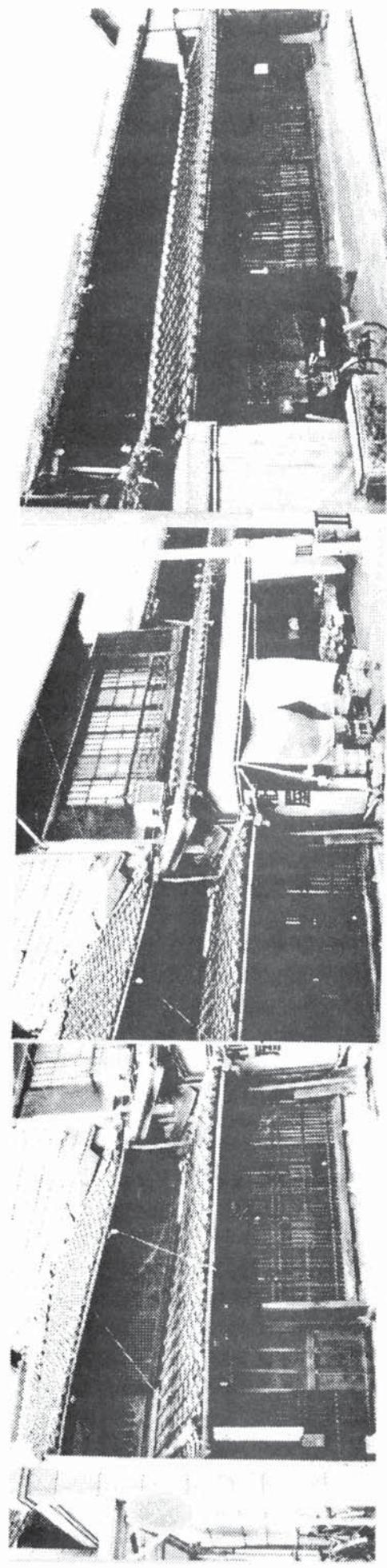
W- 5



W- 6

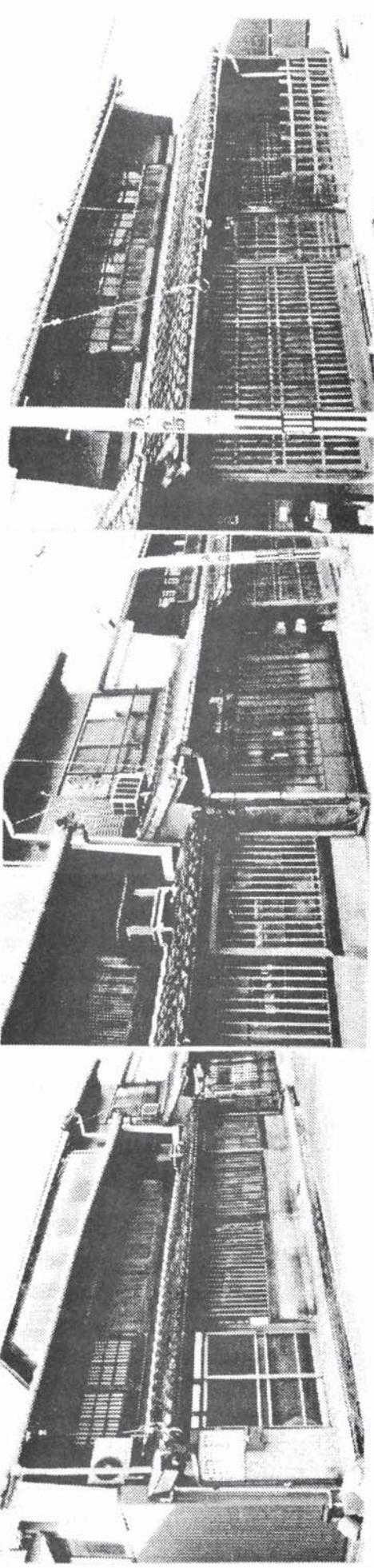


W- 7



W - 8

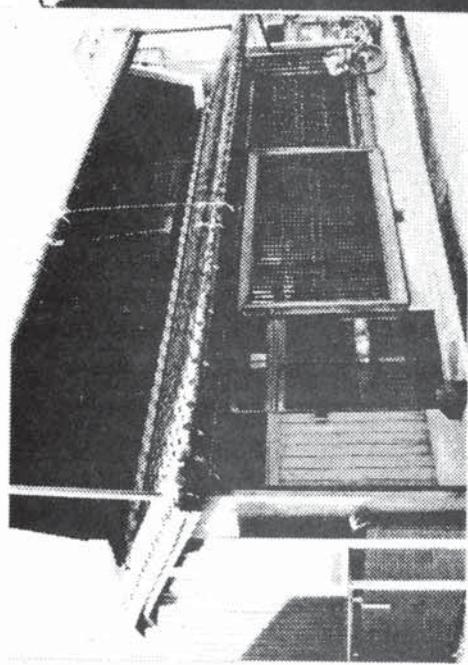
W - 9
W - 10



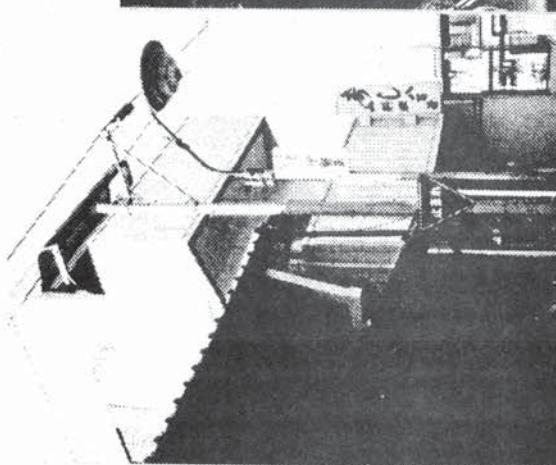
W - 11

W - 12

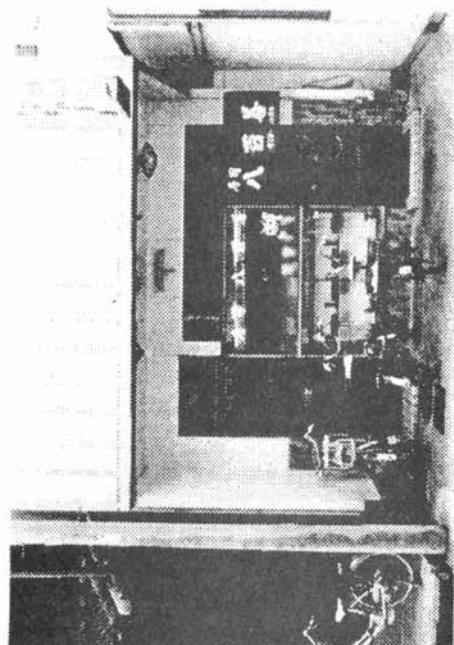
W - 13



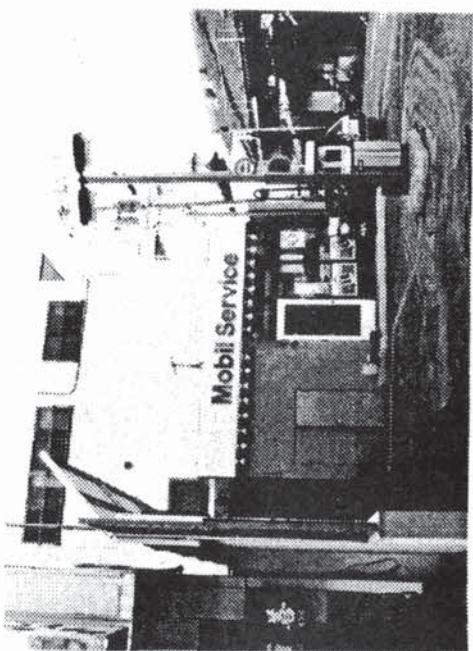
W - 1 5

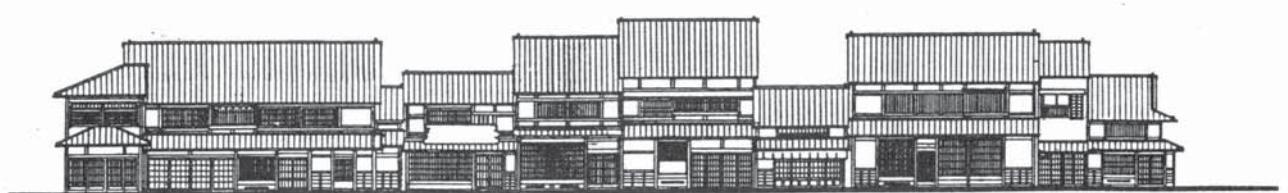
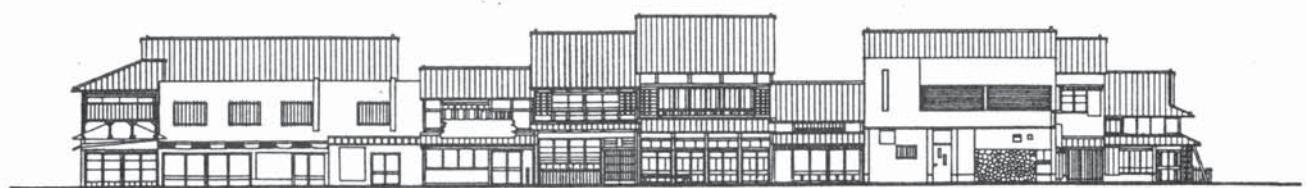


W - 1 6

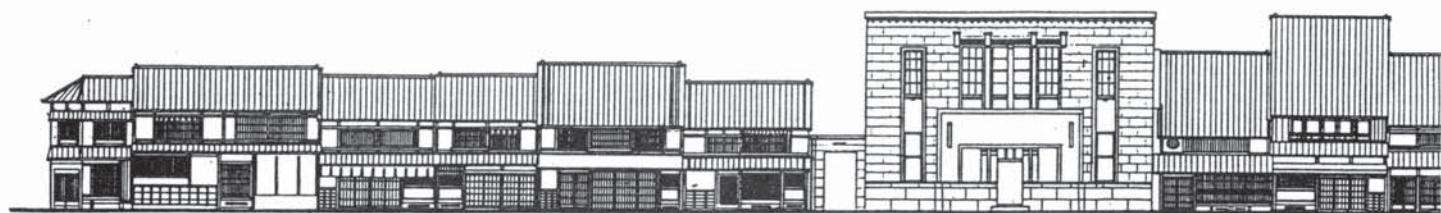


W - 1 7

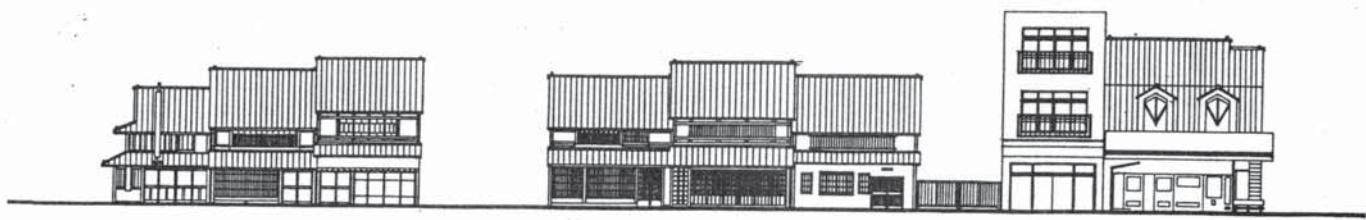




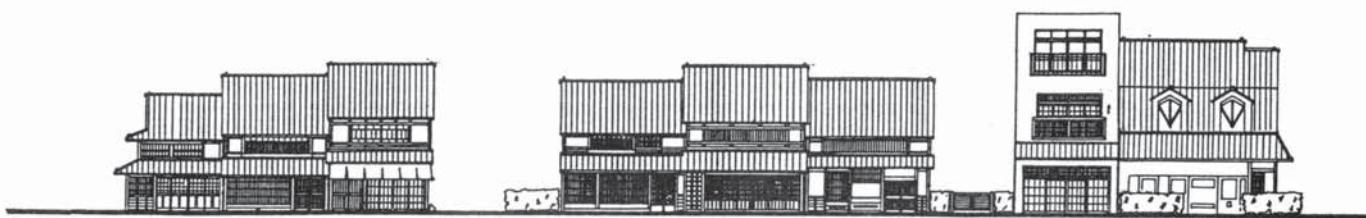
町並み連続図面現状図（西側）



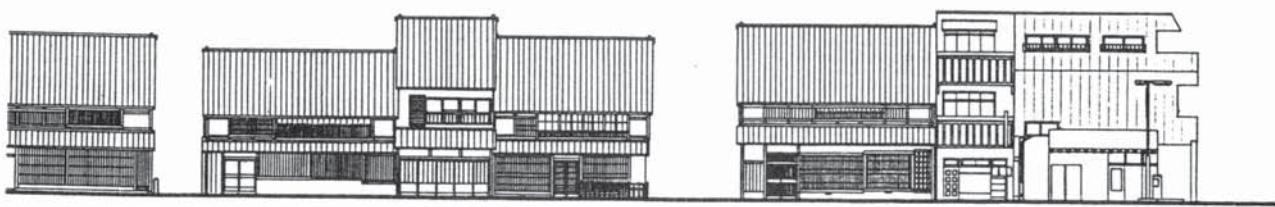
町並み連続図面修景図（西側）



町並み連続図面現状図（東側）



町並み連続図面修景図（東側）



町家の住生活調査報告

1. 調査概要

(1) 調査目的

本調査は、町並み保存についての沖島市民の意識および住生活の実態を明らかにし、市における今後の町並み保存のあり方を探ることを目的としている。

昭和58年・59年の調査時にも、「町家に関する住生活調査」を行ってきたが、調査対象が家屋の実測調査を行った世帯にのみ限定されていたため、今回は、より広範な市民の意見が把握できるよう対象を広げて行ったものである。

(2) 調査方法

調査対象：巡見街道に沿った9つの町（兼平町、片岡町、北町、米町、米之座町、本町、南本町、筏場町、橋詰町）の1,029世帯を対象とし、回答者は主として主婦（世帯主）と他の成人家族1人（個人票）とした。

内 容：住宅及び町の住み心地、住宅の継承について、住宅の改造・増築の実態、町並み保存に関する意識などである。アンケート調査票は、添付資料に示す。

方 法：留置自記記録法とし、昭和61年8月15日の広報配付時に配付し、8月27・28・29日に回収を行った。未回収のものは郵送回収によった。

2. 調査結果

(1) 調査票回収状況

<世帯票>

配付数	1,029
回収数	465
有効回収数	449
回収率	45.2%

<個人票>

配付数 (対象者数)	1,029 857
回収数	430
有効回収数	289
回収率	33.7%

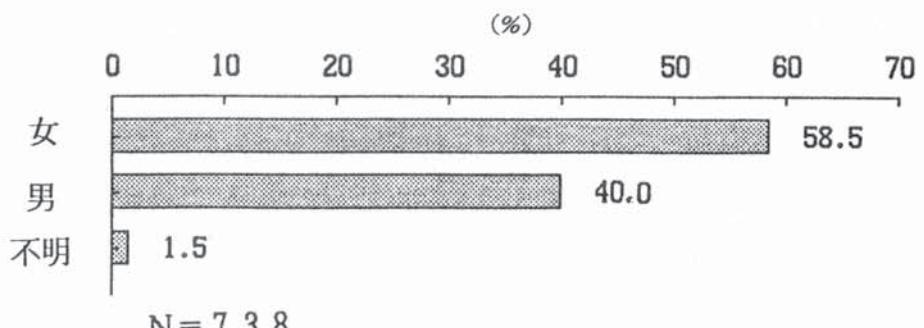


図1. 性 別

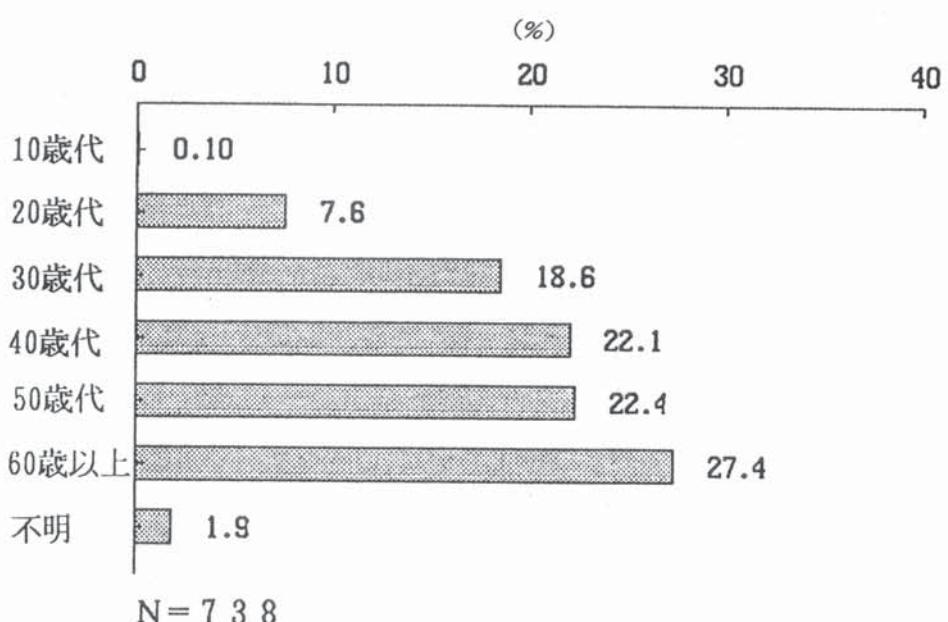


図2. 年 齡 構 成

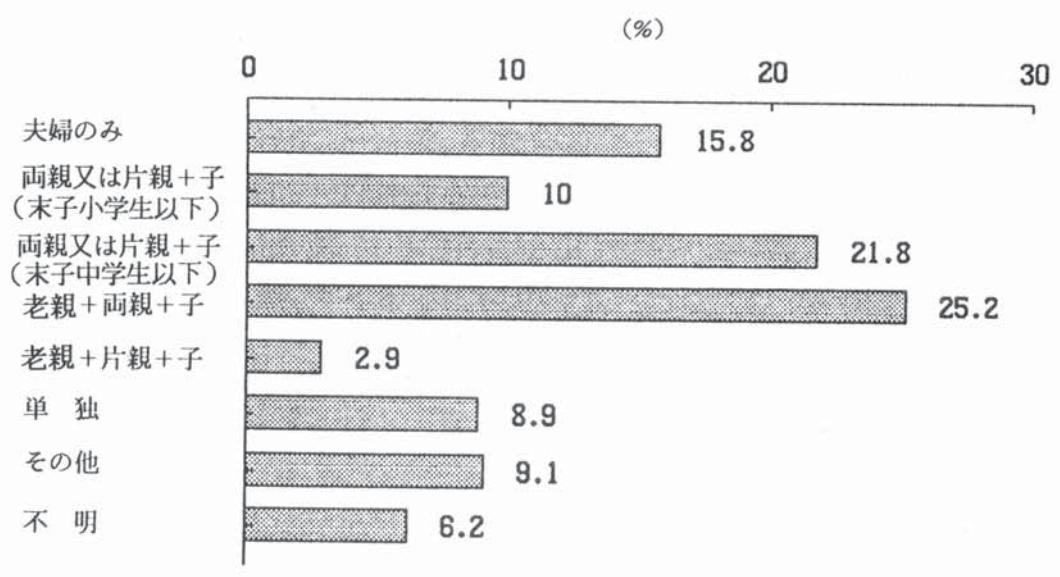
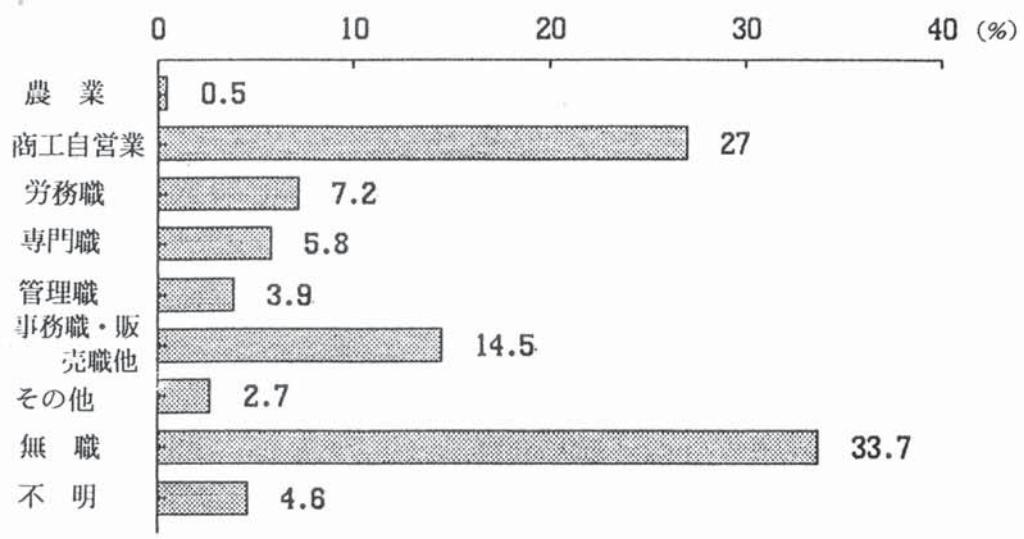
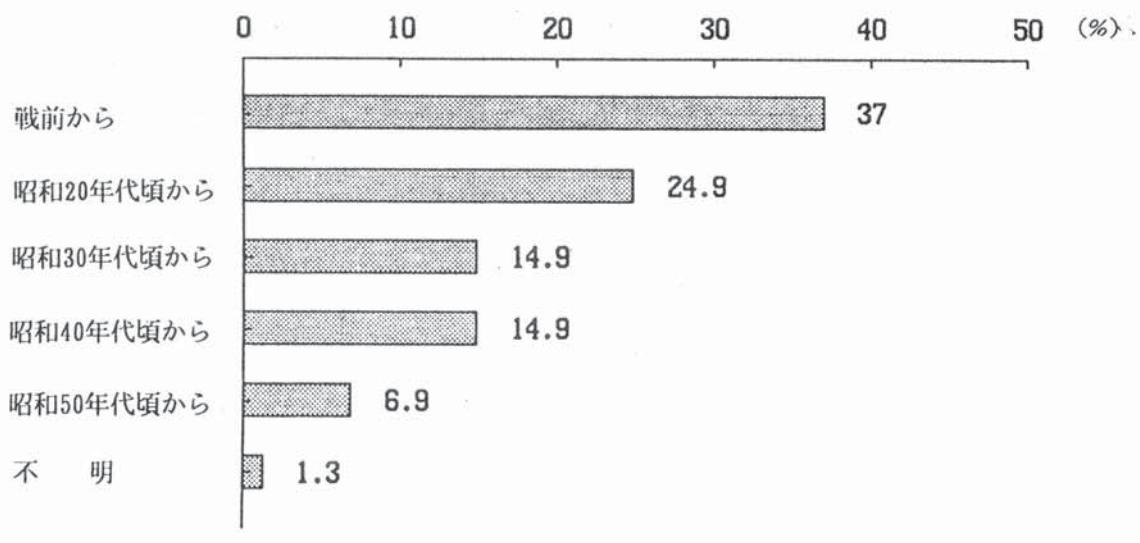


図3. 家 族 構 成



N = 738

図4. 職業



N = 449

図5. 津島での居住歴

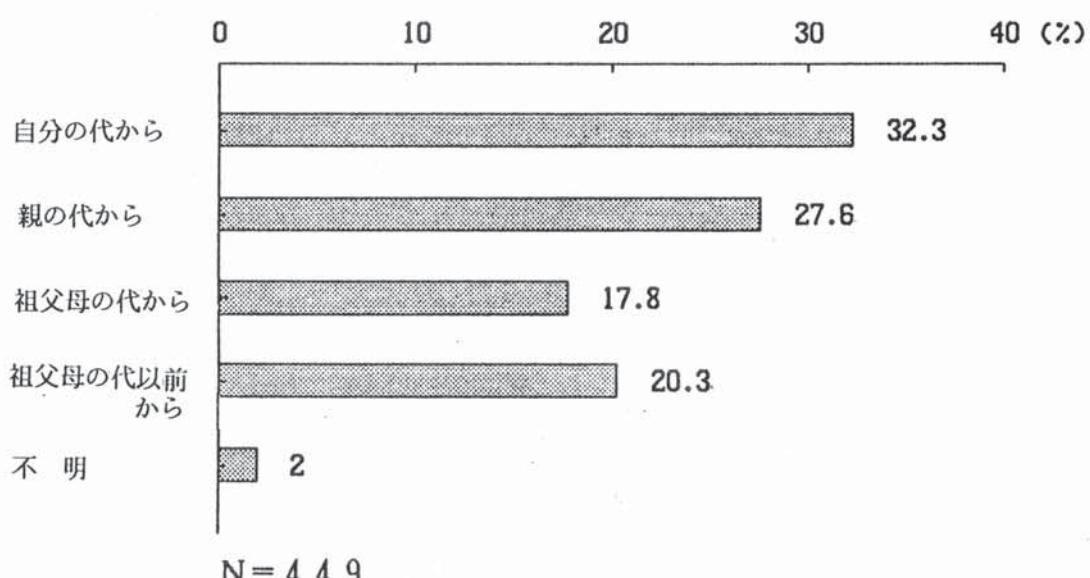
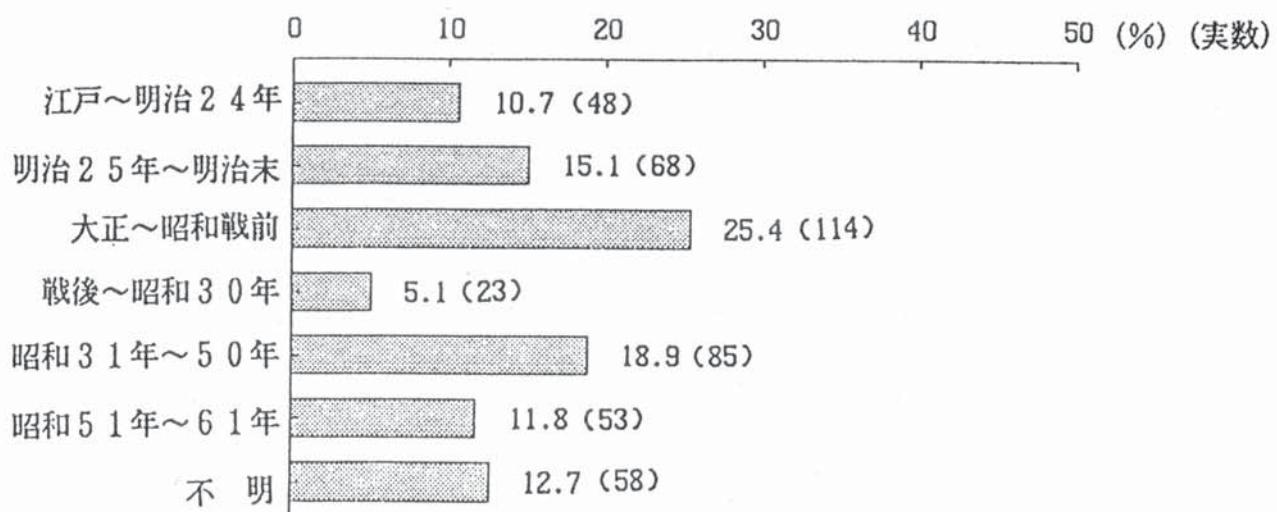
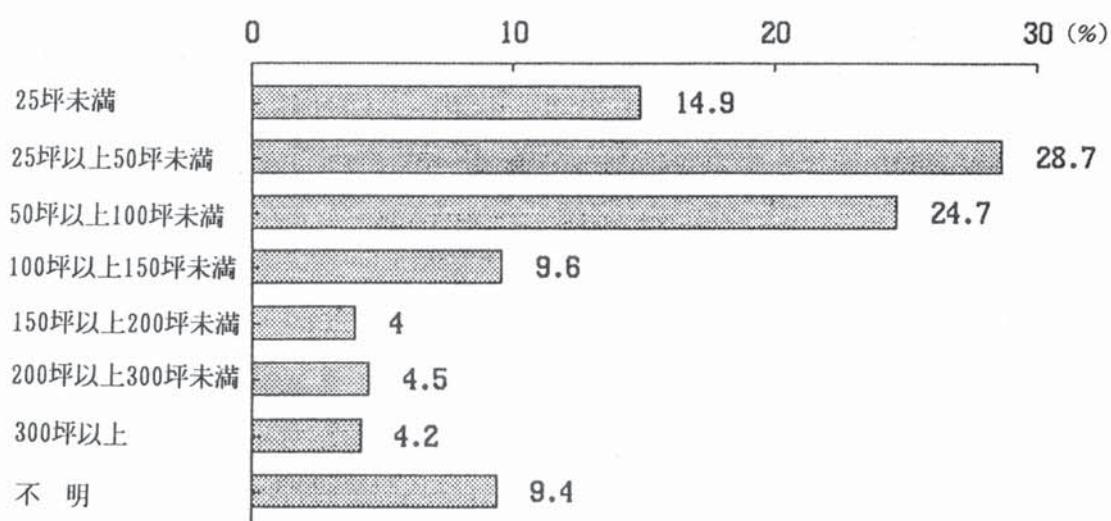


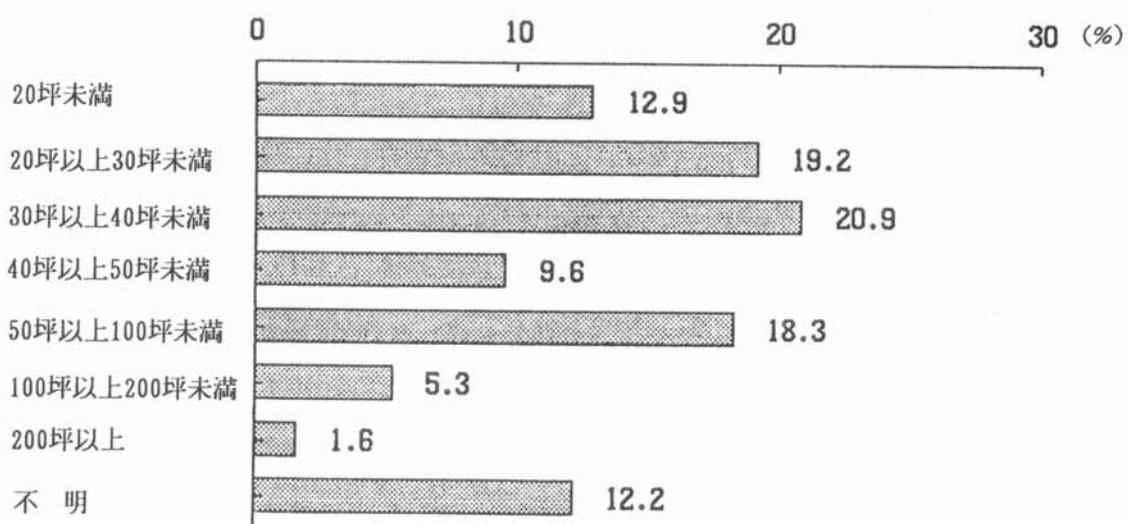
図6. 現住宅での居住歴



N = 449 図7. 住宅の建設時期



N = 449 図8. 敷地規模



N = 449 図9. 住居規模(建築面積)

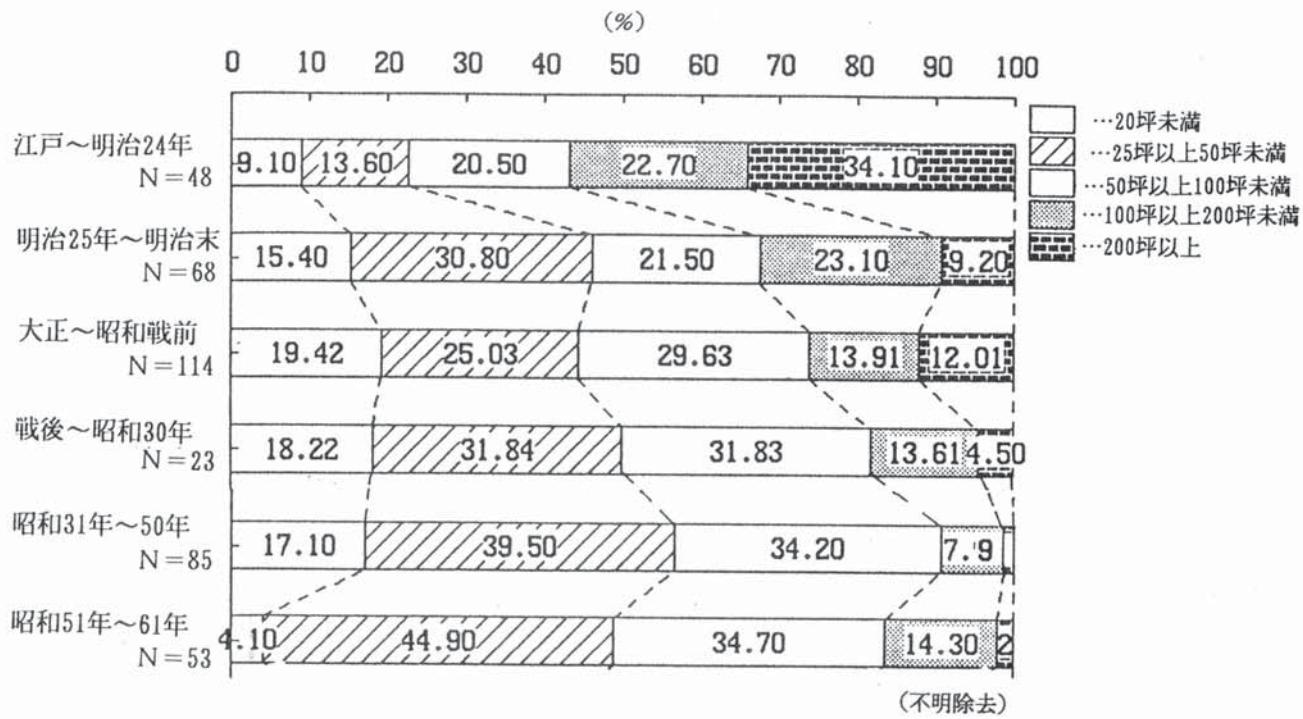


図10. 敷地の広さ－建設時期別－

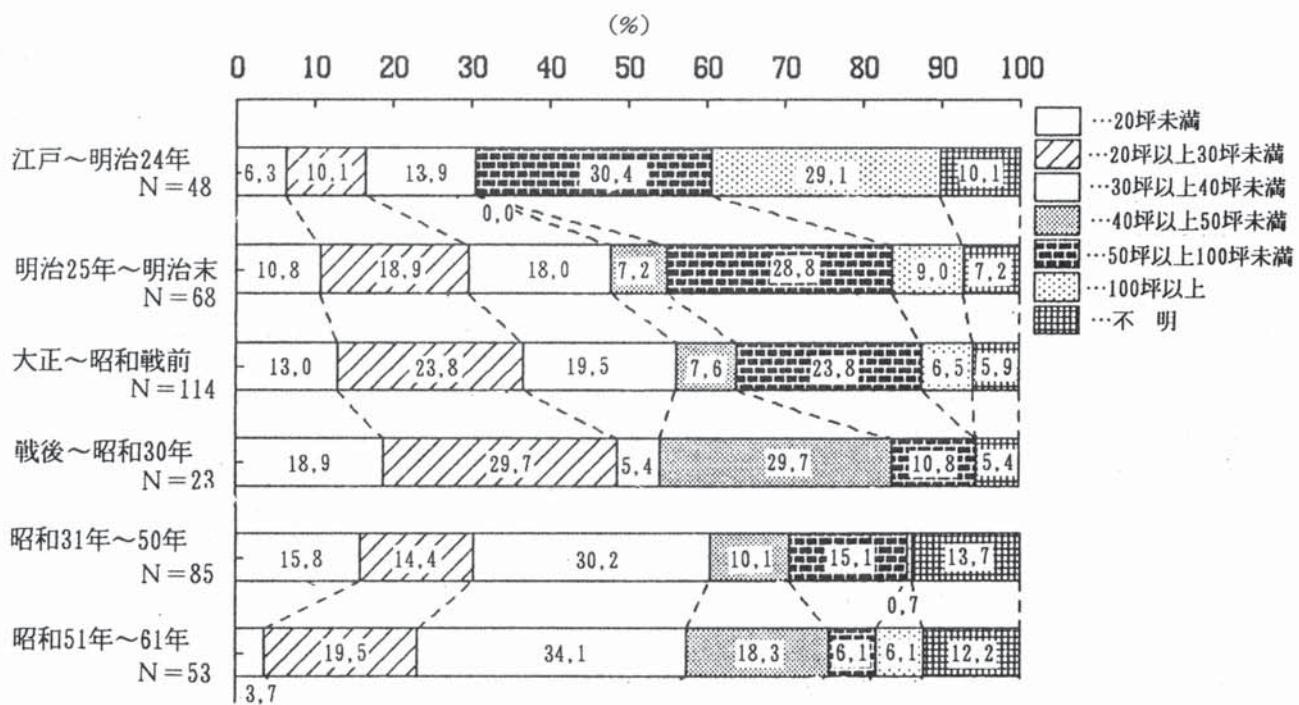


図11. 住宅面積－建設時期別－

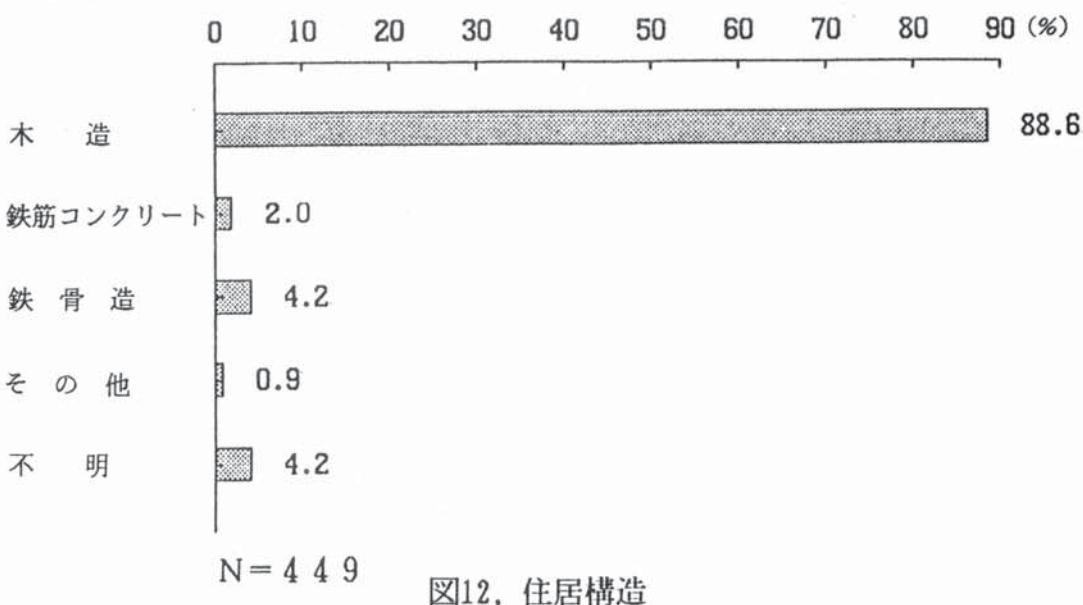


図12. 住居構造

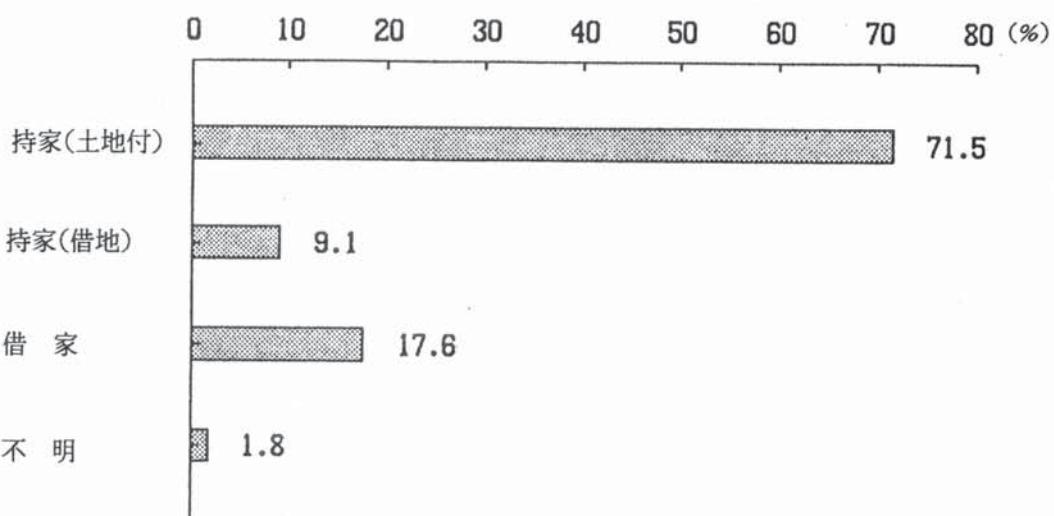


図13. 住居の所有形態

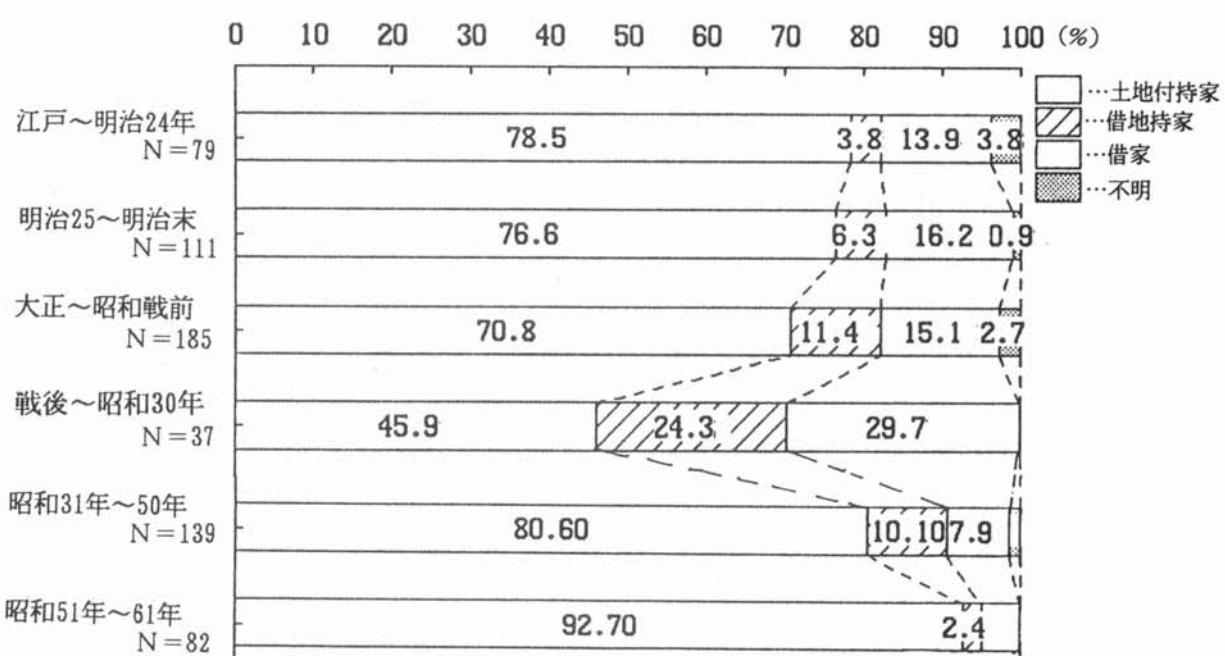


図14. 住宅の所有形態（建設時期別）

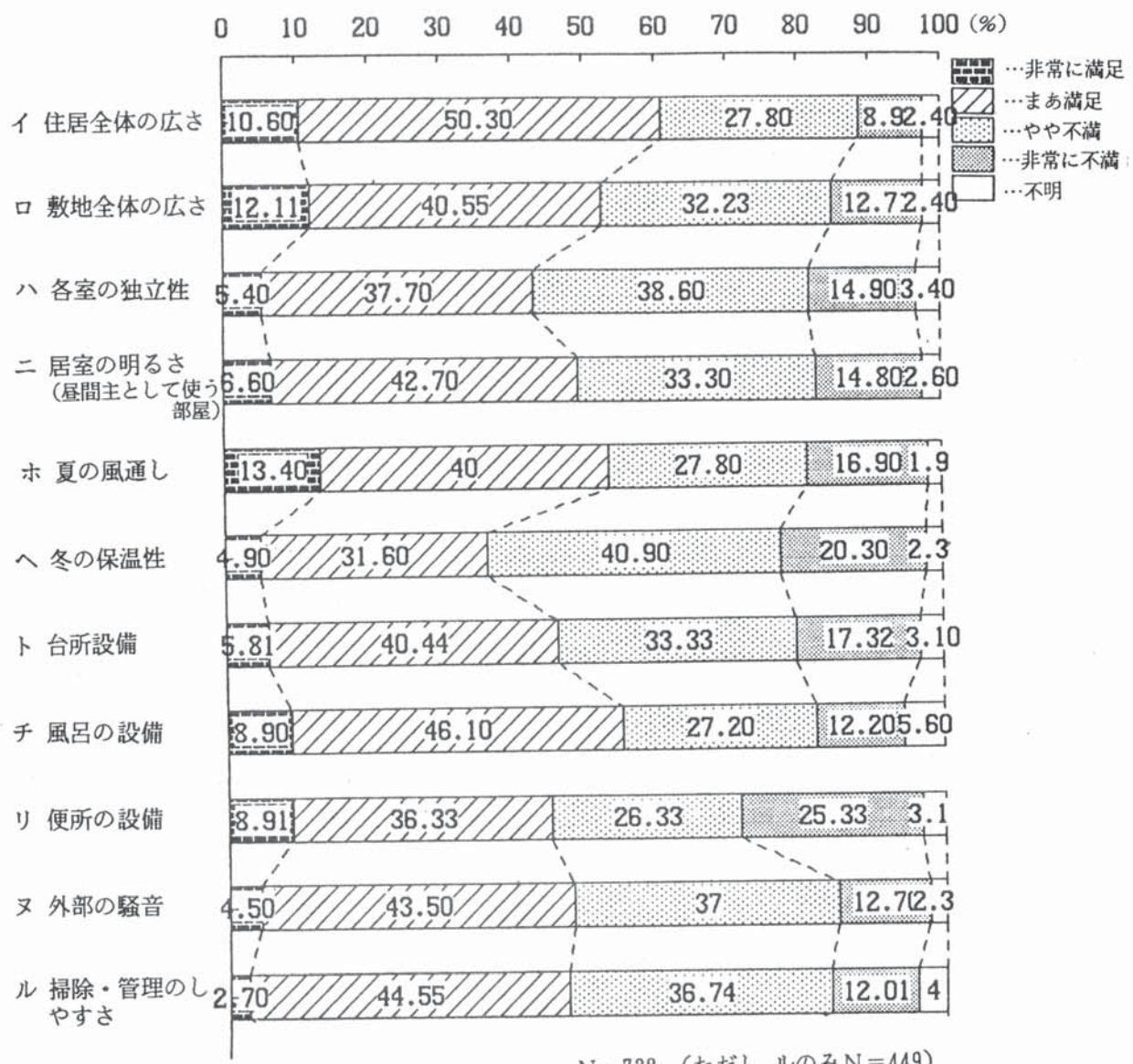


図15. 住宅の住み心地(全体)

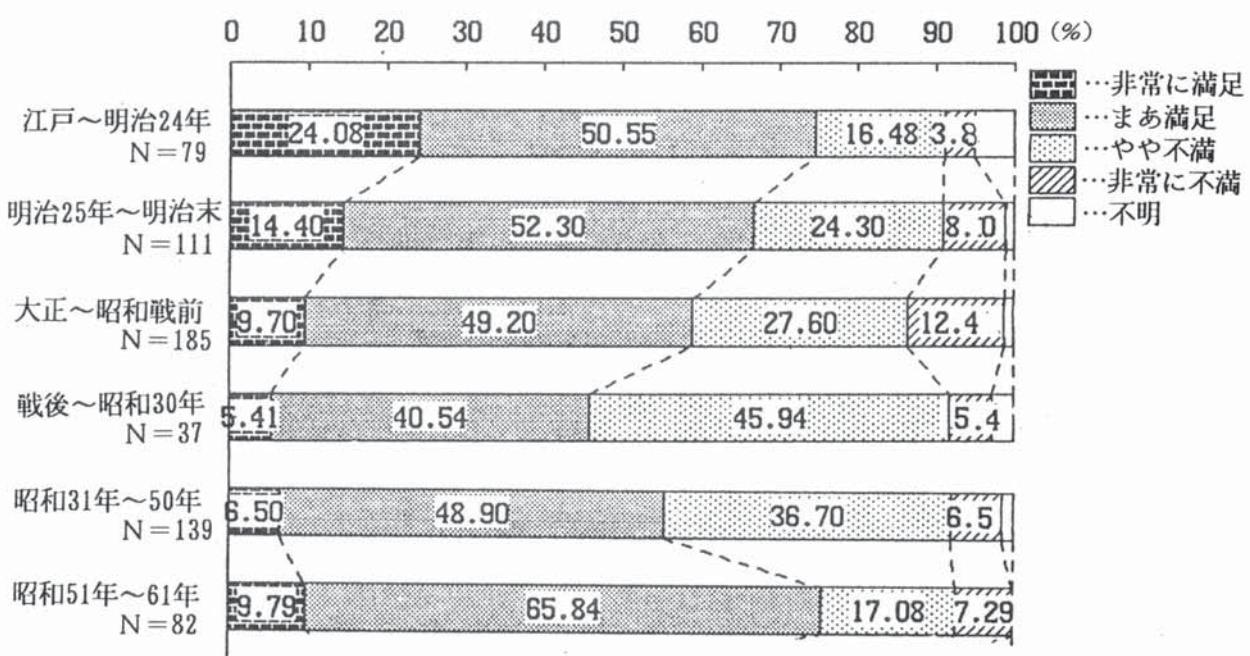


図16. 住宅の住み心地(住居の広さ) - 建設時期別 -

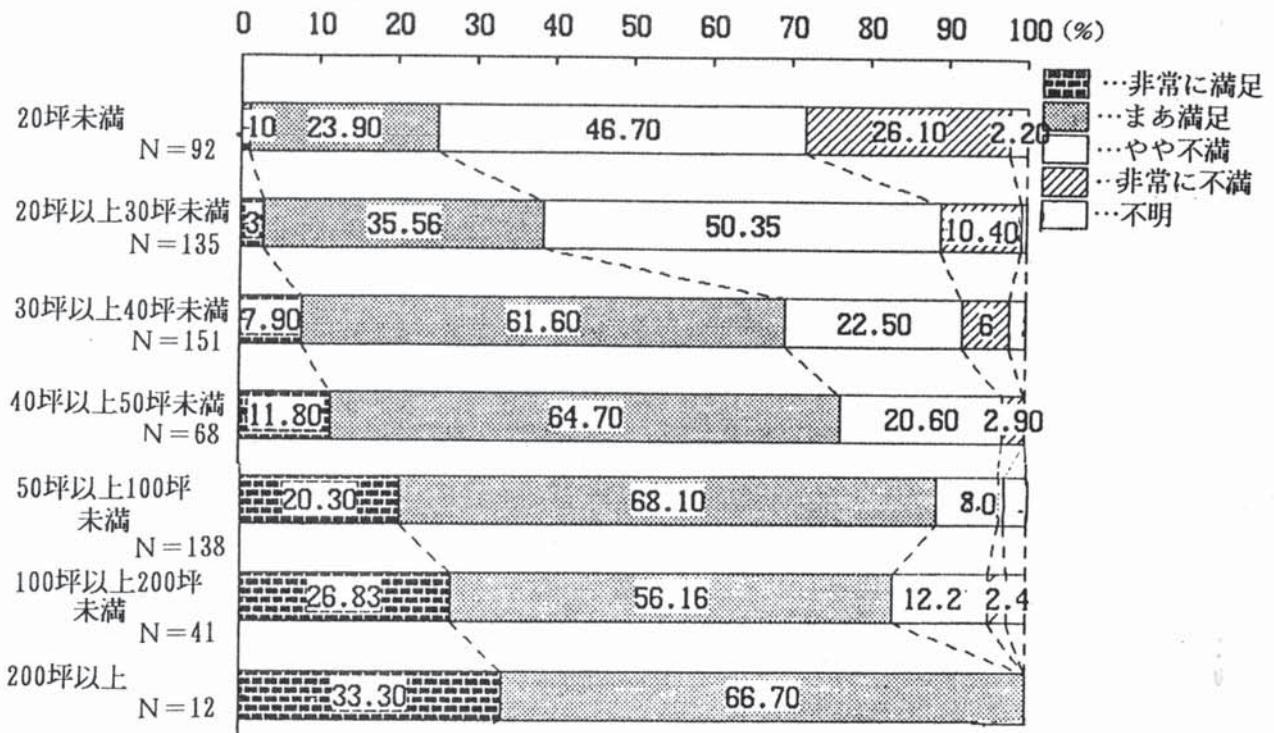


図17. 住宅の住み心地(住宅の広さ)－住居面積別－

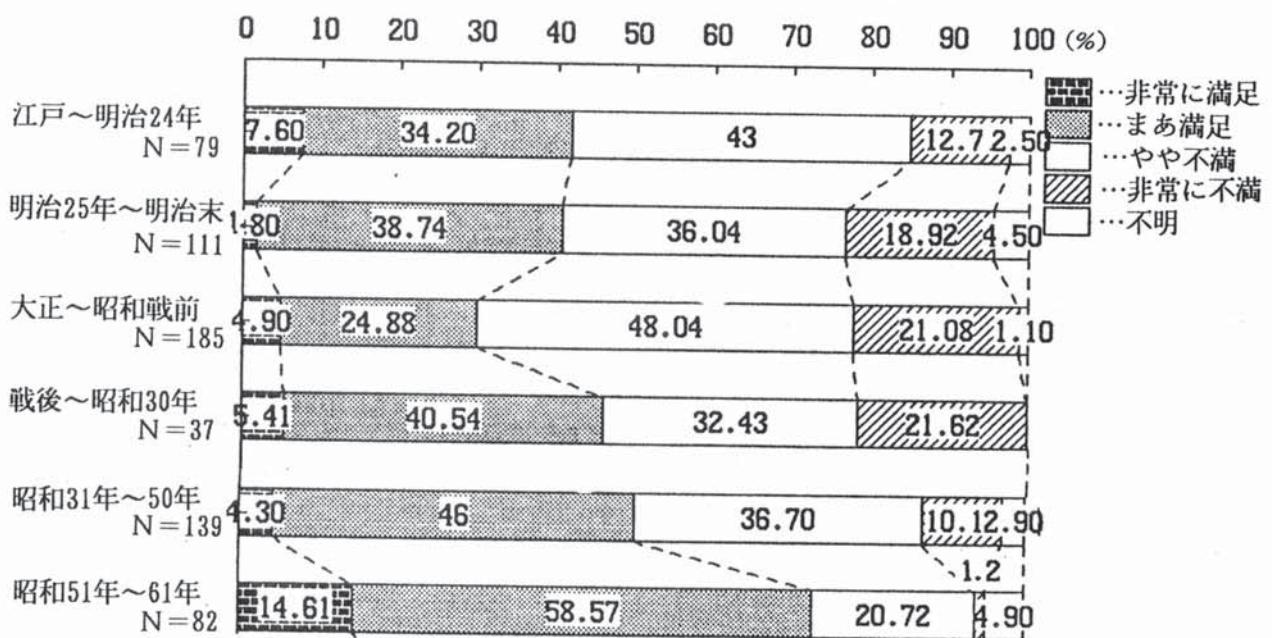


図18. 住宅の住み心地(各室の独立性)－建設時期別－

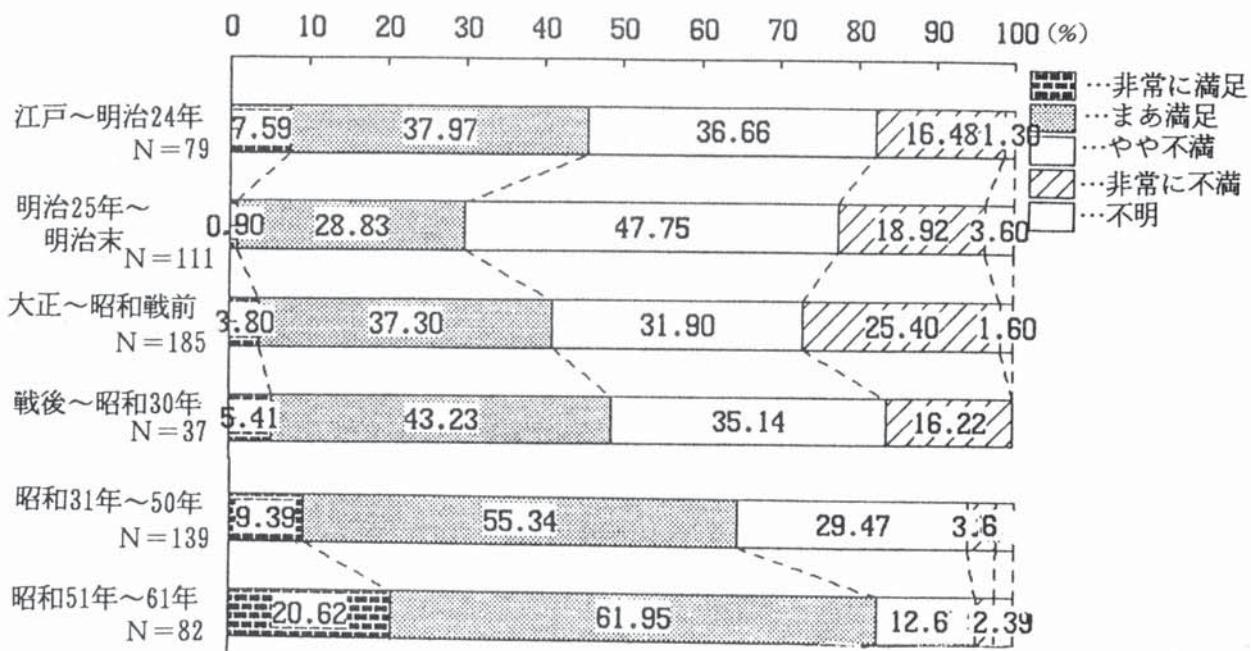


図19. 住宅の住み心地(居室の明るさ)－建設時期別－

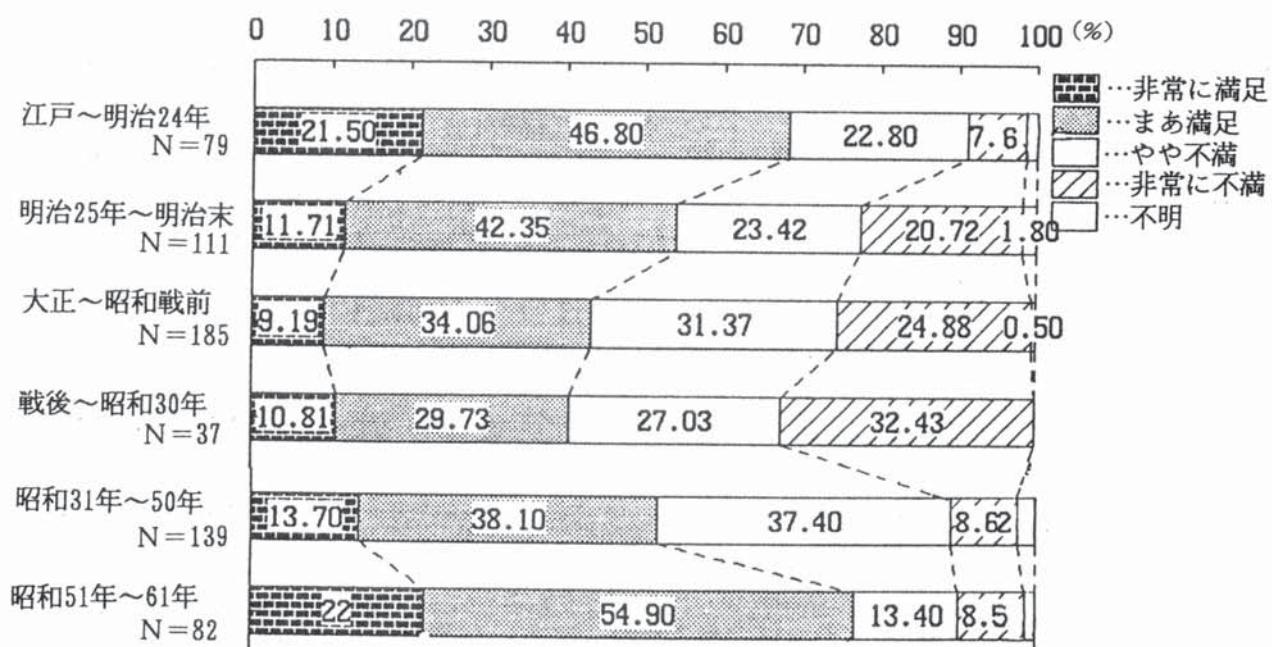


図20. 住宅の住み心地(夏の風通し)－建設時期別－

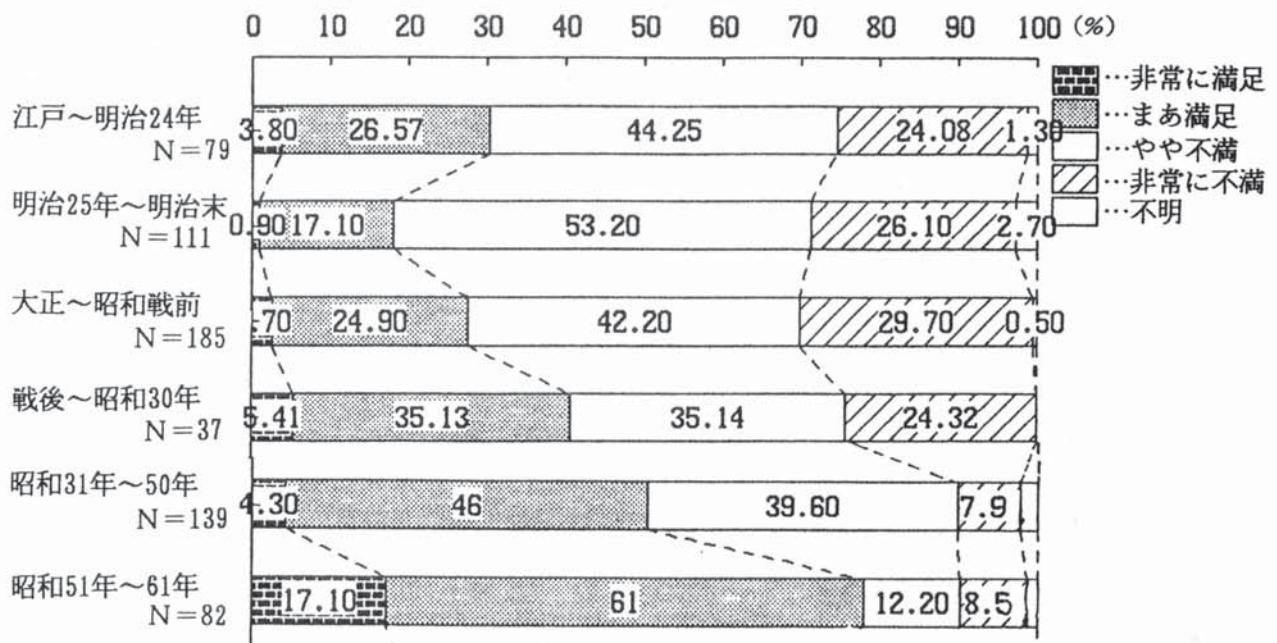


図21. 住宅の住み心地(冬の保温性)－建設時期別－

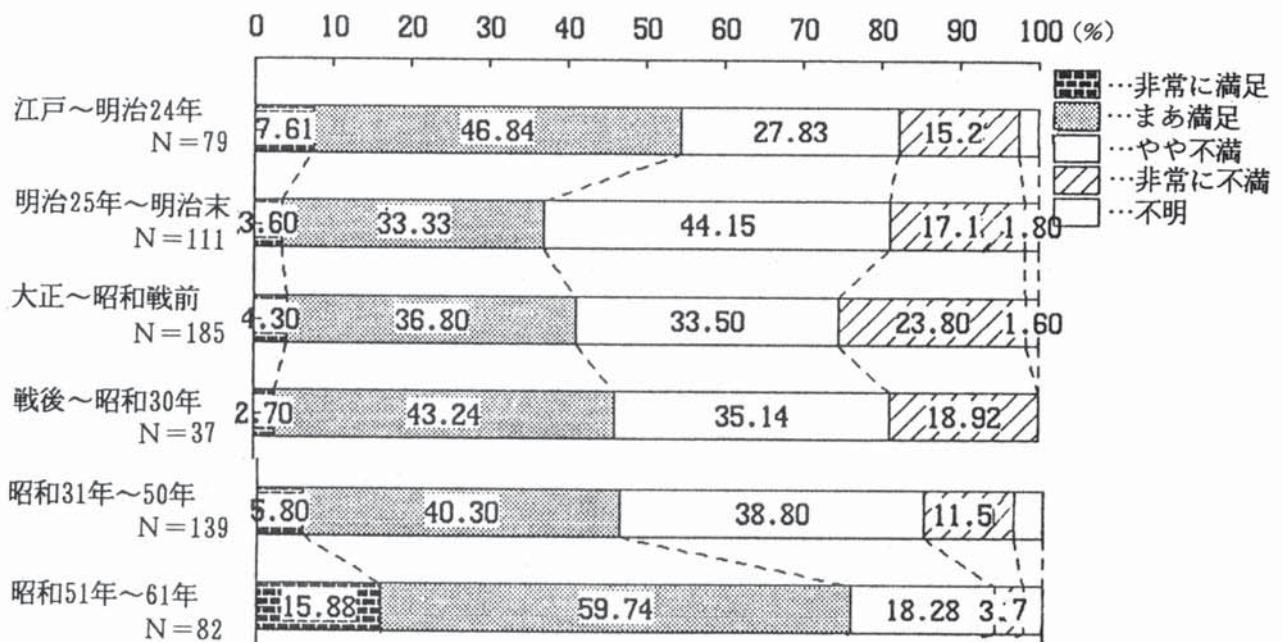


図22. 住宅の住み心地(台所設備)－建設時期別－

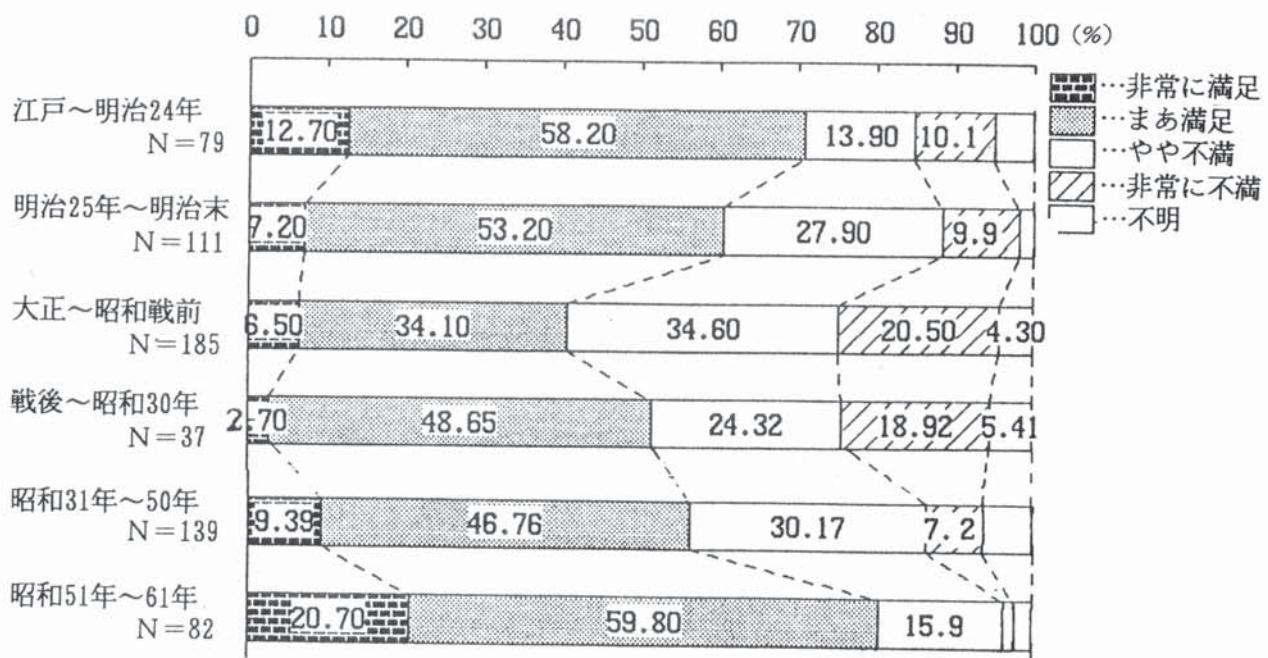


図23. 住宅の住み心地(風呂の設備)－建設時期別－

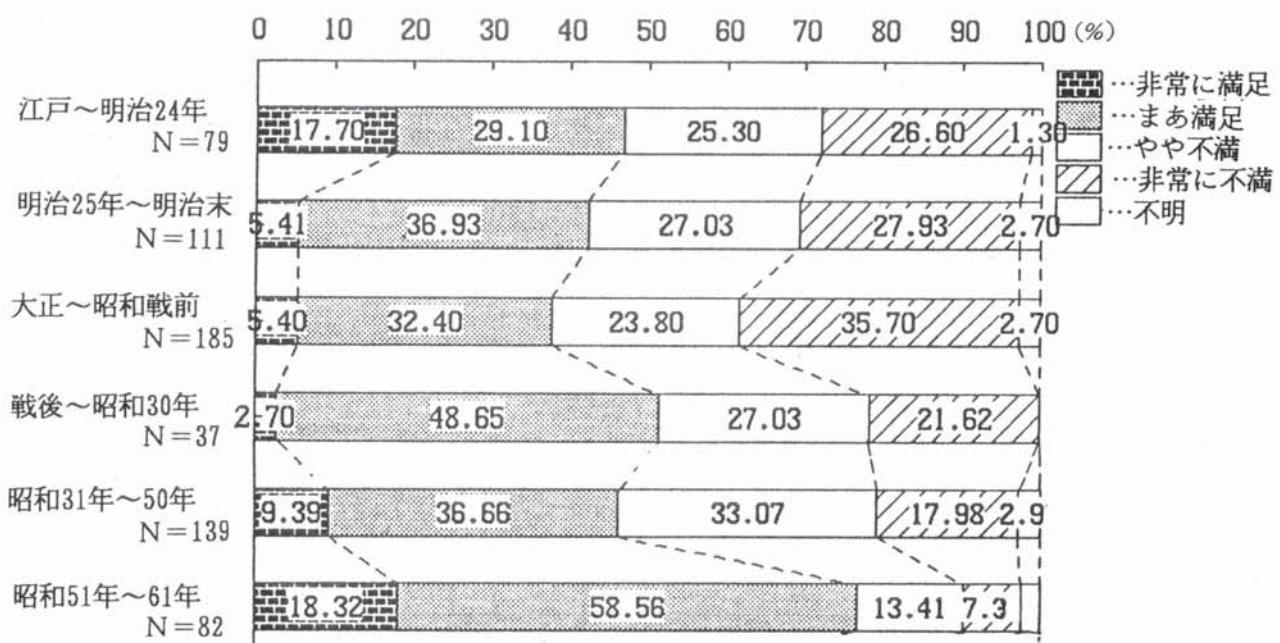


図24. 住宅の住み心地(便所の設備)－建設時期別－

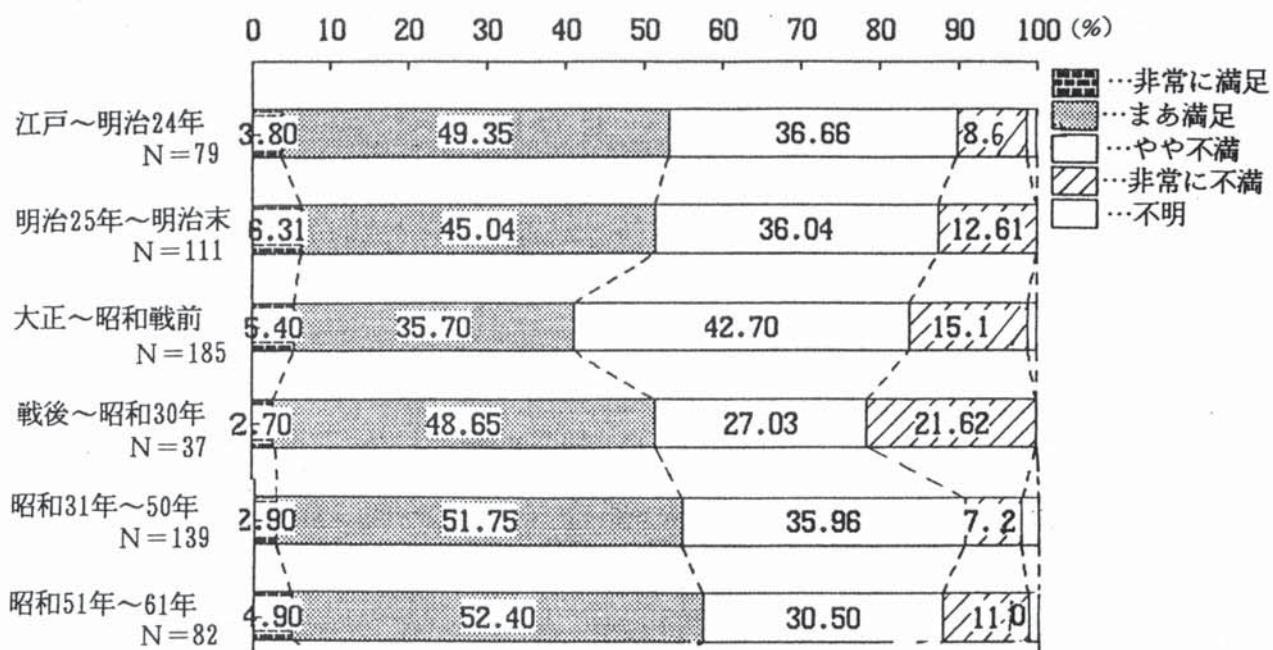


図25. 住宅の住み心地(外部の騒音)－建設時期別－

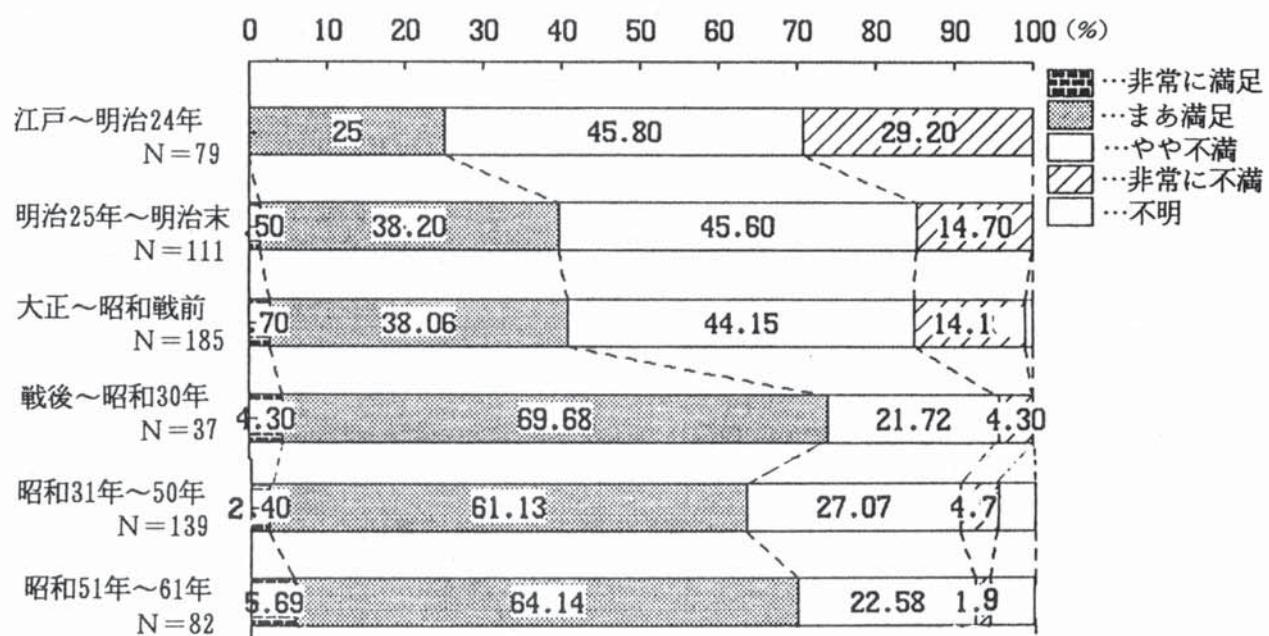


図26. 住宅の住み心地(掃除・管理のしやすさ)－建設時期別－

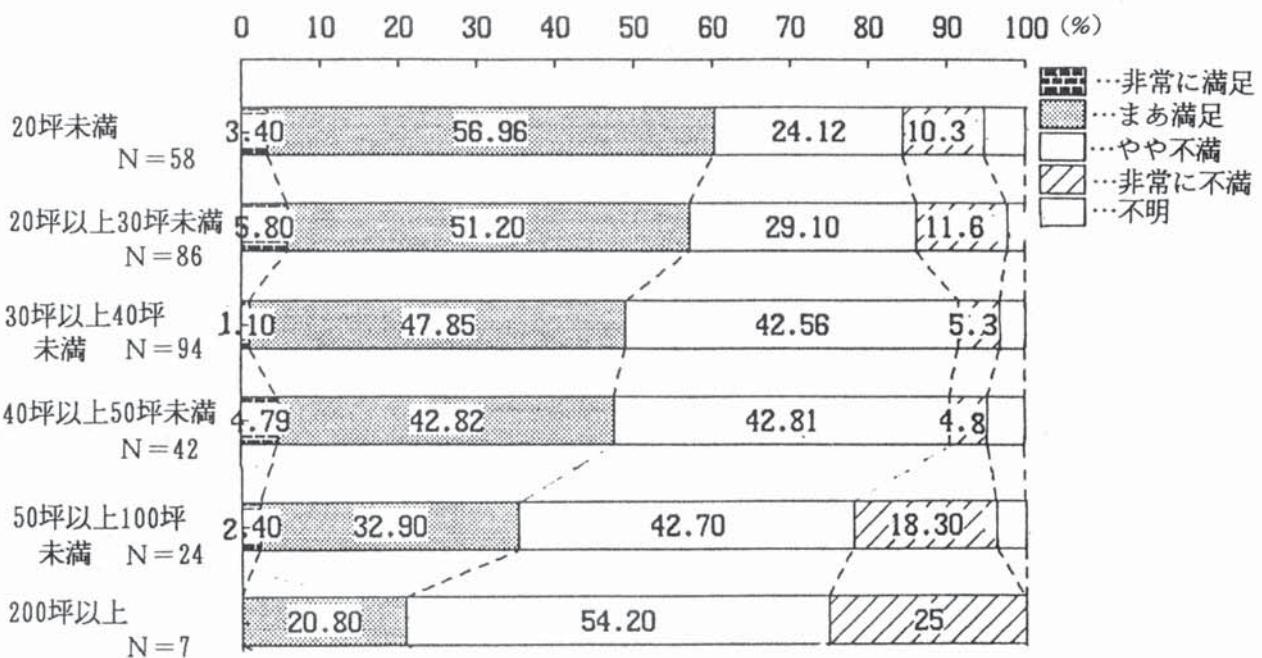
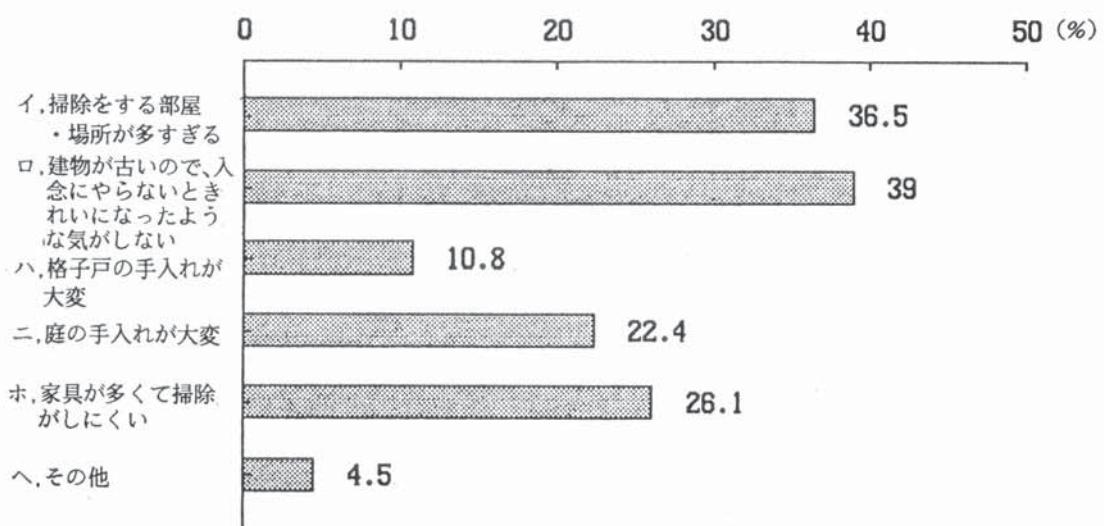
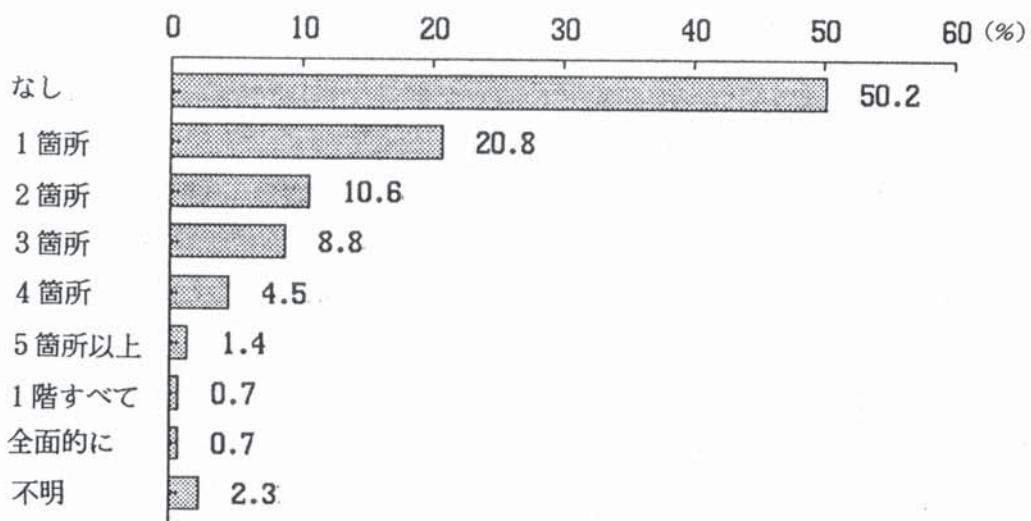


図27. 住宅の住み心地(掃除・管理のしやすさ)
- 住居面積別 -



N = 241 図28. 掃除に手間どる理由



N = 442 図29. 改造・増築箇所(数)

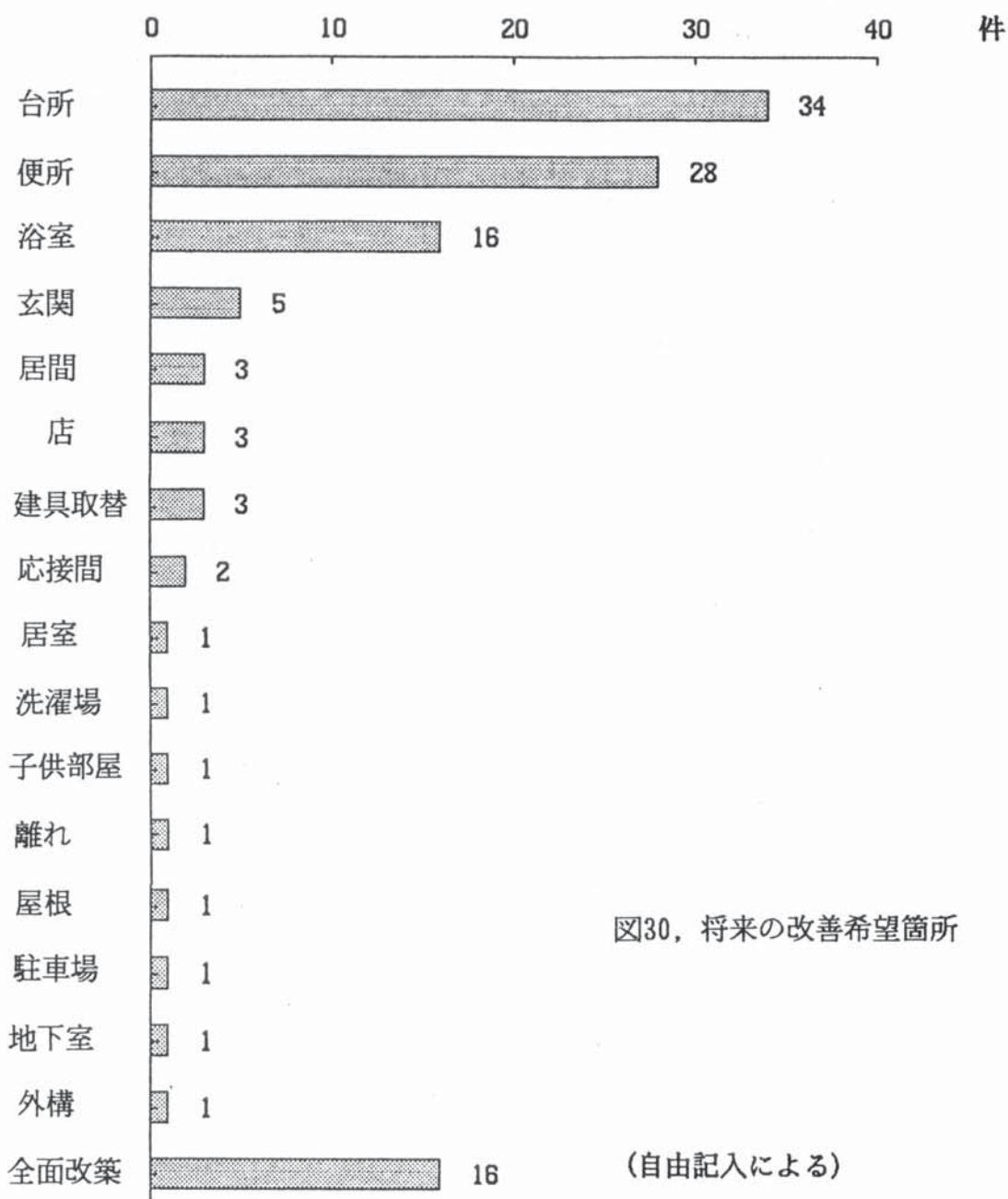


図30. 将来の改善希望箇所

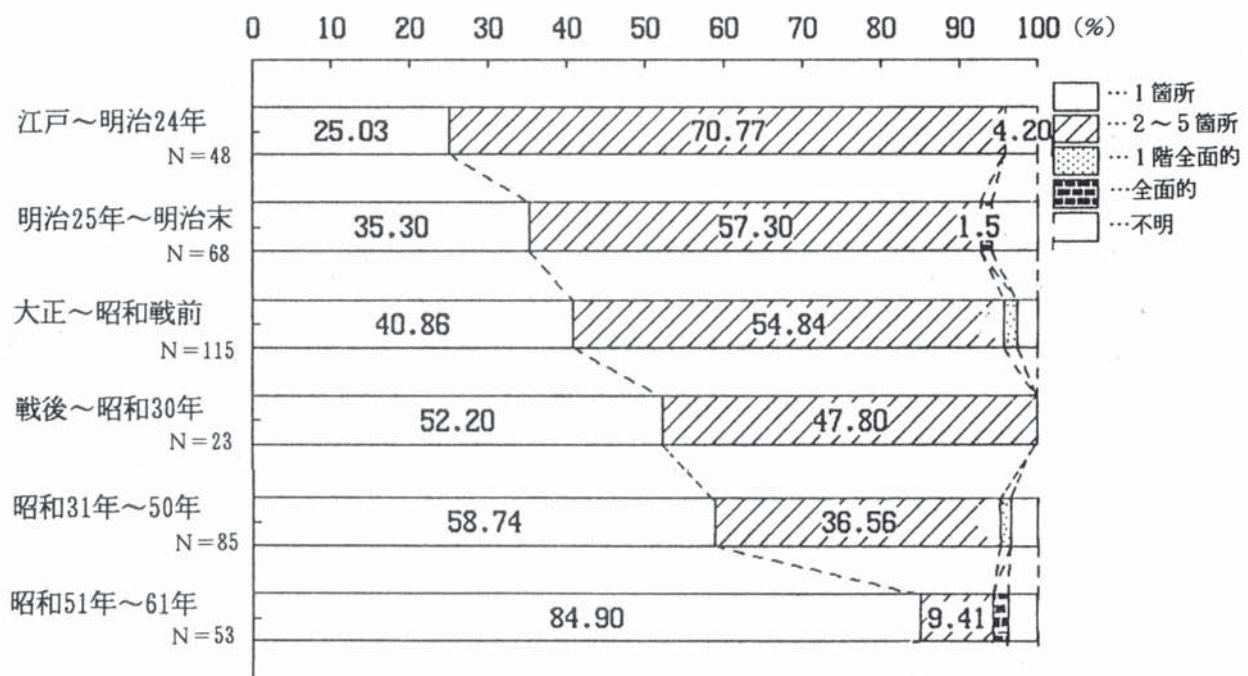
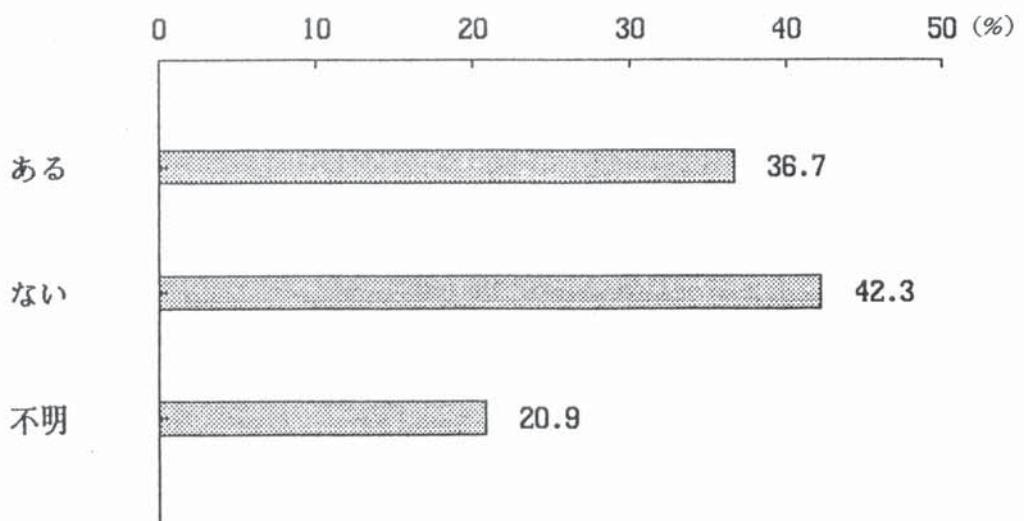


図31. 改造・増築箇所数(建設時期別)



N = 449 図32、将来の改善希望の有無

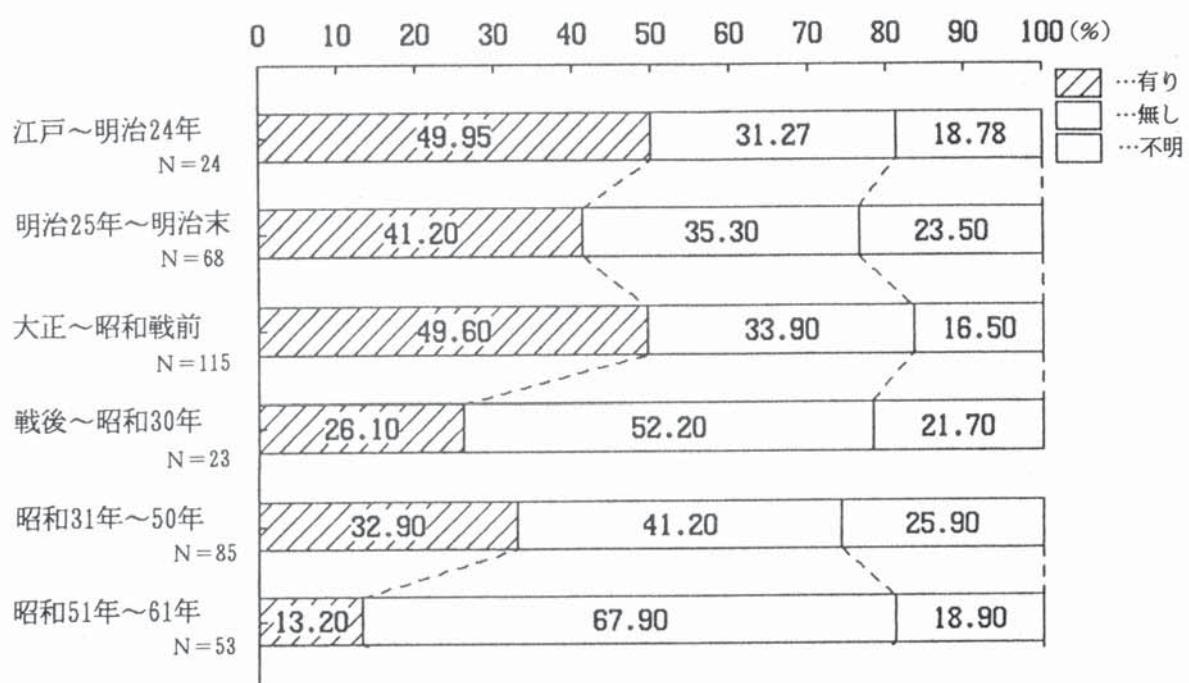
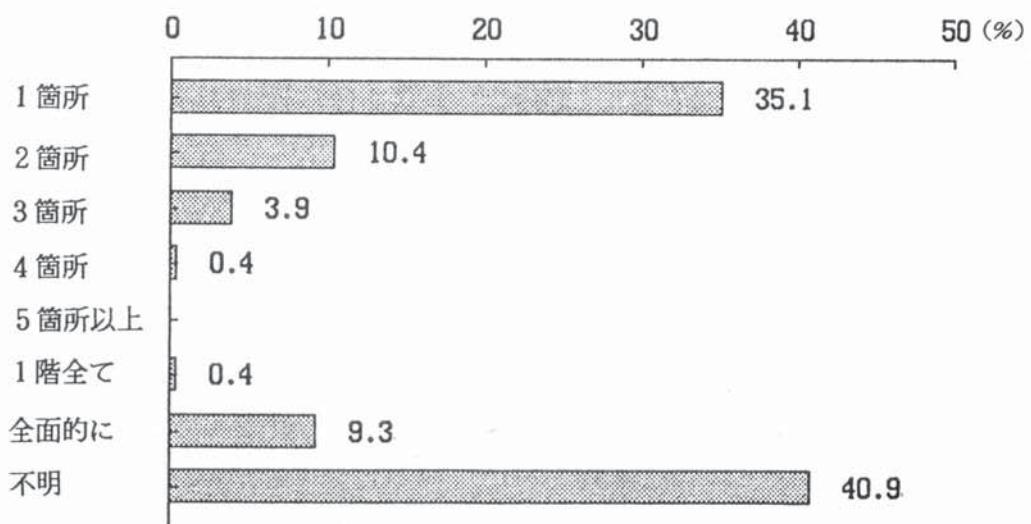


図33、将来の改善希望の有無(建設時期別)



N = 259 図34、改善希望箇所数

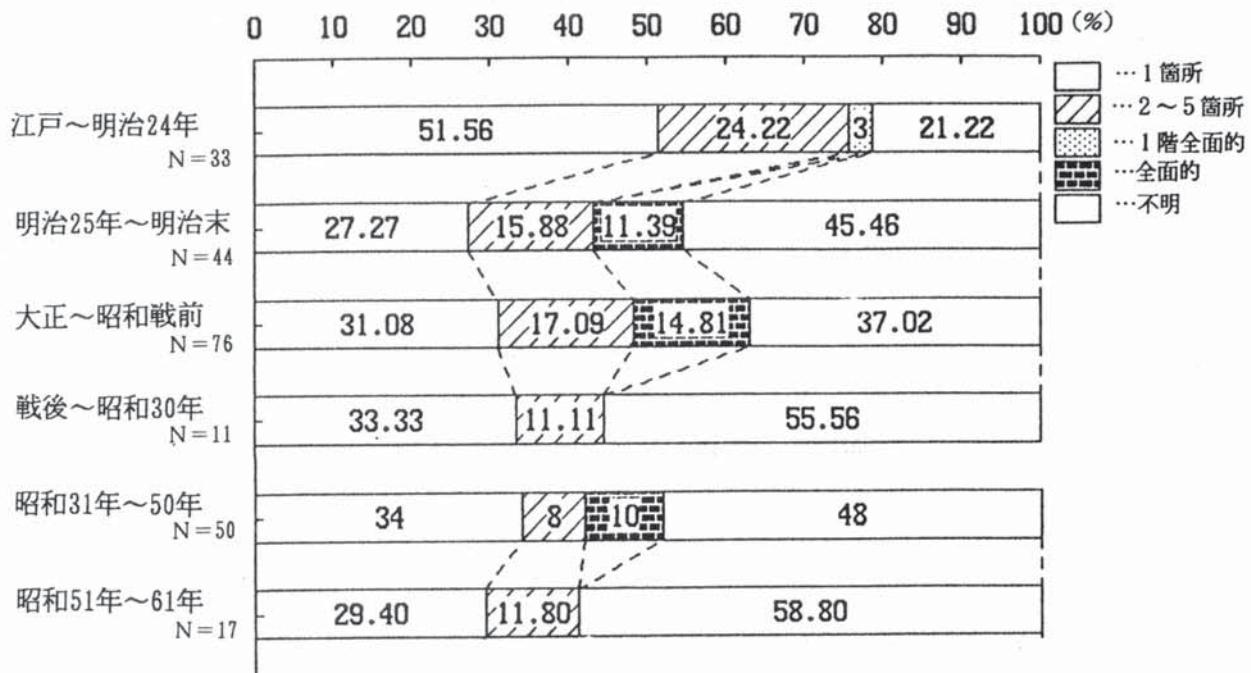


図35、将来の改善希望箇所数(建設時期別)

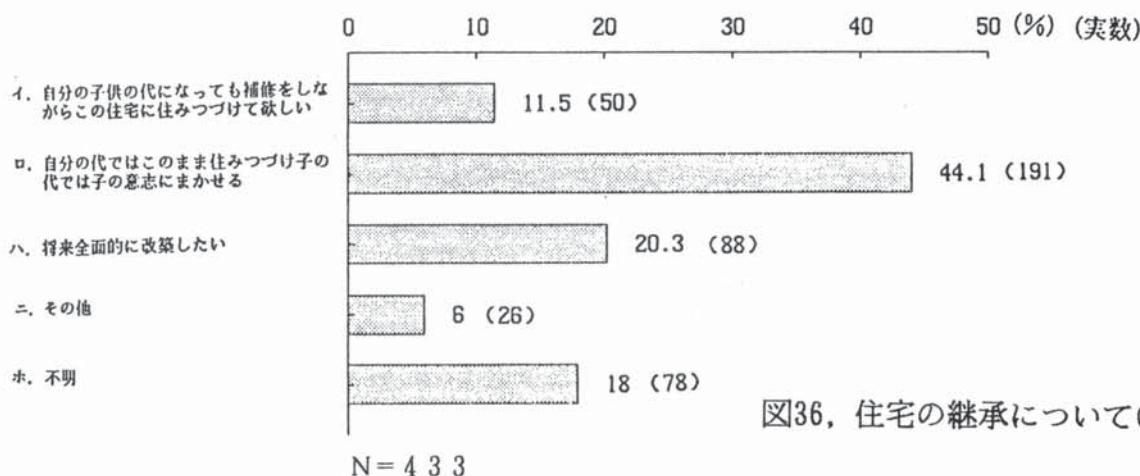


図36、住宅の継承について(全体)

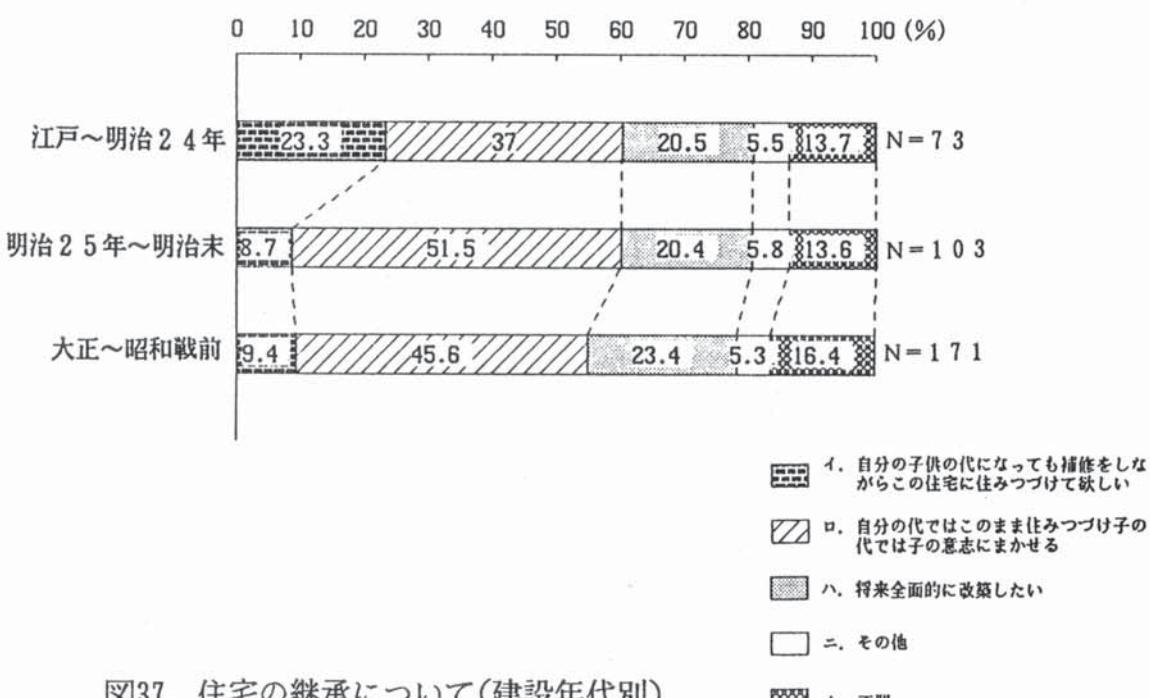


図37、住宅の継承について(建設年代別)

ホ. 不明

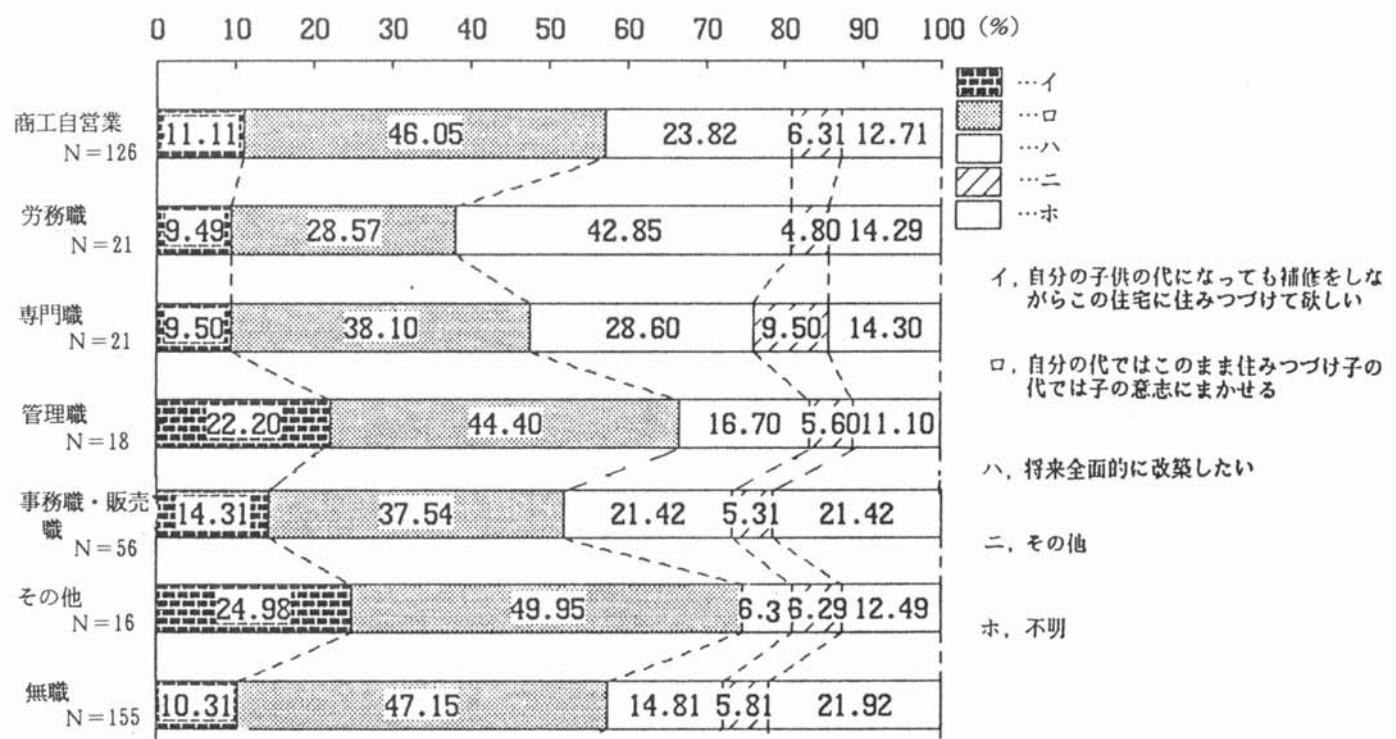
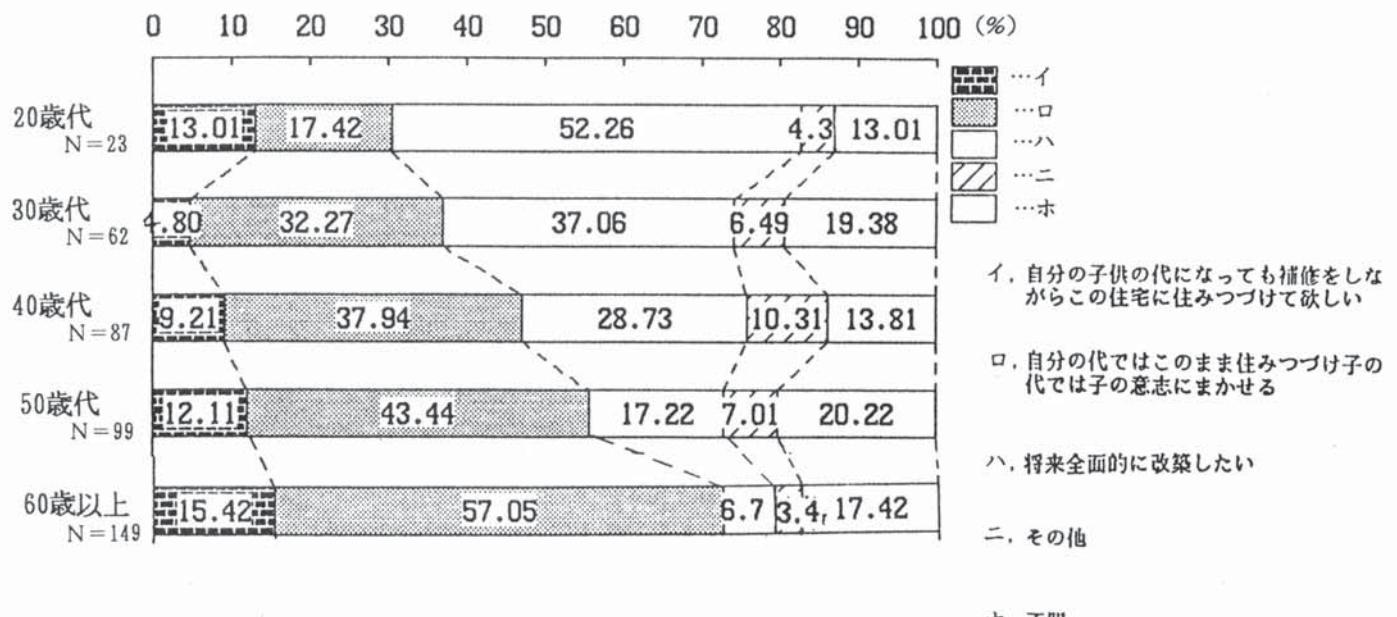
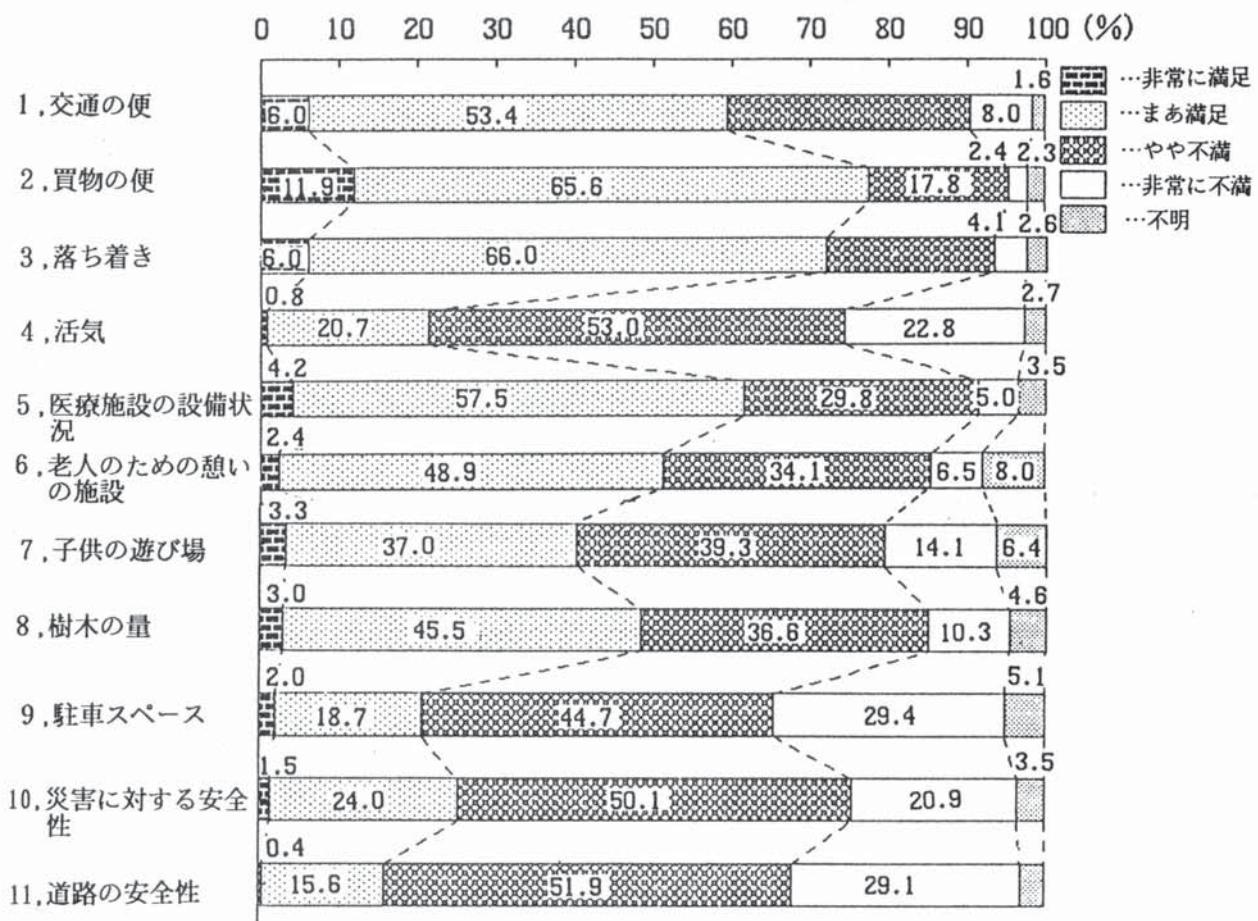


図38. 住宅の継承について－職業別－



N = 738

図39、町の住み心地(全体)

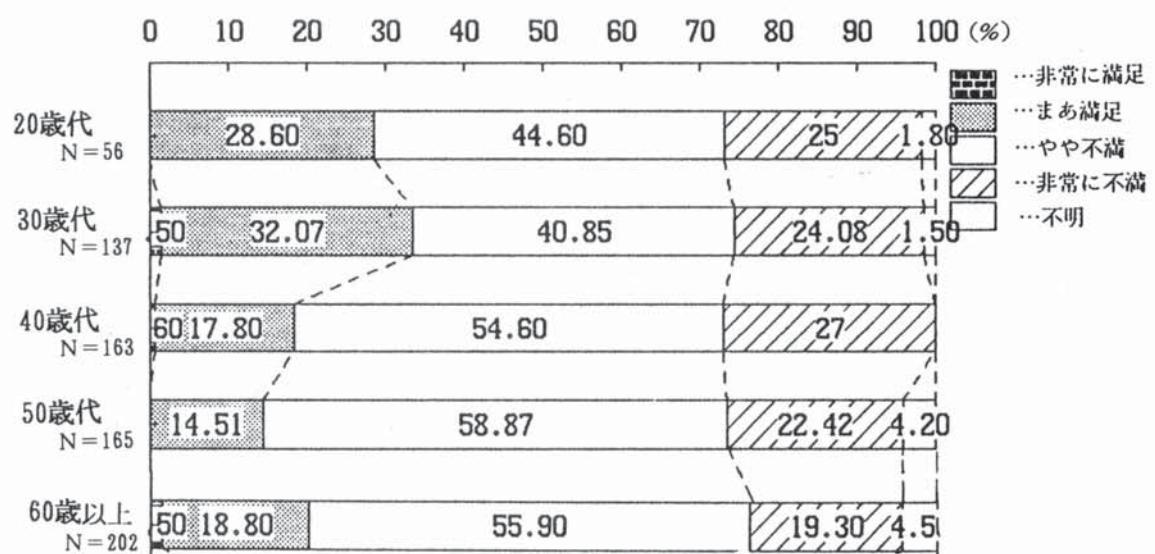
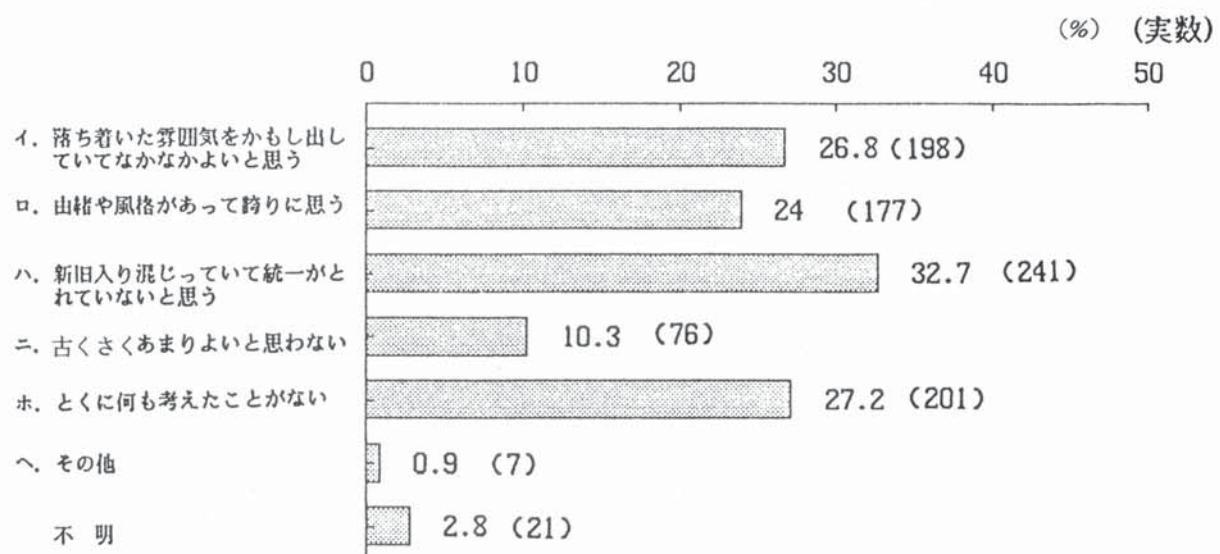
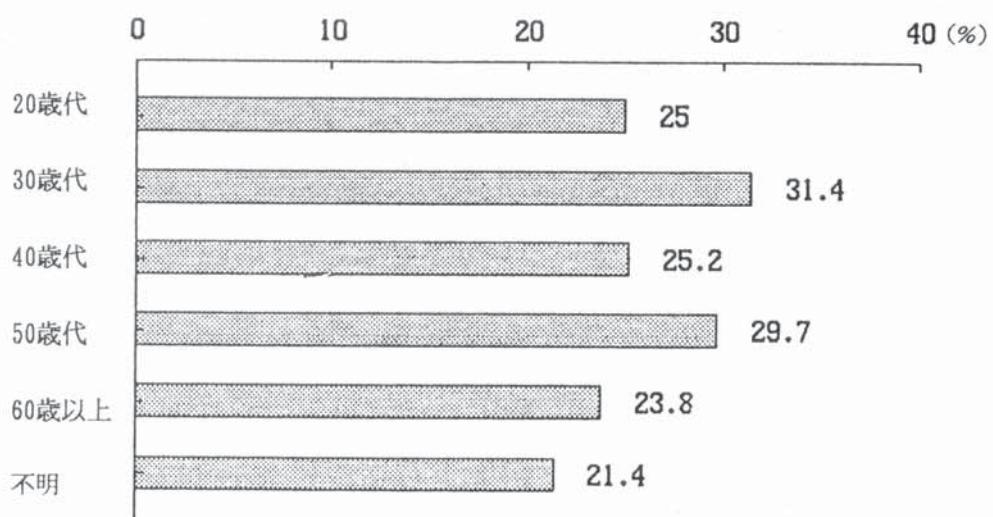


図40、町の住み心地(活気)－年齢別－

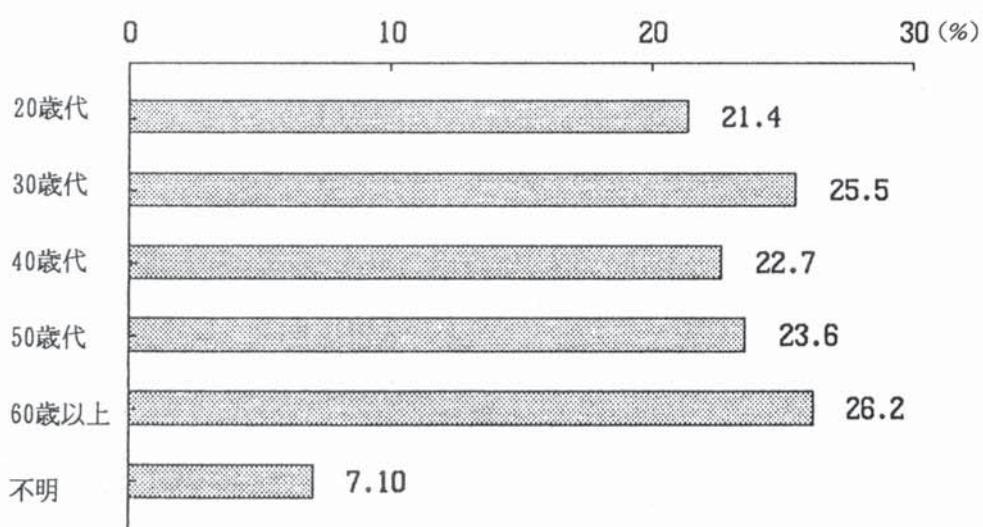


N = 738 (複数回答)

図41. 街道沿の住宅について(全体)



イ.「落ち着いた雰囲気をかもし出していてなかなかよいと思う」



ロ.「由緒や風格があって誇りに思う」

図42. 街道沿いの住宅について(年齢別) - (1)

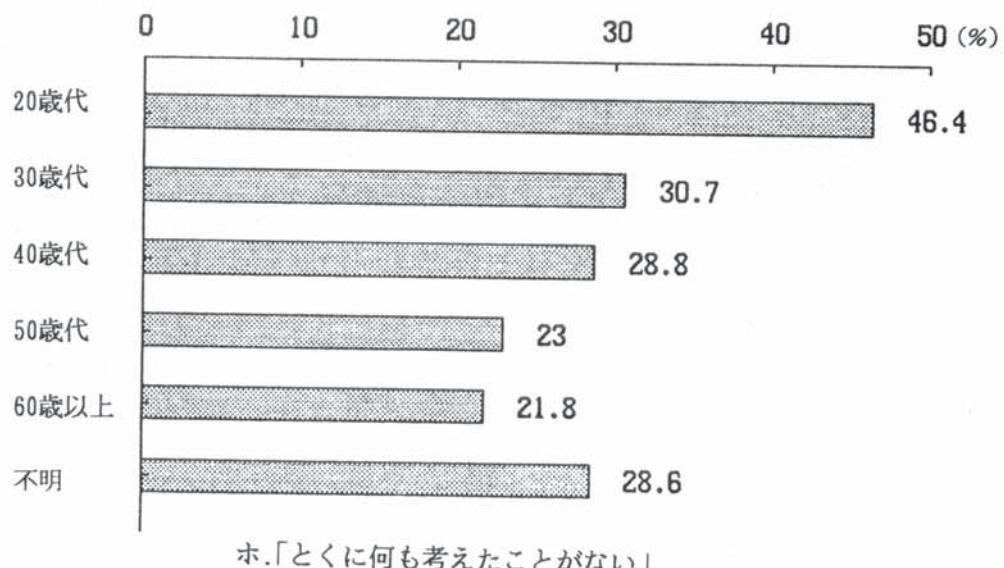
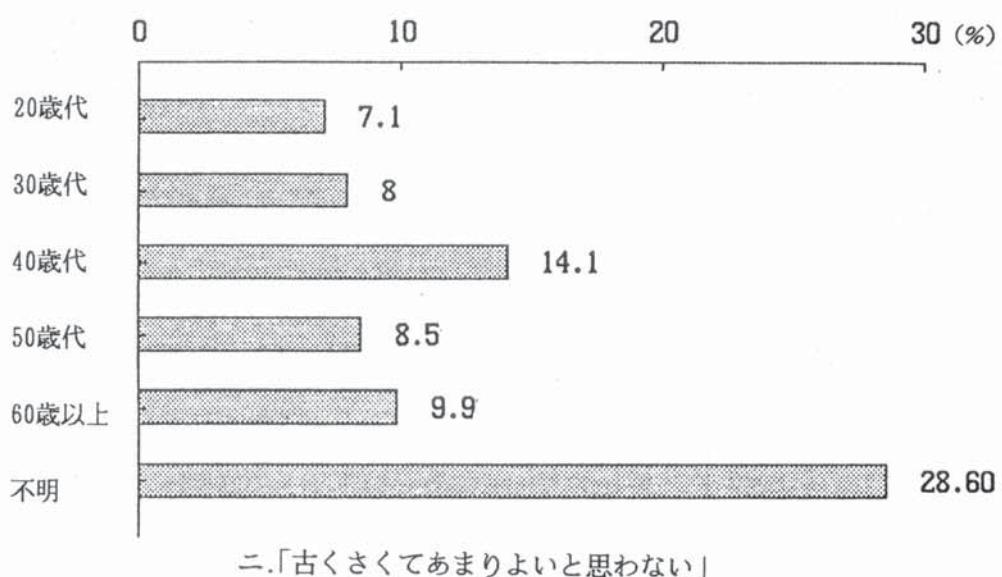
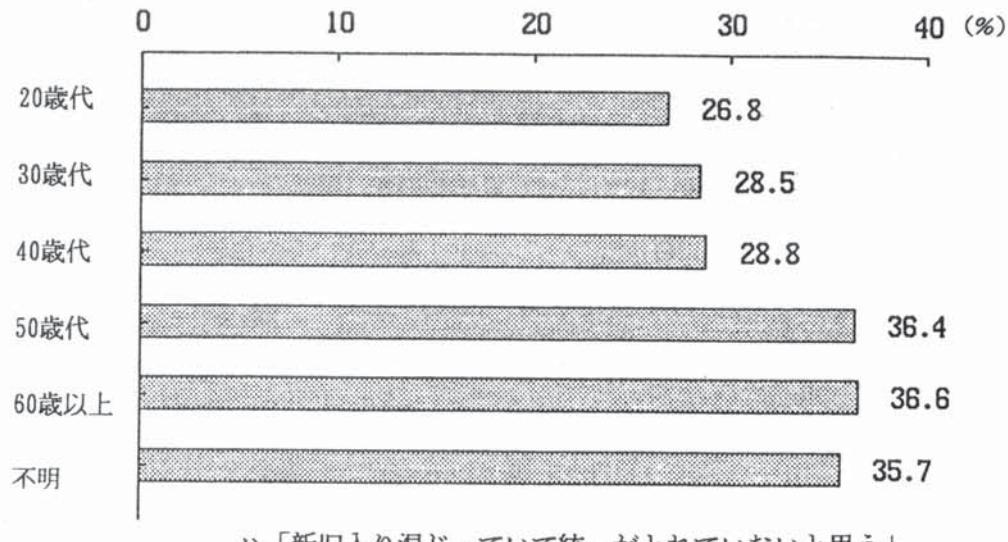
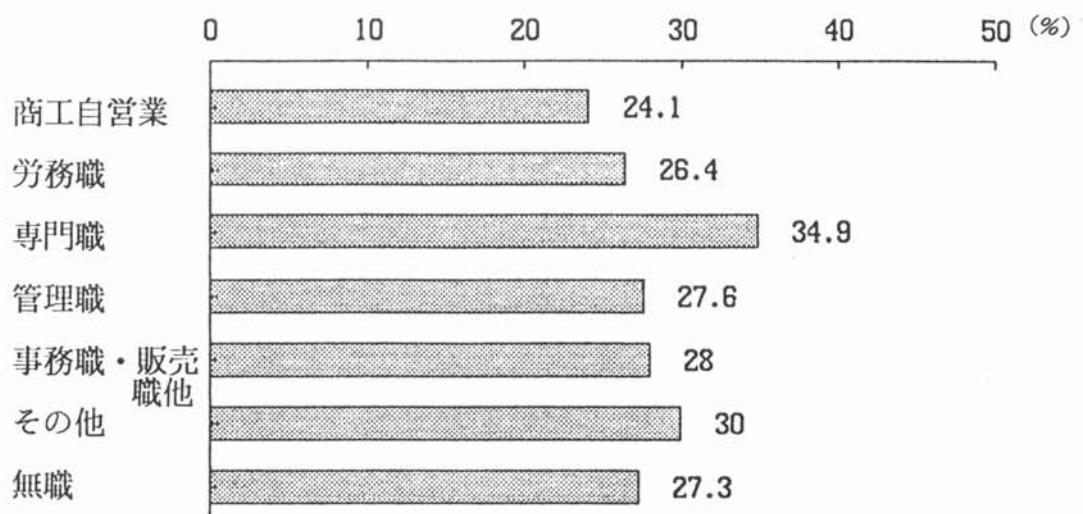
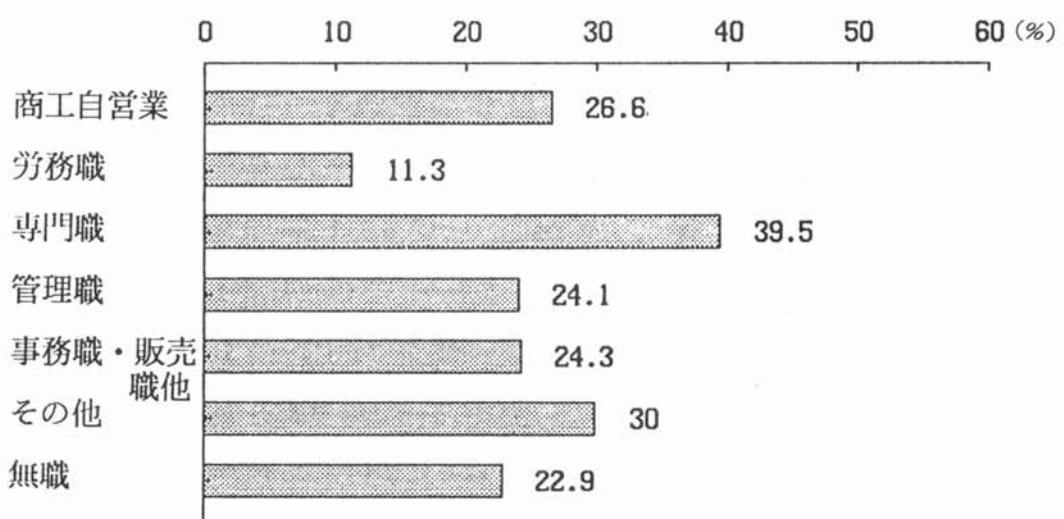


図43. 街道沿いの住宅について(年齢別)－(2)

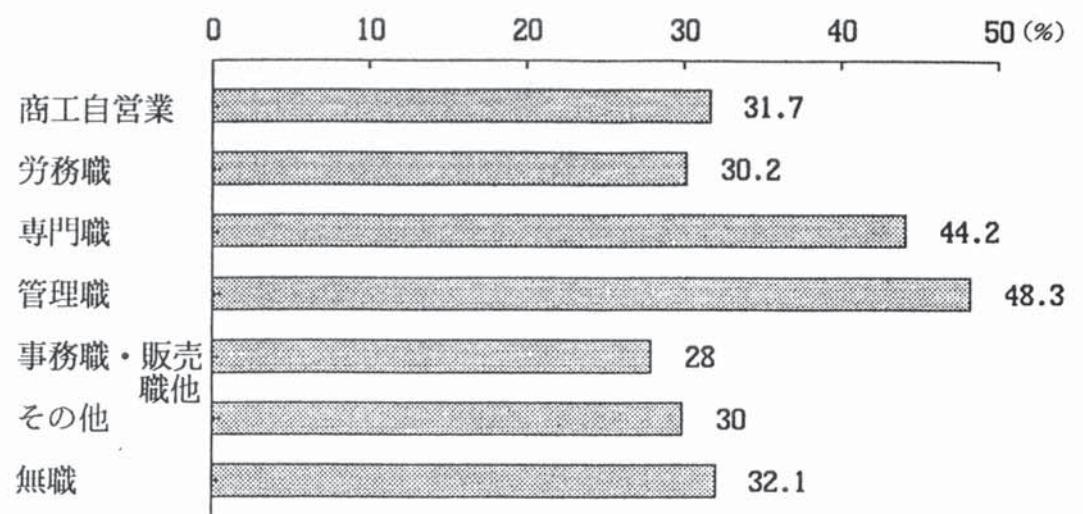


イ.「落ち着いた雰囲気をかもし出していてなかなかよいと思う」

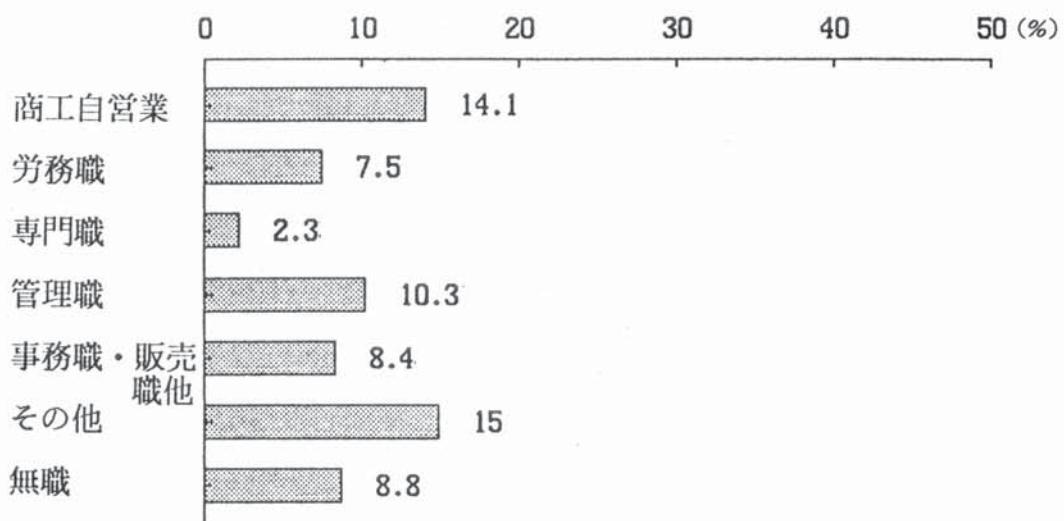


ロ.「由緒や風格があって誇りに思う」

図44. 街道沿いの住宅について(職業別)－(1)

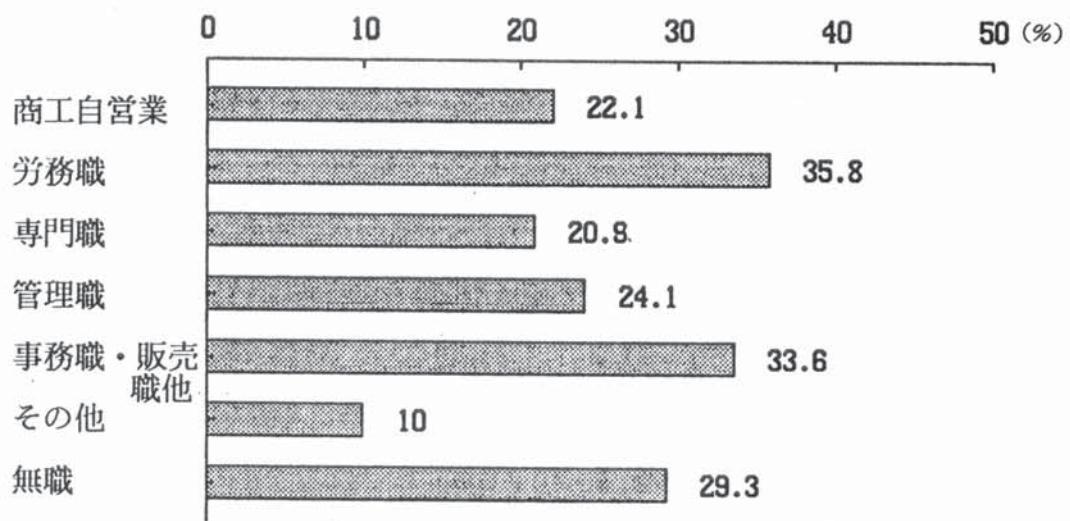


ハ.「新旧入り混じっていて統一がとれていないと思う」



ニ.「古くさくてあまりよいと思わない」

図45. 街道沿いの住宅について(職業別)－(2)



ホ.「とくに何も考えたことがない」

図46. 街道沿いの住宅について(職業別)－(3)

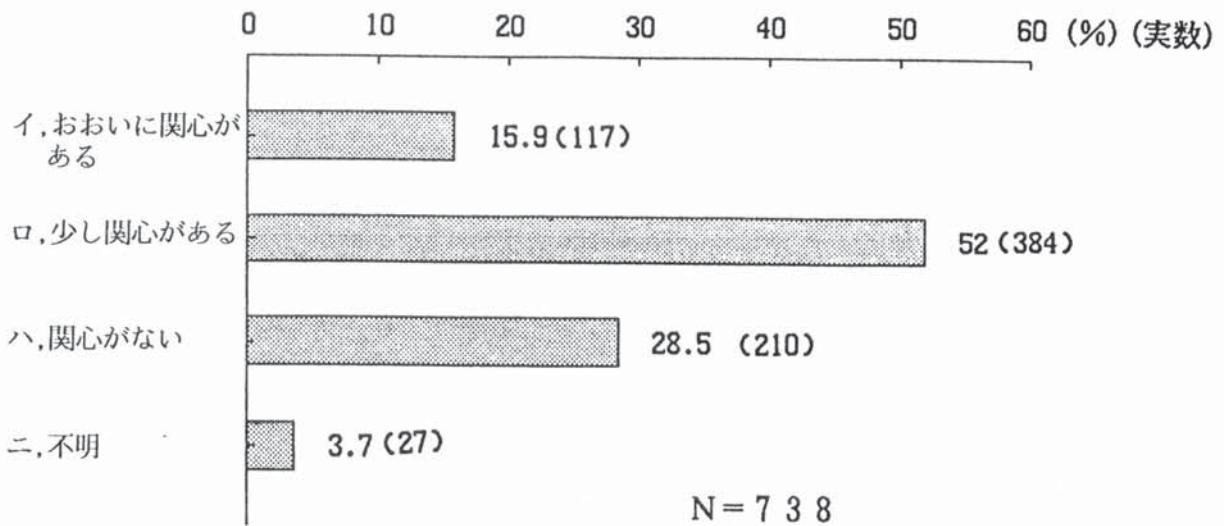


図47. 町並み保存について(全体)

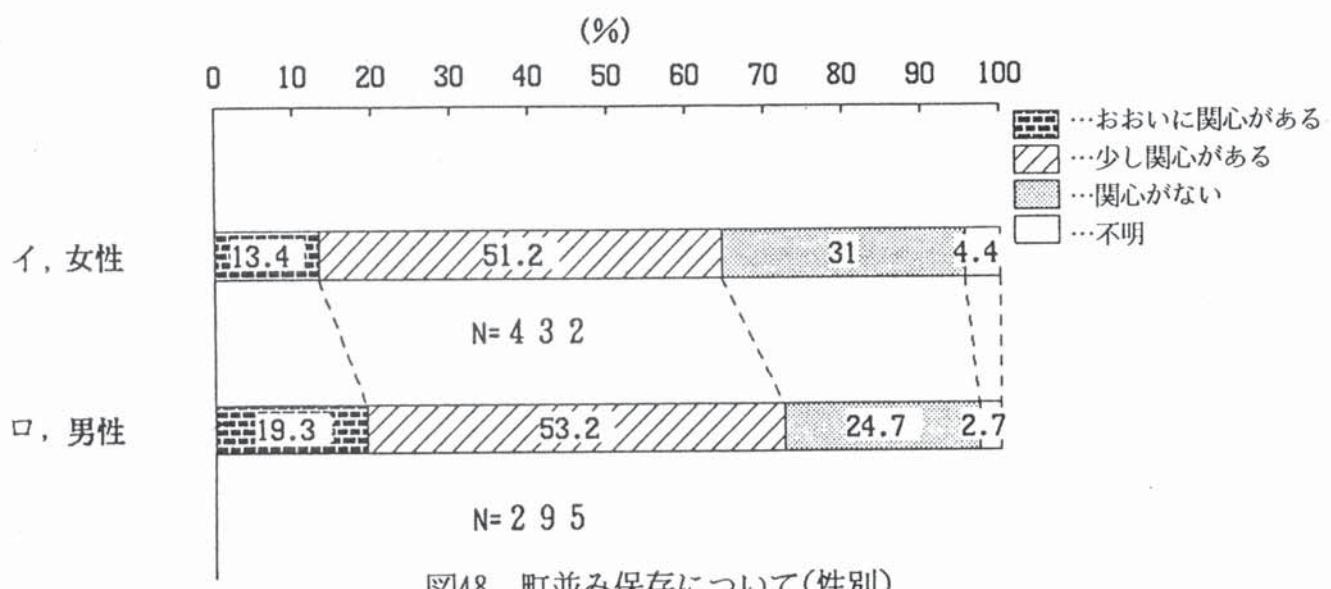


図48. 町並み保存について(性別)

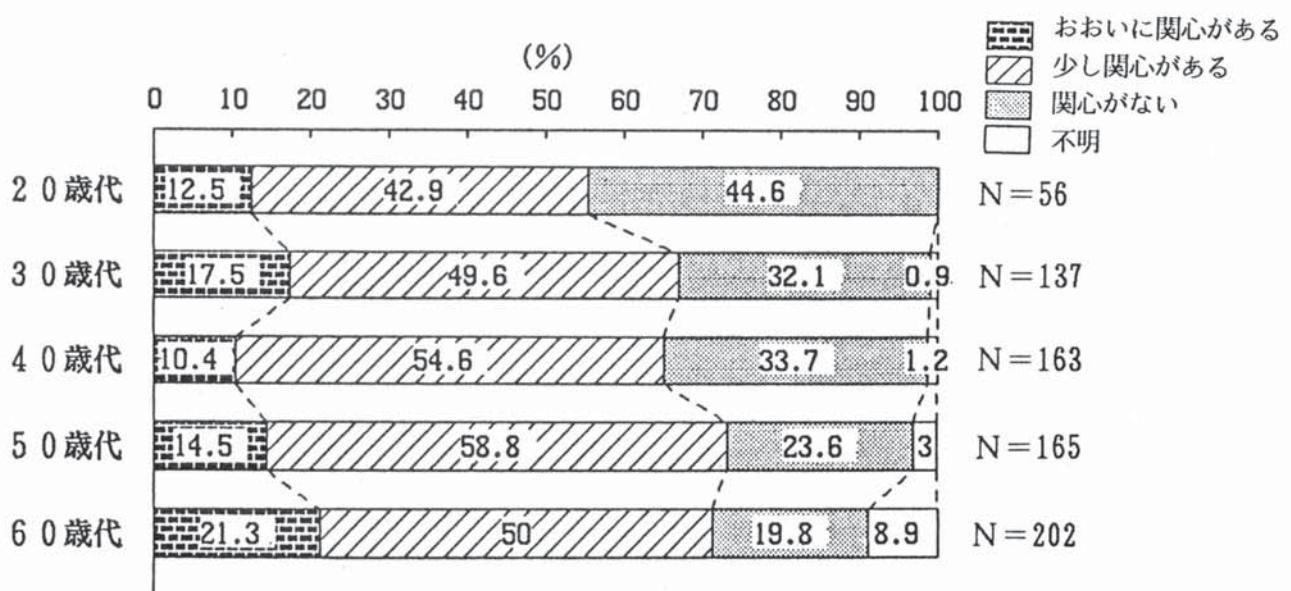
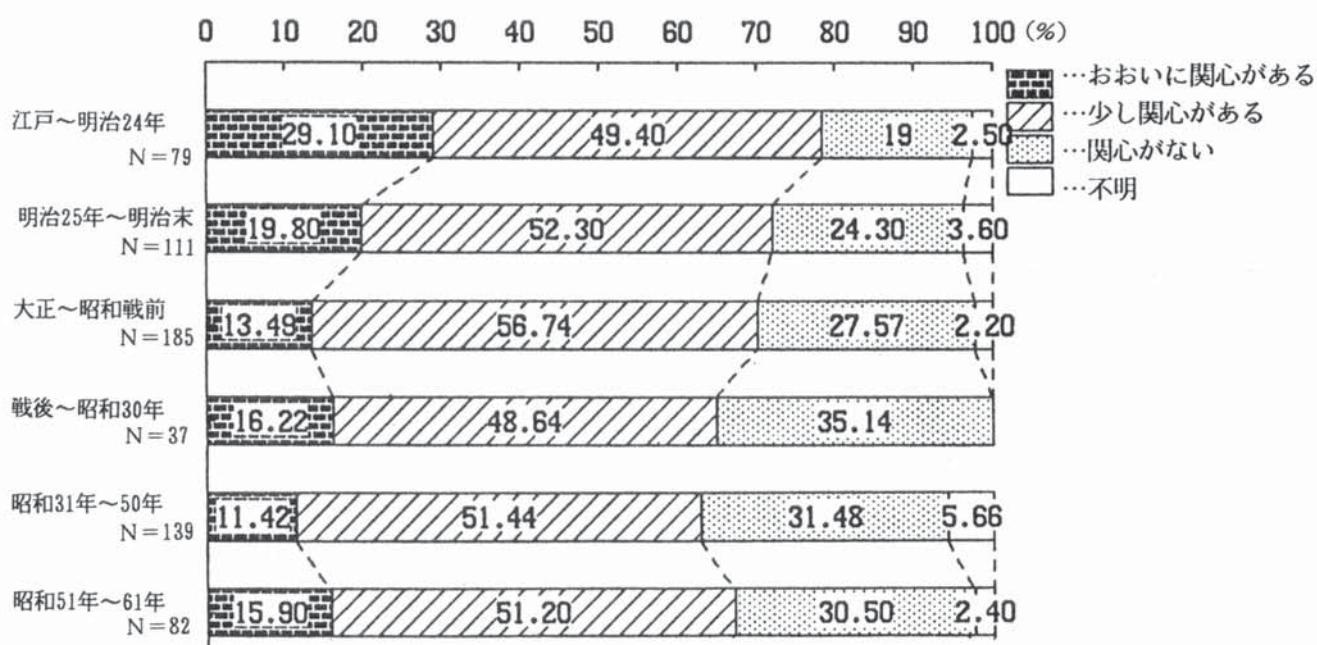
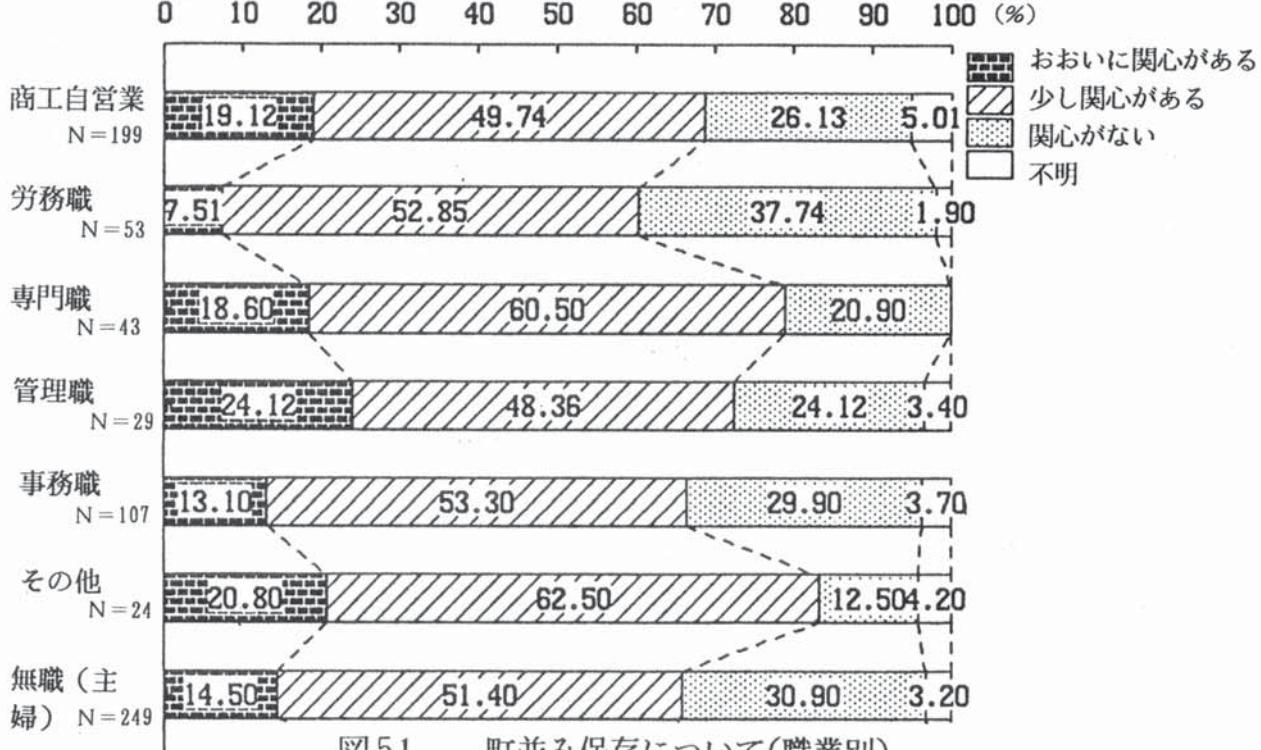
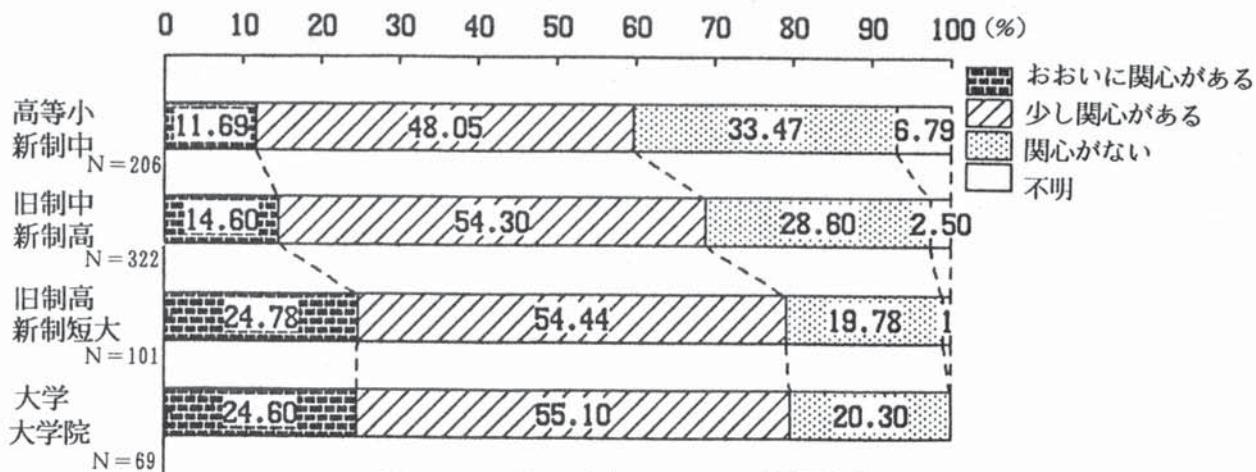


図49. 町並み保存について(年齢別)



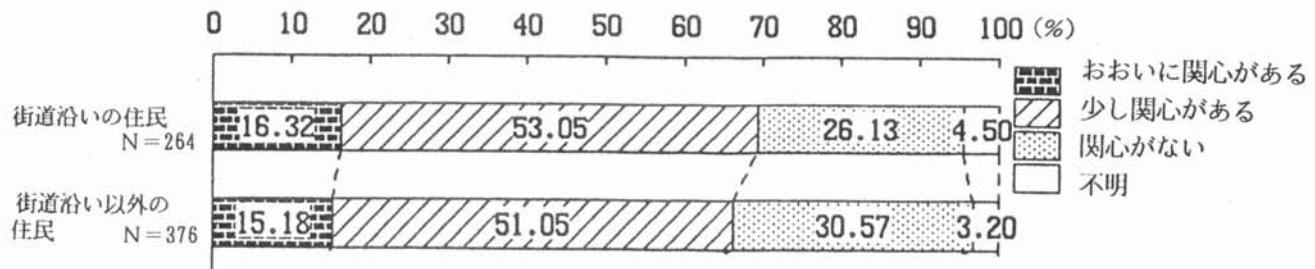


図53. 町並み保存について(街道沿い、その他の別)

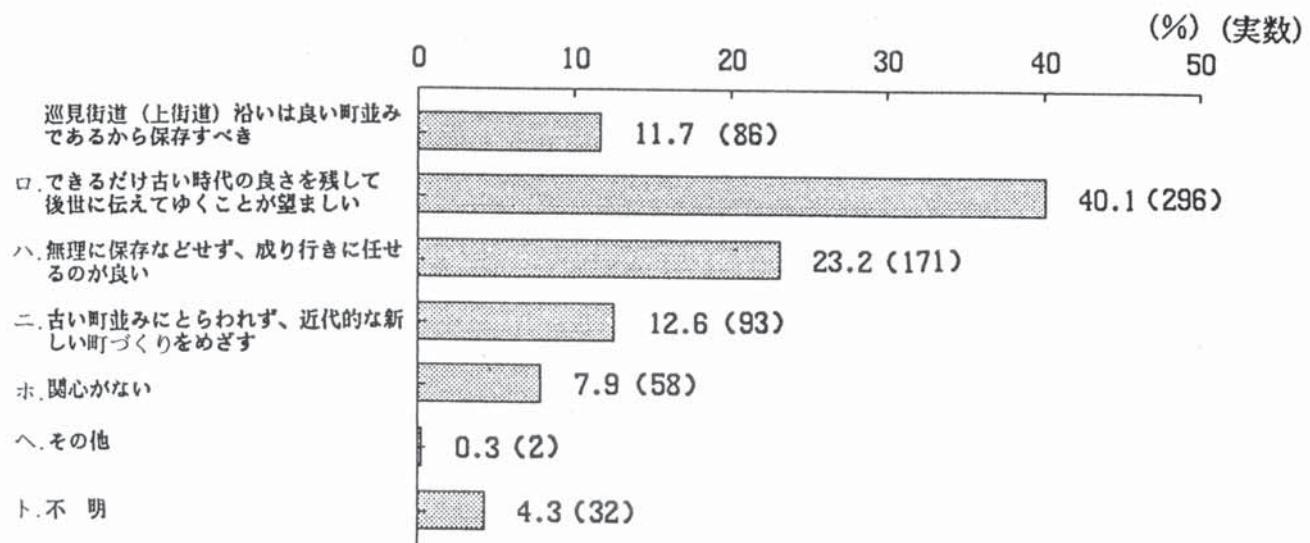


図54. 津島市の町並み保存について(全体)

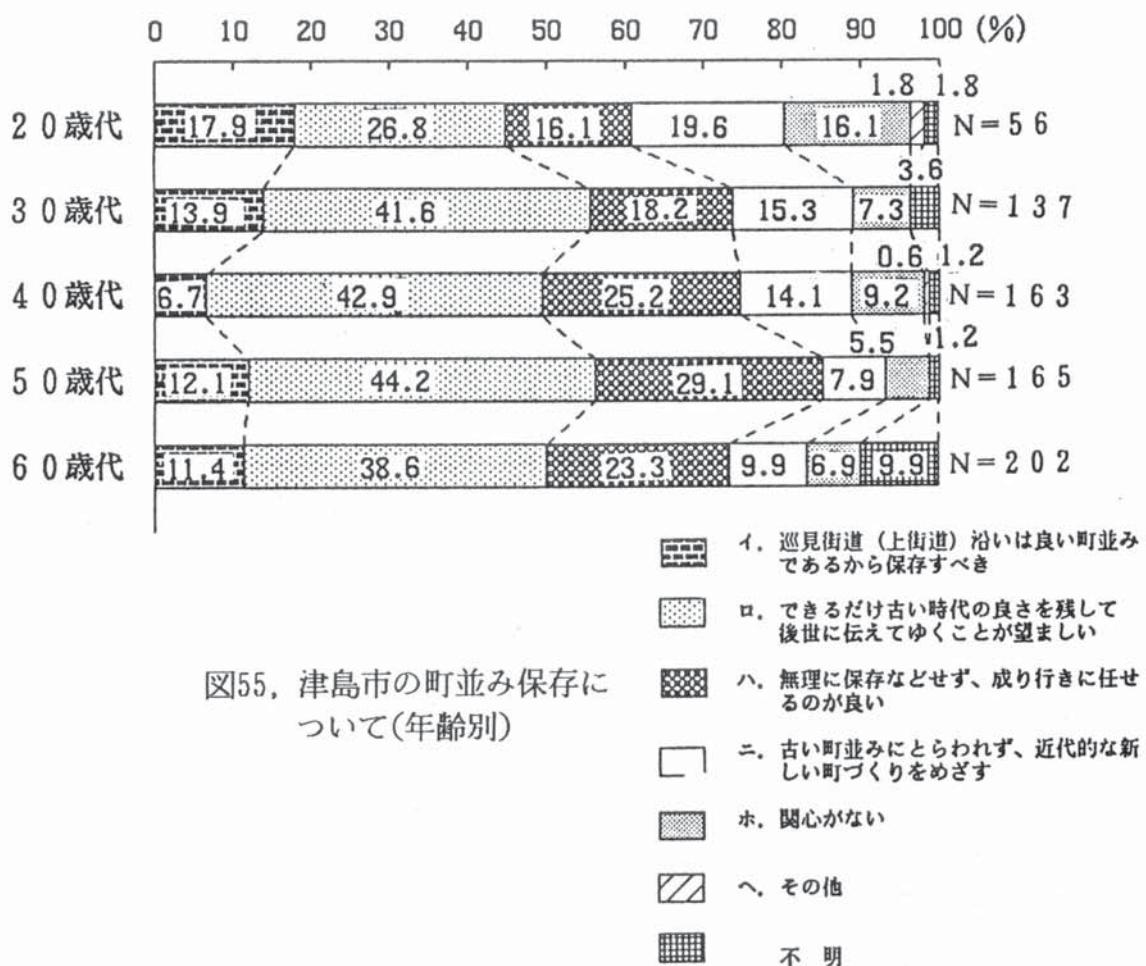
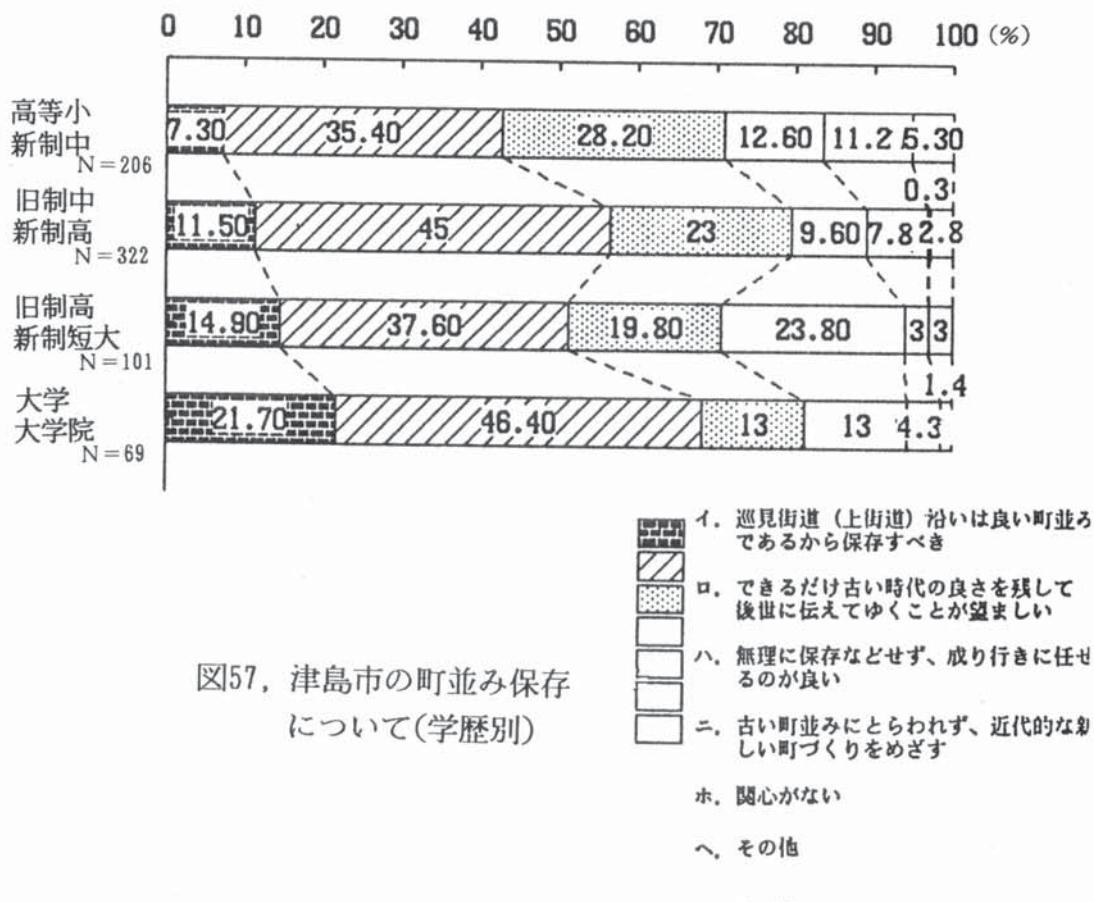
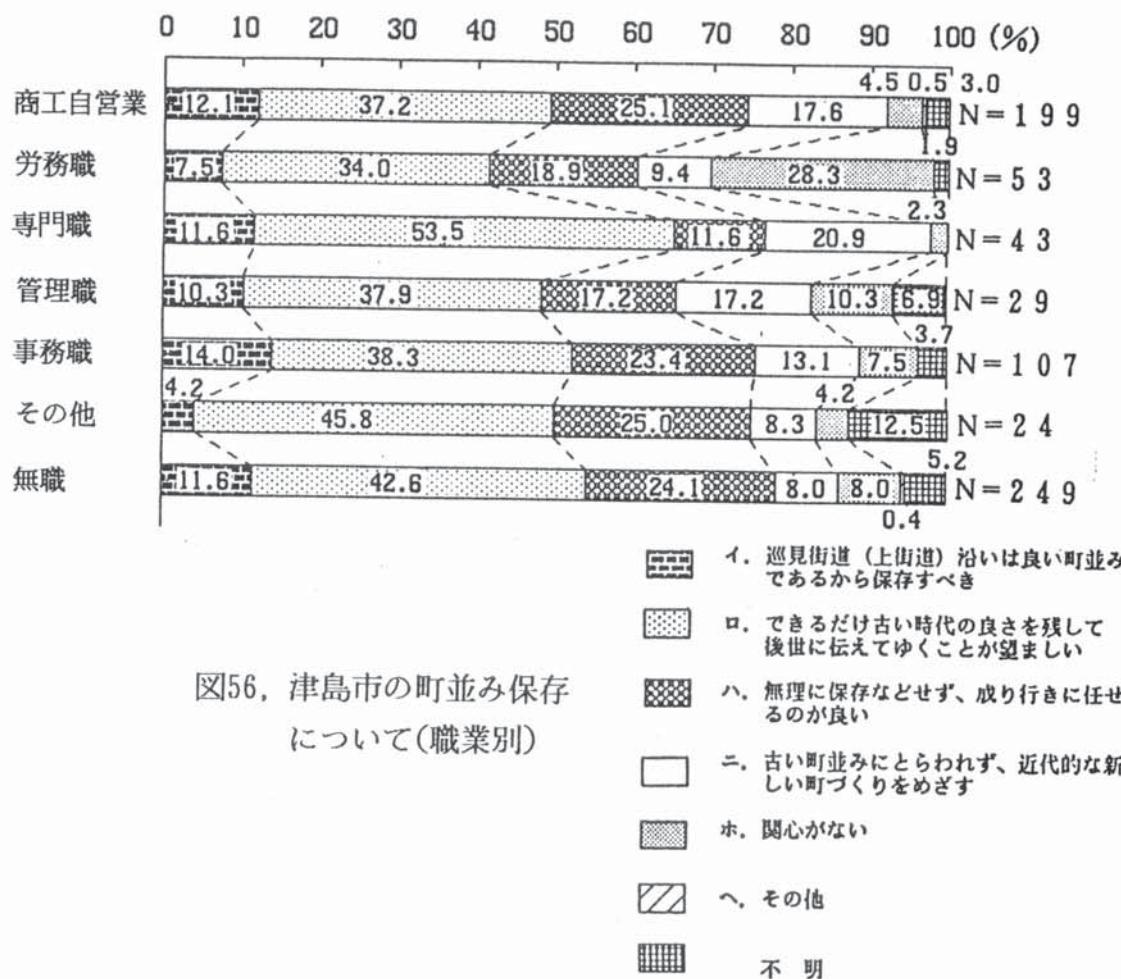


図55. 津島市の町並み保存について(年齢別)



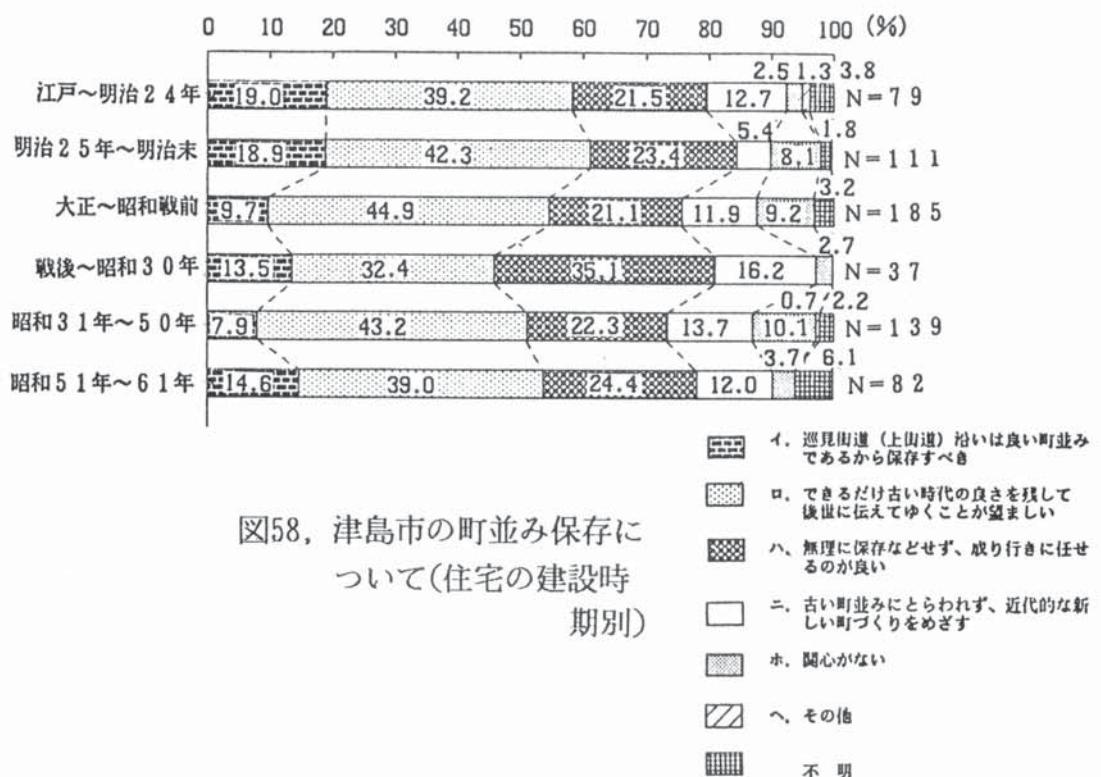


図58. 津島市の町並み保存について(住宅の建設時期別)

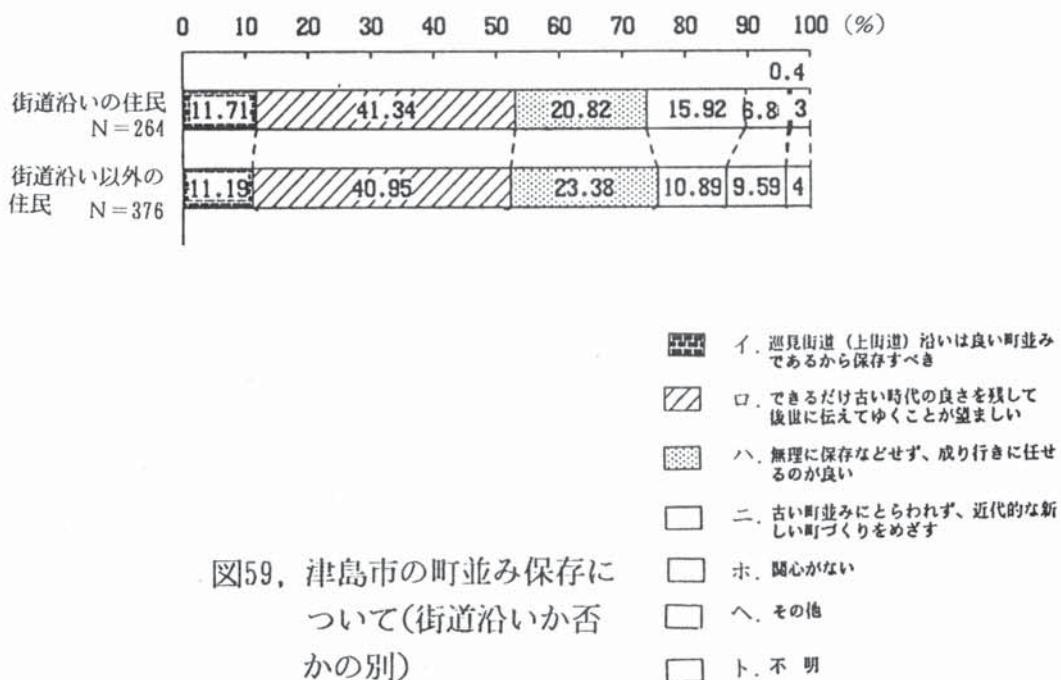


図59. 津島市の町並み保存について(街道沿いか否かの別)

(2)調査対象の属性

回答者の属性は、図1～4に示す。

年齢別では（図2）、60歳以上が4分の1を占めるのが、30歳代、40歳代、50歳代はほぼ均一な回答数が得られた。家族構成（図3）は、核家族世帯が47.6%、直系家族が28.1%と、全国平均（核家族世帯60.0%、S60年）に比べ直系家族が多く、わが国の伝統的な家族形態を保つ世帯が比較的多く残っているといえる。職業は（図4）その多くは主婦が占める無職の3割を除けば、「商工自営」が多く27.0%、ついで「事務・販売職」14.5%となっている。

次に、回答者の津島での居住歴をみると（図5）、50歳代、60歳代の回答者が合わせて半数を超えることからも当然とはいえるが、戦前からの居住歴をもつ人は4割近くとなっている。また現住居での家族の居住歴をみると（図6）、「祖父母の代から」あるいは「祖父母の代以前から」と答えた人が4割弱と、代々子孫に受け継がれて居住してきた住宅が多いことがわかる。

(3)調査対象の住宅概況

まず、対象者の住宅の建設時期からみると（図7）、ここに示された時期は回答者の記憶によるものなので必ずしも正確な年代を示しているとは言い難いが、戦前のものが、対象者所帯の約半数を占めているものと思われる。

次に住居および敷地の規模についてみると（図8、9）、敷地が25坪未満の小規模なものから、300坪以上のものまで大小さまざままで格差が大きいことがわかる。持家層（一戸建・長屋建）の全国平均敷地面積（297.8m²）を上回る世帯が2割強となっていて、大規模な敷地をもつ住宅が少なくない。

住居面積でみた場合も、50坪以上と答えた人が約1／4を占め、間口が狭くても奥行きの深い住居が比較的多いといえよう。しかも、これらを建設時期別で比較すると（図10、11）、江戸、明治期に建設されたものに敷地・住居規模の大きいものが目立つといえよう。

住居構造では、まだまだ木造が主流を占めているが（9割弱）、RC造や鉄骨造なども現段階ではわずかであるが、徐々に増えていくことが予想される（図12）。

住居の所有形態は、持家層が約8割を占め借家は少ない（図13）。これを建設時期別でみると（図14）、「戦後～昭和30年」と「大正～昭和戦前」の住宅に借家および借地の持家層が多くみられることがわかる。

(4)住宅の住み心地

古い住宅と現代の新しい住宅とではその住み心地はどうか。図15に示すように、11の項目について居住者の住み心地についての評価を得た。まず、全体を通してみると、「住居全体の広さ」、「敷地全体の広さ」、「夏の風通し」、「風呂の設備」などについては、満足している世帯が多いといえる。逆に不満を訴える世帯の方が多い項目は、「冬の保温性」、「各室の独立性」、「便所の設備」、「台所設備」、「掃除・管理のしやすさ」、「外部の騒音」などとなっている。

次に、主な項目について建設時期別で比較した場合、「住居の広さ」については、（図16）、戦前以前の住宅と昭和51年以降の住宅に満足と答える人の割合が他より多くなっていることがわかる。また、「住居の広さ」については、住居面積別で比較した場合（図17）、30～40坪以上になると満足と答える人が多くなる

こともわかる。

「各室の独立性」、「居室の明るさ」、「冬の保温性」、「台所設備」、「風呂の設備」、「便所の設備」については、昭和51年以降の新しい住宅での満足感が高くなっている。一方、古い「江戸～明治24年」の住宅においても、「夏の風通し」、「風呂の設備」、「台所設備」などに対する評価は良くなっている（図18～25）。 「掃除・管理のしやすさ」については、住居が広く、しかも建設年代の古い住宅に不満を示す声が多い（図26～27）。また、この項目で不満と答えた人に、掃除に手間どる理由を尋ねたが、「建物が古いため入りにやらないときれいになったような気がしない」（39%）、「掃除をする部屋・場所が多くすぎる」（37%）などが目立った理由としてあげられる（図28）。

「外部の騒音」については、建設時期別では「大正～戦前」の住宅に不満が多くみられる（図25）。

(5)住宅の改造・増築の状況

これまでに住宅の改造・増築などをやったことのある世帯は、半数を占めている（図29）。その場所としては、台所が最も多く、ついで浴室、便所、居室の順となっている（図30）。そして当然とは思われるが、戦前以前の古い住宅ほど改造・増築の箇所数は多くなる傾向にある（図31）。

将来の改善希望については、改善希望が「ある」と答えた人が37%（図32）、また、その中で全面的に改造を希望する世帯は全体の1割弱となっている（図34）。さらにこれらを建設時期別で比較してみると、戦前以前の住宅に改善希望「有り」の割合が多く、しかも、全面的に改造を希望する割合は、「大正～昭和戦前」と「明治25年～明治末」の住宅に多くみられる（図33、35）。

(6)住宅の継承について

現在住んでいる住宅を次の世代まで継承させようと考えているのかどうかについては、図36に示すような結果が得られた。「自分の代はこのまま住みつづけ、子の代では子の意志に任せる」と答えた人が44%と最も多く、「子の代になっても補修をしながらこの住宅に住みつづけて欲しい」と答えた人は12%にとどまっている。住宅の建設時期別では、「江戸～明治24年」の住宅で子の代までの継承を望む人が23%と他のグループより多くなっている（図37）。また職業別では、「管理職」の層に子の代までの継承を望む人が多く、「商工自営業」ではその比率が1割程度である（図38）。

(7)町の住み心地

町の住み心地については、図39に示すように11の項目について評価を得た。

全体では、満足感の高い項目としては、「買い物の便」、「落ち着き」、「交通の便」、「医療施設の設備状況」などがあげられている。逆に不満と答えた比率の高い項目としては、「道路の安全性」、「活気」、「駐車スペース」、「災害に対する安全性」などがあげられる。

古い伝統的な町においては、一般に「活気」がないと、とくに若い人たちにとってマイナスイメージにつながることが多いと思われるが、津島の場合は、町の「活気」についてとくに若い世代の不満が多いというわけではなく、むしろ40歳代、50歳代の人の不満率の方が高いといえる（図40）。また、同じく年齢別で比較した場合、「医療施設の設備状況」や「老人のためのいこいの施設」については、50歳代の人の不満率が

他よりやや高いのが特徴といえる。

(8) 街道沿いの古い伝統的な住宅について

巡見街道沿いには年代の古い住宅が多く残っているが、これらの住宅群について市民はどのような感想をもっているのかを尋ねた。図41はその結果を示すが、「新旧入り混じっていて統一がとれていないと思う」という意見が全体の33%と最も高い値を示し、ついで「落ち着いた雰囲気をかもし出していて、なかなかよいと思う」が27%、「由緒や風格があって誇りに思う」24%となっている。しかし、「とくに何も考えたことがない」と答えた無関心派も少なくない。

これについての性別比較による差異にみられなかったが、年齢別比較では(図42、43)、「落ち着いた雰囲気を………」と答えた人は、30歳代、50歳代にやや多く、「新旧入り混じっていて………」と答えた人は、年齢が高くなるに従い多くなっている。「古くさくてあまりよいと思わない」と答えた人は、40歳代にやや多くみられる。「とくに何も考えたことがない」の無関心派は20歳代に多く(46%)、30歳代でも約3割を占めている。

また職業別による比較では、専門職層で、「落ち着いた雰囲気を………」や「由緒や風格があって………」と高い評価を示す人が他よりやや多くなっているが(図44)、「新旧入り混じっていて………」と答えた人も専門職や管理職の層に多くなっていることも見逃せない(図45)。「とくに何も考えたことがない」と答えた人は「労務職」「事務職、販売職」の層に若干多くみられた(図46)。

(9) 町並み保存について

町並み保存についての意識では、一般論としての町並み保存についての関心と、具体論としての津島の町並み保存そのものについての意識とに分けて尋ねた。以下はその結果である。

a. 町並み保存についての関心

「ここ10年来マスコミ等でとりあげられている高山市や有松町の古い町並みの保存といったことに対して、あなたはどのように感じていらっしゃいますか」という質問に対し、「おおいに関心がある」と答えた人は、全体で16%、「少し関心がある」が52%と、「関心がない」と答えた人の比率(29%)より上回っている。(図47)。

これを性別でみると(図48)、女性よりも男性の方がやや関心が高いといえる。年齢別では各年代間で大きな開きはみられないが、20歳代がやや関心が低いといえる(図49)。

職業別では、「専門職」、「管理職」、「商工自営業」の層で他よりやや関心が高くなっている(図51)。

また、住宅の建設時期別では、「江戸～明治24年」の住宅層が他より関心が高くなっているが、「昭和51年～61年」の住宅層も関心が低いとはいはず、各層間に大きな差異があるとはいえない(図52)。さらに街道沿いか否かによる比較では、両者に差はみられなかった(図53)。

b. 津島市の町並み保存について

津島市の町並み保存について、図54に示すようなイ～への選択肢の中一つだけ回答を選んでもらった。その結果全体では、「できるだけ古い時代の良さを残して、後世に伝えていくことが望ましい」とする考えを支持する人が40%と最も多く、「巡見街道沿いは良い町並みであるから保存すべきである」と積極的に保存

を支持する人は12%にとどまっている。

また、「無理に保存などせずに、成り行きに任せるのが良い」と答えた人は23%、「古い町並みにとらわれず、近代的な新しい町づくりをめざすのがよい」と答えた人は13%となっている（図54）。

これを属性別でみると（図55～57）、a. 町並み保存についての結果と類似した傾向がみられるといえよう。

住宅の建設時期別では、「江戸～明治24年」や「明治25年～明治末」の層において「巡見街道沿いは良い町並みであるから保存すべきである」という積極的保存支持派が他より多く占められているといえる。また、「無理に保存などせず……」や「古い町並みにとらわれず……」という回答の支持が多かったのは、「戦後～昭和30年」の住宅層においてであった（図58）。街道沿いか否かの別では両者にほとんど差がみられなかった（図59）。

(10)アンケート全体に関する自由意見

〔家屋に関するもの〕

- ・伝統的住宅の知恵（天窓等）を復元してくれる技術者がいないので残念である。（60歳・女）
- ・巡見街道沿いは伊勢湾台風時も浸水せず、家屋は良好である。（同上）
- ・古い家を補修（維持）するためには費用がかかりすぎる。市の援助がのぞましい。（41歳・女）
- ・古い町並みは眺めるにはよいが、実際には住みにくく、どこの家にも物置同然の部屋がある。（36歳・女）
- ・茶席（明治末期）の維持・保存についてアドバイスを受けたい。（71歳・男）
- ・うなぎの寝床が多く、南向きの現代住宅が望ましい。（36歳・男）
- ・海拔0、多湿であるため、夏の蚊等不快である。冬は防風林がないため底冷えする。（同上）

〔道路・都市計画に関するもの〕

- ・車が増え、狭い道路で危険。子どもが外で遊べなくなった。（36歳・女）
- ・年々地盤が低くなってきており下水工事、排水工事等をしないと旧家も長持ちしない。（32歳・男）
- ・道路も広くならない方が安全。このままの方が落ち着いた生活ができる。（45歳・女）
- ・道路が狭く駐車場も少ないと力のある商店は他へ出て行ってしまい、住宅地化しつつある。（53歳・女）
- ・道路が狭く、しかも路上駐車が多く危険。（36歳・男）
- ・奥行きのある家が多いので、家をバックさせ道路幅員広げるべき。また、道路も碁盤目のようにすべき。（同上）
- ・ほとんどの家が奥へ水を流しているはずなのに、表通りだけの下水道は利用価値がない。水の流れを調査し、利用できるものにして欲しい。（41歳・男）
- ・汲み取り車により景観もだいなし。水洗化を進めるべき。（36歳・女）

〔町並み保存に関する行政への要望・意見〕

- ・町並みに固持して町の発展を阻害しないようにすべきである。写真、模型等で残すのがよい。自転車、歩行者の時代から自動車時代となり、道路拡幅などが必要となってきた。（62歳・男）

- ・南本町では道路拡幅を行っており、町並み保存と反するのではないか。また、「町並み」と「津島神社」だけで観光は成り立つか。行政はもっとやるべきことが他にあるのではないか。（42歳・男）
- ・道路拡幅により、町並みや古い町家は壊されつつあり、残るのは外部騒音と交通公害だけだ。このまま古い町並みを維持して暮らしてゆきたい。（52歳・男）
- ・一種の流行で復元させるのはよくない。都市開発等で失われてしまうものを残すことは尊いが、やる以上は思いつきではいけない。（81歳・男）
- ・市当局は保存に積極的になるべきだ。（64歳・男）
- ・行政が個々の住宅の外觀に規制を加えることには疑問である。（37歳・男）
- ・巡見街道筋は一部を除いて道路拡幅から見放されており、保存するには好都合である。（84歳・男）
- ・道路が狭くて駐車スペースがない。古い町並みを残しながら拡幅するかバイパスを造るとよい。（52歳・男）
- ・町並み保存に関する条例等を作り、残す家は残すように早く手を打て欲しい。（48歳・男）
- ・巡見街道という名前は馴染みがないし、上街道は旧鎌倉街道と呼んで欲しい。町並み保存と同様、由緒ある地名・町名も保存して欲しい。（53歳・男）
- ・古い町並みを残すことも大切だが、道路が狭く真っ直ぐでないので危ない。もっと整然とした町並みを目指すべきだ。（26歳・女）
- ・保存すべき町並みを決め、その町並みで建て替え希望があれば、市・県等が買い上げる等をし、保存しない地域は新しくしていくべきだ。（43歳・女）
- ・古い町並みは博物館に一部の地域を集めて公開し、他の地域では道路を拡張したり、歩道の設置など対策が必要。（36歳・女）
- ・津島は好い物が沢山残っているのに、保存に対する行政が遅れている。資料館、町家保存に力を入れて欲しい。（57歳・女）
- ・古き良き時代の面影は日本の誇りであるから、できるだけ保存に努力して欲しい。（75歳・男）
- ・古い町並みは大切にし、より完全なものとしていく努力は必要だと思う。我が市全体の中でもそれは重要な役割を果たすと思う。しかし、市民全体が我が市の町並みの価値について疑心暗鬼なのではないだろうか。（不明）

[津島市政全般に関するもの]

- ・もっと活気のある町、活気のある人がいるとよい。（40歳・女）
- ・名古屋一津島間を名鉄のみに頼らず、地下鉄を延長すべきだ。（75歳・女）
- ・市営プールの改築（他町村に比べ悪い）。税金が高すぎる。また、市民病院に近代設備を導入して欲しい。（42歳・女）
- ・同和の人もみな一緒にして欲しい。（43歳・女）
- ・災害時のための公園を整備すべき。（36歳・男）
- ・津島市は老成化しているため、産業の活性化（企業誘致等）が必要。（36歳・男）
- ・名鉄のみに頼らず、地下鉄を延長すべき。（81歳）
- ・津島市のシンボル天王寺公園をもっと清潔にし、津島神社の公園ももっと整備すべき。（81歳・男）

・市民一人一人を平等にして欲しい。（20歳・女）

・違反駐車を取り締まって欲しい。（43歳・男）

[アンケートの内容に関するもの]

・良い調査である。（70歳・男）

・文章が分かりにくい。（54歳・女）

・最終学歴、職業がなぜ必要なのか。（36歳・女、42歳・女、40歳・男）

・満足か不満足かという設問は、例えば広すぎて困るといった面もあり、簡単には答えにくい（41歳・男）

まとめ

今回の意識調査は、町並み保存について、津島の人々がどの程度関心をもち、どのように考えているのかを、より広範に把握することを目的として行われた。町並み保存をすすめていくにあたっては、とくに年代の古い住宅の居住性を抜きにして語ることはできないので、住宅の住み心地や改造・増築の状況についてもできるだけ詳細に把握しようと努めたつもりである。しかし、調査内容に一部不備な点があったり、また回収票の中には、世帯票と個人票の回答がまったく同一のものがあって、無効とせざるを得ないケースがかなり出てしまったことなどにより、当初の目的が充分に果たせたとは言い難い面も多々あるだろう。

これらのことと前置きしながら、調査結果を以下にまとめてみよう。

まず居住性についての住宅の評価から考察を試みると、建設年代の古い「江戸～明治24年」では、「住宅の広さ」については申し分ないとする人が多く、したがって住居が広いため「夏の風通し」といった点については評価が高くなっている。水回り設備関係のうち風呂については、すでに改造している家が多いためか、満足感がかなり高く、台所についても半数強が満足としている。しかし、便所については不満が多い。これは、便所が水洗化されていないことや設備位置などに対する不満からきているのではないかと思われる。

「掃除・管理のしやすさ」では、住居が広くまた使われていない物置的な部屋が多いことなどから掃除に手間取ると不満を訴える声が多い。したがって、これら古い住宅では、設備の不備な点を改善し、住まい方をもう少し合理的に工夫することによってより快適な住生活が確保できるともいえよう。「大正～昭和戦前」あるいは「戦後～昭和30年」の住宅では、不満の高い項目が他より多くみられたが、その要因として、これらの住宅は、「借地の持家」や「借家」の割合が多いことや、住宅の広さが30坪未満と狭小なものが多く存在することなどが考えられる。そして前者では、将来の改善希望の中で全面的改善を望むという声が「明治25年～明治末」の住宅と並んで多くなっていることがわかった。

次に町並み保存について述べると、町並み保存について的一般論としての関心の程度は、全体の約2／3の人がなんらかの関心を抱いていて、関心は高いとえる。そして、巡見街道沿いの古い住宅群については、「新旧入り混じっていて統一がとれていないと思う」という意見が3割強を占め、町並み景観としてのまとまりの希薄さを指摘する声が少なくないが、「落ち着いた雰囲気をかもし出していてなかなか良いと思う」という意見も3割近くを占め、町並みに対する評価は分かれているといえよう。さらに、津島市の町並み保存については、「できるだけ古い時代の良さを残して後世に伝えてゆくことが望ましい」とする人が4割、「無理に保存などせずに成り行きに任せるのがよい」とする人が2割強、そして「古い町並みにとらわれず

に近代的な新しい町づくりをめざすのがよい」が1割強とここでも意見が分かれているといえる。

現住宅の継承については、「自分の代はこのまま住みつづけ、子の代では子の意志に任せる」と答えた人が多く4割強を占める。「子の代になっても補修をしながらこの住宅に住みつづけて欲しい」と答えた人は1割強程度にとどまり、古い住宅の継承を頑なに望む人は少なくなっている。しかし、これを住宅の建設時期別で比較した場合、「江戸～明治24年」の古い住宅層で子の代までの継承を望む人が多く、自らの住宅を高く評価していることがわかる。

津島の町の住み心地については、不満感の高い項目として「道路の安全性」「活気」「駐車スペース」、「災害に対する安全性」、ついで「老人のためのいこいの施設」「子どもの遊び場」「樹木の量」などがあげられ、これらについての行政側の対応が望まれる。逆に満足感の高い項目としては、「買い物の便」「落ち着き」「交通の便」「医療施設の設備状況」などがあげられる。

最後に、回答者の自由記入による意見をまとめると以下のようになろう。

町並み保存については、保存に関する行政側の対応の遅れを指摘する声が多く目立った。一方、行政が個々の住宅の外観に規制を加えることは疑問とする意見もみられた。

道路、都市計画については、道路の拡幅および駐車場の確保を訴える声と、逆に道路の安全性や落ち着きを保つため、広くならない方がよいとする意見とに分かれている。

町の将来については、もっと活気ある町を望む声が年齢を問わず少なくなかった。

以上、これら市民の声を今後の町づくりに反映させようとすれば、津島の町は、落ち着いた伝統的な町並みと活気ある近代的な商店街との両者をうまくマッチさせた街づくり計画が必要とされているといえるのではないだろうか。

<参考文献>

1. 新田米子・高橋啓子・尾鍋昭彦：歴史的街並みの保全の可能性について——有松町における調査事例、聖徳学園女子短期大学紀要第6号（1980）
2. 長沢由喜子・尾鍋昭彦・高橋啓子・新田米子・水野信太郎：津島における町家建築の現況および住生活調査、江南女子短期大学紀要第11号（1982）
3. 三島由美・尾鍋昭彦・高橋啓子・新田米子：津島における町家建築の現況および住生活調査（第2報）江南女子短期大学紀要第13号（1984）
4. 財団法人 観光資源保護財団編「尾張・津島の町家と町並み」（1985）
5. 国民生活センター編「くらしの統計'87」大蔵省印刷局

津島の都市景観

1. 都市景観について

都市景観とは、一般的な言葉でいえば目に映る町の眺めである。町には、建物、街路、橋、広場などの物的な施設があり、それらの間に各種のストリートファニチュア、看板、標識類が置かれている。また、人工物に加えて、川、池、山、緑などの自然物が、町のなか、あるいはその背景に存在する。都市景観は、これらの要素によって構成される町の視覚的環境であると言ふことができる。

しかし、都市景観は、それを構成する要素の単なる寄せ集めではない。同じ要素を含んでいても、それらの相互関係が違えば、景観の性格はまったく違ったものになる。また、それらが置かれる場所、つまり町のなかで占める位置が違っても、印象は大きく変わってくる。

したがって、都市景観を評価するには、どのような要素がどのように分布し、それらの間にどのような関係があるのかを明らかにする必要がある。

2. 都市景観調査

1) 調査の概要

私たちは、都市景観という視覚的な側面から津島の町並みの構成を明らかにするために、次の手順で調査を行った。

- ① 予備調査に基づき、津島の町並みを考えるうえで重要であると判断される要素を拾い出す。
- ② 中心市街地に50m間隔の網をかけ、拾い出した要素の分布を調べる。
- ③ その結果を重ね合わせ、都市景観のタイプ別に町並みのゾーン区分を行い、それらの相互関係に基づいて町並みの構造づけを試みる。

2) 調査対象区域

津島は、平安時代の末から尾張と伊勢を結ぶ重要な港であり、江戸時代には、全国に信者をもつ津島神社の門前町、佐屋街道沿いの商業都市として栄えた。明治に入ってからは、さらに毛織物工業の中心地として発展した。

津島の町には、こうした繁栄の遺産として、国指定の重要文化財になっている津島神社をはじめ、歴史の古い神社・寺院が数多く存在し、かつての巡見街道である本町通りには、幕末から明治にかけての町並みが残っている。

今回の調査では、対象区域として、津島神社と津島駅にはさまれた中心市街地のうち、東西1150m、南北900mの範囲を選んだ。ここには、津島神社と駅のほかに、北町から南本町一丁目にいたる本町通りの主要部、神社と駅を結ぶ天王通り、津島まつりの舞台になる天王川公園などが含まれる。

3) 予備調査

現地調査の第一段階として、津島の都市景観の特色を表していると考えられる要素、また景観整備の上で留意する必要がある要素を抽出する目的で、予備調査を行った。この対象区域は中心市街地の西部、東西・南北各900mの範囲とし、100m間隔のグリッドの交点で写真を用いて景観サンプルの採集を行った¹⁾。

採集された景観要素を分類整理し、それに基づき、伝統的景観に関わる要素として町家・神社・寺院、都市のアクティビティに関わる要素として商店、都市景観のなかの自然要素として木立ち・水面・山並み、ネガティブな要素として老朽建物・荒れ地・混乱した町並みを拾い出し、本調査の対象にした²⁾。

4) 本調査

調査区域に50m間隔のグリッドをかけ、予備調査で拾い出した要素を対象に、各交点からの眺望のなかにそれらの要素が存在しているかどうかチェックを行った³⁾。グリッドの交点総数は456、アクセスが不可能な地点を除いた有効サンプル採集地点は426であった（図-1：黒丸が実際のサンプル採集地点を示す）。この結果に基づき、景観要素の分布状態を調べ、都市景観構造の把握と評価を試みた。

3. 都市景観要素の分布

1) 伝統的な町並み

伝統的な形式の町家・長屋がある程度まとまって町並みをなしている景観が見られる地点数は74であり、その内の36地点（49%）が本町通り周辺に集中している（図-2）。本町通りには、曲がりくねった街路に面して、格子をも

つ平入り2階建ての町家が並んでいる（写真-1）。いまのところ通過交通もあまりなく、落ち着いたたたずまいが保たれている。表通りから分かれる路地には、黒く塗られた妻壁・板塀・長屋などが見られ、独特の雰囲気がかもし出されている。一方、本町通りの南部では、2階の軒の低い町家が多くなるとともに、老朽化した家屋が目につくようになる。

上河原町にも、ややまとまった町並みが見られる。この通りの町家はしもたや風のものが多く、本町通りと比べ、裏通りの景観になっている。

東西方向の通りでは、筏場町に連続的な町並みが見られる（写真-2）。この町並みは、緩やかな曲線を描く通りに沿って軒線のそろった町家が並び、整った美しさを持っている。また、本町通りと天王川公園を結ぶルートとしても重要である。しかし、現状では通過交通が多く、歩行者が安心して歩ける通りではない。

このほか、片町・祢宜町・宝町などにも町家の分布が見られ、それぞれ性格の異なる景観をつくり出している。

2) 神社

神社の社殿や鳥居が見られる地点数は69、分布が集中しているのは、津島神社周辺31（45%）と御嶽神社周辺15（22%）である（図-3）。津島神社は面的な広がりを持ち、都市景観のなかで核になるゾーンをなしている（写真-3）。

一方、視覚的な影響圏は小さいが、市神社・堤下神社・坂口神社などの小祠は、町並みの局地的なランドマークになり、景観を引きしめる役割を果たしている（写真-4）。

3) 寺院

寺院の建物・大屋根・山門が見られる地点数は106、分布が集中しているのは、天王川公園18（17%）と本町通り沿い40（38%）である（図-4）。

本町通り沿いの分布は表通りから奥まった位置に見られ、そこでは、成信坊・宝泉寺・西福寺などのように、寺院が裏通りや横町のアイストップになっている（写真-5）。これらの寺院は、裏通りの景観の焦点をなしているだけでなく、表通りと裏通りを視覚的に結びつけ、町並みの景観に奥行きを与える役割を果たしている。

4) 商店街

商店がある程度連続して商店街としての景観を呈している地点数は 77、分布が集中しているのは、天王通り 28 (36%) と今市場 15 (20%) である (図-5)。

天王通りは、津島神社と津島駅を結ぶメインストリートであり、商店街としての連続性が最も強く感じられる (写真-6)。しかし、個々の商店は老朽化の目立つものが多く、かといって伝統的な落ち着きも感じられないため、都市の中心軸としての活気と充実を欠いている。

今市場は広い都市計画街路に面し、沿道には新しい商店が並ぶ。しかし、これらの商店の間には視覚的な調和が欠けており、全体として雑然とした印象が強い。ここは車での中心街への入口に当たり、今後も商店街の発達がつづくと考えられるので、新しい商店街としての景観秩序の確立が望まれる。

本町通り沿いにも商店街景観が見られるが、不連続であり、調和に欠ける。橋詰の東西の通りには、短いが活気のある商店街が見られる (写真-7)。この通りは、現状では老朽化が目立ち雑然としているが、本町通りと天王川公園を結ぶルートとして可能性を持っている。

5) 木立ち

まとまった緑や目立つ大木が見られる地点数は 103、分布は天王川公園 39 (38%) と津島神社 28 (27%) の周辺に集中している (図-6)。これらは、中心市街地に隣接する緑のゾーンとして貴重な環境資源だが、市街地の内部からは部分的に垣間見られるにすぎない (写真-8)。

これら以外には、調査区域の東部に分布が点在している。その多くは寺院境内の木立ちであり、視覚的な影響圏は局地的だが、山門や大屋根とともに、市街地のなかで貴重な緑のアクセントの役割を果たしている (写真-5)。

6) 水面

池や川の水面が見られる地点数は 47、その分布は、新堀川周辺と津島神社境内を除けば、天王川公園周辺 34 (72%) に限られている (図-7)。ここでの水面の眺めは、池をめぐる木立ちや山並みの眺望と結びつき、明るい広がりを持っている (写真-9)。

7) 山並み

西方の多度・養老の山並みが見られる地点数は 118、天王川公園 14（12%）を除いて、分布は東西方向の街路沿い 91（77%）に集中している（図-8）。

天王川公園から望まれる山並みは、前述のように池や堤の並木と結びつき、景観にのびやかな広がりを与えていた。一方、東西街路の奥に望まれる山影は、都市景観にはっきりした方向性を与える役割を果たしている（写真-10）。

8) ネガティブな景観要素

都市景観にネガティブな影響を与える要素として、周囲との調和を欠いた商業建築・老朽化した家屋・放置された空き地を拾いだし、調査した（図-9）。

混乱した街路景観は、天王通り・橋詰・今市場（37）に多く見られる。こうした景観は、本町三丁目の南端に見られるように、伝統的な町並みと新しい街路の接点で著しい不調和を生んでいる（写真-11）。

老朽化した家屋は、南本町と本町筋の裏通り（8）に見られる。これらは、現状では景観を阻害要素しているが、伝統的な町並みの一部をなす要素でもある。安易に現代風の建物に置き換えるのではなく、町並みとの調和を考慮した整備を図る必要がある。

荒れ地は、向島ポンプ場周辺（9）に見られる。市街地内の空き地は、町並みの連続性を壊し、景観を雑然とした落ち着きのないものにしている。放置しておけば、ここに町並みと不調和な新しい建物が建つ恐れもある。一方、使い方しだいでは、町並み整備の拠点として生かすことが可能かもしれない。

4. 津島の都市景観の構造

1) 明快な都市景観構造

優れた都市景観の条件は、第一にそのなかの個々の場面が魅力的なものであることだが、それだけでは十分と言えない。個々の情景が、あるまとまりをなして特色のあるゾーンをつくり出し、それらが相互に明確な関係をもって把握されるとき、つまり都市景観が明快な構造を持っているとき、私たちは、景観を通じて町並みの全体像をはっきりイメージすることができる。

津島の都市景観の構造は、多度の山並みに向かって引き絞られた弓にたとえることができる。弓に当たるのは、弧を描いて南北に走る本町通りを中心とする伝

統的な町並みである。つがえられた矢は、津島駅から西に延びる天王通りであり、津島神社が矢尻に当たる。天王川公園は、照準を安定させるスタビライザーに相当する（図-10）。

このように明快な構造を備えた津島の都市景観は、住民のひとりひとりが町並みの現状を理解し、それをより良い方向に導くための将来像を描くうえで、有力な役割を果たすだろう。

しかし、それは都市景観の現状に問題点がないということではない。津島でも、町並みは絶えず変化しつづけており、伝統的な家並みがしだいに姿を消し、個性のない景観の侵食が進んでいる。

津島が、固有の可能性を生かしながら、都市景観を整備していくにはどうすればよいだろうか。ここでは、都市景観の骨組みをなすゾーンとその相互関係の特質・問題点を整理し、今後の方針づけを考えてみたい。

2) 津島神社

津島神社は、重要文化財を含む建築群だけでなく、うっそうとした社に包まれた境内全体が、津島の都市景観を代表する「顔」の一つになっている。このゾーンの景観は良好に保たれており、今後とも、こうした状態を維持する配慮が期待される。

3) 天王川公園

もう一つの「顔」である天王川公園の景観も、比較的良好に保たれている。しかし、景観の評価は、単に視覚的な面だけによって決まるのではなく、総合的な印象に大きく左右される。その意味では、このゾーンの景観の主要な要素になっている池の水を浄化することが大切である。

また、池の眺めは、堤の並木や西の山並みと結びついて魅力をいっそう高めている。こうした眺望が得られるのは、多くは池をめぐる堤の上である。したがって、この魅力を生かすためには、歩行者が車に脅かされずに堤の上を散策できるような対策や、公園の西側での高い建物の規制を検討すべきだろう。

4) 本町通り

津島神社・天王川公園と並ぶ都市景観の「顔」は、本町通りを中心とする伝統的な町並みである。本町通りには、立派な商家が並び、歴史の厚みを感じさせる

落ち着いたたたずまいを醸し出している。

この町並みは、自然堤防の上に形成されたため、通りが曲がりくねっており、そこを歩いていくと次々に新しい眺望が開けてくる。景観の変化が、町並みの魅力をさらに大きなものにしている。

なお、町並みの保存・整備を考える際には、表通りの町家だけでなく、その裏の路地や寺院を含めた伝統的町並みゾーンを設定し、対策を図ることが大切である。それは、町並みの景観に奥行きと陰影を与える役割を果たすだろう。

5) 天王通り

天王通りは、町への玄関口である駅と津島神社を結ぶ津島の都市軸である。しかし、その景観の現状は、中心商店街としての活気と充実を欠いている。また、1kmという通りの長さは、苦痛なく歩ける距離の限界に近い。

天王通りを内容の伴った都市軸として整備するには、それを住民と来訪者が快適に散策し買物することができる歩行者中心の通りに変えていく必要がある。幸い、天王通りは東西ともに行き止りの通りなので、通過交通を比較的容易に排除することができる。思い切ったモール化と、伝統的な町並みと調和したコントラストを生み出せるような商店街づくりを図るべきだろう。

6) 町並みへの玄関口

都市景観の構造を考える際には、これらのゾーンのそれぞれの特色を生かし、充実を図ることに加えて、それら相互の、また外部とのつながりを強化し、全体の骨組みをいっそう安定したものにする必要がある。

現在のような車社会がつづくかぎり、津島への車での来訪者はさらに増加するだろう。そのうち、名古屋方面からの来訪者は、主に拡幅された名古屋津島線を利用すると考えられる。この道路と本町通りが交差する地点は、車利用者の伝統的町並みゾーンへの玄関口になる。ここでは、町並みの玄関としてのデザインが必要になる。

本町通りの北部では、又吉昭和線との交差点に、車利用者のための副次的な入口が設定されるだろう。

本町通りと天王通りの交差点は、新旧の町並みの結節点になり、鉄道利用者の伝統的町並みゾーンへの玄関口になる。この部分の扱いも、津島の都市景観の今後を左右する鍵を握っている。

7) 連結ルートの整備

津島神社・本町通り・天王通りの三者の間には、緊密なつながりがある。しかし、これらと天王川公園とのつながりは、それに比べてやや希薄である。そこで、ここでは既存の4本のルートを整備することによって、そのつながりを補強することを考えたい。

本町通りと天王川公園を結ぶ第一のルートは、筏場町の通りである。ここには、軒線のそろった整った町並みが残っている。しかし、現状では通過交通が多いので、それを排除し、歩行者優先の通りとして整備すべきだろう。

橋詰町の通りは、本町通りと天王川公園を結ぶ最短ルートであり、筏場町と対照的に活気のある商店街になっている。かつての津島神社への参道であった歴史を生かし、門前町の親しみやすさを感じられる商店街として整備してはどうだろう。

祢宜町と浦方町の通りは、天王通りの津島神社門前と天王川公園を結んでいる。現状は、やや分かりにくい裏通りだが、名前のとおり、それぞれ個性的な独特の雰囲気を持っている。特性を生かした整備を行えば、魅力的な連結ルートになるだろう。

なお、県道名古屋津島線の本町・浦方町間の路線は、東部では筏場町の北側を削り取り、西部では天王川公園を中心市街地から切り離すかたちで建設が進められている。この道路は、市街地を横断し、西側で国道155号に接続するため、大量の通過交通を招くことが予測される。これは、都市景観の構造を根底から破壊する危険につながる。津島の町並みの魅力を守るには、路線を変更するのが最善の策である。それ不可能であれば、南方を迂回するバイパスを建設し、この部分の路線を緑道化すべきだろう。

これらの整備によって、各ゾーンを緊密に結びつけ、中心市街地から通過交通を排除することができれば、津島の都市景観の構造はいっそう明快で安定したものになるだろう。

注

1) 予備調査区域は、図-1のX0~18、Y0~18の範囲に該当し、グリッド間隔は2倍である。

2) 予備調査の結果は、下記報告書の第二章にまとめられている。

津島市町家建築実態調査委員会：尾張・津島の町家と町並み、観光資源保護財

団、1985。

3) これは、フォトグリッド（写真格子）と呼ばれる調査法である。この方法では、対象区域の地図上に均等なグリッドを重ね、各交点に最も近い公共的空間で景観サンプルを採集することにより、体系的な景観データを得ることができる。

(北原 理雄)

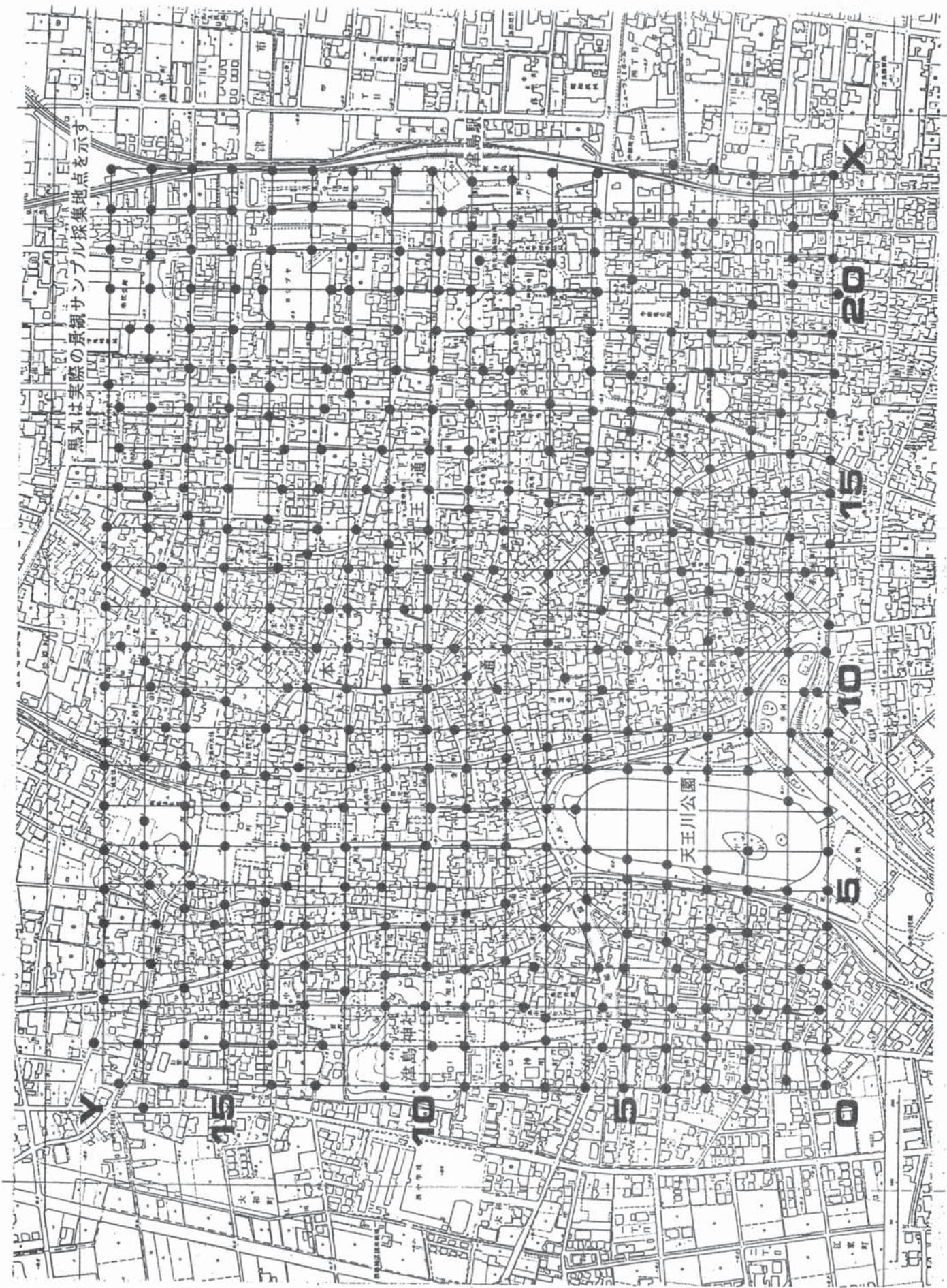
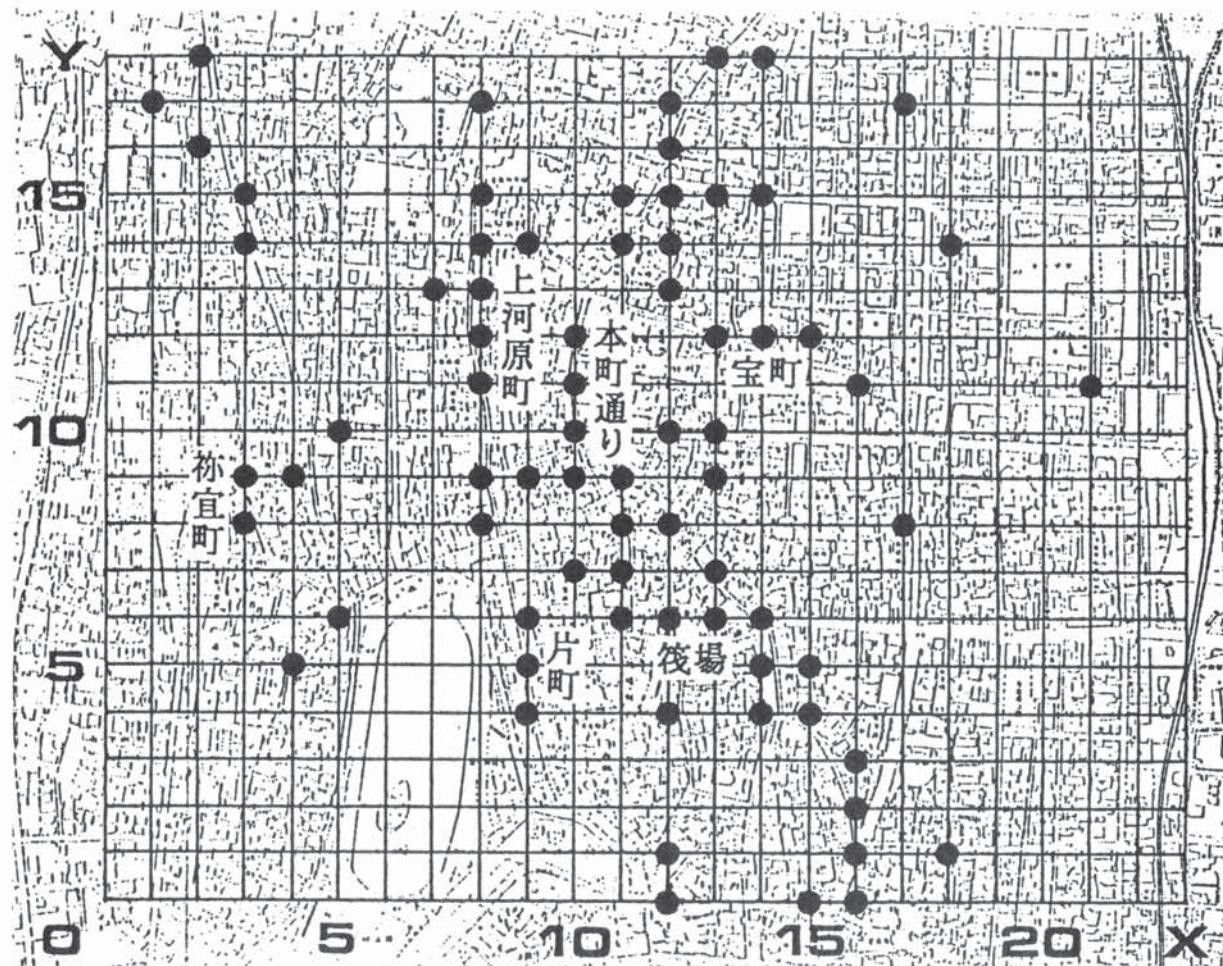
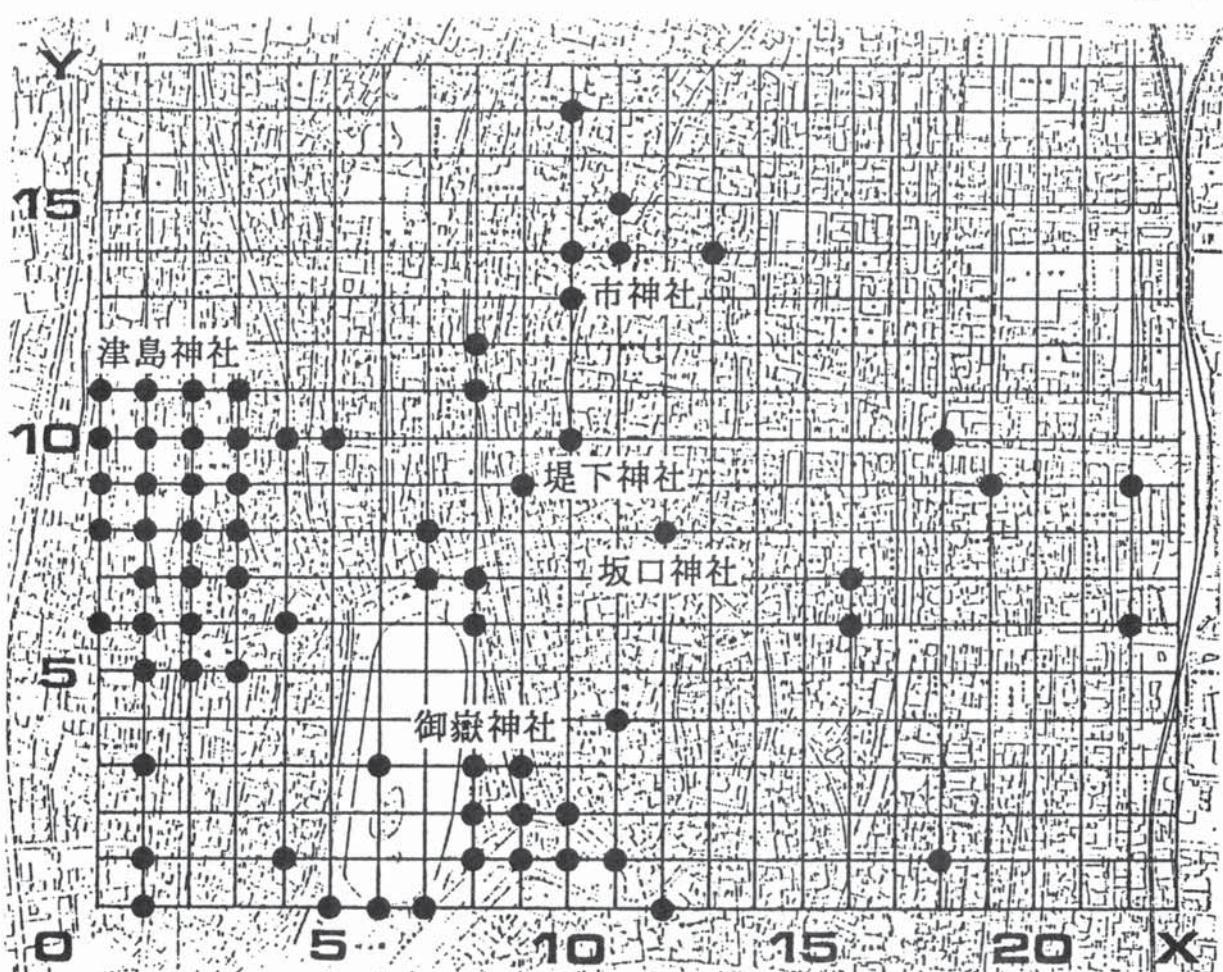


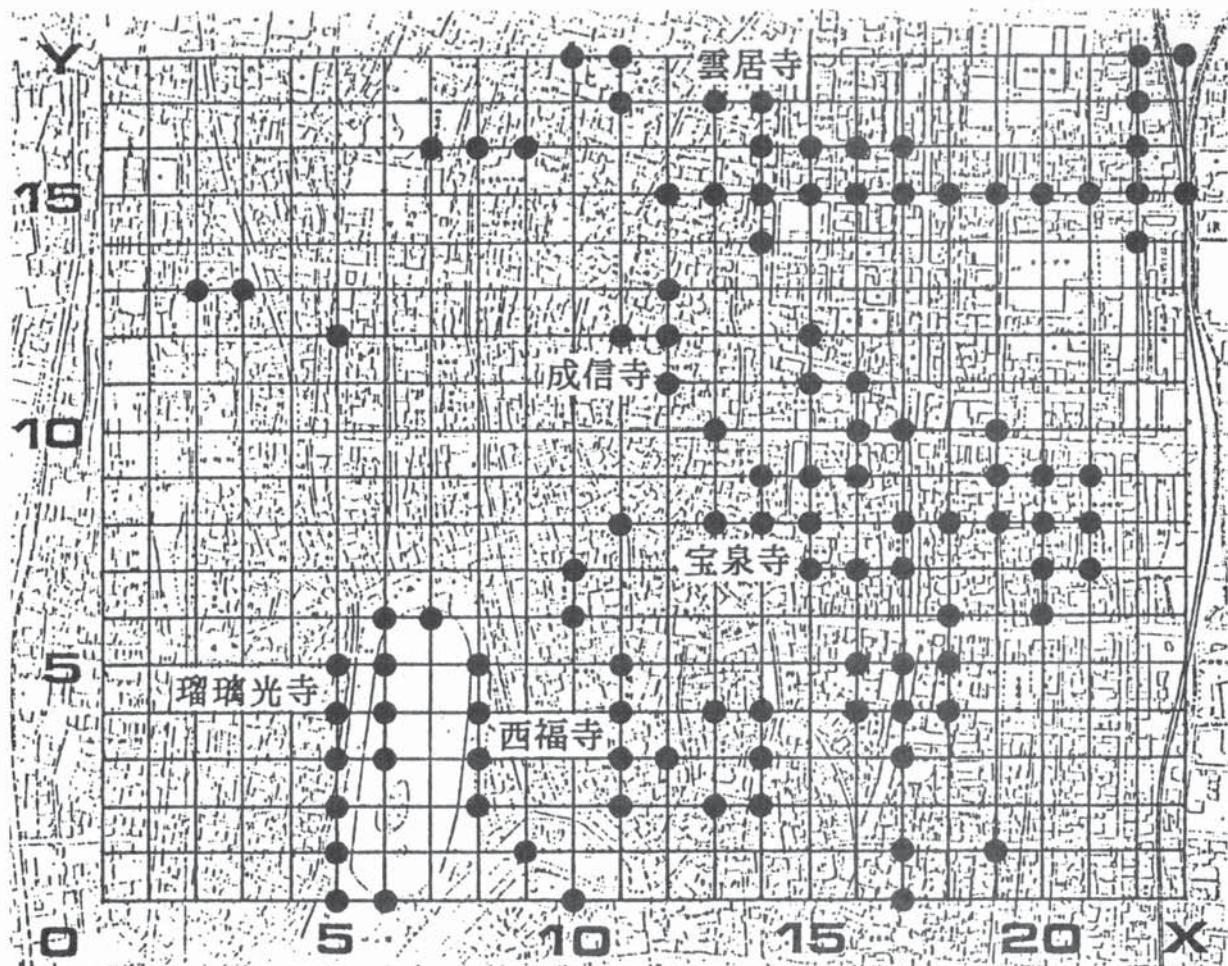
図-1



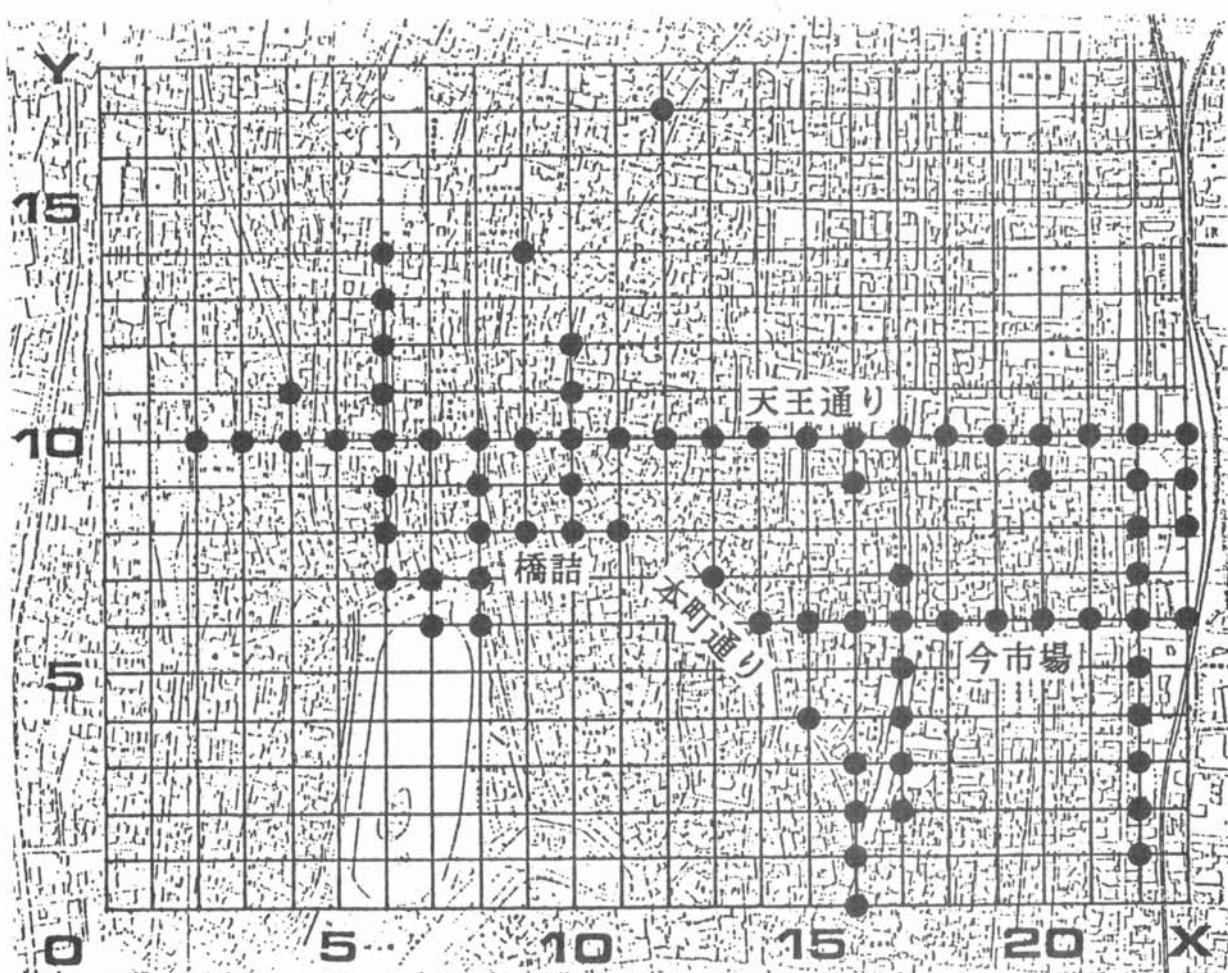
図一2



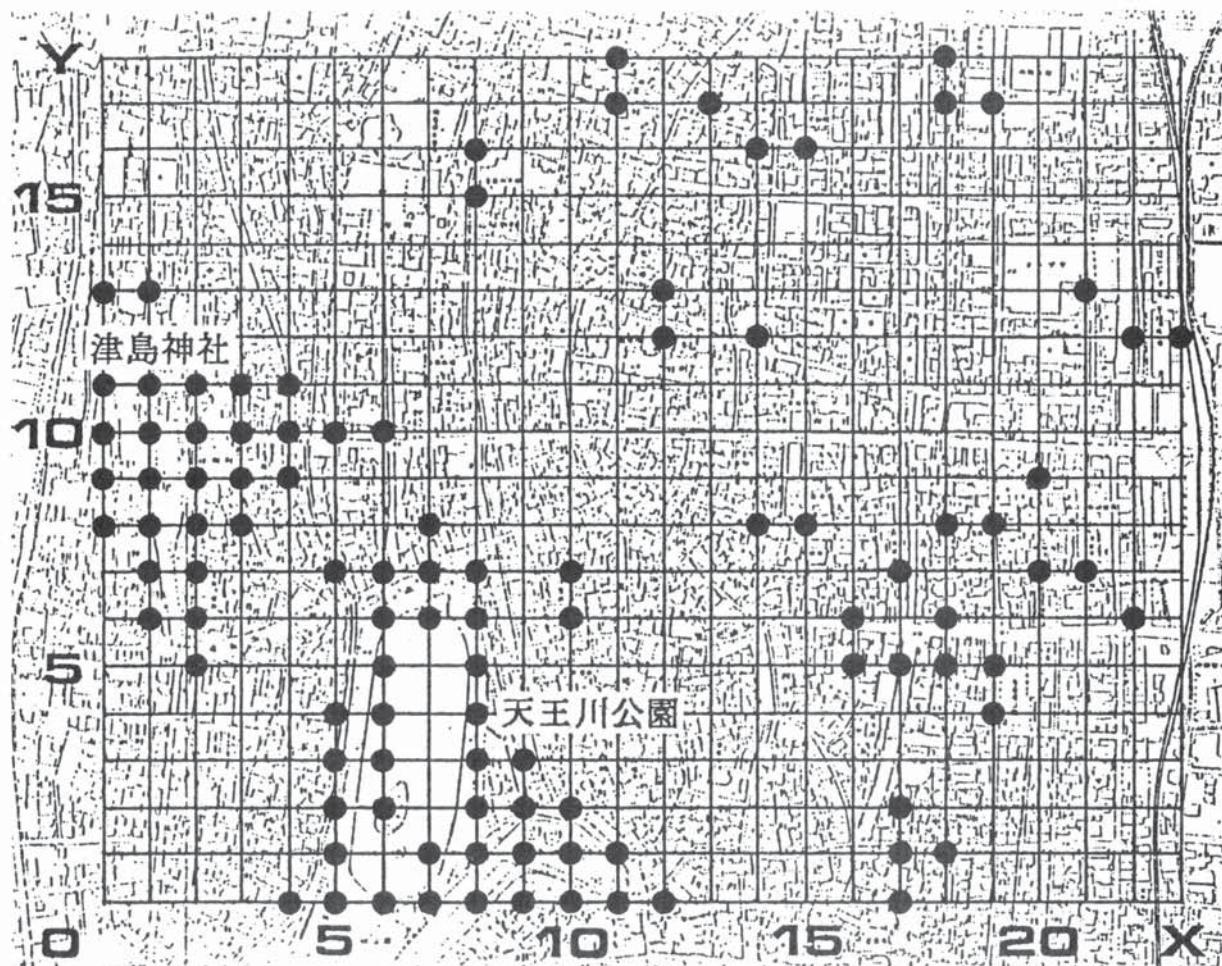
図一3



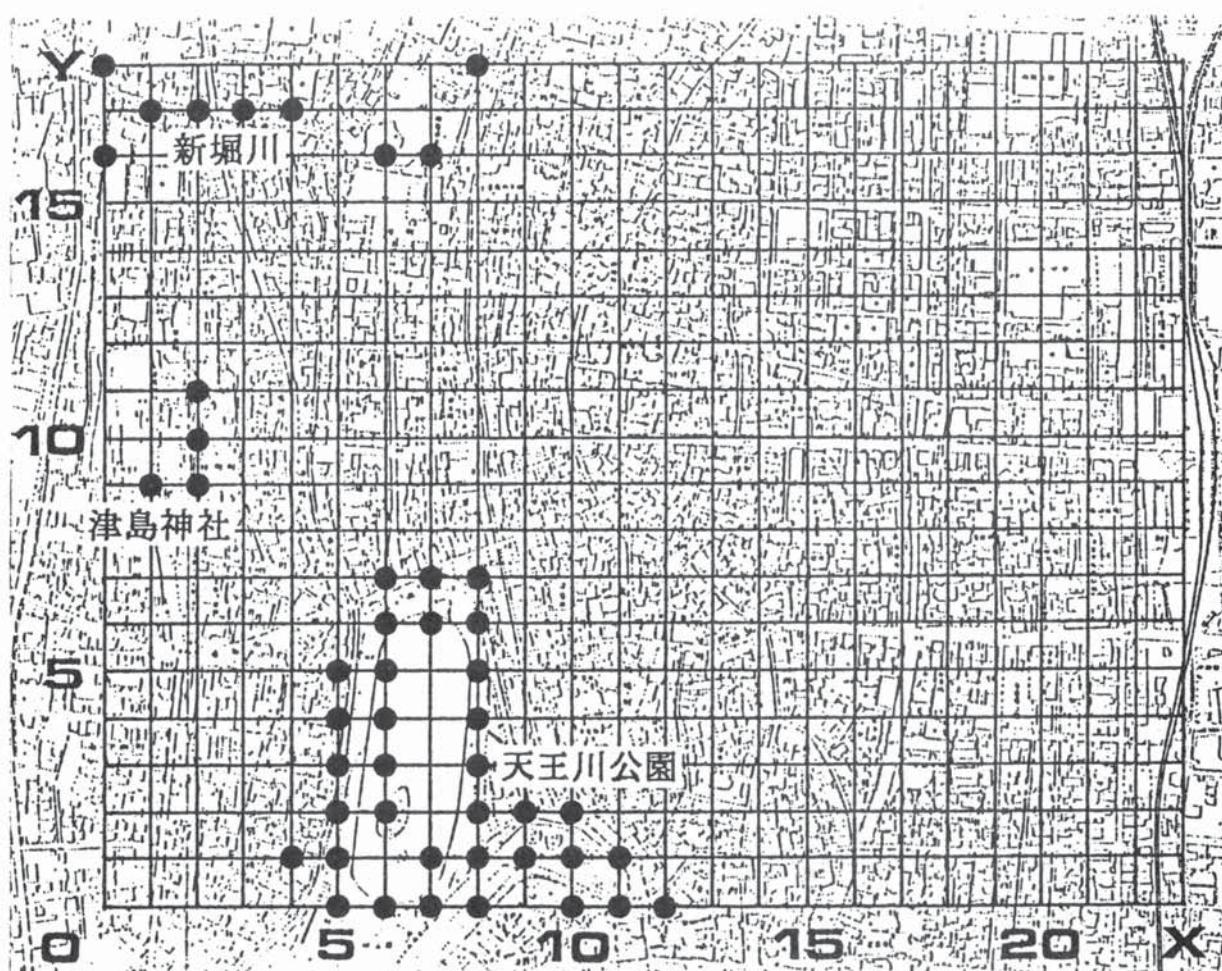
図一4



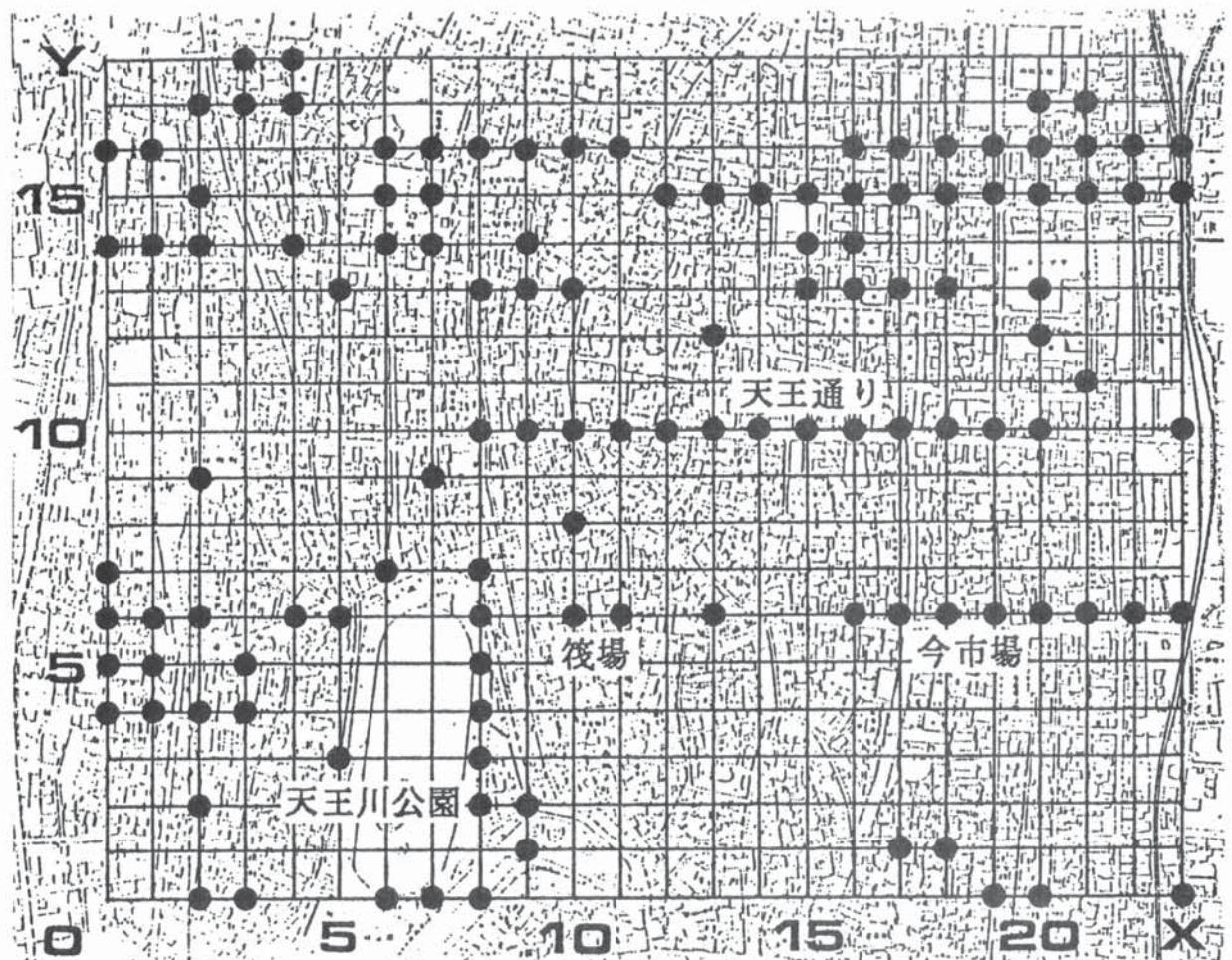
図一5



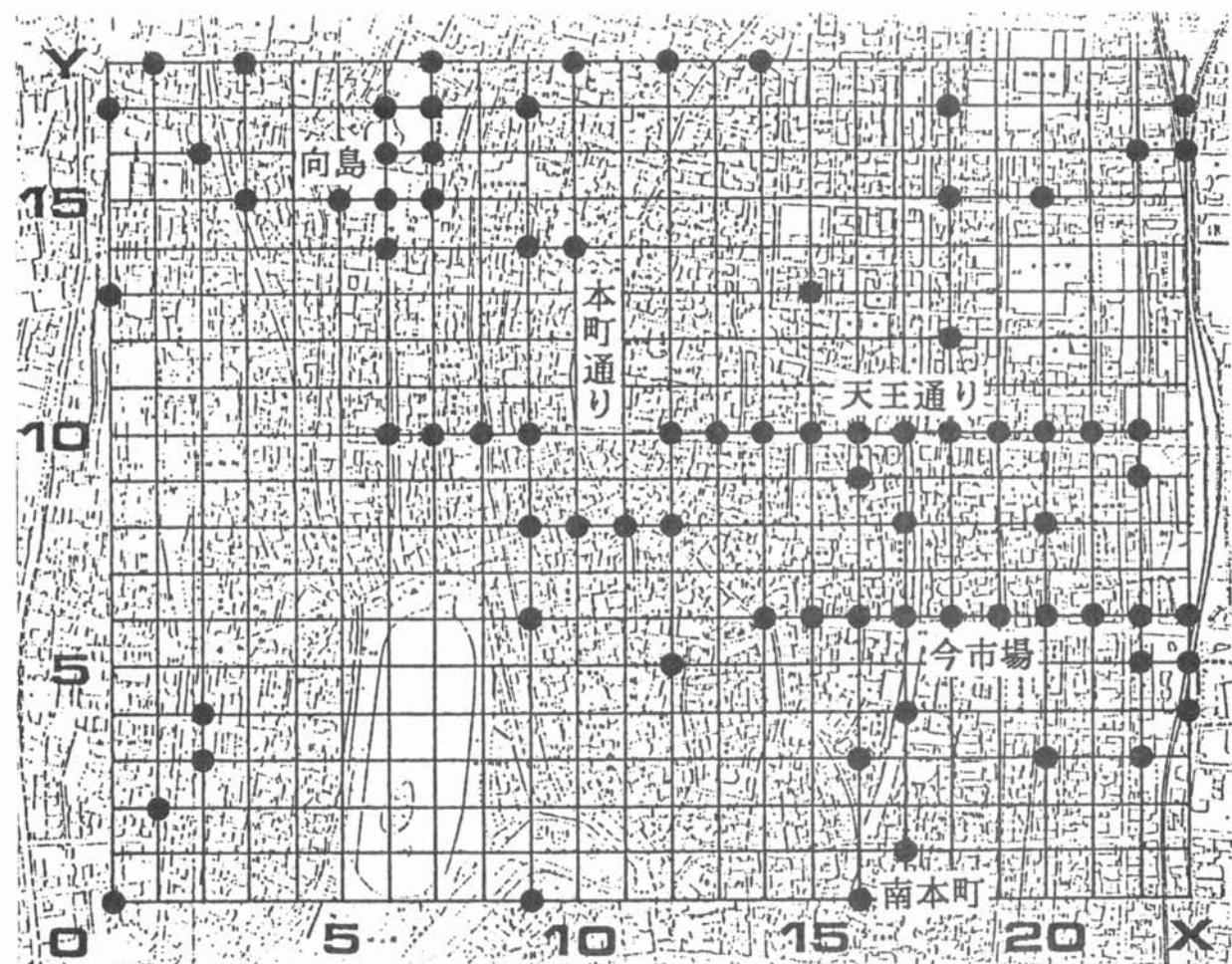
図一6



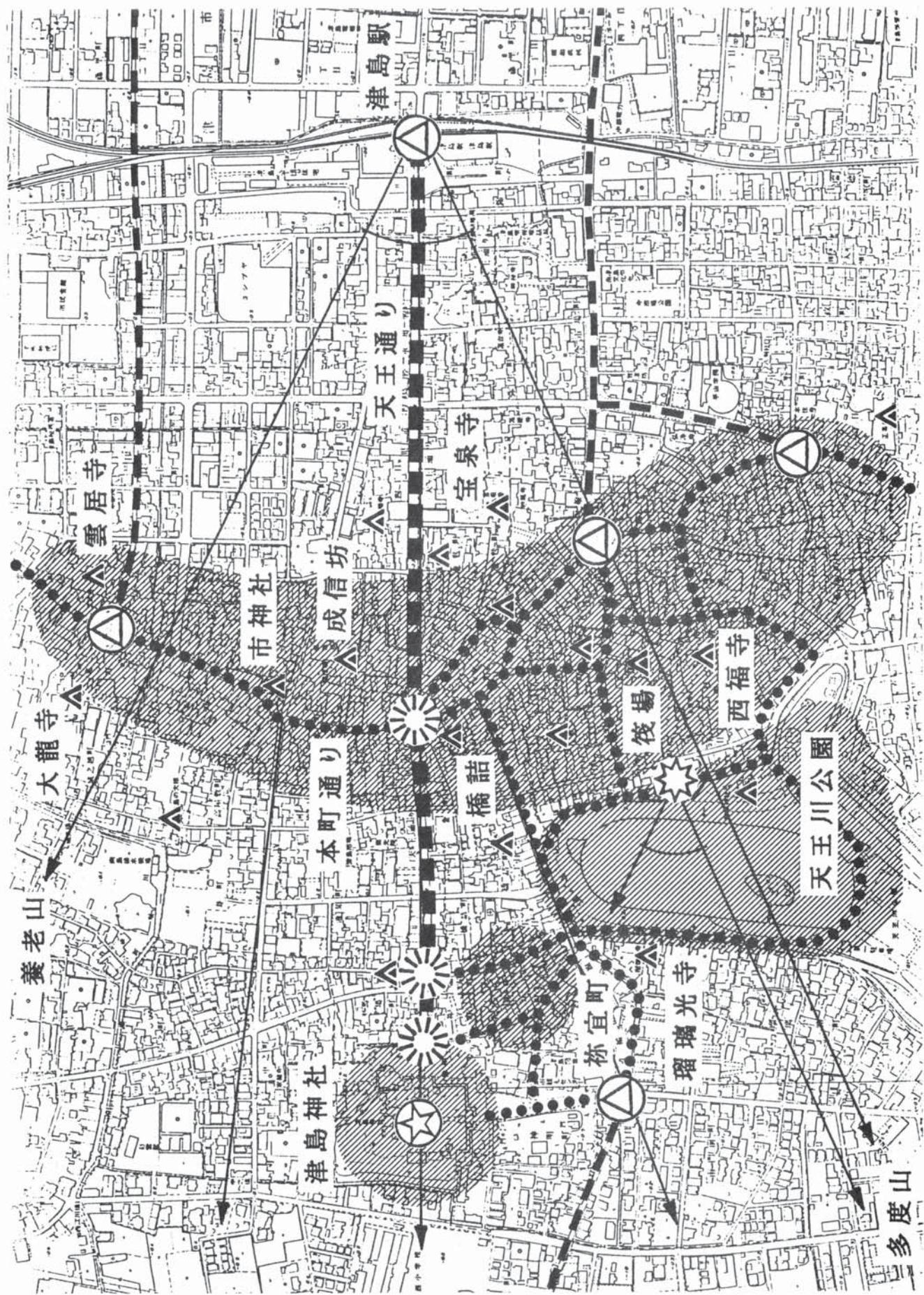
図一7



図一8

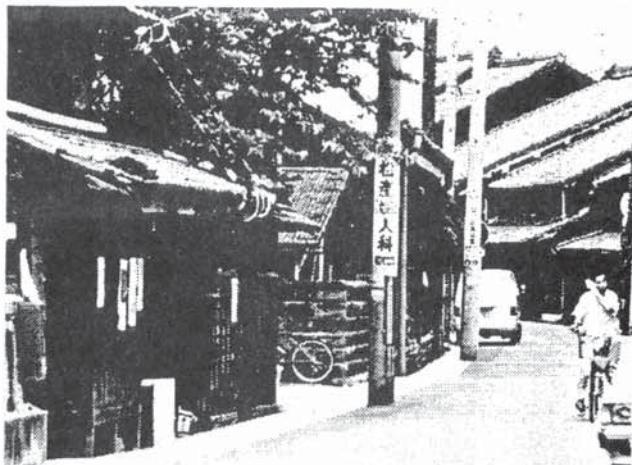


図一9

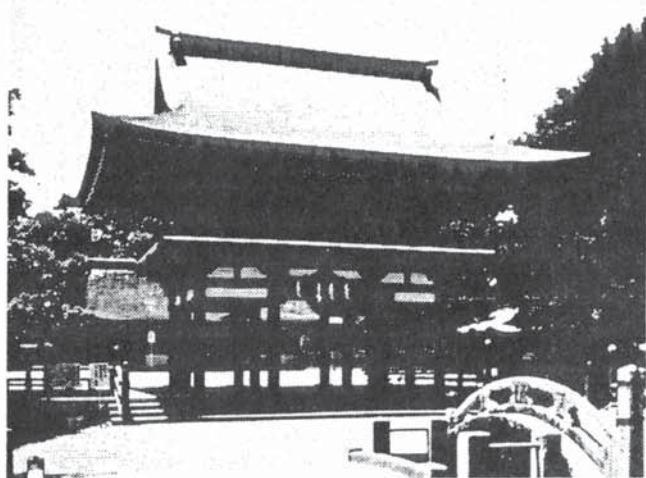




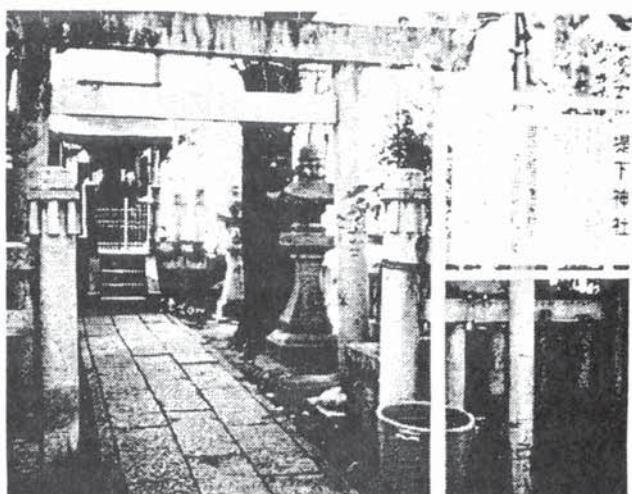
写真一 本町通の町並み



写真二 竹場の町並み



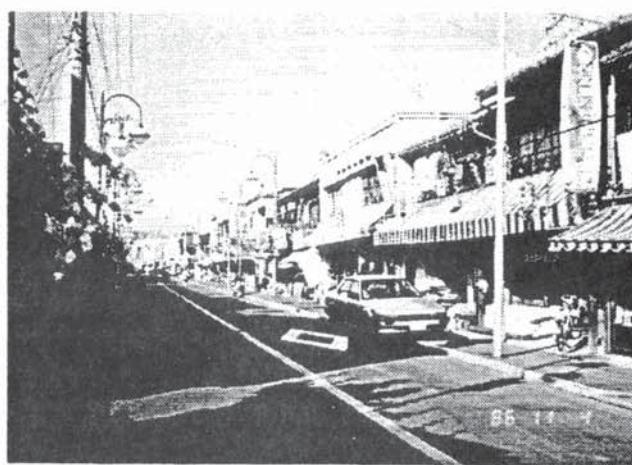
写真三 津島神社



写真四 堤下神社



写真五 宝泉寺



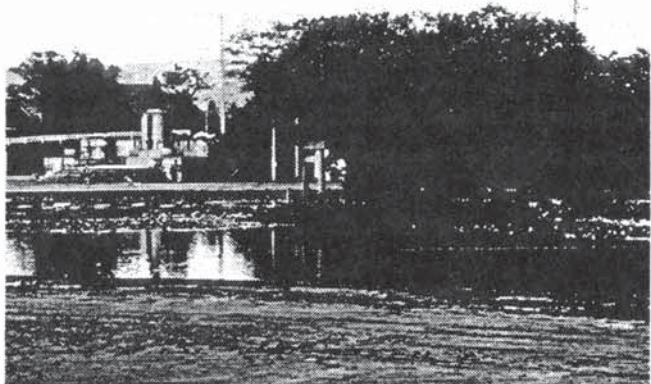
写真六 天王通の商店街



写真一七 橋詰の商店街



写真一八 天王通と津島神社



写真一九 天王川公園と山並み



写真一〇 天王通と山並み



写真一一 都市計画道路の景観

津島の町は広大な濃尾平野の西端に存在し、その西側には多度・養老の山々がゆるやかに連なり、豊かな水量にめぐまれた多くの河川に沿う美しい町である。肥沃な水田と蓮田に囲まれた美しい集落でありながら、それにもまして驚かされるのは、この町のもつ歴史の深さであることと同時に、現在もそのながれをくむ多くの歴史的な遺産が残されていることであろう。

現在みられる町並みは明治末期に形成されたものであろうと思われるが、この家並みの美しさは言うまでもなく、ゆるやかにカーブする旧街道の景観もまたすぐれたものである。この町並みの所々に存在する神社・祠・植樹のそれらひとつひとつが、往きかう人々の目をなごませてくれるのもこの町の特色のひとつとなっている。

景観の美しさ、歴史の深さを共に味わうことのできるこのような町並みは、全国にあまり例をみないものであると思われるが、この町並みも各地でみられるような、道路の新設、拡幅の問題、老朽化した住宅の新工法による近代的住宅への建て替えの問題等、様々な近代化の波にあらわれようとしている。調査によるアンケートの結果においても、町並み保存に対する意識は年

配層に高く、若年齢層には低いものとなっているが、このことは他のどの地域にも類似するものである。だからといって、この町並みを保存していくことが困難であるというのではなく、大都市名古屋のベッドタウンとなっている有利さを活かす必要がある。一般的にいう単なる近代化への道を追求することではなく、歴史に生きた町並みの特色を活かしながら、現在の若者に受け入れられる生活環境の改善を図っていくことが必要ではないかと思われる。

現在の調査の段階では、具体的な保存の計画にまでふれていないのが残念であるがこれを基礎にして、今後は津島市全体をみわたしながら保存すべきもの、新しく開発していくことが望ましいものなど、町全体をトータルにながめながら、新しい町づくりを考えていく必要があろう。幸い、津島市には自分達の町の歴史を学び、町を見直そうとするグループが小さいながら存在していることは、今後町づくりを考えていこうで大いに期待できるものである。

最後に調査によく協力して下さった住民の方々や、この調査のためにおしみない援助の手をさしのべて下さった市役所の方々に厚くお礼申し上げる次第であります。

編集・発行 津島市町家建築実態調査委員会
中央設計
昭和63年3月31日(製作 200部)

津島市町家建築実態調査委員会
(敬称略・50音順)

専門委員

尾鍋昭彦 県立愛知工業高校教諭
北原理雄 三重大学助教授
小寺武久 名古屋大学教授
高橋啓子 江南女子短期大学教授
新田米子 聖徳学園女子短期大学助教授

地元委員

浅野不二子 津島市舟戸町
伊藤長八 津島市本町1
伊藤芳紀 津島市西愛宕町2
大橋一雄 津島市本町3
岡本清孝 津島市南本町1
杉浦俊夫 津島市橋町5
富永悦夫 津島市本町2
森 平 津島市天王通2
森 亨 津島市橋町1
渡辺雅巳 津島市本町3

事務局

岡田昭人 中央設計
古田豊彦 同上
西野広子 同上

